学校へ行こう

nao

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
学校へ行こう

【Ｎコード】
Ｎ７９０１Ｖ

【作者名】
ｎａｏ

【あらすじ】
異端審問局。
己のエゴを貫き通す、それ以上でもそれ以下でもない。
正義のあり方を持ったやつらが集まった場所。

少年、ユヅル・ハイドマンは異端審問局に所属し、その中でも十三人しか名乗ることを許されていない執行官。

それなのに、いきなり日本の学校に通う羽目に。

本当に、どうしてだろう

プロローグ

「えっ」

その声が少女の口から発せられたのは、少女の頭部が宙を舞っている最中。そんなことを気にもせず、黒髪に黒い瞳の少年は、次々と首のない人形を地面に投げ捨てていく。その姿は、童話や伝承に数多く登場する死神そのもの。誰も彼を止めることもできなければ、触れることすらできない。ずれた世界に少年がいるかのように。

「本当につまらない、くだらない、仕事じゃなけりゃ、絶対にこんなことする気になんてなりそうもない」

愚痴を吐き捨てた少年は、懐から取り出したタバコにマッチで火をつけ、深々と煙を吸い込む。この時既に、少年以外に呼吸している人間はこの場所に存在していない。その状況を理解しているのか、少年は今まで右手で握りっぱなしだった刀をようやく鞘へと納める。

そして、代わりにズボンのポケットから振動し続けている携帯電話を取り出し、苦虫をつぶしたような表情を浮かべた。

「はいもしもし？」

「貴様、今いったいどこで何やってる」

携帯電話の通話ボタンを押し、とりあえず程度に会話をしようとした少年だったが、いきなり相手に怒号を浴びせられ、どう答えていいものか悩んでしまう。

「できるだけ簡潔に答えることを推奨する。的確に表現をするなら、私の堪忍袋の緒が切れる前に」

「いや、あんたにあるのはそれじゃなくて、爆弾の導火線だから」

「ほぅ、まだ軽口をたたく余裕があるとは、な。すぐにその場所に行くから、覚悟しておくように」

少年が、自身の迂闊な発言を後悔するよりも、相手のレスポンスのほうが早く、そのまま通話が強制的に終了してしまった。

「はぁ、めんどくさ」

タバコの煙と同時に言葉を吐き出し、少年は自身に取れる選択肢を模索。

一、この場からすぐさま離脱。結果、後日フラストレーションがプラスされたお説教を受ける。

二、この場で待機。結果、この場でお説教を受ける。

「選択肢によって、結果がほとんど変わらないってのが悲しいところだな」

フィルター付近まで燃えたタバコを地面へと投げ捨て、少年はこれから待ち受ける事態を予測して、大きく肩を落とす。

「それで、何か弁解はあるかな？」

十分後、現場に到着した上司の目が笑っていない笑顔を向けられ、少年は何を口にしても起こられるという確信を得てしまう。

「黙っていてはわからないぞ、ユヅル執行官。安心しろ、私もそこまで狭量ではない。事情をきちんと話してくれれば、情状酌量の余地は十二分にある」

上司の女性は、笑顔に諭すような口調で語りかけてくるが、その瞳はまったく笑っていない。この状態は、少年が過去経験した中でも、最上級にマズイ。

「ふむ、だんまりを決め込むつもりか。なら、私にも考えがある」

縁なしメガネを軽く左手の指で上げ、ズレを直した女性は、

「ユヅル・ハイドマン執行官、貴様に異端審問局、局長代理であるクローデル・ハイドマンが処分を言い渡す。貴様は、一週間以内に日本へと渡り、学校に通い、集団生活における協調性を学んで来い、以上」

ビジネススーツの懐からタバコを取り出し、マッチで火をつけると、火のついたタバコの先端をユヅルへと向けて、高らかに声を上げる。

「はぁ？　あんた何言ってんの？」

「貴様の年齢と今回の処分を考えれば、至極妥当な判断かつ、全うなものだと思うが？」

「いや、だってさ、学校だろ。俺、今まで一度たりとも通ったことなんてないし、そもそも、日本って世界で一番ドンパチがやりにくい国だろ」

少年、ユヅルはどういった考えの下に自分の処分が下されたのか、納得できずにいる。

「ようするに、日常生活からも、多くを学んでこいということだ」

クローデルは、それだけ口にすると周囲の状況をもう一度把握しなおし、部下に指示を出してその場所から去ってしまう。

「マジで、勘弁してくれ」

こうして、ユヅル・ハイドマンは生まれて初めて、日本の学校に通う羽目になってしまった。

プロローグ（後書き）

よし、

これから日本に向かおう

日本到着（前書き）

つきました、日本の聖地に

日本到着

「なぁ、俺はどうしてこんなところにいるんだ?」
ユヅルは、目の前にある路上喫煙禁止の看板を見ながら、肩を落とし、同行者であるクローデルに話を振ってみる。
「おや、私は確かに日本の学校に貴様を通わせるといったはずだが?」
「ああ、それは聞いてる。間違いない。問題はどうしてこの場所に、今こうしているか、だ」
「ジャパニメーションは、いまや立派な文化であり、日本の輸出産業で一位だと知っていたか?」
「ああ、一週間っていいながら、二週間も日本語と日本の文化に関して、缶詰状態で勉強させられたからな。話をすりかえずに、正直に言え、何でこの場所に来る必要があった?」
二人がいる場所は、東京都千代田区秋葉原。今現在、オタクだけでなく外国人観光客も聖地と表現する場所。
「これから行く場所に必要だからに決まっているからだ」
そう口にしながら、クローデルの両手はキャラクターのプリントされた紙袋をいくつも抱え、本人が楽しんでいるようにしか見えない。
「本当か? それは、自分が楽しむための言い訳ではないと、神だけでなく、局長に対しても誓えるか?」
日本に飛行機で到着してから、すぐにこの場所に移動したため、日本についてからユヅルは一本もタバコを吸っていない。それだけでなく、彼女と一緒にいることで、好奇の視線に晒されていることが、彼の精神力を削ることを加速させている。
「買い物はここら辺でいいか」
「目をそらさずに、しっかりと答えろよ」
結局、クローデルはユヅルの問いに答えることなく、そのまま一

人で進んでいく。仕方なく、ユヅルもついていくと、その場所は古い雑居ビル。

「ついてこい」

短く告げ、クローデルが入っていった部屋に、続いてユヅルもノックせずにはいる。

「おや、クローデルの嬢ちゃんか、また珍しい客だな」

「お久しぶりです、田沼さん」

クローデルが頭を下げて挨拶しているのに対し、ユヅルはついに我慢できなくなったのか、ビジネススーツの胸ポケットから、タバコとマッチを取り出し、タバコに火をつけて吸い始める。

「おいおい、兄ちゃん。この場所は火気厳禁だよ、表にもここにも書いてあるだろ？」

田沼と呼ばれていた老人が、壁に張っているポスターを指差して注意するが、

「爆死したら、死体は海にでも流してくれ」

つまらない冗談でユヅルに返され、それ以上何も言えなくなってしまう。

「つ～か、ジジイ、テメェからもタバコの臭いがプンプンする。この場所の火薬の臭いよりも、それ以上にだ。そんな人間が、」

文句を続けようとしていたユヅルだが、クローデルが頭に拳骨を落としてきたので、一時的に黙らされてしまう。

「すみません、口の減らないやつで」

「いや、その年で、大層な修羅場をくぐってきたみたいだから、しょうがないっちゃしょうがないだろ。おまえさんこそ、少しは大目に見てやんなさい」

「重ね重ねすみません」

田沼に対し、クローデルはずっと下手に出ている。それが気になったユヅルだが、あえて口に出そうとはしない。

「さて、これを取りに着たんだろ。遠慮せずに持って行きなさい」

投げ渡されたのは鈍く輝く銀色の塊。

「へぇ、オートマグか、いい趣味してるな、ジジイ」
「すみません、次来るときは、もう少し礼儀を学ばせてから来ます」
そう口にしたクローデルは、ユヅルの首根っこを掴み、そのまま引きずるようにして連れて行く。
「息災でな、ジジイ」
受け取った銃をビジネススーツの懐へ収め、ユヅルは、タバコの煙とともに一言だけ吐き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「まったく、貴様のせいで遅くなってしまったではないか」
「誰のせいか、もう一度言ってくれるか？　局長に対して報告を上げとくから」
「すまない、私のせいだ」
「最初っから素直にそういえばいいんだよ」
タバコの煙を吐き出しながら、石段を上がっていくユヅルは不機嫌極まりなく、今にも懐から銃を取り出し、クローデルに対して発砲してもおかしくないところまで来ている。それでも、彼がそうしないのは、少しながら理性が残っているためである。
「しかし、メイド喫茶は楽しかっただろう？」
「いつもどおり、英語で答えたら人を色眼鏡で見やがった。誰かに付き添いを頼まれてもあんな場所には二度と行かねぇ」
二人は、銃を受け取った後、さらに同人ショップ、アニメショップ、書店と周り、最後にはメイド喫茶にも訪れていた。そのせいで、既に日は傾くどころか沈み、街灯すらない石段を暗い中、延々と登る羽目になってしまった。
「だが、これで同年代の友人を作るきっかけ作りはできたと思うが？」
「テメェが楽しみたかっただけだろっ。いい加減、その口を閉じねぇと、タバコの代わりに鉛玉をくわえさせるぞ」

段々と石段を登る度に、ユヅルの苛立ちもそれに比例して膨れ上がっていく。そんな二人がようやく、石段を登りきると、その場所にあったのは社。

「ようやく着いたな」

「ああ、本当にようやく、な」

言葉とほぼ同時、両手が紙袋でふさがっているクローデルの足をユヅルは払う。そして、その場所を通過していく銀色の光。視界が悪いので確認はできないが、木に突き刺さっているところ見れば、何かしらの刃物であることは間違いないだろう。

「おい、日本人ってやつは、闇討ちイコール挨拶ってことなのか？」

ユヅルが視線を向けたのは、社のほぼ入り口。

「日本語、お上手なんですね」

「二週間、みっちりと勉強させられたからな」

巫女装束に身を包んだ少女が口を開き、それを待っていたかのように、周囲に配置されていたであろう松明に火が灯っていく。

「って、まだ俺は質問に答えてもらってないんだが？」

「そんな汚らわしいものを、御仏の午前に持ち込むような人間には、当然の礼節と私は考えます」

「さいですか」

巫女に答えてもらい、いまだ尻餅をついた体制のままのクローデルに冷ややかな視線を注ぎ、タバコの煙と一緒に、ユヅルはため息をつく。

「おい、そこの馬鹿。命救ってやった代わりに状況説明しろ」

「私の扱いが徐々に酷くなっていないかな？」

「事務を中心とした管理職が長くて、実戦での感覚が鈍ってるみたいだな。おい、もう一度投げれば、確実にやれるぞ」

冗談ではなく、ほとんど本気でとんでもないことを口にするユヅル。それに対して、巫女も若干答えに悩んでいるかのように見える。

「おおっ、クローデルの嬢ちゃん、よくきたのぉ」

そんな殺伐とした空気の中、現れたのは、アロハシャツにサング

ラスの小柄な老人。はっきり言って、センスを疑うような格好である。

「ユヅル、これが答えだ。貴様は、これからこの方の世話になり、学校へと通ってもらう」

「やっぱり、鉛玉が欲しいみたいだな」

「おじいさま、いったいどういうことですか？　きちんと説明してください」

ユヅルと巫女の二人は、同じ言葉を聴いて、互いに相手へと視線を移動させる。もっとも、ユヅルのほうは、既に右手に銃を持ち、安全装置を外していた。

日本到着（後書き）

次回より、学校生活に突入

昔の知り合い？（前書き）

高校生活開始！！！

昔の知り合い？

「本当にどうして、こういうことになったんだろうな」

ユヅルは、校舎の屋上、本来施錠されている場所の鍵を持ってはいない。だが、彼はこの場所でタバコの煙を燻らせている。理由は簡単、日本では未成年の喫煙は許されておらず、学校側の関係者にばれると、面倒なので、わざわざピッキングして屋上へときているのだ。

「それはまともに授業に出ていないからですよ」

一人でタバコを吸っていたはずの彼に声をかけてきたのは、現在、半ば強引に同棲する羽目になった女生徒、神宮寺カナミ。

「確か、カナミであってたよな？」

「合ってます。っとに、いい加減、まともに授業を受けてくれないと、私の立場というものもあるんですから」

自信なさそうに聞いてきたユヅルに対して、カナミはため息交じりに答える。

彼が、この私立天禅寺高校に転入してから、今日で約二週間の時間が経過している。それにもかかわらず、彼には友人の一人もできていない。まぁ、タバコを吸うために、休み時間が訪れるたびに姿を消していれば、当然の結果といえなくもない。くわえて、異端審問局で、大学受験レベルまでの知識を取得させられた彼にとって、授業は退屈以外のなにものでもなく、たいてい眠っているか、授業に出席せずにこの屋上でタバコを吸っている。

「それにしても、この国って本当に平和だなぁ。今まで生きてきた中で、こんな国一度も経験したことねぇよ」

「それは、アフガンやカリで少年兵やって、それ経由で異端審問局に入った人なら、当然じゃないんですか？」

カナミは、二週間前、ユヅルとクローデルが尋ねてきた日、祖父を撲殺一歩手前まで追い詰めた後、クローデルから大方の事情は聞

いている。
「そうだ、まだ授業時間中なのに、何でお前、ここにいるんだ?」
「あなたを探してくるように、先生に懇願されたんですよ」
「マジで?」
「おおマジです。今の時間、担当されている刈谷先生、本当に首吊り自殺でもしそうなぐらい落ち込んでました」
ユヴルの記憶によれば、今の時間は英語。この授業を受け持っている刈谷という教師は、この春からこの高校で教鞭をとっている、いわゆる新任教師。
「あれって、そんな精神脆いの?」
「先生をあれって言わない。むしろ、あなたにこそ原因があるんですから」
カナミの言っていることは、確かに事実である。
ユヴルの転入初日、彼、刈谷が担当する英語の授業があったのだが、授業中、すべての会話を英語でスラスラと話すユヴルが、刈谷の教師としての自信を完膚なきまでに粉砕し、それによって奮起した彼から未だに逃げ続けているからだ。
「俺に非があるとは、とてもじゃないが思えないんだが」
「日本は白黒の二択よりも、グレーゾーンが広い国なんですから、少しぐらい自覚してください。これから、最低でも二年半は、日本にいないといけないんですから」
「そうなんだよなぁ」
ユヴルが転入したのは、カナミと同じ一年三組。定時制ではなく、普通科の高校なので、卒業までは最短で三年かかる計算。夏休みが終わって少し経ってから転入したので、ユヴルは、最低でも二年半、この場所に滞在しなくてはならない。それも、異端審問局執行官の仕事をこなしながら。
ため息交じり彼が空を見上げ、煙を吐き出していると、タイミングを見計らったように授業終了のタイムが校舎全体に鳴り響く。
「さて、昼にするか」

タバコの火を手すりに押し付けて消し、携帯灰皿に吸殻を入れたユヅルは、そのままその場を去ろうとするが、その右肩をありえない速度と力で捕まれ、振り向かされてしまう。

「まさか、また学食で、なんていわないでしょうね？」

「そのまさかだ」

カナミは、食費の節約と言って、学校のある日は毎日、弁当を二人分作って、ユヅルにも強引に持たせている。だが、彼がその弁当に箸をつけたことは一度足りともない。

「お弁当が、ありますよね？」

顔には笑みが浮かんでいるが、カナミの瞳はまったく笑っていない。しかし、それに屈するほど、ユヅルは精神的に弱くない。

「あれは、嫌がらせだろ。きちんと、さしすせそを勉強してから作り直せ」

「そういうことを言いますか」

それと同時に手を離すカナミ、逃げるユヅル、追うカナミ。もはや恒例行事となりかけた追いかけっこがまた始まるのだった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「ふぅ、勘弁してくれよ、まったく」

カナミから逃げ伸びだユヅルが飛び込んだ場所は、図書室。転入初日、カナミに案内されてから一度たりとも踏み込んだことのない部屋。ただ、その場でユヅルは息を整えることができず、代わりに呼吸を押し殺し、懐に忍ばせておいたオートマグに右手を伸ばす。

―探ってる？　いや、こちらの出方を伺ってる？―

この図書室は、学校の中にありながら明らかに異質な場所だと、ユヅルは判断する。人の気配が複数存在しているはずなのに、次元がずれているかのように、誰の存在も知覚できず、視認もできない。

―いつ以来だろうな、こんな感覚―

異端審問局の中でも、執行官は危険度だけで言えばトップクラス。

その最前線に立ち、任務をこなしてきた彼だが、このように、命のやり取りを強要させられる場面に出くわしたことはあまりない。あるとすれば、少年兵でゲリラをやっていたとき。

殺し、殺される場所。

それが、学校という日常の一部の中に存在していること自体、異常でしかないのだが、この状態を楽しんでいる自分がいることを、ユヅルはしっかりと認識している。

一歩間違えば、死。

一秒判断が遅れれば、死。

一瞬反応が鈍れば、死。

間違えれば、遅れれば、鈍れば、いずれも即座に死を意味する状況だというのに、彼の顔には笑みが張り付いてしまっている。命のやり取りを楽しむという、異常性。自他共に、執行官の間で知られていはいるものの、それをあえて直そうとはしない。

―狂ってる。俺は今、確かに狂ってる―

思考するよりも早く、完全に反射の動きで、ユヅルは銃を引き抜き、向けられていた殺意へと銃口を向ける。それと同時に、彼の喉元にはナイフの切っ先が突きつけられていた。

―こうでなくっちゃいけない。殺し合いってのは、互いに命を賭けられる力量の相手じゃないと、意味がない―

だが、気持ちが高揚するのと反比例して、彼の脳内では理性が冷静に判断を下していた。

「レイン？」

「バリスタ？　なぜ、君がここにいる？」

レイン、そうユヅルが呼んだ女生徒に、彼は見覚えがあった。同時に、彼女が口にした、自分の昔の名前が、それを裏付ける証拠になる。

顔立ちは、若干大人びていて、背丈も多少変化しているものの、間違いない。目の前の、黒縁めがねをかけ、長めの黒髪をポニーテールでひとつにまとめている少女は、ユヅルと同じ存在。

「それは俺が聞きたい。つ～か、そのなりはいったい何？」
「失礼なことを口にするところは変わっていないな。後、今の僕は、雨竜カズキという立派な名前をもらっている。もう、昔の名前で呼ばないでほしい」
　互いを互いに、敵であると判断を下しながらも、そうではないという判断も同時に下し、二人同時に獲物を懐へとしまう。
「なら、俺も、ユヅル・ハイドマンって立派な名前がある。次からは、きちんとユヅル様と呼べ」
「わかったよ、ユヅル様」
　彼のいうとおりの呼び方で呼んだカズキは、そのまま、一服しようとタバコとマッチを取り出したユヅルの手から、マッチを一瞬でひったくる。
「ここは禁煙。っと、いうよりも、学校内で喫煙を許されているのは、教職員だけだ。ついでに言うと、本にタバコの臭いがつくと非常に困る」
「さいですか」
　久方ぶりの再会だが、彼女がほとんど変わっていないと、自分勝手な判断を下したユヅルは、苦笑いを浮かべながらも、まんざらではなかった。

「ん？　どうしたよ、昼飯食ってねぇから、顔には特に何もついてないはずだけど？」
　窓辺に腰掛けたユヅルだが、パイプ椅子に座ったカズキに見つめられ、若干落ち着かない。ちなみに、先ほどまでカズキが張っていた、人避けの結界は解除され、二人は今、準備室に鍵をかけ、誰も入ってこないようにしている。
「いや、何も聞かないのだなと、思って」
「なんか聞くことってあったっけ？」
「普通あるだろう、こうして再会できたこと自体、天文学的確率なんだ。あれからどうした？とか、今どうしてる？とか、聞きたいこ

とは山ほどあるのではないか？」
「いや、特にない」
カズキは、どうにかこうにか、会話を広げようと努力してみるものの、ユヅルに一蹴され、会話は強制的に終了してしまう。
「そういえばさぁ」
「なっなんだ」
会話を終わらせたはずのユヅルから、話を振られ、パブロフの犬みたいな反応を示すカズキ。
「あいつら、生きてると思うか？」
「ウインドにレイブン、後は、確かバイソンだったな。少なくとも僕は、死んでいるとは思っていない」
「まぁ、確かに殺したって死なねぇような馬鹿共だしな」
そう口にしたユヅルは、窓辺から準備室の出入り口へと移動。そのままドアノブをまわし、室外へと出て行こうとするが、
「それ以外に聞きたいことは特にないのか？」
「別に。それに、聞きたくなったら、ここにくれば当分の間は、お前、いそうだし」
振り返ることなくカズキの問いに答え、そのままユヅルは出て行ってしまう。そんな、彼が出て行った場所に視線を固定しながら、彼女は大きくため息をつく。
「まったく、戦場ではあれほど鋭いのに、どうしてこうも鈍いものか」

「そういえば、決めましたか？」
「いや、こんな中から決めろって、くじ引きじゃねぇんだぞ」
放課後、教室でユヅルは部活と委員会の名前が記載されているプリントの束を片手に、カナミに拘束されていた。
「でも、校則は校則です」
「校則が拘束とかかってるとは、上手いこと言ったもんだ」
茶化しながらも、ユヅルの顔は若干引きつっている。それもその

はず、この天禅寺高校に委員会は全部で二十、部活は八十を超える数ほどあり、生徒はその中のどれかに所属しなければならない。彼が、日本に来る前に得た知識の中には、帰宅部という、非常に存在意義のあるものが存在したはずなのだが、この高校には存在していない。

「お前は何部に所属してんの？」

「私ですか、私は料理部です。まさか、一緒に部活もしたいって言い出すんですか？」

それは、言葉とは裏腹にとても喜んでいるように彼の耳に響いたが、別の意味でユヅルは驚きを隠せなかった。

「指導者に問題があるのか、それとも、ただ本人のせいか。確かめたいような、確かめたくないような」

彼女の料理の腕前を知っているユヅルは、頭を切り替え思考するが、そこから言葉が少し漏れてしまっている。まぁ、カナミの耳には届いていないが。

「失礼、ユヅル様はいるか？」

そんな中、昼休みに指定した呼び名で教室に入ってきた人物、カズキに視線が集まる。それを見て、ユヅルは諦めた表情を、カナミは敵意の表情を浮かべていた。

―こいつら、面識あるのかな？―

構内新聞で、彼女にしたいランキングに、確か二人とも載っていたことまでは、ユヅルの記憶にあるのだが、二人が何位だったか、そこまでは覚えていない。だが、内容的には、カナミは、家庭的なイメージが先行し、カズキは知的なイメージが先行していたはず。

―どっちもどっちだけどな―

残念ながら二人のイメージではなく、中身を知っているユヅルは、二人のやり取りをとりあえず、観戦することを決めたのだった。

昔の知り合い？（後書き）

残念ながら、主人公は鈍感君です

定評があります（前書き）

巻き込まれることに対してですけど

定評があります

「いや、時間の無駄だな」

火花が散るエフェクトが、きっと漫画であれば表現されるカナミとカズキの二人。その二人の視界の死角をついて、教室から離脱。通学用のバッグを取ってくることを忘れてはしまったものの、中に対したものは入っていないので、そのままユヅルは教室を振り返ることなく猛ダッシュ。

「人間はぶつかって、初めて他者を理解しようとする。って、誰の言葉だったかな?」

時刻は午後五時をようやく回ったところ。今から帰宅してもいいのだが、普段の行動範囲から出なければ、二人に自分がいないことを気づかれたとき、見つかってしまう可能性が高い。

「きゃぁあああ」

商店街の入り口につくかつかないか、微妙な距離。そんな場所で、彼は、ドラマですら今は聞いたことのない、悲鳴を聞きつけ、歩きながら視線を移動させる。すると、ゲームセンターの入り口で、一人の女生徒が、複数の男に絡まれている。だが、ユヅルはそれを見て、当然のごとく無視をする。

「現代社会において、正義の味方は存在しないし、存在してはいけない。もし、存在したなら、その存在に人々が依存してしまうから」

昔、異端審問局に入ったばかりの頃、クローデルから教えられた言葉。故に、執行官は正義の味方ではなく、エゴイストでなければならない。どうして、そんな言葉を思い出してしまったのか、ユヅル自身、不思議だったが、気にせずにタバコを吸おうとして、固まってしまう。なぜなら、彼の右手に伝わってきたのは、そう、ソフトケースがつぶれる感触。

「マジか」

視線の先で起きている事件よりも、彼にとってはタバコが吸えな

いことのほうが大事件である。残念ながら、この商店街にタバコの自販機はなく、売っているのは、ゲームセンターの隣にあるおばさんのやっている小さな店だけ。

「しゃあないか」

それだけ口にしたユヅルは、タバコを買うために移動。そのとき、なぜ女生徒と目が合ってしまったのかは、彼自身不思議でならない。だが、それもあえて無視。周囲に人だかりもできてきているのに、誰一人として警察に電話をかけようとしていない。そんな無関心さが、日本で生きていくためには必要なのだ。

タバコを無事、購入し、マッチで火をつけ、吸い始めたユヅルだが、今度は男と視線がかみ合ってしまう。

「なんか、文句でもあるんかい、にいちゃん」

「いや、別に。俺は空気だと思って続けて」

男に凄まれ、普通の人間なら逃げ出してもおかしくない状況なのに、ユヅルは電信柱に背中を預け、状況を見守っている。繰り返しになってしまうが、彼は、この状況に手出しをするつもりがまったくない。

「いやっ、ちょっと、その制服、同じ高校でしょ、助けてよ」

「お前馬鹿だろ？　知りもしない、かかわりたくもない状況で話し振ってくる他人の為に、何かしようって思うのは、ジャンキーぐらい、頭のイカレタやつだけだ」

女生徒に助けを求められるが、ユヅルは一蹴。彼としては、時間つぶしの余興、テレビを見ている感覚なのだから、自分を出演者にされては困るのだ。

時計に視線を移動させれば、先ほどから十分も経っていない。だが、そこでユヅルはあることを思い出した。

今朝、学校に出かけるとき、カナミの母である神宮寺カナコから、スーパーの特売を頼まれていたことを。料理上手な彼女から、どうしてカナミのような子供が育ったのか、そして、どうして自分の弁当を彼女が作ってくれないのか、疑問は多々あったが、今はそれを

封殺。この場所からスーパーまでの距離は、およそ五分。特売の開始時間は、三十分から。

「じゃあ、がんばって」

気のない声援を送り、その場を離れようとしたユヅルだが、不意にその左肩を男に掴まれてしまう。そして、そこからは殆ど反応というよりも、反射に近い。カナミのように、殺意を持っていない相手ならまだしも、男は確実に殺意に似た敵意を持っていた。それが、災いしてしまったのだ。

左肩を掴まれたユヅルは、振り返ることなく、目だけ動かし、相手の足の位置を確認し、左足で相手の足を払い、体制を崩す。そこまでにかかった時間はほとんどない。そのせいで、男には何が起こったか、理解できていないだろう。そして、振り返ったユヅルは、落ちてきた男の頭を右手で掴み、電信柱に勢いよくたたきつける。当然の結果として、男は気絶し、その場で流血しながら崩れ落ちた。

「ああ、やっちまった」

諦めの言葉を口にして、ユヅルはその場にいる男全員の、相手をする羽目になった現実を恨めしく思った。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「さて、どうして俺はこんな場所にいるんだろうな？」

自問自答している割に、ユヅルの口調は完全に他人事である。

先ほど、何人かの男を病院送りにしておきながら、いる場所は、警察ではなく大きな屋敷。結果として、女生徒を助けた彼は、なぜだか、客間に通され、畳の上で胡坐をかきながら、日本茶の入った湯飲みを傾け、お茶を味わっている。

「待たせたな、客人」

大声上げながら襖を開け、現れたのは、左目に刀傷がある、着流しを着た筋骨隆々とした男性。そして、先ほど助けた形になる女生徒。ただし、制服から彼女も和服に着替えている。

「まずは、娘を助けてくれたことに対して礼を言わせてくれ、ありがとう」

ユヅルの対面に腰を下ろし、頭を下げる男性。正直、彼は、相手の名前も知らず、職業も予測はついているもののしらない。

「いや、助けるつもりなかったし。結果的にそうなっただけ。ついでに言うと、礼を言われるよりは、自己紹介のほうがほしい」

「おお、そいつは失礼した。俺は、秋刀魚組六代目、春日野ヒサト、そんで、こいつが娘のヒサノだ。そういや、お前、ちゃんと礼言ったのかよ」

大方予想できていた答えをもらい、ユヅルはため息をついてしまう。原因は、説明されなくても、予想できてしまうのが悲しいところ。彼は完全に組同士の抗争に巻き込まれてしまっている。それも、秋刀魚組の人間として相手側から。

「それはちゃんと言いました」

「そうか。そんで客人、あっちの平目組の若いのを、確か七、八人を一人でシメちまったって言うのも、本当かい？」

「それは想像にお任せします」

ユヅルは必要以上に口を開くことなく答える。彼にとっては、こんなことよりもスーパーの特売にいけなかったことのほうが問題。カナコに連絡し、事情を説明したところ、許してもらえたのだが、カナミに対しては、そうはいかない。なぜか、一緒に行くことになっていたからだ。

「話がそれだけなら、ここらでおいとまさせてもらいます」

とりあえず、相手が目上であることを考慮し、敬語で断りを入れてこの場所から去ろうとするユヅルだが、

「まぁ、待ちなって、寿司ぐらい食ってけって。感謝の気持ちなんだから」

ヒサトの言葉に心が揺らいでしまう。善意を断ることは、仕事上得意分野に入るのだが、彼の耳に入ってきた寿司という言葉。これが、彼の行動を鈍らせる。

寿司。日本文化をみっちり叩き込まれたユヅルだが、まだ、口にしたことはない。食生活に関して、カナコの料理の腕がいいので、特に学校にいる間以外は問題を抱えてはいないが、そこは男の子、空腹と高級料理には意思が勝てない。

「まぁ、食事ぐらいなら」

自分自身に言い訳しながら、わくてかしながら、寿司が運ばれてくるのを待つユヅル。その心情が、表情にも出てしまって、座敷犬のように二人の瞳に移り、笑っている。しかし、今の彼には、そんな問題は些細なこと。

カナコへ携帯でメールし、彼は寿司が運ばれている瞬間を心待ちにしていた。

「ふぅ、いいもんだな」

寿司を堪能し、泊まっていけというヒサトの提案を、丁寧に断り、屋敷から出たユヅルは、なれた動作でタバコに火をつけて、煙を吸い込む。

「まぁ、寿司食わしてもらったし、一宿一飯の恩は返すべしって、確か習ったはずだし」

そんなことを口にしながら、彼が向かった場所は平目組の屋敷。食事をし終わった後、仕事仲間に連絡し、調べてもらった住所。

木造の門が彼の行く手を遮っているが、それも些細な問題でしかない。ノックや、インターホンを鳴らすようなまねもしない。彼は、門を一撃で蹴り壊し、敷地内へと足を踏み入れる。当然、騒ぎを聞きつけた者たちがいっせいに集まってくる。それを確認して、彼はとても満足そうに、とても楽しそうに口の端を吊り上げる。

「テメェ、どこの組の鉄砲玉だ」

「俺？　俺は、自分のエゴを貫く為に来た野良犬だよ、飯の礼もあるけどな」

ユヅルは、とても楽しげに、歌うように口にし、右腕で引き抜いた銃の引き金を問答無用で、集まってきた男に向かって引く。

響く銃声、飛び散る脳漿。

命のやり取りを普段からしているような人間は、たとえヤクザであっても、少ない。それは、日本という国の性質上、仕方のないこと。しかし、男たちの目の前に立っている一人の少年は、それが、呼吸するのと同じぐらい普通な場所で生活し、生きてきた存在。

「さぁ、一方的な虐殺の始まりだ。短い夜を、せいぜい楽しめ」

そして、自分より強いもの、弱いもの、女、子ども、老人。区別なく、躊躇することなく、殺してしまう、壊れた存在。

お仕事事情１（前書き）

決してやりすぎてしまったわけではありません

お仕事事情1

「おはようございます、カナコさん」
「あら、ユヅル君、いっつも早いわねぇ」
神宮寺邸、台所に姿を現したユヅルは開口と同時に頭を下げる。彼の目の前にいる恰幅のいい、笑顔の非常に似合う女性こそ、この神宮司家の台所を唯一任されている女性、神宮寺カナコその人である。
正直、親子でありながら、カナコとカナミはあまり外見的に似ていない。しかし、そんなことよりも、彼はどうして料理の腕が似てくれなかったのか、悔やみきれない。
「すぐご飯にしてあげるから、居間でテレビでも見てて待っててくれる？」
「はい」
現金といわれてしまえばそれまでだが、ユヅルは食事を作ってくれる人、それが美味い料理であるなら、その人には敬意を払い、滅多に逆らうことはない。彼の中で、もっとも偉大な職業ランキングでは、常に調理部門がトップテンを占有しているからだ。
居間に移動し、テレビをつけると、昨夜、隣町である屋敷が全焼したことが報道されており、それを見たユヅルは暗い笑みを浮かべる。テレビの中では、放火の疑いで警察が調査に乗り出したことを報道しているが、それはフェイク。実際は、ユヅル自身、死体処理が面倒なことに、敷地内の人間全員を殺し終えてから気づき、屋敷に火を放ったのである。
「物騒な世の中になったのぅ」
「そうっすね」
家主であり、天禅寺高校理事長でもある神宮寺勲が居間に現れ、彼から少し距離を置いてソファに腰を下ろす。それに対して、ユヅルは適当に相槌を打つ。

「昨日は、帰りが遅かったようじゃな」
「そうっすね」
「どこぞでナンパでもしておったんか？」
面倒になり、ユヅルは言葉を返すことにためらいを感じ、
「ごはんですよ～」
カナコの声を聞いて、これ幸いと、リビングへとさっさと移動する。
本日の朝食は、ご飯に味噌汁、焼き海苔に秋刀魚、きんぴらごぼう。いいにおいを漂わせており、席に着くなりユヅルは、食事に取り掛かりたかったが、そこはじっと我慢。
この家には、決して破ることのできないルールがひとつだけ存在している。
食事は家族全員そろってとること。
昼や夜、ばらばらに行動しているとき、例外は存在するものの、朝だけは、この例外は適用されない。
「おはようございます、おかあさんにおじいさま」
その場所に残る一人、カナミが制服姿で現れ、席に着く。ちなみに、彼女の父親は、彼女が幼いときに亡くなっているが、詳しい事情は聞いていない。
「それでは、いただきます」
「いただきます」
「いただきます」
そんなわけで、現在の家長カナコの声に続き、皆食事を開始する。
そんな中、
「昨日は、どこに行ってたんですか？　私を置いて」
私を置いて、その部分を強調し、どす黒いオーラを背中にカナミが口を開く。巫女でありながら、これいかに。そう思いながらも、ユヅルは決して口にしない。
「人助け」

事実間違ってはいない。けっして、やりすぎとか、結果的にそう転んだとか、そんなことをいう必要もないので、箸で秋刀魚の骨をきれいに取り除きながら、ユヅルは視線を合わせずに口を開く。
「人助け？　あなたがですか？」
驚きを隠せず、カナミを箸をおいて固まってしまっている。
「ああ、春日野さんだろ、昨日、電話いただいてるから、覚えてるわよ」
「おかあさん？」
そして、カナコが知っていて自分が知らないという事実、そのことがさらにカナミの機嫌を悪化させていく。
「ちょっと、それってどういうことですか」
「どういうことも何も、春日野さんとこのお嬢さんをユヅル君が助けた。そのお礼をかねて、夕食をご馳走する。そう聞いてるけど、違うのかい？」
「違いません、そのとおりです」
声を荒げるカナミをよそに、ユヅルは空になった茶碗を差し出して、おかわりをよそってもらう。よそっているカナコは、とてもうれしそうだ。
「また女性ですかっ」
「おや、またって、どういうことだい？」
「昨日の放課後、教室に来たんですよ。ユヅルさんの古い知り合いだって言う女の子が」
カナコとカナミは二人で女性同士の会話をし始める。それに割り込むのは、無粋。そう判断したユヅルは、黙々と食事を続けていたが、
「ハーレムとは羨ましいのぅ」
「カナミに聞かれたら、半殺しにされるぞ、エロジジイ」
勲の言葉に軽く突っ込みをいれ、食事を終了する。
「ご馳走様でした」
両手を合わせ、頭を下げたユヅルはそのまま食器を片付けるべく

台所へ移動。
「お粗末さまでした。本当、ユヅル君は綺麗に食べてくれて、おばさんうれしいわぁ」
カナコの言葉通り、彼の皿には秋刀魚の骨ぐらいしか残っておらず、ほかはすべて彼の異の中に収まっている。
「作ってもらった人への感謝の気持ちは、食事を平らげることで示すしかない。それが、美味い食事なら、尚更。そう思ってますから」
「なら、どうして私が作ったお弁当は食べてくれないんですか？」
カナコへの賛辞のつもりで、ユヅルは口を開いたのだが、自分の迂闊さで頭が痛くなってくる。料理の話、イコール、カナミの弁当。それを連想するのは容易かったというのに。
「昨日も言ったが、おまえ、試しにさしすせそを言ってみろ」
「さが、砂糖、しが、塩、すが、酢、背が、背油で、そが、ソースです」
「及第点すらやれねぇよ」
これ以上は無駄と思い、食器を片付けたユヅルはそのまま玄関へと向かい、学校へと向かう。それに続くように、あわてて食事を終えたカナミが玄関についてくる。
「じゃぁ、気をつけていってらっしゃいで」
「はい」
「いってきます」
カナコの言葉に答え、二人は神宮寺邸を後にする。そして、次の瞬間、大きく後悔してしまう。

お仕事事情1（後書き）

続きます。

ちなみにさ＝砂糖、し＝塩、す＝酢、せ＝しょうゆ、そ＝味噌が正しいのです。

お仕事事情2（前書き）

さぁ、哲学の時間?です

お仕事事情2

「おはようございます」
「「「「「おはようございます」」」」」
神社の石段を降りたユヅルとカナミの二人は、突然目の前に飛び込んできた光景と、野太い声の挨拶で一瞬、かたまってしまった。
なぜか、石段を降りてすぐの場所にはリムジンが停まっており、そのリムジンから弧を描くように石段まで、男たちが直立不動の状態で並んでいる。まぁ、最初に二人、主にユヅルに声をかけてきた人物に見覚えがあったので、ユヅルには予想がついていた。彼女、春日野ヒサノがいるのだから、まぁ、当然、その人物もいるわけで。
「おう、おはよ～さん」
当然といわんばかりに、リムジンから降りてきたのは、秋刀魚組六代目、春日野ヒサト。昨日と違うのは、服装が着流しから黒のスーツに変わっているというだけ。
「ああ、突然の訪問すまんね、学校まで乗せてあげるから、はよ、乗って、乗って」
「学校って、車に乗っていくほど距離ありませんけど」
ヒサトの提案に、遠慮がちにカナミが言うが、隣にいたはずのユヅルがさっさとリムジンに乗り込んだのを見て、勢いで彼女も乗ってしまう。続いてヒサト、ヒサノの順に乗り、車は走り出す。
「早速で悪いけど、あれ、きみがやったんか？」
「ああ、やっぱりその件で。答えは、肯定」
敵対組織の壊滅情報を知りえたヒサト。確信はなかったものの、確率が少しでもありそうなところには、今日、出向いていく予定だった。しかし、一軒目、一番確率の低い場所であたりを引いてしまうとは、予想していなかった。
「何でそんなに驚いてんの？　そう思ったから、ここまで来たんじゃねぇの？」

「ああ、そうだったんだが」
すんなりと信じられるような内容ではない。平目組の構成員はおよそ二百名。多少、出払っていたとしても、屋敷には百名ぐらいの人間はいたはず。それを、たった一人の少年が。否定している自分と、肯定してる自分。そのどちらもいて、ヒサトは判断をつけられずにいる。
しかし、時間は経過し、四人を乗せた車は学校へついてしまう。
「じゃあ、行ってきます。おとうさん」
「乗せてくれてありがとうございました」
ヒサノとカナミはそれぞれ口にし、車を降りるが、ユヅルは、二人が降りたことを確認したのと同時に、車のドアを引き、内側からロックをかけてしまう。その行為に対して、カナミは文句を口にするものの、チャイムが鳴ってしまったため、しぶしぶ校舎へと入っていく。

「なぁ、問答ついでに俺の質問にも答えてくれよ、おっさん」
懐からタバコを取り出し、ヒサトの了承も得ずにタバコを吸い始めるユヅル。
「人が人を殺す理由ってなんだ？」
言っている意味がわからない。そう、ヒサトは思ったが口には出さない。ユヅルは、冗談ではなく、本当に質問してきていたから。
「相手を憎いと感じる。それによって行動するからだろう」
妥当だと、考えた答えをヒサトは口にするが、それを聞いたユヅルは、声を上げて笑い始めた。本当におかしそうに。何も、理解できていないと、答えが間違っていると言わんばかりに。
「ああ、悪い、気分を悪くしないでくれよ」
そう口にしながらも、ユヅルはまだ笑いを堪えている。
「別に、おっさんの答えが間違ってるってわけで笑ったわけじゃない。ちっとばっか、前に同じ答えを聞いたことがあって、そいつの面を思い出してただけだから」

そう口にし、ユヅルは備え付けの灰皿に、灰を落とす。
「動物は、食うため、守るため、そのために他のものを殺す。植物もしかり。平たく言えば生きる為に殺す。でも、人間は生きるため以外にも人を殺す。けっして、人を殺さなきゃ、自分が死ぬってわけでもない状況で」
タバコの煙を吐き出したユヅルの瞳は、とても暗い光を宿している。
「俺の中には、決して破らないルールが二つだけ存在している。そのうちの一つ、それを奴らは破った。だから殺した。勿論、本部に確認も取ったから、安心して俺は殺し尽くした」
その口元は、確かに笑っている。その表情を見て、ヒサトは目の前の人物が、敵対組織を壊滅させたのだと、確信を持ってしまう。そう、不覚にも、目の前の少年が怖い存在だと思ってしまっていた。
「人だけが、感情でも、本能でもなく、計算で、人を殺す。間違っちゃいないさ、戦争やテロ、そういったもんが、俺の言葉を事実だと認めてる。ああ、そうだった、俺の答えを聞かせ忘れてた。俺は、人が人を殺すのに理由なんてないと思ってる。理由なんて後付で、殺した後に考えてる。しいて理由に近いものを挙げるなら、邪魔と感じたからだろ。言いたいことは、そんだけ。乗せてくれてありがとな」
言いたいことだけ口にしたユヅルは、タバコの火を灰皿に押し付けて消し、車から出て校舎へと向かって歩いていく。
残されたヒサトは、自分の掌が汗まみれになっていることに気づき、大きく息を吐いた後、上を見上げる。
「あれ、どこまで壊れてる。いや、どうしたら、あそこまで壊れることができる」

お仕事事情2（後書き）

まだ、続きます

お仕事事情3（前書き）

この話が終わって、ようやく次へ

お仕事事情3

所変わって教皇庁。
その敷地内でも特に目立つのが、全体を黒に染め上げられた建物。異端審問局本部であり、別名、『黒金の檻』。
その局長室で、二メートルを超えた筋骨隆々の巨躯を無理やり机に詰め込んだ初老の男性は、手元の資料を見ながら、とても嬉しそうに目を細めていた。
「どうかなさったんですか、局長？」
「いや、やっぱりわかっちまうかい？」
秘書の持ってきたコーヒーを左手で受け取り、ソーサーは机に置いたまま、カップを傾ける。
隻腕隻眼、それでいて温和で、豪快な笑顔。彼をこの場所で知らない人間など存在しない。
アレグリオ・ハイドマン枢機卿。
教皇に次ぐ地位を持ち、一癖も二癖もある執行官たちが唯一、逆らわない存在。
「日本に行った、馬鹿息子。あいつのことなんだけどな」
「ユヅル執行官ですね」
アレグリオは、異端審問局に所属するすべての人間を家族だと思い、自分より年下の人物を息子、娘と呼んでしまう癖がある。
対して秘書の女性は、ユヅルのことを思い浮かべ、気分が沈んでしまう。
最年少で執行官の資格を得た少年、人として壊れた存在、綱渡りをする馬鹿、様々な風評が飛び交っている中、彼には外せない。むしろ、その一言ですべてを表現してしまえる言葉がある。
単独破壊者。
単独で以外、仕事をすることがなく、仕事をすれば必ず死者や、不必要なはずの破壊が生まれてしまう、はた迷惑な執行官。彼のお

かげで、何回、彼女が政府に手回ししたのか、既に数えることを彼女は諦めている。
「そうそう、あの馬鹿息子、昨日、日本で初仕事をしたらしい。しかも、自発的に」
「自発的に、ですか」
若干、信じられないといった感じで、秘書はアレグリオの言葉を反芻する。彼女の知っている中でのユヅルは、完全に受身。与えられた仕事はこなすものの、自分から決して動こうとはしない、面倒くさがりのはず。
「いやぁ、クローデルのやつが、いきなり、ユヅルを日本の学校に通わせる。って、言って来たときにはどうなることかと思ったが、意外といいほうに転んでるみたいだ」
「それで、被害は？」
「ああ、被害。人的、物的あわせると、ふむ。この報告書を見たほうが早い」
コーヒーカップを置き、代わりに机の上の報告書を掴んで、アレグリオは秘書に渡す。数秒、目だけを動かし、報告書を読んでいた秘書だが、途中で頭が痛くなってきたのか、軽く右手で頭を支えてしまう。
「日本でも、やっていることに変わりはないみたいですね」
その報告書には、敷地面積は詳しく記載されていないものの、死者数、百二十名。そう記載されている。
「日本政府、主に警察機構は、話の通じる方たちでしょうか」
ため息をついて、秘書はこれから起こるであろう被害を予想し、大きく肩を落とす。
「こうなるとあれだな、あいつがどんな風に変わってきているのか、見てみたいもんだ」
「だめですよ、局長。日本に行かれている間の仕事はどうするんですか？」
アレグリオの行動を先読みし、秘書は釘を刺す。案の定、彼は、

その巨躯が少しだけ小さく見えるぐらいに落ち込んでいる。
「なら、クローデルでも」
「それもダメです。以前、ユヅル執行官と共に局長代理を向かわせたとき、経費が馬鹿みたいにかかっています。それとも、局長のポケットマネーから、出していただけますか？」
「だめだな」
ユヅルを日本に置いて帰ってきたクローデルが、経理に見せた経費請求書。それを見たとき、彼女は羞恥で顔が赤くなったのと、その金額で顔が青くなったことを覚えている。しかも、まだそれは記憶に新しいのだ。
「なら、やはり君に行ってもらうしかなくなってもらうぞ、エカテリーナ執行官」
秘書であり執行官、エカテリーナ・フォルダンは、大きくため息をつくものの、
「了解しました。今回、私が抱えている案件に、めどが立ち次第、日本まで様子を見てきます」
彼の決定に逆らうことはしない。
「それでは、失礼いたします」
彼女は、報告書を机の上に戻し、敬礼をした後、室内を出て行く。
「それにしても、あの馬鹿息子が学校生活とは、俺も年を食ったもんだ」
彼が肩口から右腕を、同時に右目を失った事件は、異端審問局で知らないものはいない。同時に、その原因、奪った相手がユヅルであることも。
「日本、行きたかったなぁ」
冷めたコーヒーで喉を潤し、アレグリオは一人愚痴るのだった。

お仕事事情３（後書き）

第三の執行官登場！！！

部活動に参加しよう1（前書き）

ラブコメに突入。

筆者はベタな展開が大好きです。

部活動に参加しよう1

「そんで結局、こうなると」

ユヅルはため息をつきながら、机に突っ伏す。

現在は放課後、大半の生徒は部活動へ行き、他の生徒も当番の委員会へと移動。故に、教室には、生徒の数が殆どいないことが普通なのだが、一年三組の教室だけは違っていた。なぜか、大半の生徒が教室に残ったまま。

彼の目の前には、もはや当然といえるカナミ、そして昨日会ってしまったカズキ、加えてヒサノの三名がなぜか立っている。どうしてこんな事態になってしまったのか、彼には皆目見当がつかないのだが、クラスメートたちは、紛れもなく、この状況を楽しんでいる。

「それで、どうするんですか、ユヅルさん」

決して逃がさない。捕食者の瞳をしたカナミに声をかけられ、ユヅルは面倒くさそうに上半身を起こし、机の中からプリントの束を取り出す。

「ちなみに私は、昨日も教えたとおり、料理部です」

「僕は、図書委員兼創作部に所属している」

「私は、手芸部です」

カナミ、カズキ、ヒサノの順に聞いてもいないのに、答えてくれたので、とりあえず、ユヅルはプリントの束をめくる振りだけはしておく。

「そこに書いてあるとおり、本人のやる気さえあれば、複数の部活に入ったり、雨竜さんのように、委員会と兼任することもできます」

―まず、それはない―

その言葉を、三人に聞かれないように、心の中だけで毒づくユヅル。

プリントには、委員会、運動部、文化部の順に記載されているが、人に決められたルールを守ること、上下関係の厳しさ、この二つが

嫌いな彼は、必然的に入ろうとすれば、文化部になってしまう。しかし、目の前にカナミという前例がある以上、文化部で大丈夫なのかという、非常に不安な材料がある。そんなわけで、彼はすんなりと答えを出せずにいる。

「やっぱり見てから決めるしかないか」

「それが一番いいかもしれませんね」

なぜか、この場で進行役を担当しているカナミは、その言葉を待っていましたといわんばかりに嬉しそうな声を上げる。

「それでは早速、料理部に」

「神宮持さん、それはどういう理由だろうか？」

急ぎユヅルの手を取り、教室を出ようとするカナミだが、その手を横からはたかれ、張本人であるカズキに怒りの視線を向ける。

「何をするんですか、雨竜さん？」

「僕こそ理由を聞いているのだけれど、それとも神宮寺は耳の不自由な人なのかな？」

「理由ならいっぱいあります。ユヅルさんのことを、保護者の方から頼まれていますし、一緒に住んでいるんですから、一緒に帰れたほうが何かと都合がいいです」

「あまり束縛すると嫌われてしまうよ。それに、連絡さえ取れれば、一緒に帰る必要なんてないと思うよ、子どもじゃあるまいし」

なぜか、言い争いを始めてしまった二人を見たクラスメートたちは、歓声を上げている。正直、ユヅルとしては、視線だけで殺し合いを開始している二人を止めてほしいのだが、自分に火の粉がかかると面倒なので、それをしない。

「えっと、ヒサノだっけ？」

「はい、なんでしょう、えっと」

「ああ、別に好きに呼んでくれていい」

人とあまりかかわる生活をしてこなかった彼は、人の名前を覚えることが少し苦手で、間違えないように、とりあえず確認を取ってみる。

「それでしたら、ゆー君で」
「手芸部って、何やる部活？」
「手芸部はですね。刺繍をしたり、服を作ったり、ぬいぐるみを作ったり、まぁ、自分の作りたいものを作る部活ですね」
「ふ～ん」
二人ではなく、自分に話を振ってくれたのがよほど嬉しかったのか、ヒサノのテンションは結構高くなっている。そんな彼女と、言い争いをしている二人を見比べ、音を立てずに立ち上がったユヅル。そのままヒサノの手を引いて、教室を後にした。
「あの、どこに行くんですか？」
「どこって、手芸部だよ。順番ぐらいでもめてるからな、あの二人。そんなのに付き合ってたら、時間の無駄だ」
「じゃあ、案内します」
手をつないだままなのを、あえて指摘しないのは、鈍感な割りに空気を読んだユヅルだから。ヒサノは、嬉しそうに、ユヅルの手を引っ張りながら、部活塔へと移動を開始した。

天禅寺高校は、部活動が盛んであり、私立ということもあり、運動部、文化部のそれぞれに部活塔が設けられている。二人が向かうのは文化部の部室塔。一年生の教室が五階にあるので、若干距離ある。
そんな中、ユヅルとヒサノ、二人の進路を塞ぐように一人の男子生徒が現れた。
「お前、ヒサノさんと手をつないでいるなんて、うらまやまし、っじゃなくって、どういう関係だっ」
大声を上げる男子生徒。よく見てみれば、彼の額のハチマキには、ヒサノＬＯＶＥと太い黒とピンクのマジックでかかれており、はっぴに似たのまで着ている。
「お前の知り合いか？」
「いえ、まったく知りません」

とりあえず、相手は彼女を知っているようなので、ユヅルはヒサノに聞いてみるが、どうやら彼女も知らないらしい。
「って、言ってるけど、あんた誰？」
「俺は、春日野ヒサノさん、非公式ファンクラブ『ほんとに、ほんとに、ヒサノさん』。通称ＨＨＨ、会員ナンバー五十三」
「ファンクラブ？　何、それも部活動の一つだったりするのか？」
「いえ、本人で非公式って言ってますし、そういった活動に顧問の先生がつくとも思えません」
相手に自己紹介を求めておきながら、相手の言葉を聴かないユヅル。とことんマイペースにして、わが道を行く人間である。
「って、聞けよ」
「ああ、悪い。そんで、用件は？」
「お前を粛清する」
いきなり背中から木刀を取り出して構える男子生徒。ユヅルから見れば、構えは隙だらけで、力も入りすぎ。おまけに、相手に攻撃を宣言してから、襲い掛かるなど、反撃してくださいとお願いしているようなもの。つまり、返り討ちにするのは非常に簡単なのである。だが、ここで一つ問題がある。それは、何かしら暴力沙汰を起こしてしまえば、保護者を呼ばれてしまう。それだけは、彼としては避けたかった。常識人として執行官内で知られているエカテリーナ、形式上の保護者であるクローデル、局長にして、身元引受人になっているアレグリオ。この三名が来るなら、まだ、言い訳の使用がある。しかし、この三人は、多忙を極めており、来る確率は非常に低い。そうなると、他の執行官がくる。それは、できるだけ、彼としては避けたい。
「しかたねぇな。舌、噛むなよ」
「えっ？」
ヒサノが気づいたときには既に遅い。彼は、手を離して行動を開始している。男子生徒は、ユヅルに対して襲い掛かってくるが、彼はそれに背を向け、両手でヒサノを抱き上げる。俗に言うお姫様だ

っこ。それだけなら、まだ、ヒサノの精神も耐えることができただろう。だが、ユヅルはあろうことか、開いている窓から、外に向かって跳躍した。

部活動に参加しよう1（後書き）

決してよい子はまねしちゃいけません。

続きます。

部活動に参加しよう2（前書き）

好き＝得意、嫌い＝苦手

これは常に当てはまる方程式とは限らない。

部活動に参加しよう2

とりあえず、文化部の部室塔に着いたユヅルは、入り口で、ヒサノの状態を確認。彼女は、放心しているのか、うっとりしているのか、どちらにしてもここでおろすわけには行かないと判断。そのままの状態で、彼は手芸部の部室を目指す。

手芸部、そう、簡易的な看板がある部屋を見つけたユヅルは、両手がふさがっているので、いつものようにドアを足で蹴り飛ばす。当然、ドアは外れ、中にいた部員たちが驚いて、出入り口に視線が集中する。

「ああ、なんていえばいいんだ、こういうとき。悪い、ヒサノ、説明してくれ」

ヒサノを下ろし、ゆっくりと彼女を立たせようとするユヅルだが、彼女は腰が抜けてしまっていたので、体制を崩してしまう。そんな彼女を放って置くわけにも行かず、もう一度彼女をユヅルは抱き上げ、今度は椅子の上にゆっくりとおろす。

「おい、しっかりしろ。悪い酔いしたか?」

「だっ大丈夫です。はい」

顔をユヅルに覗き込まれ、二人の顔は吐息がかかるぐらいの距離にある。こういった彼の、鈍すぎる態度が、彼女の鼓動のスピードを飛躍的に上げてしまっているのだが、本人は無意識でやっているため、まったく気づかない。

「えっとですね、彼は、その、部活見学に来たゆ～君です」

「いや、春日野、呼び方はともかくとして、その紹介の仕方はどうかと思うぞ」

ヒサノがどうにかこうにか、口に出せたのはその言葉だけ。それに対して、部員の一人が野次っぽく言うが、

「部活見学、なるほど、噂の転校生くんだね」

そんな中で一人の女子生徒が、ユヅルを値踏みするように見なが

ら、軽く手をたたいた。ちなみに、ユヅルが女子と判断できたのは服装と、胸の大きな二つの風船のおかげだ、

「ああ、自己紹介がまだだったね、あたしは、手芸部部長、二年の釧路岬。気軽にみ～たんって呼んでくれるとうれしい」

―随分と奇抜な自己紹介をしてくれる―

口には出さないものの、ユヅルは彼女の外見から見て、率直に変人という判断を下す。髪は茶色のショートカット、それに加えて猫耳カチューシャ。これだけでも、町で見かけたら声をかけたくない。そして、そんな彼女の服装といえば、下は制服のスカート、だが、上はなぜか男同士が上半身裸で絡んでいるイラストが描かれているTシャツ。

「俺は、」

「ゆ～君でしょ。大丈夫、覚えたから」

―いや、呼び名じゃなくて、正式な名前を覚えろよ―

心の中で突っ込みを入れつつも、それ以上追求しようとはしない。この手の手合いは、受け流すことに専念しながら、会話をしなくては会話が成立しない。むしろ、自分の世界に相手を引っ張り込んでいく。

「そんで、釧路先輩」

「み～たん」

「いや、釧路先輩」

「み～たんです。そんな可愛くない呼び方は認めません」

―勘弁してくれ―

助けを求めようと、ユヅルはヒサノへ視線を送るが、残念ながら、彼女は首を振っている。どうやら、彼女もお手上げらしい。

「み～たん先輩、見学に来たんで、作品とか、部活の作業しているところとか、見せてほしいんですが」

「ちょいと待つがよろしい」

岬は満足げに口にすると、ロッカーをごそごそと漁り始める。

「話し方に統一性の無い人だな。おまけに、こうと決めたら譲らな

い」

「恥ずかしながら、おっしゃるとおりです」

小声でユヅルが口にすると、恥ずかしそうに顔を赤らめながらヒサノが代わりに謝罪してきた。どうやら、ヒサノも彼女に振り回されている犠牲者の一人らしい。

「これが、我が手芸部、主に私の作品だぁ。とくとご覧あれ」

机に広げられたものを見て、ユヅルはどう答えればいいのか、困ってしまう。おおよそ見当はつくのだが、確信は持てない。

「これは？」

「見ればわかるだろう、犬だ」

「じゃあ、これは？」

「ゆ～君はダメダメさんだな。猫に決まっているだろう」

自信満々に岬は答えるが、ユヅルには、色が違うだけで同じもののようにしか見えない。他の部員はどうなのだろうと思い、周囲に視線を配るが、皆、苦笑いを浮かべている。

「どうだ、すばらしいだろう。そんなわけで、これにクラスと名前を書きたまえ」

彼女が机の上に置いたのは、入部願いの紙。ここで、促されるままに書いてしまえば、詐欺に引っかかるカモでしかない。

「その前に、針含めた裁縫道具一式、貸してください」

ユヅルの言葉に、快く裁縫道具を渡す岬。部員たちは、これから何が起こるのか、固唾を呑んで成り行きを見守っている。

だが、次の瞬間、部室にいた全員が言葉を失ってしまう。なぜかって、それは、ユヅルが器用に、針と糸を使いこなし、ぬいぐるみを二体ほど、十分もしないうちに完成させていたからだ。その動きは、一朝一夕でものにできるものではなく、とてもじゃないが、体に染み付いていなければ、できるものではない。

「み～たん先輩、これが犬と猫です」

そう、彼が作った二体のぬいぐるみは、十人が十人認める犬と猫。しかもそのできはかなりのもの。あまりの手際のよさに、部員全員、

状況が飲み込めていない。だが、そんな部員をよそに、入部届けに名前を英語で記入したユヅルは、ぬいぐるみを椅子に座ったままのヒサノに対して放り投げる。

「それは、お前にやる。ああ、そうだ、活動日とかは、明日にでも教えてくれ」

そう言って、ユヅルは部室から出て行ってしまう。

「すっ素晴らしい。ハラショ～」

奇声を上げながら喜ぶ岬に、ユヅルお手製のぬいぐるみを抱きしめ、完全に乙女モードに入ってしまったヒサノ。

部員たちは、この状況、どう収拾をつけたらいいものか、腕組みをしてうなっていた。

部活動に参加しよう2（後書き）

部活は決まりましたが、まだ続きます。

次はどちらのターン？

部活動に参加しよう3（前書き）

答えはカズキのターン

ドロー

部活動に参加しよう3

「そんで、お前は姿かくして、気配かくさずか。いるのバレバレだぞ」

手芸部の部室を出たユヅルはため息をつきながら、気配のある方向に視線を固定。

「ふむ、僕としてはうまく隠れたと思ったのだが、甘かったか。次からは気をつけることにするよ」

謝罪と取れなくもない言葉を口にして、姿を現したのはカズキ。もっとも、彼女の気配を感じたので、彼は部室から出てきたのだが。

「そんで、今から行くのか？」

「どこに？」

「どこにって、お前。部活見学に俺を誘いに着たんじゃねぇのかよ」

腕時計を見れば、時刻は午後五時三十分を回ったところ。部活の活動時間がどのぐらいまでなのか、ユヅルは知らないが、この時間はまだ活動していてもおかしくない。

「うん、そうだよ。すぐいこう、今行こう」

そう言ってユヅルの隣まで来て、右腕に両腕を絡めてくるカズキ。

「歩きづらいんだが」

「おやっ、お姫様抱っこは歩きづらくはないと？」

さらに何か言おうと、ユヅルは口を開こうとするが、口では彼女に勝てないことを過去の経験から学習済みなので、諦める。そんな彼を見て、カズキは満足そうに、ユヅルの腕を取りながら、抱きつくような体制で部室へと彼を連れて行く。その瞬間も、当然のようにシャッターを切られているのだが、もう、彼にとってはどうでもいいことになっていた。

カズキに連れてこられた部屋の看板を見て、ユヅルは一瞬、顔をしかめる。その場所には確かに、創作部と書かれているが、その隣

には軽音楽部の看板も一緒にかけられている。
「さぁ、行くぞ」
彼女に促され、抵抗することもなく、ユヅルは部室へと足を踏み入れる。それと同時に、彼の耳に響いてきたのは轟音。そう、まさに轟音。それもそのはず、部室内に防音設備を施してあるのだろう。外には音が一切漏れていなかったが、中では四人組のバンドが演奏真っ最中。だが、肝心の歌が聞こえてこない。
「彼らは、創作部の有志で結成したバンドでね。最近、部に昇格したため、部室がまだない。そんなわけで、部室を兼用しているんだ」
「説明ありがとよ」
二人が会話をしていると、ようやく二人の存在に気づいた四人組が演奏を中止し、
「雨竜さんの彼氏かな？　はじめまして、軽音楽部部長の一年五組、真田アキタカです」
ギターを演奏してきた小柄な少年が頭を下げた後、右手を差し出してきた。だが、ユヅルの右腕は、カズキに取られてしまっているため、握手ができない。それを察してくれたのか、アキタカは代わりに左手を差し出してくる。
「一年三組のユヅル・ハイドマン。ちなみに彼氏じゃない」
さりげない親切を快く受け入れ、ユヅルは彼の手を握り返す。
「そうですか、それは失礼。そうそう、創作部の部長は今、生徒会室に行って、席をはずしています。代わりといっては何ですが、副部長の僕が説明しても？」
「それは助かるな、是非そうしてくれ」
待たされるよりも、時間を無駄にせず済む。そう考えたユヅルは、アキタカの提案をのみ、先を促す。
「創作部の主な活動としては、やはり、執筆活動ですね。主な発表の場である文化祭では、各部員が書いてきた作品を一冊にまとめ、無料配布しています。ちなみに、軽音楽部に詩も提供してくれて助かってます」

「なるほどね、ジャンルとしてはどんなの書いてるんだ？」
「それは、僕が持ってこよう。確か、去年度の作品が保管されていたはずだ」
ようやくユヅルの右腕を解放し、作品を取りに移動するカズキ。
そんな彼女を見て、アキタカはユヅルに耳打ちしてくる。
「本当に彼女と付き合ってないんですか？」
「さっきも言ったが、違う。昔の知り合いなだけだ。あいつも、久しぶりに会えたんで、舞い上がってるだけだろ」
意外と食い下がってきたアキタカに対し、こちらも小さな声で答えるユヅル。だが、彼の言葉をアキタカが信じていないことは、笑みを浮かべている彼の顔を見れば一目瞭然だった。
「あった、これだ」
目的のものが見つかり、一冊の本をユヅルに手渡すカズキ。受け取ったユヅルは、その重量に若干驚きながら、ページをめくっていく。
「なるほどねぇ」
本を閉じ、近くにあった机に置き、室内を見渡すユヅルは、先ほどまで持っていた疑問をぶつけてみることにした。
「そういや気になったんだが、バンドにボーカルはいないのか？作詞はしてもらってるんだろ」
だが、その質問はどうやら地雷だったらしい。その質問をした瞬間、バンドメンバーは遠目でも分かる位に肩を落とし、落ち込んでいる。
「ぼくら、音痴なんです」
「音痴？」
「はい、楽器の演奏はそれなりにできるんですが、歌うとなるとやっぱり、四人ともダメみたいで」
「なら、他のやつに歌ってもらえばいいだろ？」
「そうなんですけど、僕らの知り合いに歌の上手い人っていなくって」

どうやら、彼らなりに手を尽くした結果、ボーカルがいないらしい。それで納得しようとしたユヅルだが、カズキが不用意な一言を口にしてしまう。
「ならユヅル、君が歌えばいい」
「はっ？」
「ここまで来たんだ、もう、創作部にも軽音楽部にも入ることは決定だろう？」
「話を勝手に進めるなよ」
「本当ですか？」
講義を続けようとするユヅルだが、アキタカのあまりの嬉しそうな顔を見て、若干決意が揺らいでしまう。そこに、カズキはつけ込んでいく。
「あんしろ、真田。彼はこう見えて、歌も上手いし、なんだかんだ言って、面倒見がいい。懇切丁寧に頼めば、断るような男ではない」
「勝手に他人のキャラを作るな」
「是非、お願いします」
ユヅルは抗議するが、とき既に遅し。既に、彼が両方の部に入部し、ボーカルとして軽音楽部に参加することが確定して、話が動こうとしている。
「それで、何を演奏しましょう」
「俺、日本の歌、あんまり聴いた覚えないから、適当でいいよ」
そして、抵抗の無意味さを悟り、ユヅルは諦めてしまう。
「それじゃ、リベロの『Ｄｏｎ'ｔ　ｙｏｕ　ｓａｙ』は？」
「それなら知ってる。でもあれって、ギター二本必要だろ？」
アキタカが提案してきた曲は、去年、全米で大ヒットを記録した映画のテーマ曲。しかし、そのバンドは五人組だと、ユヅルは記憶している。ボーカル＆ギター、ギター、ベース、ドラム、キーボードの五人組。改めてみても、ここには、ギター、ベース、ドラム、キーボードの四人しかいない。そう、一人分足りない。
「はい、それじゃお願いします」

そう言って、アキタカは予備のギターを取り出してきて、ユヅルへと手渡す。どうやら、彼が　ボーカル&ギターをやることは、変更のきかない決定事項らしい。

「はぁ」

ため息をつきつつも、受け取ったギターのチューニングをしたユヅルは、アンプにつないで、軽く音を出してみる。

「準備はいいですか？」

「もう、どうにでもしてくれ」

ユヅルの返答を、了解と取り、五人での演奏が開始される。もっとも、観客はこの場にいるカズキ一人なのだが。

始まるまで、やる気が完全になかったユヅルだが、演奏が始まると、それは一変した。

そう、彼は誰に恥じることなく、堂々とした態度で歌い始めたのだ。勿論、そうでなくては困るのだが、ギターもきちんと弾けている。初心者であれば、どちらかに偏ってしまい、片方でミスをしがちなのだが、彼にはそれがない。おまけに、英詩の歌詞は、長年英語圏で生活してきた彼にとっては母国語のようなもの。発音も完璧である。

演奏が終わり、カズキから拍手を受け取りながらギターを置こうとしたユヅルだが、その瞬間、後ろから四人がかりで抱きしめられてしまう。そこで、倒れなかったのはさすがとしか言いようがない。

「やばいっす、ユヅル君、メチャクチャ上手いじゃないですか」

「ギターも歌も、マジパネェ」

「逃がしはしない」

「これからよろしく、お願いします」

振り返れば、四人同時に口を開くものだから、ユヅルは戸惑ってしまう。

「俺は、聖徳太子じゃねぇ。一人ずつにしろ」

なんだかんだ文句を口にしつつも、流れには逆らえないユヅルだった。

部活動に参加しよう3（後書き）

彼は、いったいいくつの部活に参加するのでしょうか？

答えは、ノリだけが知っている

幕間　闇の中（前書き）

本当の彼はどこに。

複線を一つ回収

幕間　闇の中

横浜倉庫街。

時刻は、深夜二時を回り、周囲の光は闇に飲み込まれ、騒音は海の音にかき消されていく。

そんな場所で一人、ベンチに座り、タバコの煙を燻らせているのは、天禅寺高校の制服ではなく、私服姿のユヅル・ハイドマン。両手をジーンズのポケットに突っ込み、思考をまとめる為に両目すら閉じている。

「失礼、少し遅くなってしまったようだな」

深夜だというのにサングラスをかけたスーツ姿の男。英語で話しかけてきたところを考えれば、間違いなく、この男がユヅルの待ち人。

「そうだな、本当に、少し遅かった」

タバコを吐き捨て、靴の裏で火を踏み消して立ち上がったユヅルは、男の持っているスーツケースに視線を注ぐ。

「それが、例のブツで間違いないのか？」

「ああ、確認してもらいたいのだが、そちらの持ち物は？」

ユヅルは男の問いに、顎でベンチの横においてあるスーツケースを示す。

「尊大な態度だな。交渉相手の機嫌を損ねて、得でもあるのか？」

「別に。気に入らないなら取引なんてしなければいいだろう」

「違いない」

男がサングラスを取ると同時、何かに牽きつけられるようにスーツケースが持ち上がり、男の前まで移動してくる。決して手品などではない。

超能力。

人は度々、この言葉を口にする割に、科学という言葉を盾にして、事実を否定し続けている。しかし、存在し続けているのも確か。完

全に否定することなど、誰ができようものか。
男はなれた動作で、しゃがみこんでスーツケースを開けるが、彼は顔をしかめる。勿論、それは中身が彼の予想していたものではなかったから。代わりに、その中身は、一枚の紙切れ。
「求めるならば、奪い取れ。それが、唯一無二の答えだ」
紙切れに書かれている言葉を、高らかに口にするユヅル。瞬間、飛んでくる空のスーツケース。それを右足で蹴り飛ばし、彼は、左手で新しいタバコに火をつける。
「まさかとは思っていたが、そうか、それが答えか」
「当たり前だ。もしかしてあんた、異端審問局が、人殺しが、エゴイストが、羊の振りしただけの狼が、取引なんて。そんな、いっぱしの人間みたいな、常識持ったやつらみたいな真似をするとでも、本気で思ってたのか？」
彼は、顔に邪悪な笑みを貼り付け、男の言葉を真っ向から肯定する。
「この世に正義なんて存在しない。あるのは力と欲、そして意思のみ。他者の価値観で変化してしまうようなもの、俺たちは信じない。この世に悪も存在しない。わかったなら、とっとと帰れ。伝書鳩の真似事させられる俺の身になって」
男に対して、帰るよう態度で促すものの、男がこのまま引き下がるとは、微塵も思っていない。
「そうか、ならば、貴様らの流儀に習い、そうさせてもらうとしよう」
男の言葉と同時、瞬時に移動しようとしたユヅルだが、その体が動かない。当然、無防備なまま、男のこぶしを腹に受けるが、男はユヅルが倒れることすら許そうとはしない。そのまま右膝を鼻に、肘を右目に叩き込む。声すら出せず、痛みに耐えながら、ユヅルは思考をフルスピードで回転させていく。
「つまらんな、異端審問局とは、所詮この程度のものか」
吐き捨てるように男は口にし、ユヅルに対して背を向ける。そう

して、ようやく彼は倒れることができた。だが、のんきに眠っているわけにもいかない。男は、その気になれば、いつでもユヅルを殺すことができたはず。それでも、その行動に移らないのは、自分の力に、優位性に絶対の自信があるからに他ならない。

「これなら、こんなやつらを収めている長、アレグリオといったか、奴の器もたかが知れている」

「おい、お前、今、なんて言った？」

男の侮蔑に対し、痛む体に鞭打ち立ち上がったユヅルは問いかける。それは、この場にそぐわぬ、純粋すぎる声。

「貴様ら、異端審問局もその長もたいしたことがないといったのだ、小僧」

振り向きざま、ユヅルの反応できない速度で、右のつま先を鳩尾に叩き込む。能力を使う必要は既にない。それだけで、目の前の少年は意識を失う。そう、男は踏んでいた。それは、間違いなく、長年の経験からくるものであったが、結果は違っていた。

男の蹴りを受けたまま、ユヅルはその場から動いていない。倒れてもいなければ、うめき声も上げていない。完全に意識を失っているわけでもない。なら、男が気になって仕方がない、違和感の正体はいったい。

「そうか、俺の聞き間違えじゃ、なかったわけだな」

口から血を吐き出し、男の攻撃で落としてしまったタバコの代わりに、又、新しいタバコに火をつけながら、ユヅルは、男の顔を見ずに口にする。そして、ゆっくりと、タバコの煙を吐き出しながら、顔を上げた彼の顔に、先ほどの笑みはない。かといって、苦痛の表情があるわけでもない。怒りがあるわけでもない。普段どおりの表情を浮かべ、

「俺の中には、破らないと決めたルールが二つだけある。それを特別に教えてやる。一つ、己の生き方を己では変えないこと。一つ、オヤジのことを馬鹿にした奴だけは、誰であっても殺すこと。お前は今、局長、オヤジのことを馬鹿にしたな」

何気なく、そう、雑談でも口にする口調で歌い上げる。
「お前は、殺す」
そして、宣言する。
だが、男とて、ただその場にいて、殺されるはずがない。相手を殺す。そう口にしたものの、その場から動こうとしないユヅルへ、こぶしを、蹴りを、肘を、膝を急所へと叩き込んでいく。彼は動かない。男が能力を使っているため動けない。
「もう、終わりか？」
タバコの煙を燻らせ、唇にタバコをはさんだ状態で、ユヅルは口にする。
男は既にやけになってしまっている。手ごたえがないわけではない。そのこぶしには、骨を砕いた感覚、足にも同様の感覚が伝わってきている。男の見立てであれば、全身骨折に加え、骨折した骨が臓器に突き刺さり、言葉を口にすることなど、到底できるはずのない常態。なのに、目の前の少年は、それが当たり前のように口を開く。
「終わりみたいだな」
次は、こっちの番。その言葉そう告げている。だが、男の能力に拘束されているユヅルは、動くことができない。そう、男は自分の能力に対して、絶対の自信を持っていた。その瞬間を見てしまうまでは。
ユヅルは、いつの間にか、左手の指にタバコを挟み、空いた指で刀の柄を握っている。先ほどまで持っていなかったはずの刀。彼はそのまま右手で抜刀。距離的には、男を袈裟切りにできるが、男はその攻撃に対して、能力で対抗。
男の能力は、引力と斥力であり、超能力の中でも、サイコキネシスと類似されることが多い。対して、ユヅルの獲物は刀。磁力の影響を大きく受ける金属でできた武器は、男の能力に逆らうことができない。男は、そう、確信していた。しかし、男の体に伝わってきたは、異物が体に進入してくる不快感、次いで、肌を切り裂かれる

痛み、そして、地面の冷たさの順。ユヅルの刀は見事なまでの軌跡を描き、男を袈裟切りにし、鞘へと収められている。

「なっ、なぜだ」

男は、途切れ途切れに、信じられないといった表情で、ユヅルを見上げる。対して、彼は、タバコを投げ捨て、再び刀を抜き放つと、今度は男の右腕に突き刺し、地面に縫いつけ、刀に体重をかけて固定させる。

「確か、殴られた数は、十一発だったな」

男の問いに答えず。懐から銃を取り出したユヅルは、その引き金をためらうことなく、男の右手に向かって引く。引く、引き続ける。指が千切れ飛び、爪が宙を舞おうが、血が周囲に飛び散ろうがお構いなしに。ちょうど、十一発撃ち終えたとき、彼は懐に銃を戻し、刀を男の右腕から引き剥がし、男の首へと移動させる。男は既に、痛みと出血で意識が途切れかかっている。それを、無理やり髪を掴んで、上半身だけ起き上がらせるユヅル。

「お前は、俺を殺せていた。だが、殺せなかった。それが事実であり結果。それがすべてだ。自分に自信を持つことは否定しないが、殺せるときに殺しておかないから、自分が殺されることになる。しっかり、勉強しておくんだったな」

嘲るのではなく、淡々と口にしたユヅルは、男の髪から手を離し、そのまま刀で喉を切り裂く。既に、致命傷の男に、さらに傷を与え、彼はようやく刀を鞘へと戻す。

「こちら、ユヅル・ハイドマン。対象の殲滅を確認、処理を頼む」

「了解しました」

携帯電話を取り出し、着信履歴からコールした彼は、返事だけを聞いて、すぐに通話をきって、携帯をジーンズのポケットに戻す。腕時計で時刻を確認すれば、午前ニ時二十三分。

「約五時間後には学校に行かないといけないのか。ズル休みは可能か？」

先ほどまでとは打って変わり、ため息をつきながらも彼はいつも

のように、その場所を後にする。

幕間　闇の中（後書き）

次からは再び日常に戻ります。

デートにレッツゴー1（前書き）

ようやくカナミのターン。

そして続きます。

デートにレッツゴー1

それは、ある日の出来事。

いつものように高校へ行き、帰りに商店街で夕食の材料を買い終えたユヅルとカナミの二人は、小さなテントの前にいた。そこには、大々的に商店街福引大会。この文字が横断幕に書かれ、風に舞っている。

「福引ってなんだ？」

そんなことをユヅルが口にしたのがきっかけ。偶然にも、本日の買い物で、一回福引をするほどの福引券を二人は手に入れている。

「そうですね、口で説明するとどうも上手く言えないので、実際に一度やってみましょう」

カナミに言われ、二人して列に並び、いよいよ二人の番。ユヅルにしてみれば、初体験である。

「ここを握って、回せばいいと」

「はい、出てきた玉の色に応じて、その景品がもらえるんです」

説明を受け、視線を移動させてみれば、一等、二泊三日、ペアでの温泉旅行。二等、米一俵。三等、フルーツ詰め合わせ。まぁ、商店街の福引なので、商品としては順当なところなのだろう。とりあえず程度に納得し、ユヅルが回すと出てきた玉の色は、白。見事に外れであり、ポケットティッシュを一つ受け取り、彼の福引は敗北で終わる。

「なるほどなぁ、こういうもんか」

受け取ったポケットティッシュをユヅルは、ポケットに押し込み、家路へと着こうとするが、二人が横断歩道に差し掛かったところ、車が赤信号で飛び込んできた。ユヅルが瞬時に、カナミの腕を取り、体ごと引き寄せ、車は通過していく。

「怪我は？」

「だっ大丈夫です」

非常事態だったとはいえ、正面からユヅルに抱きしめられるような体制になり、カナミの頬は赤みを帯びている。

そんなとき、続けて今度はバイクが、ハンドル操作を誤って突っ込んできた。二人には関係ない距離だが、その先には、杖を使っている老婆の姿が。

「おばあさん」

考えるよりも先に体が動いたカナミは、老婆をかばうようにその場にしゃがみこむ。

―馬鹿が―

心の中で毒づきなら、移動したユヅルは、ドライバーを殴り飛ばし、それより少し遅れて、バイクを上に蹴り飛ばす。

「本当に、世話が焼ける」

腰を抜かしたドライバーと、落下してフロント部分が変形したバイクを見た後、ユヅルはカナミに手を差し伸べ、

「卵割れちまったから、もっかい、買いに行くぞ」

仏頂面のまま、言葉を口にする。そんなユヅルの手を握り、立ち上がったカナミは、それからすぐに老婆の無事を確認。

「無事で、よかったです」

「ほんに、ありがとうなぁ」

「さっさと行くぞ」

既に、興味のなくしているユヅルが先に行ってしまったので、カナミをあわてて後を追う。

そして、善行は善行となって帰ってくるのである。

翌日、土曜の夜。

学校から帰ってきたユヅルとカナミの二人。二人の視線は、石段より少し先に停まっている黒塗りの車に注がれる。以前、ヒサノの父がリムジンで訪れてきたことがあるので、少し警戒しながら、二人は石段へと近づいていく。

すると、車から一人の男性と、見覚えのある老婆の姿が出てきた。

「かあさん、この人たちで間違いないのかな？」
「ええ、合ってますよ」
一言二言交わし、老婆を車へと戻らせた男性は、二人の下へと歩いてきて頭を下げる。
「初めまして、先日は母を助けていただいたそうで。お礼に伺わせていただきました。お二人がいなければ、母は今頃、よくて病院のベッドの上、悪ければ、この世にいなかったでしょう。本当にありがとうございます」
男性は、礼を口にして再び深く頭を下げた。
「そんなっ、頭を上げてください。おばあさんが無事で、私たちも怪我はしてないですから。お礼を言われるようなことじゃありませんよ」
あわてて男性に対してカナミは声をかける。ユヅルはといえば、無関心を装い、完全に関わる気がない。
「それでですね、よろしければなんですが、こちらを受け取っていただけませんか？」
口ではそういいながら、カナミに男性は半ば強引に封筒を握らせる。中に入っていたのは、最近、近所にできた遊園地のフリーパスチケットが二枚。
「私、この遊園地の支配人をやっていまして。こんなお礼しかできなくって申し訳ありません」
そう口にして、男は頭をもう一度下げると、今度はそのまま車に戻り、去っていってしまう。どうやら、返却は受け付けてもらえないらしい。
「何もらったんだ？」
話に興味はなくとも、もらったものには興味があるらしく、ユヅルがカナミの手元を覗き込む。
「ふぅん、明日日曜だし、誰か友達誘って行って来れば？」
そんなことを口にして、ユヅルは石段を登っていこうとするが、
「じゃあ、一緒に行きませんか？　遊園地」

「俺と？」
「えっとですね、深い意味はないんですけど。ほら、ユヅルさんって、日本の遊園地に行った事ないんじゃないかなって、思いまして。そっその、突然なんで、予定があれば、別にかまわないんですけど」
自分でも何を言っているのか分かっていないのか、彼女の声は裏返っていて、そして、断られることが怖いのか、弱々しい。
「何時にここ、出ればいいんだ？」
「えっ？」
「だから、行くんだろ、遊園地。行く前に声かけろよ」
「はいっ」
まさか、一緒に行ってもらえると思っていなかったカナミは、彼の言葉に対して満面の笑みで答えるのであった。

デートにレッツゴー1（後書き）

ちなみに、ユヅルの予定は、
月、火に手芸部。水、木が創作兼軽音楽部となっております。

デートにレッツゴー2（前書き）

久しぶりにカナミと二人。

そして、筆者も絶叫系は苦手

デートにレッツゴー2

待ちに待った日曜日。

二人きりのデートということもあり、カナミのテンションは相当なもの。もっとも、時刻はまだ午前六時を回ったばかりで、ユヅルに声をかけていない。

「よし、今日は絶対大丈夫なはずです」

普段、いや、最近一週間で、二人の周囲、主にユヅルの周囲は大きく変化している。彼が着てから二週間の間は、二人でいることが多かったというのに。なぜか、彼はいろいろな場所で、自分勝手にフラグを立ててしまう。おまけに、それが女性がらみなのだから、尚更性質が悪い。

「でも、今日は二人っきりです」

最近、部活に参加し始めたせいか、ユヅルは学校生活が忙しくなってきている。もっとも、そうさせたくて、クローデルは彼を日本の学校に入れたのだが。彼女のにしてみれば、そういった大人の事情は関係ないのだ。

昨日一日悩んで、決めた服装に、普段はあまり念入りにはしない化粧もしている。これで、お弁当も持っていければ最高だったのだが、それは、昨日、母親に台所で大目玉を食らい、できなくなってしまった。それでも、今日は、二人っきりなのだ。

「さてと、それじゃ」

そう言って、自室を後にしたカナミは、ユヅルの部屋の前まで移動。一つ深呼吸をして、ドアを開ける。なぜだか、彼女自身は知らないが、彼はドアに鍵というものをかけない。トイレは例外だが、彼が自分の部屋に鍵をかけたところを、カナミは一度もみたことがない。

薄暗い室内、足元に気をつけることなく、カナミは室内に足を踏み入れる。彼の部屋には、ものがあまりない。いや、生活に必要な

もの以外、殆どものがなく、味気ない。あるとすれば、灰皿ぐらいのもの。後、小さな写真たてが一つ。そこには、今と同じ仏頂面を浮かべたユヅルと、隻腕隻眼男性が笑みを浮かべて写っている。

そんな室内で、ユヅルはベッドの中、静かに寝息を立てている。彼を知らない人間が見れば、特に驚くことはないが、知っている人間からしてみれば、結構驚いてしまう。そう、彼、寝顔だけは年相応の少年で、むしろそれよりも幼く見えて、可愛く見えるのだ。無論、この事実を知っているのは、この家でカナコとカナミの二人だけ。そう、最近現れた二人の女の子は、この秘密を知らない。そんな小さな優越感に浸りながら、カナミはベッドの前で膝をつき、彼の前髪に手を伸ばす。

「ユヅルさん、朝ですよ」

耳元でカナミはささやくが、ユヅルからの反応はない。彼、自分で起きる時は、目覚ましを必要とせず、決まった時間に起きる。だが、特に、誰かに起こされるときに限っては、ちょっとやそっとでは目を覚まさない。

そのことを知っていながら、あえて確認したカナミは、頬を軽く指でつつく。それでも、反応は返ってこない。完全に熟睡している。そして、彼女自身、この時間を完全に楽しんでいた。しかし、楽しい時間は長くは続かない。壁の時計を確認すると、時刻は午前七時を回ったところ。遊園地までの移動時間を考えれば、八時半に家を出れば十分間に合う。なら、もう少しこの時間を楽しめると、カナミは思ったのだが、

「何やってんだよ、お前」

残念なことにユヅルが目を覚ましてしまう。少しだけがっかりしながら、カナミは立ち上がり、

「起こしに来たんです」

少し頬を膨らませ、腰に手を当て、前かがみになって、寝ぼけているユヅルに声をかける。

「わかったよ、着替えたらすぐ行くから。待ってろ」

「はい」
やはり、今日はテンションが相当高い。そのことを自覚しながら、返事をしたカナミは部屋から出て行く。

「ったく、がきじゃねぇんだから、もう少し落ち着けよ」
「そうですけど、一日を楽しむためには、時間は無駄にできないんです」
チケットを入場ゲートで渡し、代わりにリストバンドを受けとった二人は、それぞれ右手につけ、遊園地に足を踏み入れたのだった。

「お前が乗りたいって、言ったはずだよな?」
「そうです、そのとおりです」
ユヅルの問いに答えるカナミの言葉は、非常に弱弱しい。まぁ、テンションだけで苦手な絶叫マシンに乗れるわけもなく、乗った後の考えていなかったのである。当然の結果、体調を悪くしたカナミはベンチにもたれかかっている。
「はぁ、飲み物でも買ってくるから、おとなしく待ってろよ」
そう口にして、ユヅルは売店のほうへと歩いていってしまう。彼がいなくなったことを確認して、
「本当、何やってるんでしょうね、私」
大きくため息をついてしまうカナミ。楽しみでしょうがなく、はしゃいでしまったことが原因なのは、自分でも分かっている。後先考えないで行動してしまった自分が悪いのだ。
「ねぇ、彼女、一人?」
「良ければ、俺たちと一緒に遊ばない?」
顔を上げてみれば、カナミに声をかけているのだろう。何人かの男性が近くによって着ている。まぁ、ナンパである。普段であれば、すぐに断ることができるのだが、現在、彼女は体調不良。すぐに言葉を口にすることができない。
「あんたら、何やってんだ?」

そんな場所に、まったく空気を読まずに戻ってきたのはユヅル。両手には、売店で買ってきたドリンクが握られており、本当に、疑問をただ口にしただけらしい。

「なに、あんたこの子の知りあい？」

「ちょっと引っ込んでてくれる？」

だが、男たちはユヅルの存在を好ましく思っていない。睨みながら、彼にここを立ち去るように、手で指示するのだが、残念。彼らが相手にしている男、ユヅルは、マイペース。男たちの言葉を無視して、ベンチに腰掛けて、両方のドリンクをベンチの上に置く。

「とりあえず、紅茶とコーヒー買ってきたから好きなほうを選んでいいぞ」

「あれ、優しいんですね？」

「お前が普段、どんな目で俺を見てるのか、少し分かった気がするよ」

そう口にして、苦笑したユヅルはそのままタバコを取り出し、火をつけようとして、やめる。

「タバコ、吸わないんですか？」

「いや、さすがに体調崩してるやつの隣で吸うのはどうかと思った」

そんな彼の言葉を聴いて、少し気分がよくなってきたカナミは笑みを浮かべる。

「おい、何完全に無視してくれちゃってんの」

「やっちまうぞ、テメェ」

その存在を完全にユヅルは忘れていた。そう、服をつかまれ、強引に立たせられてようやく、思い出した。

「あのさぁ、一つ質問、俺の握力はいったいどれぐらいでしょう？」

「はぁ？　そんなの知るかよ」

「こちとら、格闘技やってんだぞ」

まともに質問に答えてもらえると思っていなかったが、想像以上の答えが返ってきたので、とりあえず、自分の服を握っている男の手を右手で軽く握る。

「まぁ、測った覚えなんてないんだけどさ」
それだけで、男は苦しげなうめきを上げながら、ユヅルから手を離し、掴まれている手にもう片方の手を持ってきて、どうにか彼の手を引き剥がそうとする。
「今なら、俺のお願い聞いてくれるかな。消えろ、俺の視界から」
ユヅルが右手を離すと、男の手にはきっちりと青あざが手の形を残し、そこにどれほどの力がこめられていたかを、雄弁に語っている。それが効果があったらしく、男たちはその場からすぐに去っていく。
「ったく、面倒くせぇ」
再びベンチに腰を下ろしたユヅルは、空を見上げながら毒づく。
「さてと、それじゃ、次はあれに乗りましょう」
そんなユヅルの右腕を取り、立ち上がったカナミは、メリーゴーランドを指差し、歩き出す。
「体調はもういいのかよ」
「大丈夫です」
ため息をつきつつも、ユヅルは逆らうことなく、彼女に歩幅を合わせて歩き出す。それが、カナミにとっては嬉しかった。

デートにレッツゴー2（後書き）

次で、複線を少し回収する予定。

カナミのターンはまだ続きます。

デートにレッツゴー3（前書き）

お弁当は恩返し。

デートにレッツゴー3

夕暮れ時、二人は帰る前に観覧車に乗っていた。
「ふぅ、意外と疲れるもんだな、だが、楽しかった」
今日一日を振り返り、外の景色に視線を固定しながら、ユヅルは口にする。
「なぜ、あの時、我を殺さなかった。答えろ、小僧」
しかし、帰ってきたのは、無粋な言葉。それは、紛れもなくカナミの口から放たれているのに、彼女の言葉ではない。
「お前、誰だっけ？」
「はぐらかすな、小僧」
対面に座っている彼女に視線を移動させたユヅルは、いきなり怒鳴られ、どう言葉を返していいものか、少しだけ悩む。
「それで、何を答えろって、『クシミタマの巫女』。もう一度言ってくれ」
「なぜ、あの時、我を殺さなかった」
「いや、殺したと思ってたよ。今、お前がここに、カナミの表層意識を乗っ取って、出てくるまでは」
「だから、はぐらかすなと言っている」
彼女は立ち上がり、ユヅルの首元を両手で掴み、服をひねりあげる。
「何をそう、カリカリしてるんだ？　生きてたんなら、それが結果だろ？」
「生かされている屈辱を、知らぬ貴様ではあるまい。答えろ」
「ったく、面倒なやつだな。とりあえず、座れ」
ユヅルは、彼女を座らせ、服装を正すと、大きくため息をつき、
「殺さなかった理由だっけ？　そんなの、お前もカナミの一部だったからに決まってるだろ」
「我が、この器の一部だと？」

「俺はそう感じたんだが？」
「馬鹿なことを言う。我に捧げられた供物であるこやつの、一部だと」
納得がいかないといった表情で、彼女は怒りをあらわにする。
『クシミタマの巫女』
それは、神宮寺の家に古くから伝わっている、神の名前。神宮寺の家に生まれた女子は、代々、この神の器になることを義務付けられ、生贄になる。そして、三代において生まれてくることのなかった神宮寺家が、ようやく授かった女子がカナミである。
彼女の為、カナミは生贄になるはずだった。そう、義務付けられていた。だが、カナミの祖父である勲は、この儀式を憎み、どうにか、この儀式を阻止しようと計画を練り、ユヅルが現れた晩に、その計画を実行した。計画は単純明快、カナミを生贄にする振りをして差し出し、それに食いついた神を殺すこと。神を祀る家系として、実行することも、思考することすらも禁じられているはずなのに、勲は孫娘を守る為に、禁忌を犯した。もっとも、実行したのはユヅルなのだが。
「俺がお前を殺そうとしたとき、お前は既にカナミの中にいた。そしたらもう、お前は、カナミの一部と考えてもおかしくはない。俺はそう思うが？」
「ほう、ならば問おう。我が、この娘の体を奪い、現世に顕現した場合、貴様はどう動く？」
「そんな当たり前の、分かりきってる答えを聞いて、どうするんだ？」
「いいから答えろ」
―なんか、ため息ついてばっかだな―
激昂する彼女の問いに対する答えは、既にユヅルの中で決まっている。
「お前を殺して、カナミを取り返す」
「できるのか、貴様に？　我をこうして見逃している貴様に」

「お前こそ何を勘違いしてるんだ？　それとも、力の差すら理解できないほど耄碌したか。俺は、お前がカナミの一部だと判断したから、お前を殺さなかった。それが逆になったら、簡単に殺せるに決まってるだろ。現に、お前は一度俺に負けてるんだよ」

「口先だけでは何とでも言える」

「なら、試してみるか？」

平然と、日常会話でも口にするようにユヅルが口にすると、彼女は、笑みを浮かべて、いきなり、ユヅルの唇を奪ってきた。それは、ほんの一瞬の出来事だった為、彼は驚愕に目を見開き、瞳を閉じていた彼女は、次の瞬間、顔を茹蛸のように赤くしている。

「なっ、なんで、こんなことになってるんですか」

いきなりの事態に、カナミはどうすればいいのかわからない、―引っ込みやがったな、あいつ―

既に、カナミに体の支配権が戻ったのだろう。ユヅルは、このことをどうやって説明しようかと悩む。すると、ちょうど観覧車は役目を終えて、地面へと戻ってしまう。

「悪い、係員さん、もう一回乗せてくれ」

そう口にして、ユヅルは降りることを拒否。再び観覧車は地面から、ゆっくりと離れていく。隣には、オーバーヒート状態のカナミ。事情を素直に説明することは簡単だが、それは、カナミのために行動した勲のことを考え、なるべくしたくない。

「さて、どうしたもんかね、まったく」

問題は積み上げられたまま。だが、このわずかな時間だけは、満喫しようと、ユヅルはオレンジ色に彩られた町に、視線を送った。

デートにレッツゴー3（後書き）

次回は、ちょっとシリアス。

エロジジイがシリアスなのです。

生贄と夜1（前書き）

複線回収開始。

生贄と夜1

それは、ユヅルが日本についた日。
屋敷の離れに、クローデルを伴わず、勲に呼び出されたユヅルは、彼の対面に腰を下ろし、胡坐をかく。
「そんで、こんなところに呼び出して、何のようだ？」
「本題に入る前に聞いておきたい、主は、神の存在を信じるか？」
先ほど、クローデルから受け取ったものをみた時の緩んだ表情はどこへやら、そこには厳しい表情を浮かべた老人がいる。
「俺自身は、信じちゃいない。でもまぁ、いるかもな」
神に祈ることの無意味さ。そのことを、少年兵として戦場で戦っていたユヅルは知っている。
神はただ、そこにいるだけ。
「まぁ、信じる信じないは、個人に自由じゃ。勝手にするがよい」
そう口にして、勲が懐から取り出し、見せてきたのは、小さな金属片。
「本題はここからじゃ、この、神宮寺の家は、代々、神に生贄を捧げている。馬鹿げていると思うかもしれんが、これは、紛れもない事実じゃ。現に、わしの母も生贄に捧げられている」
瞳を閉じ、静かに語りだす勲。ユヅルは、茶化すことなく、その言葉に耳を傾ける。
「だが、それから、女子はこの家に生まれなかった。わしは、嬉しかったよ。だが、カナミが十五年前、生まれた」
「なるほど、次は、カナミの番ってわけだ」
順当に考えれば、間違いない。だが、その言葉を口にした瞬間、勲はユヅルに対して殺気を露にし、どうにか、押し殺す。
「そう、主の言うとおり。カナミの番、しかも、儀式は今晩、執り行われる」
「へぇ」

ユヅルは、他人事のように言葉を返すが、
「そこで、主には、その場で神を殺してほしい」
勲はとんでもないことを口にした。
「ジジイ、正気か？」
それは、神仏を祭る側の人間としては、思考することすら禁止されているはず。だが、勲はその言葉を、考えを口に出してきた。
「まぁ、それは置いといて、どうして、今日？　やるなら、早いうちに終わらせておけばよかっただろ？」
「確かに、主の言うことはもっともじゃ、しかし、それはできんかった」
「どうして？」
「儀式は、二年おきに行われ、八回で完成する。先ほど見せた金属片は、その儀式の際、生贄となるものが、飲み込む代物じゃ。神は、そのときようやく姿を現す。それまでは、いかなる手段も、神を殺すには至らない」
「試したのかよ」
「試したに決まっておろう。でなければ、いきなりこのタイミングで現れた主なんぞに、頼むと思うかっ」
その怒号があまりに大きく、ユヅルは両手で耳を塞ぐ。
「誰が好き好んで、大切な孫娘を生贄に差し出したりするものかよ」
「そうかい」
ため息を一つつき、ユヅルは懐からタバコを取り出し、マッチで火をつける。
「質問、かまわないか？」
「なんじゃ？」
「あんたの母親も生贄に捧げられたって言ってたな。でも、あんたは生まれてる。二年おきで、八回だから、計十六年。計算が合わないだろ？」
「わしは、母親が十五のときの子どもじゃ」
「そんじゃ次、生贄に捧げるって言うけど、具体的には？」

「その体を差し出し、神の器にする。つまり、肉体は生きているものの、精神的には死ぬことを意味する」
タバコの煙を吐き出し、ユヅルは腕組みしてしまう。
「それって、要するに同化するってことだろ？　あんた、どうやって神を殺すつもりなんだ？」
「これを飲み込んでから、半刻、つまり、三十分ほど、神は、完全に無防備となる。そこを狙う」
「いや、だって、肉体ないわけだろ？　作戦自体破綻してる」
「煩い。それでも、やらねばならんのだ」
「メチャクチャ言いやがる」
背中を床に預け、天井に視線を向けながら、ユヅルは思考する。
「ガキのために、行動してくれる肉親、か。俺もこういう国に生まれてれば、少しは、人生変わってたんだろうな」
口にタバコをくわえたまま、独り言を口にし、瞳を閉じる。
「ジジイ、最後に一つだけ聞かせろ。俺が来なければ、どうするつもりだった？」
「どうするもこうするも、わし自身の手で終わらせるつもりじゃったよ」
その言葉は、自分がカナミの命を奪い、己の命も絶つ覚悟がこめられており、ユヅルが現れなければ、本当に実行していたことだろう。
「そうか。はぁ、俺は、エクソシストじゃねぇんだけどな」
体を起こし、真っ向から勲の視線を受けながら、
「いいぜ、やってやるよ。神様に喧嘩売るのは大得意だからな。ただし、条件がある」
「条件？」
「俺がタバコ吸っても文句言わないように家族に言っとけ」
立ち上がったユヅルは、入り口まで移動し、振り返ることなく、
「期待はすんなよ」
吐き捨てるように口にして、その場所から去っていく。

時刻は午後十時を回ったところ。
神に生贄が捧げられるまで、残り二時間をきったところ。

生贄と夜1（後書き）

次回、ＶＳ神様

生贄と夜2（前書き）

熱い言葉が響きます。

生贄と夜2

儀式まで残り、二十分。

体を清め、白の着物に身を包んだカナミは、本堂の中で、金属片を見つめながら、一人立ち尽くしていた。自分は、あと、二十分で、自分でなくなる。十六の誕生日に、死を迎える。それも、他ならぬ神の手によって。縋る神すらいないとは、まさにこのこと。自然と彼女の体は震えている。どうにか体を抱きしめ、震えを収めようとするが、逆に震えは大きくなり、ついに彼女は、その場で膝を着いてしまう。

「みっともねぇ姿だな、まったく。クローデルに刃物投げつけてきたときと、完全に別物じゃねぇか」

タバコを口にくわえたまま、本堂に足を踏み入れたユヅルは、後ろ手に障子を閉め、つまらなそうにカナミに視線を注ぐ。

「あなたに、今日、突然現れたあなたに一体何が分かるというんですか」

瞳に涙を浮かべながら、声を荒立たせるカナミ。しかし、彼が彼女に向けてくる視線は、侮蔑へと変化している。

「わからるわけねぇだろ。それとも何か、お前は俺に理解されたいのか？」

つまらなそうに柱に背中を預けるユヅル。

「第一、もうすぐ大事な儀式を執り行うんです。部外者はお引取りを」

「大事な儀式、ね。自殺の間違いだろ？」

声を張り上げるカナミに対する答えは嘲笑。それをきいて、彼女の頭にも少し血が上ってくる。

「自殺。何を言ってるんですか、これから執り行うのは神聖なる儀式。代々、神宮寺家が行ってきたことです」

「要するに馬鹿な家系ってことだろ」

タバコの煙を吐き出し、さらに火に油を注ぐユヅル。
「テメェ勝手に、そうするしかないって。結論を決め付けて、それ以外の答えを求めようとしない。正しさの奴隷。いいよな、誰かが決めたレールに、これまた誰かが決めたルール。そんなものに縋れば、何でも正しいって言い切れるんだから。まるで免罪符振りかざす聖者。かっこよすぎて、反吐が出る」
「それは、神宮寺家に対する侮辱ですか」
金属片を握る手が、先ほどとは別の感情で震えている。彼女は、すぐにその感情が何であるか理解できる。これは、怒りだ。
「ああ、それぐらいの理解はできたか」
「なんですって」
それ以上カナミは我慢することができず、ユヅルに対して怒りに身を任せて、掴みかかる。彼は、それを避けることもせず、その場所に立ったまま。避けようとすれば、簡単にできるのに。
「私のことはともかくとして、いえ、それも許せませんが。あなたの言葉は、命を賭してきた、先祖に対する侮辱です。それは、決して許せません。訂正してください」
「嫌だね」
カナミの怒りを受け流し、短い言葉を吐き捨てるユヅル。そして、改めて確認してみれば、彼の表情は、嘲笑から怒りへと変わっていた。
「一つきくが、おまえの言う神宮寺家ってなんだ?」
「それは、私が生を受けた家で、代々神を祀っている」
「それだけか?」
その言葉は、怒りを押し殺したもの。だが、次の瞬間、ユヅルは彼女を突き飛ばし、
「テメェは、本当に馬鹿みてぇだな。テメェの言う家ってやつには、テメェの家族は含まれちゃいないってのか」
「そっ、そんなこと」
彼の怒りに、言葉に言い返すことができずに、カナミは言葉をつ

むぐことができない。
「自分の腹痛めて生んだ娘に、死なれる気分は。理解できてんのか？　正しさの奴隷に成り下がり、自分の母親、祖父の気持ちを本当に理解できてんのかって、聞いてんだよ」
　ユヅルは、感情に任せて言葉を吐き出していく。そして、その言葉の一つ一つが、彼女の心に深く、深く突き刺さっていく。
「でも、二人とも納得してくれて」
「そんなん、形だけに決まってんだろうがっ」
　ここで彼の怒りは頂点に達する。
「さっき見てきたら、お前の母親は机で、顔隠して泣いてたよ。そんで、ジジイは、お前を救ってくれるようにって、俺に頼み込んできた。わかるか？　あの二人は、テメェと違って、ルールなんかじゃねぇ、自分の心と向き合って生きてんだよ。誰かの決めたルールじゃ納得できねぇんだよ。相手が神だろうとなんだろうと、自分の大切なものを、手放したくねぇんだよ。わかるか？　そんだけ、お前はあの二人に愛されてんだよ」
　それは、今、カナミが最も聞きたくて、同時に聞きたくなかった言葉。彼女だって、自分が死んだ後のことを考えなかったわけではない。ただ、そのたびに悲しみに負けて、考えることを諦めていた。
「でも、だったらどうしろって言うんですか。私には力もないし、選ぶ選択肢も、もう残っていない。二人の気持ちだって本当は、痛いほどわかってますよ。でも、私には、これしか選べなかったんです」
　涙があふれ、頬を伝い、それが床へと落ちるまで、殆ど時間はかからなかった。
「なら、選択肢が増えたら、お前はどうしたい？」
「生きたいですよ。お母さんと一緒に笑って、おじいちゃんと一緒に散歩して、普段どおり、二人と一緒にもっと生きて、恩返しして。私が生まれたことを、成長したことを、二人に喜んでもらえる。そ

んな生活に戻りたいですよ」
心から、零れた雫のように、彼女の言葉は口から出てくる。
「最初っから、そういえばいいんだよ、馬鹿」
そんな彼女を見て、先ほどの怒りはどこへやら、ユヅルは呆れていた。
「はなっから、諦めて、受け入れた振りしてるやつなら、どうしようかと思ったが。まぁ、今のお前なら、及第点ギリギリってとこだろ」
ユヅルの言葉をカナミは理解できていない。それがわかったユヅルは、その場でしゃがみ、彼女に視線の高さを合わせ、
「俺が救ってやるよ。神が相手だろうが、どこの誰が相手だろうが、関係ない。俺は、テメェの代わりになるために、この場所に来たわけじゃねぇんだよ」
「えっ、一体何を言って」
「神を、テメェをくっちまおうってやつを、テメェから、日常を奪おうって奴を、俺が殺す。そう言ってるんだよ」
「無茶ですよ。気持ちは嬉しいですけど」
彼女は、一条の光明が射したように思えた。だが、ユヅルの言葉を完全に信じられずにいる。
「俺の予想が正しければ、不可能じゃない。もっとも、リスクとリターンを天秤にかければ、リスクのほうに大きく傾くだろうけどな」
「それじゃ、やっぱり」
「何、弱気になってる。お前は、ようやく、自分の心と向き合ったんだろ。だったら、そんなくだらない言葉よりも先に、もっと大事な言葉を口にするべきだろ」
タバコの煙を吐き出しながら、彼は何気なく口にする。口にしている内容が、途方もないことだというのに。
「助けてください」
「聞こえねぇよ」
「私を、助けてください」

大きな声で、彼女が口にすると、頭を軽くユヅルにたたかれた。
そして、頭をたたいた張本人、ユヅルは立ち上がり、
「任せろ」
短く、それでいて、優しい声で彼女に答えた。
時刻は午後十一時五十五分。
儀式の開始まで、残り五分を切っていた。

生贄と夜２（後書き）

次こそ、ＶＳ神様のはず

生贄と夜3（前書き）

神との対面

生贄と夜3

「そんじゃ、始めるか」
「はい」
ユヅルに返事をした後、金属片を飲み込むカナミ。するとすぐに、彼女は苦しみだし、その額に、金属片が集まり、橙色の勾玉を形成する。
「ほう、我が前に現れる不遜なやからがいると思ってみれば、貴様か」
「俺のこと知ってんのか？」
「この小娘の目を通じ、見ておったからな。勿論、先ほどの茶番も見ておったぞ」
カナミの口を通じてでてきた言葉は、既に彼女の言葉ではない。神、彼女の中にいた存在の言葉となってしまっていた。
「なるほどね、余計な手間が省けて結構。そんじゃ、悪いが、いくつか俺の質問に答えてくれ」
「よかろう。だが、良いのか、我がこの娘を食べ終わるまでの時間は、およそ半刻。小僧、貴様に、そんな余裕はあるまい」
「別にそんな心配いらねぇよ。むしろ、あんたとしては、好都合だろ？」
「食えぬ奴め」
自分を殺す算段をしていたものが、目の前で貴重な時間を無駄にしている。それをいぶかしげに思う彼女だが、ひと時だけ、ユヅルに付き合うことにする。
「一つ目、あんたの名前は？　別に名乗りたくなきゃいいけど、こっちとしては呼称ぐらい聞いとくのが、礼儀だろ？」
「我は、『クシミタマの巫女』。そう、貴様ら人間には呼ばれている」
あっさりと答えてくれたので、拍子抜けしてしまうユヅルだが、

彼の記憶に、そんな名前の神は存在していない。
「聞いたことねぇな。二つ目、あんたが食事を終えた後、生贄はどうなる？」
「むろん、半刻で死ぬ。すぐに殺してやってもいいのだが、生贄が我に食われたことを、周囲の人間に知らせるには、その程度の時間は必要だろう？」
「なるほど、見せ付けてから殺すわけか」
―随分と悪趣味な神様だな―
「そんじゃ、三つ目、あんたが生贄を要求する理由は？　昔、何かしらあったんだろ。そいつを聞かせてくれ」
「理由、理由？　これはつまらぬ事を聞く」
「いいから、勿体つけずに答えろよ」
「そんなものは、あるはずもない。我は神、貴様ら人間にとっては、崇め、恐れる存在。むしろ、我は生贄を要求した覚えなどない。昔、人間共が勝手に捧げてきたから、仕方なく食ってやっている。そんなところだ」
　この問いに対する答えは、彼にとって予想の範疇にあった。
―やっぱり、そういうパターンかよ―
　人間は未知の存在に、非常に弱い存在。それが、自らと異なる力を持っていれば尚更。その相手が脅威となって襲ってくる前に、下手に出てしまうのは、どの国でも変わらない。
「次、生贄を捧げるのをやめたら、あんたはどうする？」
「無論、勝手に食わせてもらう。貴様たち人間が、生贄として捧げているから、多少、我慢してやっているだけのこと。それがなくなれば、好き勝手にするのは当たり前のこと。むしろ、我は、他の連中と比べれば慈悲深い存在であろう。捧げられたものしか食ってはいないのだから」
「さいですか」
　結果として、生贄を捧げようが、捧げまいが、かわらない。神は、身勝手な存在。それを知っていながらも、ユヅルはため息をついて

しまう。彼らは王とは違う。王とは、民がいて初めて存在できるが、神は、人がいなくても存在できる。
「ふむ、存外、抵抗するな、今回の生贄は」
「そりゃそうだろ、そいつは、今までの生贄と違って、正しさの奴隷じゃない。馬鹿、だからな」
彼にはわからないが、カナミは自分の精神が食われることに対し、少なからず抵抗しているらしい。それを聞いて、ユヅルは微笑する。
「そんじゃ、最後の質問。あんた、今まで人間に対して、恐怖って感じたことはあるか？」
「ないな。むしろ、なぜそのようなことを問うのか、我にはそのことが疑問だ。貴様は、道端の石ころに恐怖を感じるのか？」
その言葉を聴いて、ユヅルは嬉しくなったのか、声を上げて笑ってしまう。終いには、腹を抱えて苦しそうに。
「そうか、うん。いや、想像してた答えどおりで安心した。いや、まさか、ここまで予測の範疇から出ないと、笑うしかないだろ」
「何がおかしい、人間」
いらだってきているのか、彼女の言葉にはすぐにわかるほど、棘がある。
「なら、初体験って奴だ。相手が俺なのが、少し可哀想だが、そいつは勘弁してくれ」
「我を馬鹿にしているのか、人間」
「いや、馬鹿にはしてねぇよ。ただ、哀れんでるだけだ」
その言葉と同時、世界は一変した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

儀式が執り行われている本堂から離れ、母屋で勲は物思いに耽っていた。
「ここにいらっしゃいましたか」
そんな彼に声をかけてきたのは、風呂上り、浴衣姿のクローデル。

「隣、失礼いたします」
声をかけ、勲の隣に腰を下ろすクローデル。その姿は、妙に色っぽく、普段の彼なら、鼻の下を伸ばしているところだが、今は違う。孫娘のことで頭がいっぱいの彼は、それどころではない。
「ユヅルに、仕事を頼んだようですね」
「奴に、聞いたのか？」
「いえ、失礼とは思いましたが、立ち聞きさせていただきました」
そう、彼女は、二人が離れでしていた会話をすべて聞いて、記憶している。
「安心していただいて大丈夫ですよ。あいつには、我々も手を焼いてはいますが、実力だけは、私が保証します」
確かに、彼女の言葉は、今の勲にとっては心強い。だが、相手は神。相対できる存在を、彼の長い人生の中で、見たことはない。
「おそらく、勘のいいあいつのことです。私と同じ結論に至っていることでしょう。そうですね、あなたの心配事を消す為に、一ついいことをお教えしましょう。これは、本来、機密事項にあたるのですが、知っていていただいたほうが良さそうなので」
「聞くだけならば」
「あいつは、席次の十三。我々、異端審問局が抱え込んだ、諸刃の剣です」
そう口にし、彼女は楽しげな笑みを浮かべて去っていった。

生贄と夜3（後書き）

次回、神と決着をつけます

生贄と夜４（前書き）

神様もビックリ

生贄と夜４

「人間、貴様、何をした？」
「何をした？　おいおい、仮にも神様なんだから、それぐらいすぐに理解しろよ。ついでに言っておくと、まだ、何もしてねぇよ。今からするけど」
彼女は、空気が一変したことにいち早く気づいたが、それが何を持って変化したのかは理解できていない。そんな彼女を愉快そうに見つめながら、彼は呪詛をつむぐ。

『　無限書庫（アーカイバ）へのアクセス開始
第二六九幻想領域座標固定
並びに、封殺結界を固定座標に接続
執行官権限により、厳重封印指定の十三を開放　』

「さぁ、踊ってくれよ、神様」
それは勝利を確信したものが、敗者を嘲笑する為に放つ言葉と、同じ響き。
次の瞬間、彼女の違和感は現実のものとなる。
彼女の視界に映っているのは、先ほどと対して変わらない光景。だが、決定的に違う点が一つ。そう、カナミが映っている。先ほどまで、彼女は、カナミの目を通して世界を近くしていた。なら、カナミの姿を、己自身の姿を自分の目で見るはずなどない。
「馬鹿な、我を生贄の体内から引きずり出したというのか？」
「ご名答。まぁ、厳密に言えば、完全に引きずり出したわけじゃないが、同じようなもんだろ」
驚愕の次に沸きあがってくるのは、怒り。自分の食事を邪魔した者への、自分を嘲笑する者への。
「人間、貴様、無事で済むとは思っていないだろうな？」

「上から目線はやめておいたほうがいいぞ。ここは既に、俺の領域。あんたが神様だろうが、この中じゃ、関係ない」
「ぬかせ」
そうして彼女は力を行使する。
神通力。
人間に力を貸し与えるとき、神の力は劣化してしまう為、このような言葉で度々口にされる。しかし、現在の彼女は人間に力を貸しているわけでも、体内にいるわけでもない。故に、本来の力を振るう事ができる。その力は、映画やドラマなどのフィクションではない。現実の力。人間からしてみれば、魔法という言葉が、一番しっくり来るかもしれない。
だが、彼女の力がなぜか発動しない。
「貴様、一体何をしたっ」
「少しは自分で考えろよ、神様」
相手を小馬鹿にしたように、ユヅルは笑みを浮かべる。それが、彼女には非常に気に食わない。すぐにでも、殺してしまいたい。そう思いながら、力をこめるものの、肝心の力はまったく発動の兆しすら見せない。
「どうした？　立ってるだけじゃ、俺は殺せないぜ、神様」
「ふん、それは貴様とて同じこと。もうすぐ半刻経つ。生贄を助ける時間はもうないに等しいぞ」
「ああ、そいつはもう心配ない」
彼女は切り札をちらつかせるが、ユヅルはそれに対してほぼ無反応。それが、彼女の違和感をより大きなものへと、膨らませていく。
「これだけヒント出してやってるのに、まだ気づかないのか。なら、出血大サービスだ。俺のじゃねぇけど」
いつの間にか、彼は右手に刀を握っていて、それを振るう。刃は、彼女の頬をうっすらと切り裂き、再び鞘へと戻る。
「血、だと。我が、血を流しているだと」
彼女の声は今度こそ、驚愕していた。そして、彼女が今まで抱い

ていた違和感の正体をようやく理解する。
「まさか、貴様っ」
「ようやく理解できたみたいだな。答えあわせだ。あんたが考えているとおり、俺の領域内では、俺が拒絶したものは、すべて否定される。それが、時間だろうが、神だろうが、関係ない」
「馬鹿なっ、そんな神の領域に足も踏み入れることのできない人間が。できるはずがない」
「ああ、当然、俺一人の力じゃ無理だよ」
そう、ユヅルが話していることが本当だとすれば、彼女が力を使えなかったのは当然。そして、この領域の中であれば、神であるはずの彼女を殺すこともできる。
「俺は、魂吸収者（ソウルアブソーバー）って、呼ばれる能力を持ってる。そんで、俺が手に入れた魂の力を使って、この領域を形成してる」
魂吸収者。
それは、異端審問局でも存在を完全に肯定できなかった、異能の力。この能力を有するものは、自身の魂以外に、他の魂を己の体内に取り込み、その力を自由に行使することができる。そう、彼らの力には個人差があり、能力者によって発現する力が違う。一概に、結果をはじき出すことができない。不確定要素が多い能力なのだ。
「さぁ、ようやく自分の愚かさに気づいたようだな、神様。なら、次は、立場って奴を理解してもらおうか」

『 厳重封印との魂接続開始
肉体および魂の封印を開放
物理的干渉および精神的干渉に異常なし 』

「こうやって、いちいち名乗りを上げるのは、どうも慣れないが、折角だから、あんたには自己紹介をしておくよ。異端審問局所属、異端殲滅執行官、階梯、第七階梯（エンタク）、席次は十三、与えられた称号は『死神』。これが、俺、ユヅル・ハイドマンの肩書きだ」

淡々と口にする彼だが、その表情はとても楽しげ、そして、彼は最後に決定的な一言を口にする。

『 起きろ、もう一つの俺の魂
悪魔皇イレイザー 』

それは、異端審問局に所属するものが、決して口にしてはいけない言葉。その言葉を放つのとほぼ同時、彼の体は銀色に光に包まる。光が収まると、そこに立っていたのは、変貌を遂げたユヅル。黒髪は、銀へと色を変え、獅子の鬣を連想させる長さに。黒の法衣を纏い、右と左、両方の腰にはそれぞれ三本の刀、背中には身の丈ほどの大きな刀。そして、彼の右頬には、蛇の刺青が出現していた。

「悪魔、だと」

この答えだけは、彼女も予想していなかった。信じるものは違えど、彼もまた、神を信じるものに違いないと、異端審問局に所属しているだからと、彼女は勝手に、彼のことを決め付けていた。だが、結果は違う。目の前にいるのは、紛れもなく、悪魔の力を有した、人間ではないなにか。

「ああ、俺の魂の在り方に最も近く、欲しかった力を持ってたからな。殺して、その魂を吸収した」

その言葉を、彼女は信じるわけにはいかない。悪魔、言い方は違えど、在り方は違えど、似たような存在を殺した。その言葉を、信じるわけには、決していかない。

「どうして、こんな話してる余裕があるのか、理解してるか、神様？」

右手を刀の柄へ移動させながら、歌うように彼は口にする。

「簡単な話、勝者の余裕って奴だ。おっと、卑怯とか、いまさら陳腐な言葉を使うなよ？　俺はきちんと、あんたにも、チャンスをやったんだからさ」

「機会だと？」

「ああ、俺の長話になんて付き合わずに、俺をあの場ですぐに殺していれば、今、あんたは、俺の死体を肴に、勝利って酒に酔ってもおかしくなかった。それをしなかった。それが、あんたの敗因だ。余裕見せ付けて、人間見下してるからそうなるんだよ」

「たかだが、力を手に入れた人間が偉そうに」

彼女は侮蔑の言葉を吐くものの、彼の心にはそよ風ほども波風が立たない。

「その力も、汚いまねをして手に入れたのだろうがっ」

「ああ、そうだよ。策をめぐらすことに、何の躊躇いがある」

彼女の侮蔑を賛辞として受け取り、さらに彼は続ける。

「卑怯、汚い、そんなものは戦場じゃ褒め言葉でしかない。自分よりも強い相手が敵なら尚更。殺し方に、勝ち方に美学を求めるなんて三流以下。力を誇示したいだけの馬鹿がプライドひけらかすようなもんだ。どんな手段を使おうが、誰に罵られようが、生き残った奴が勝者だ」

ゆっくりと刀を抜き放ち、その切っ先を彼女の喉元にユヅルは突きつける。

「貴様がやっていること、我と何が違う」

「違わねぇよ。俺も、わがままなんでね。まぁ、そうだな、一番近い言葉があるとすれば、同属嫌悪って奴だ。そんじゃ、精精、苦しんで死ね」

「待て、貴様は抵抗もしない我を、殺すというのか」

「ああ」

珍しくも命乞いをする彼女に対して、ユヅルは即答。

「さっき言っただろ、俺と魂の在り方が似てるって。悪魔に命乞いなんてしても、意味なんてない」

そして、彼は、氷のような冷たく鋭い瞳で、

「あんたは、今まで何人も食ってきたんだろ。それが、自分の番になったってだけだ。命乞いをする前に、自分の行動を振り返るべきだったな。あんたがもし、少しでも、善行を人間に施したって、嘘

でも口にしてたら、少しぐらいためらう振りをしてやっただろうよ」
　刀の切っ先を、彼女の喉に押し込んだ。想像を超える絶叫。今まで、彼女が味わったことのない痛み。刀を引き抜くと同時に、赤い血が噴出し、彼女はそれを抑えようと両手を伸ばすが、その両腕は、彼の刀によって床に縫い付けられてしまう。そして、次の彼の行動によって、彼女の表情は、生まれて始めて恐怖に凍りつく。ユヅルは、自由の利かない彼女の左手を両手で取り、小指から順番に、その爪を剥いでいく。ただでさえ、喉の傷、両手の傷で致命傷。それなのに、目の前の少年はそれ以上の傷を、彼女の肉体と心に刻み付けていく。
「我が、我がいったい、貴様に対して、何をしたという」
「うん？　何もされてないよ、俺は。ただ、あんたが食ってきた人間の肉親は、これよりも痛かったんだと思うんだよな。だからさ、少しは、その痛みも勉強してから死ね。爪の次は、皮を剥いでいく。その次は目を抉り出し、臓器を一つずつ取り出していく。ああ、途中で死ねると思うなよ。全部終わるまで、お前が死ぬことを、俺は拒絶し続けるから」
　日常会話のように口にするユヅル。それが、彼女の精神をこの上ないほどに壊していく。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「おわったぞ、馬鹿女」
　元の姿に戻り、力の痕跡すら消した彼は、カナミの頬を軽くたたき、彼女を起こす。
「えっ、本当に終わったんですか？」
「ああ、終わった」
　彼は床に腰を下ろし、タバコにマッチで火をつける。そんな彼に対して、カナミは、正座し、頭を下げる。
「ありがとう、ございました」

その言葉は、震えていた。だが、それは恐怖ではなく、明日を迎えられる、日常に戻れる喜びによって。
「頭上げろ。そんで、礼なら、ジジイに言え。俺は仕事を請けて、それをこなしただけだ」
「でも、実際に助けてくれたのは、あなたです」
尚も食い下がってくるカナミに対して、
「ユヅル」
「えっ？」
「俺の名前はユヅルだ、これから不本意だろうが、一緒に生活するんだ。あなたなんて、他人行儀な呼び方するんじゃねぇよ」
つまらなそうに彼は口にする。それが、よほど予想外だったのか、彼女はキョトンとしている。
「なら、私も、お前じゃなくって、カナミです。神宮寺は三人いるので、名前をきちんと覚えて、名前で呼んでください」
「面倒だな」
「今、何か言いましたか？」
「腹減ったっていったんだよ。恩義を少しでも、かすかにでも感じてるなら、上手い飯でも食わせろ。それで、貸し借りなしだ」
そう口にして立ち上がるユヅル。そんな彼に対し、
「はい」
元気良く、カナミは返事をして立ち上がった。
そして、その後、ユヅルにダメだしされ、彼の舌をうならせる為、学校生活で、お弁当を作り続けることを決めたカナミだった。

生贄と夜４（後書き）

ようやく、複線を少し回収。

次から、再びラブコメに戻ります。

ショッピングです1（前書き）

お買い物です。

そして、ギターがいっぱいでてきます。

ショッピングです1

「あれっ？　出かけるなんて珍しいですね」
「人を引きこもり、ニートだっけ？　みたく言うんじゃねぇよ」
天気のいい日曜日。
玄関で靴を履いている私服のユヅルを見て、カナミは思わず声をかける。
「ほら、俺、軽音楽部に入ったって説明したろ」
「ええ、その他にも手芸部と創作部に入ったことをきいています。勿論、料理部にそのせいで入れなかったってことも」
恨みがましくカナミにいわれ、ユヅルはどう答えていいものか悩んでしまう。結局、三つの部活動に参加することになってしまったユヅルは、料理部に入ることを拒否。さすがに四つも部活動をすることは、不可能に近い。そのことについては、きちんと説明したので、カナミは納得したものだと、ユヅルは思っていたのだが、どうやら違っていたらしい。
「その件については、きちんと説明しただろ」
「ええ、説明を受けましたとも」
「はぁ、まいぁいいや。そんで、軽音楽部に入ったはいいが、俺、自分のギター持ってねぇんだよ。だから、今日は楽器屋に行くんだよ。なんか、この説明もしたきがするな」
靴を履き終えたユヅルは、朝からため息をつきながら、出て行こうとするが、そのとき、カナミに一枚のメモを渡される。
「なんだ、これ？」
「帰りにお買い物をお願いします。今日は、おかあさん、高校の同窓会に行って、夜は遅いんです」
「それはわかったが、これは？」
「だから、今日は私が腕を振るうことにしました。そこに書いてあるのは、夕飯に必要な材料です」

その言葉を聴いて、彼の気分は朝から重くなる。料理部に所属しているものの、カナミの料理の腕は、素人と大差ない。むしろ、素人のほうが上手く作れるかもしれない。要するに、努力で才能の穴を埋めるには、時間が足りなすぎるのだ。それで、彼は日ごろ、強引に持たされている弁当を回避し続けている。しかし、それが家での食事となれば別。逃げ場はない。

「わかったよ」

「いってらっしゃい、ユヅルさん」

メモをジーンズのポケットに押し込み、ユヅルは家を出る。

―処刑台に上らされる死刑囚みたいな気分だ―

駅前に着いたユヅルは、その、人の多さにげんなりするが、目当ての人物を見つけたので、わき目も振らずに近づいていく。

「悪い、少し待たせたか？」

「いえ、僕もいま来たところです」

頭を軽くかきながら、ユヅルが声をかけたのはアキタカ。同じ軽音楽部で、彼の予備のギターを使わせてもらっているので、選んでもらうのを手伝ってもらうことにしたのだ。

「本当に、僕なんかでよかったんですか？」

「分けわかんない奴だな、お前以外に誘うようなメンツいないだろ？」

「えっ、でも、校内新聞だと、天禅寺の女神三人と仲がいいって」

「女神ねぇ」

二人は歩きながら、何気ないことを口にし、楽器屋へと向かう。

そして、楽器屋に足を踏み入れた二人だが、

「そういえば、ユヅル君は、どんなギターが欲しいんですか？」

「えっ？」

彼の不用意な発言が、アキタカの体を完全に凍らせてしまう。

「ちょっと待ってください、気持ちの整理をつけますから。確認しておきますけど、ギターを買いに着たんですよね？」

「ああ、そうだよ。って、ギターって、こんな種類あるのか？」
「まさか、テレキャスにＳＧ、ファイヤーバードにムスタング、フェンダーやミュージックマンも知らないとか？」
「種類多いなぁ」
「嘘でしょう？　さすがにルシールぐらいは知ってますよね？」
「知らない」
その一言を聞いて、アキタカは絶句。チューニングも、弦の張替えもできるのに、ギターの種類をここまで知らない人間だとは、さすがの彼も思っていなかった。だが、当の本人はそんなこと気にせずに、店内を歩き回り、楽器とにらめっこを開始する。
「よさそうなのがあったら、弾いても大丈夫ですよ」
ショックから立ち直り、彼を見つけたアキタカ。しかし、彼の視線の先にあるギターを見て、再び言葉を失う。そこにあるのは、俗に言う痛ギター。アニメやゲームのキャラクターがプリントされているギターである。
「さすがに、それは、勘弁して欲しいです」
「俺もさすがに、あれを人前で弾く度胸はねぇよ。ただ、なんか、見覚えのある絵だったから、気になっただけ」
「そうですよね、ハハハ」
渇いた笑いを口にしながら、胸をなでおろすアキタカ。そして、ギターを見て回ること、およそ三十分。
「そういえば、お前の予備のギターって」
「ああ、あれは中古で買ったムスタング。ちなみに、愛用しているのは、ＳＧです」
「なるほどね」
そう口にしながら、彼が手に取ったのは、白のボディにピンクのラインが二本入っているムスタング。しばらく、ギターを見つめていた彼だが、決心したのか、構えて、近くにあるアンプとつないで、いきなり弾き始めた。勿論、店内には二人以外にも客がいるわけだが、そんなことはお構いなし。自分の思うまま、指が動くままに弾

き続ける。
「やっぱりだ」
「そのギター、気に入ったんですか？」
「ああ、最初、不安だったんだけどな。弾いていて、確信が持てた」
「でも、そのギター、高いですよ？」
値札がギターの置いてあったところにも、ギター自体にもつけられていないところを見れば、アキタカの経験上、相当な値段がする。
「アンプはあるから、あとはエフェクターか。でもさすがに、部活の備品を使い続けるのも微妙だな。とりあえず、アンプも一台探しとくか」
「いや、ユヅル君、人の話を聞きましょうよ」
しかし、ユヅルは結局そのまま、ギターと、新たに選んだエフェクターを二つ。レジへと持って向かう。
「おっちゃん、これくれ」
そう言って、無造作に、ただ、ギターだけは丁寧にレジカウンターに置くユヅル。店員は、彼と商品を交互に一度見たあと、無言でレジを打ち始める。
「アンプ一台に、エフェクター二つ、ギターを含めて、六十万飛んで、六千二百円になります」
「宅配サービスって奴を、利用したい」
「では、こちらに住所の記入をお願いします」
言われるがまま、ユヅルは現在の住所をボールペンで書いていく。
「それで、お会計ですが」
「ああ、引き落とし一回で」
財布のチェーンをもって、引っ張り出した彼は、その中のカードを一枚抜き取り、レジに置く。しかし、そのカードを見て、店員は絶句する。彼が置いたのは、ＬＥＧＥＮＤのロゴが入ったカード。このカードは限度額無制限で、この会社の重役、その親類、もしくは友人のみが持てる。そして、そのせいで持てる人間が非常に限られているカードである。

「あん？　ひょっとして、カード使えなかったりするのか。それだったら、銀行から下ろしてくるけど」
固まっている店員を不審に思い、ユヅルが声をかける。
「だっ、大丈夫です。使えます、使えますとも、はい」
その声でようやく意識を取り戻した店員がレジをたたき、署名を求めてくる。それに、慣れた手つきで、きちんと英語で記入するユヅル。
「本当に、常識が通じないんですね」
口にしたアキタカは、若干あきれていた。

ショッピングです1（後書き）

人目を気にしない彼なら、使いこなせるはず。

当然のように続きます。

ショッピングです2（前書き）

会話メイン。

中間管理職は心配事がつきません

ショッピングです2

「さてと、これからどうしたもんかな」
「じゃあ、カラオケにでも行きますか？」
「別にいいけど、お前音痴じゃなかったっけ？」
本来であれば、買い物にはもう少し時間をかけるはずだったのだが、すんなりと終わったので、ユヅルとアキタカの二人は、ハンバーガーショップで時間をつぶしていた。もっとも、ユヅルはタバコを吸っていたが、アキタカはそれを注意することをしない。
「じゃあ、神宮寺さんや雨竜さん、春日野さんを誘ってみたらどうですか？」
「別に誘ってもいいけど、連絡先、俺、知らないぞ」
「えっ？」
その言葉を聴いて、アキタカは目を丸くする。
「ユヅル君、携帯持ってますよね？」
「ああ、持ってるよ」
「何で知らないんですか？」
「うん？　それって聞いとくものか？」
「聞いておくものですよ、普通。じゃあ、携帯に誰のも入って事ですか？」
「いや、お前のと、シンゴにリュウイチ、後、ツヨシにアツヤの番号は入ってるよ」
「軽音楽部の人間だけじゃないですかっ」
「まぁ、そうだけど、そんなに不思議がるもんか？」
あれだけ親しげに接している三人の連絡先すら知らない。そんな彼の鈍さに頭を抱えたくなってきたアキタカだが、そんな時、ちょうど取り出していたユヅルの携帯が震える。
「はいはい、どちらさん？」
「私ですけど、そちらは変わりありませんか？」

「その堅物口調は、エカテリーナだな。でも珍しいな、あんたから電話してくるなんて。俺、なんか面倒ごと起こしたっけ？」

電話の相手は、エカテリーナ・フォルダン執行官。しかし、そんなことを知りもしないアキタカは、英語の会話に興味津々。

「あなたが面倒ごとを起こすのはいつものことです。そんなことで、わざわざ、あなたに連絡したりはしませんよ、私の場合」

「それもそうだな、じゃあ、用件は？」

「今夜、そちらの時間であれば午後八時ジャストの便で、羽田に到着する予定です。それで、できれば、迎えに来て欲しいのです」

「へぇ、どういう風の吹き回し？」

「もともとは、あなたに原因があるのですよ、ユヅル」

「どういうこと？」

残念ながら、普段どおりと彼女が言うのだから、ユヅルに思い当たる節は一つもない。ましてや、多忙な秘書官が動くような事件など、起こりようもない。

「報告書を提出しましたよね？」

「ああ、だって、あれを提出しないと、きちんと報酬が口座に振り込まれないだろ」

「ええ。そこに問題はないのですよ。あなたが何を考えて仕事を請けたのか、私は知りません。ですが、自発的に仕事をしましたよね？」

「確かにしたな」

思い当たるのは、平目組を壊滅させた際に提出した報告書。しかし、それほど珍しいことなのだろうか。そんな疑問を持っていると、

「それで、局長が、何かしらの心境があったのではないかと。そうであれば、一度顔を見に行きたいとおっしゃいまして」

「止めたんだよな？」

彼女の行動が予測できたユヅルは、結論付けて言葉を口にする。

「ええ。それで、局長の代わりに、私が行くことになりまして」

「なるほどね、大体の事情は理解した。でも、それってメールで済

むよな？　何でわざわざ電話？」
「そうですね、時間もないことですし、本題に入ります。実は先日、空席だった席次の十二が、急遽決定しました」
その言葉を聴いて、一瞬、彼は体をこわばらせる。
「まさか、正気か？」
「そのまさかです。察しがよくて助かります。席次の十二は、あなたのところへ向かっています」
「勘弁してくれよ。ここ、そっちほど無茶できないんだぞ？」
「わかっています。ですから、なるべく早く、私もそちらに向かいます」
そう口にして、エカテリーナは通話を一方的に切る。
「はぁ～」
携帯を上着のポケットにしまったユヅルは、その場で大きなため息をつく。
「どうかしたの？」
「ちょいと面倒ごと。悪いけど、カラオケは今度にしてくれ。これから、面倒ごとをかたしてくる」
そう言って、自分のトレイを持って立ち上がるユヅル。
「ああ、うん、じゃあ、また明日」
「ああ、じゃあな」
―そういえば、ああいうのを友達って呼ぶのか？―
これから行動を起こす割りに、他愛もないことを考えながら、彼はタバコの火を消した。

ショッピングです2（後書き）

次回、新キャラ登場。

ちなみに、彼の携帯には、神宮寺家の電話番号すら入っていません

魔弾の後継者1（前書き）

執行官ＶＳ執行官

はじまります。

「本当に、あれが席次の十三？　いつでも殺せるぐらい、平和ボケしてる、一般人にしか見えないんだけど？」
建物の屋上、スナイパーライフルのゴーグル越しに、ユヅルを見つめながら、少女はつまらなそうに声を上げる。
「信じられなければ、信じなければいい」
「なに、あんた、生意気なこと口にしてるわけ、情報屋」
「受け取った分の料金に見合う仕事は、きちんとしたつもりだよ。それでも気に食わないというなら、彼を殺した後、僕も殺せばいい。なに、君なら簡単だろ？」
少女は、情報屋と名乗っている通話相手を、耳のイヤホンを外すことで無視することにする。
情報屋。
素性はまったく知らないが、金さえ払えば、迷い猫の情報から、国家機密すら手に入れる凄腕。そう聞いていたから、少女は、依頼したのだ。これが、間違いであれば、すぐさま殺しにいこうと思いながら、再び、少女はゴーグル越しに獲物を睨みつけ、
「お手並み拝見といきましょうか、席次の十三。せめて、逃げて、逃げて、命乞いさせるまで、生きて、お会いしましょう」

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「しっかし、どうしたもんか」
ガードレールに腰を下ろし、タバコの煙を吐き出しながら、ユヅルは空を仰ぐ。今回、席次の十二、この椅子に座った人間が、誰なのか、彼には皆目検討も着かない。ただ、以前、この椅子に座っていた人物は、非常に温厚だったことだけは覚えている。
「面倒なことになってきたな、まったく」

愚痴をこぼしながら、ユヅルはタバコを投げ捨て歩き始めるが、次の瞬間、彼の目の前にあった建物が、爆音と共に火と煙を吐き出した。火の手が上がっていることから見て、爆発が起きたのは、建物の二階。周囲の混乱が起きるのは必然。あたりには火災報知機の音が鳴り響き、視界も悪い。

そんな中、彼は頭に衝撃を受けて、体制を軽く崩す。その場所に手を伸ばしてみれば、ヌメリとした血の感触が伝わってくる。

―えげつないことするね、まったく―

おそらく、この、建物を爆破したことも、周囲の混乱も、彼を襲撃する作戦の一部なのだろう。日本だから、世界一治安のいい国だから、そんな常識の通じる人間が、異端審問局に所属しているわけがない。彼らはエゴイスト。自分の目的を達成する為には、己のエゴを貫く為なら、周囲の被害など気にしない。究極にはた迷惑な連中。それを、この、暖かい場所での生活で、ユヅルは失念していたらしい。

「間抜けは俺のほうか」

自重しながら、新しいタバコに火をつけ、傷の手当をすることなく、歩き出した。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「馬鹿げてるなんてもんじゃない、殺しづらさ（ダイハード）。まさか、ライフルの一撃で死なないって、あいつ、本当に人間？」

自身の甘さを反省したユヅルとは対照的に、引き金を引いた側であるはずの少女は、狼狽している。少女自身、すぐに殺せるとは思っていなかった。ただ、ライフルの一撃を頭に受け、生きている相手に対して、どう対処すべきか。問題となってしまったのは事実。

「情報屋、きこえてる？」

「うん、聞こえてるよ。それにしても、さっきの爆発は君の仕業かな。ここは君のいた国とは違うんだから」

「うるさい、それよりも、あいつがあんな化け物だなんて聞いてないわよ」
　相手のたしなめる言葉を、強引に打ち切り、ライフル片手に少女は立ち上がる。
「おや？　それぐらいのことを知っていて、君は動いたんじゃないのかい？」
─馬鹿にしてる。そんなことは、私だって知ってる─
　しかし、人づての話を聞いただけの少女は、動揺を抑えられない。ユヅルのことは、彼が日本に渡ってからも、度々、異端審問局で話題に上がっている。だが、その中で、彼の武勇伝が上げられるたび、少女は、どうせ、そんなたいしたことじゃない。そう、心の中でさげすみ、鼻で笑っていた。だが、彼女は実際に自分の目でそれを確認してしまった。
「だいぶ苛立っているみたいだね。作戦は、冷静に実行しないと、成功率が確実に下がるよ？」
「うるさい」
「席次の十二、ああ勿論、君の前の人だけど、あの人は、いい人だったよ？」
「うるさい」
　前任者のことを引き合いに出され、今度こそ少女は、通話を終了させる。そう、携帯電話を床に叩きつけて。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

　時刻は午後四時を回ったところ。
　一度目の襲撃以降、自分の存在を餌に、相手を釣ろうと、町を目的なしに歩き回っていたユヅルだが、当てが外れたらしく、ため息をついて、公園のベンチに腰を下ろした。
─簡単に諦めるような奴なら、楽だが。さすがに、そんな根性なしが執行官にはなれないしな─

襲撃者の正体がわからず、釣ることもできなかったユヅルに残されている手段は、待つことだけ。ただし、リミットは残り五時間。エカテリーナが羽田に着くのが、八時。それからこの町に到着するまで、およそ一時間。それまで逃げ切ることができれば、彼の勝ちは確定する。むしろ、襲われているくせに、彼が負ける要因のほうが少ないという現状。

「でもそれじゃ、つまんねぇんだよな」

リターンよりもリスクを、安穏よりも恐怖を、日常よりも、非日常を。

現在、狩られる側に回っているはずの彼は、間違いなくこの状況を楽しんでいた。そして、あえて安全策を取らずに、危険地帯へ足を踏み入れる。それが、彼の欲望であり、本能であり、磨き上げられて牙。

そんな時、ふと彼の視界に入った建物が砂煙を上げながら崩れていく。しかし、先ほどと違って、別方向からの攻撃が来ない。

―誘ってる、ああ、招待状代わりか―

彼を襲撃した相手は、先ほどの襲撃で、彼の特性を大体掴んでいるはず。なら、他人を容赦なく見捨てる彼にとって、他者を痛めつけたところで意味がない。逆に、行動したことにより、自分の場所を、教えている。そう、彼は判断する。

「さて、お手並み拝見させてもらうぜ、席次の十二（ルーキー）」

魔弾の後継者1（後書き）

間に合うのか、エカテリーナ？

魔弾の後継者2（前書き）

トリガーハッピー

そこは、何の変哲もない倉庫。
ブービートラップを警戒しながらも、目の前に目的の人物が現れたことを確認し、ユヅルはタバコに火をつけた。
「はじめまして、あんたが新しい席次の十二？」
「人を、誰かに与えられた記号で呼ぶな」
気さくな挨拶を心がけたつもりのユヅルだったが、どうやら彼女の気分を害してしまったらしい。
「私には、レベッカ・サウザードという、母親からもらった大切な名がある」
以外にも自分から自己紹介をしてきたレベッカに対し、口笛を吹き、
「そうか、そんじゃ、俺にもユヅル・ハイドマンっていう、名前がある」
軽口で答えた彼に対する返答は、銃声。彼女の両手に握られている拳銃。その片方、右側から紫煙が立ち上っている。
「あのさぁ、それは、ガキが気軽に使っていいものじゃねぇんだぞ。第一、銃声聞きつけて、警察が着たらどうするつもりだよ、お前」
「だまれ、貴様と談笑するつもりなど私には、毛頭ない」
怒りと同時に、左側の銃も彼に向け、レベッカは言い放つ。
「そっか、なら、一つだけ答えろ。お前、何がしたいんだ？」
「大方察しがついているのだろう」
「俺は、確信が欲しい。そんなわけで、お前の口から直接、聞きたいんだよ」
「私は、お前を殺しにきた」
予想通りの答えを聞けたので、ユヅルは顔に微笑を浮かべる。
「俺をすんなりと殺せないことは、学習済みだよな。それでも、俺を殺すって言ってるんだ。何かしら、策ぐらい用意してあるんだよ

なぁ？」

「それは、お前が死んで確かめろ」

「そうかい、じゃあ、最後に一つだけ、礼をいっておく。俺をぬるま湯から出してくれて、ありがとうな」

銃を構えている相手に無防備に歩み寄りながら、彼は場にそぐわぬやさしい声で、レベッカに語りかける。

「もういいから、黙れ、化け物」

彼女はそう口にして引き金を引く。狙いは、当然のように額。それを受けたユヅルは、流血し、体制を崩すものの。死んでいない。レベッカが手にしている二丁拳銃は、彼の持っているオートマグと違い、現在、世界最強と名高いデザートイーグル。その５０ＡＥ弾を受け、傷だけですんでいるのだから、彼女の言葉はもっとも。

「これが、お前の用意した、策か？」

侮蔑するのでもなく、嘲笑するのでもなく、何気ない口調で口にするユヅル。そんな彼に対して、彼女は何度もその場で引き金を弾き続ける。撃鉄が、甲高い金属音を上げるまで。それまでに彼が受けた弾丸の数は、二十二発。一般人であれば、死ぬどころではなく、跡形もなく消し飛ぶか、肉片に変わっていてもおかしくない。それでも、彼は生きている。傷は負っているものの、自らの足で、崩れることなく立っている。

「化け物がっ」

吐き捨て、彼女は弾丸の尽きたはずの拳銃を、弾層を変えることなく、引き金を引く。突如として響く轟音。そして、初めて、この場で膝を着くユヅル。

「さすがに、化け物レベルの耐久力を持っていても、これは効くらしいな」

「ははっ、『魔弾』とは、あの人と能力まで同じかよ」

「あいつのことを、口にするなぁ」

そして、彼女は引き金を弾き続ける。先ほどと違うのは、ユヅルが弾丸を受けるたびに、大きく体制を崩し、その場から動いていな

いこと。
　魔弾。
　正式な能力名は、圧縮開放なのだが、異端審問局ではこの能力は、特にこう呼ばれている。原理は非常に簡単で、ただ物質やエネルギーを任意の大きさに圧縮し、対象に接触した瞬間に開放するというもの。ただ、この能力は、シンプルであるがゆえに、非常に応用が利き、殺傷能力も高い。先ほどから、ユヅルが受けているのは、おそらく、空気を圧縮した弾丸。威力を武器でたとえるなら、この魔弾は、バズーカクラスに相当する。
「踊れ、踊れ。さっきの余裕を後悔して、踊り続けろ」
　彼女は狂った笑いを浮かべながら、引き金を引き、ユヅルが地面に倒れ、そのまま動かないことを確認して、唾を吐く。
「ふっ、ははっ、はーはっは。これが席次の十三。ただの馬鹿の間違いだろ。私はこんなにも強い。相手が化け物だろうが、殺してみせる。なのに、私は十二、テメェみたいな奴の下に見られる。それは、きっと前任者が間抜けすぎたからだろうな」
　声を上げてひとしきり笑った後、こみ上げてきた怒りをそのまま言葉にするレベッカ。しかし、
「おまえ、なんか勘違いしてないか？　席次の十三は、十二よりも上って意味じゃねぇぞ」
　荒い息で立ち上がったユヅルを見て、忌々しげに目を細める。
「お前こそ、何言ってやがる。撃たれ過ぎて、頭までイカレたか？　執行官の席次は、一が一番上で、次が十三、その後からは普通に数えて、十二は末席だろうが」
「そこから教えないといけないのかよ、骨が折れる」
　彼女はユヅルの言葉を聴いた瞬間、引き金を引く。当然、衝撃を受けたユヅルは崩れ落ちるが、今度は膝を着くだけにとどまる。
「異端執行官の席次は、一から七までが万能型、八から十三までが特化型。そんで、数え方は、万能型が一から、特化型が十二から。能力の使い方、戦闘スタイルで、席次が与えられるだけだ」

「なら、十三はどこに行った」
「その数字の意味を教えてやるよ、今からな」
シニカルな笑みを浮かべ、彼は呪詛を口にする。そう、神を蹂躙したときの言葉を。

『
無限書庫（アーカイバ）へのアクセス開始
第二六九幻想領域座標固定
並びに、封殺結界を固定座標に接続
執行官権限により、厳重封印指定の十三を開放

厳重封印との魂接続開始
肉体および魂の封印を開放
物理的干渉および精神的干渉に異常なし
起きろ、もう一つの俺の魂
悪魔皇イレイザー
』

魔弾の後継者2（後書き）

第四の執行官登場

数え方は
万能型が1、2、3、4、5、6、7
特化型が12、11、10、9、8
です。

魔弾の後継者3（前書き）

熱血。

拳で語ります。

銀色の光が周囲を包み込み、現れたのは変貌した姿のユヅル。
「それが、本性か、化け物」
「ああ、これが、席次の十三、『死神』の称号を与えられたものの姿だ」
嘲るのでも、愉悦に浸るのでもなく、ユヅルは淡々と告げる。
「さっきも言ったように、席次の十三には、特別な意味がある」
彼の言葉を待たず、引き金を引くレベッカだが、その弾丸は、先ほどまでと違い、ユヅルの肉体に到達していない。到達する前に、その存在を『拒絶』され、存在を保てずに消滅してしまっている。
「考えたことはないか？　キリスト教で、十三は忌むべき数字。異端審問局でも、それは同じ。だが、そんな数字を、第七階梯（エンタク）のやつに与える理由を」
十三という数字は、キリスト教だけでなく、神を信奉する国にしてみれば、忌むべき数字。それは、かの救世主に集った、十三人の使途、その中に一人だけ存在した、裏切り者を意味する数字に他ならない。
「わからないか、それとも考えてる余裕がないのか、どっちでもいい」
レベッカは、自身の力が、今まで磨き上げてきた牙が、彼の力に及ばないことを認められず、何度も引き金を弾き続ける。その銃声は、まるで、子どもが泣きじゃくるように、空しく、悲しく響き続ける。
「席次の十三は、執行官の中で特別えらいわけでも、優遇されているわけでもない。ただ、この数字が意味するのは、粛清。そして、味方殺し。席次の十三は、異端審問局に敵対する、外部勢力、内部勢力問わず、殺す。嫌われ者に与えられる数字だ」
ただ、淡々と事実だけを口にするユヅル。しかし、彼女の頭は、

その言葉を受け入れながらも、否定していた。もし、彼が口にしたことが本当だとすれば、彼は、執行官を単独で殺すことができるほどの戦闘能力を有していることになる。それを認めるということは、自分が、彼に勝てないという事実を認めることになってしまうから。

「お前の前の、席次の十二、カイゼル・アルスラーンを粛清したのも、俺だ。ただ、あの人はお前とは違っていた。あの人は、自分の力を誇示することもしなかったし、席次に対して、そこまで強い執着を持ってはいなかった」

「あの男の名を、私と母を捨てた男の名を、口にするなっ」

その行為が、無駄だとわかっていながらも、彼女は引き金を弾き続ける。そんな彼女を、近寄ることもせず、ただ、ユヅルは見つめる。

「仇討ちでもなく、そこまで俺に執着を持つ理由は何だ？」

「私は、証明しなくちゃいけない。お前なんかに殺された弱い奴の代わりなんかじゃなく、席次の十三すら超える存在であることを」

「おまえ、そんな薄っぺらな理由で、俺を襲いに着たのか」

タバコに火をつけ、煙を吐き出したユヅルはつまらなそうに口にするが、その表情からは、はっきりとした怒りが伝わってくる。

「なら、あの人の、テメェの父親に代わって、俺が、ぶん殴ってやるよ」

「あいつのことを、お前が口にするなっ」

怒りと共にレベッカが引き金を引いた瞬間、彼女の顔にユヅルの右こぶしが突き刺さる。容赦も、手加減もまったくない、力任せにたたきつけられたこぶしを受け、彼女の体は宙に浮き、次の瞬間、地面にたたきつけられる。

「あの人と比べてるのは、他の誰でもないおまえ自身だろうが」

「ちがう、私は、既にあいつを超えたっ」

「超えたわけ、ねぇだろうが」

立ち上がったレベッカの顎は、強烈な衝撃を受けて、再び体を宙に浮かせる。衝撃の正体は、死角から繰り出されたユヅルの左こぶ

し。
「守られてただけの奴が、命賭けて守ろうと立ち上がり続けた奴を、超えられるわけねぇあろうが」
タバコの煙を吐き出し、追撃しようとはせずに、レベッカが立ち上がることを待つ。
「あんなやつが、守り続けただと。私と母を捨てた、あんな奴が」
「不幸自慢なんて、こっちは聞く気がねぇんだよ。それに、その行動に理由があったことにすら、お前は、考えようともしない」
「理由だと、そんなもの、何の言い訳にも」
次に彼女を襲ったのは、壁にたたきつけられる衝撃。神速のスピードで繰り出されたユヅルの、右足。受身を取ることもできなかった彼女は、背中を壁に預けながら、それでも立ち上がる。
「そうだろうな、テメェはそうなんだろうな。自分の不幸を理由に、今まで、自分を守ってきた、信じてきたものすら、すぐにゴミ箱行き。そんなんで、あの人を超えたなんて、軽々しく、口にするんじゃねぇ」
ユヅルは、ゆっくりと彼女に近づき、彼女の服を右手で掴み、ねじり上げ、彼女の体を持ち上げる。
「確かに、お前の能力は、あの人の能力を超えたかもしれない。だが、ただ、それだけだ。それ以外、お前は、あの人の在り方、言葉、意思、どれをとっても、足元にすらおよばねぇよ」
そして、言葉と共に、力を込め、レベッカの首を締め上げる。
「お前に、一つ、大嫌いな事実を教えてやる。俺が、あの人を殺したのは去年。あの人が、異端審問局を裏切った理由は、家族を守るためだ」
そう口にして、彼女を力任せに投げつけるユヅル。コンテナにぶつかりながら、血を吐きながら、それでも、レベッカは立ち上がる。しかし、その表情からは、明らかに動揺していることが読み取れる。
「嘘だっ、お前は嘘を口にしている。あいつが、捨てた家族を省みることなど」

「去年、お前は、母親と共にテロ組織に人質にされているな」
「なぜ、そのことを知っている」
「情報屋から、お前の情報を買った。おかげで高くついたが、そんで、俺の中で絡んでた糸が、解けた」
レベッカの動揺は、彼の言葉でさらに大きくなっていく。それでも、ユヅルは、言葉を続ける。
「執行官としては、信じられない失態だ。あの人は、家族を人質にとられ、異端審問局の内部情報を外部組織に渡す為に、持ち出した。その外部組織は、予想がつくだろ、お前と母親を人質にした組織。そして、俺はあの人と対峙した」
気持ちが揺れているレベッカは言葉を口に出せない。
「俺は、あの人に聞いた。他に選択肢はないのかと。それに対して、あの人は、俺にこう、口にした。父親って奴は、いつになっても、嫌われても、悪役になってでも、家族を守りたいんだと。その時、生まれて俺は初めて、敵対する人間に敬意を持ったことを、今でも覚えてる」
「うそだっ。あいつが、あいつが、そんなことをするはずが」
かんしゃくを起こした子どものように、両手で頭を抱えながら、彼女はその言葉を否定する。
「まだわかんねぇのか、テメェは。あのひとは、最後の最後で、執行官である自分よりも、父親であることを取った。あの人にとって、そんだけ、お前らは大切な存在だったんだよ。それまで、苦楽を共にした戦友や、仲間と家族を天秤にかけて、迷わずにお前たちのことを選ぶぐらい、守りたい家族だったんだよ」
「黙れっ」
「異端審問局は、社会の嫌われ者。執行官ともなれば、恨みだけでも相当な数を買ってる。その恨みの矛先が、自分から家族へ行くことを、あの人は恐れた。そして、遠ざけた」
「だまれっ」
「テメェだって、本当はわかってるんだろ？　あの人が何の考えも

なく、自分のそばを離れるはずがないって」
「だまれっ、だまれっ」
「そうして、事実を、受け入れることを拒んで、弱い自分を守り続けてるんだろ。そうしないと、自分の心がつぶされてしまうから」
「黙れと、言っている」
「テメェは、あの人の背中に、父親の背中に何を見た。あの人は、後悔していなかった。自分の選択に、絶対の自信を持っていた。だから、俺も、それに答えた。もう一度聞くぞ、お前は、本当にあの人を超えたのか？」
「犬死した奴なんて、私は超えたに決まっている」
武器もなしに、怒り任せに突っ込んでくるレベッカ。それは正に、赤い布に興奮して突っ込んでいく闘牛そのもの。何の技術もなく、回避することなど、ユヅルには容易い。
「これだけ言って、まだわかんねぇのか」
ため息を一つついて、その場を動かない。
「今まで築いてきた、立場も、仲間も、プライドも捨てて、一人の人間として、戦う覚悟がお前にあるか。ねぇだろうな。くだらないことに固執したお前には無理だ」
接触まで、二秒もない。
「まっすぐ、家族を守ろうとした、でっかい父親の背中から目をそらし、テメェの安っぽい心守ってる奴が。全部犠牲にして、それでも守ろうと、勝てないことを知りながら、挑み続けた人を。あったけぇ手で、自分が傷だらけになっても、家族を守り抜いた人を。最後は笑顔浮かべて、死んでいった人を。軽々しく、超えたなんて、口にするんじゃねぇよ、弱虫」
怒号と共に、右のこぶしを、レベッカの顔面に、カウンターでたたきつける。
「あの人の墓に、花でも供えて、手を合わしてから出直して来い」
吐き捨てるように口にして、ユヅルは能力を解除した。

魔弾の後継者3（後書き）

紅蜘蛛編に影響を受けすぎた気がする

魔弾の後継者４（前書き）

とりあえず、決着

「そんで、あんたはいつまで草葉の陰で見守ってるつもりだ？」
「それだと、私が死んでる扱いですね」
タバコの煙を吐き出しながら、目覚めないレベッカを一瞥し、ユヅルは口にする。そんな彼に答えたのは、金髪碧眼の美女。人によっては女神と表現するかもしれない。グラビアモデル顔負けの肢体をパンツスーツに押し込んだ美女は、サングラスをはずし、ため息を一つつく。
「彼女、死んでませんよね？」
「別に殺しても良かったんだけどな。とりあえず、あの人のことを誤解したまま、ってのはいただけなかっただけだ」
「そうですか、それは何より」
美女は、ユヅルへと歩み寄り、彼の口元からタバコを奪うと、地面へと落とし、靴底で火を踏み消す。
「タバコは止めなさいと、何回も口をすっぱくしていったはずですよ」
「本当、堅苦しいって言うか、まじめだよな、あんた」
タバコを取り上げられ、ユヅルはため息を一つ。
「そんで、現在時刻は？」
「午後七時を回ったところです」
「そうかい。到着は八時って聞いてたはずなんだけど、俺の聞き間違いかな、エカテリーナ？」
「いいえ。間違ってはいませんよ。私の本体は、まだ羽田に到着していませんから」
エカテリーナ・フォルダン。
異端審問局、局長秘書官にして、席次の八を担う彼女は、いつも含みのある口調で話す。その為、ユヅルは若干彼女のことを苦手としている。

「ああ、分身（アバター）か、それ」
「ええ、それにしても、ユヅル。もう少し、加減というものを覚えてください。仮にも、女の子相手なんですから、おなかと顔に打撃を加えるのは、人としてどうかと思いますよ」
「あんたは、人を殺せるやつを性別で、加減を決めたりするのか？」
「まったく、ああ言えばこう言う。本当、年相応に、年上に言いくるめられてくださいよ。そうじゃないと私、泣きますよ？」
「勘弁してくれ」
談笑するユヅルとエカテリーナ。そんな中、レベッカが意識を取り戻し、鼻血をポケットから取り出したハンカチでぬぐう。
「起きたみたいだな」
「ですね。とりあえず、私が説明しますから、あなたは少しの間、黙っていてください」
「嫌だって言ったら？」
「別に、どうもしませんよ」
「勝手にしてくれ。俺は、これから羽田に向かうから、後よろしく」
「はい、任されました」
そんなことを口にして、ユヅルはその場を去っていく。そして、その場に残される二人。
「それで、レベッカ・サウザード執行官。彼は強かったですか？」
何気ない問いに、彼女は答えることができない。そんな彼女に対して、微笑を浮かべながら、
「では、質問を変えましょう。彼の言葉は、痛かったですか？」
エカテリーナは答えづらいであろう質問を口にする。当然、レベッカはすぐに答えることができず、言葉に詰まってしまう。
「そうですね、無理に答えなくても結構ですよ。あなたの表情で、大体の予想はつきましたから」
「それで、処分を言い渡しに着たんですか？」
レベッカは、仕事とは関係なしにこの場所に来て、人的被害を出しただけでなく、戦闘行為にも及んでいる。秘書官として、執行官

を取り締まる立場であるエカテリーナ。彼女がこの場に現れたのは、それが理由。そう、彼女は考えていた。

「処分？　あなたはいったい何を言っているんですか？」

本当に、何を言っているのかわからないといった様子で、エカテリーナは首をかしげる。だが、首を傾げたいのは、むしろレベッカのほう。

「私は、彼の変化を直接確認することができたので、十分ですよ。その為に、あえて体を張ってくれた人を、どうして処分できましょうか」

彼女に、ユヅルのことを説明したのは、エカテリーナ。そう、暗に彼女はこういっているのだ。

『あなたを利用させてもらいました』

っと。

「そうですね、では、代わりに一つ質問をします。あなたは、嘘偽りなく答えてください」

「はい」

「あなたは、今回、自分が処罰される対象であると、自分で自覚している」

「はい」

「そうですか、なら、処罰ではなく、一つ、仕事を与えることにします。別にそんなに難しいことではありませんから、気楽に考えていいですよ」

そう言って、エカテリーナは、レベッカの耳元でささやく。だが、それを聞いて、レベッカは、

「無理です」

「大丈夫ですよ、あなたならできます。それでは、又、後ほど」

笑顔で手を振り、その場から一瞬で消えるエカテリーナ。そこで、彼女は、先ほどのユヅルの言葉を思いだしながら、

「お墓、どこにあるんだろう」

執行官になってから初めて、父に会うことを決めたのだった。

魔弾の後継者４（後書き）

次回から、
再び舞台は学校に戻ります

水着×ｍｉｚｕｇｉｌ（前書き）

季節は、冬のはずです。

「それで、って、きちんと私の話を聞いてますか、ユヅルさん」
「ああ、とりあえず聞いてるよ」
学校の屋上、昼食をとりながら、カナミは隣で購買のパンを食べているユヅルに対して不満を口にする。彼が、この天禅寺高校に転入してきて、約二ヶ月になろうとしているが、未だに、カナミの弁当は食べてもらえていない。
「文化祭についてだよね」
「そうですよ、ゆ～君。きちんと聞いてください」
一緒に昼食をとることになったカズキとヒサノにまで言われ、彼は閉口してしまう。そして、彼は、自分の隣で昼食を取っている女子生徒に視線を向ける。レベッカ・サウザード。ユヅルと同じ異端審問局所属の執行官であり、実際に殺し合いをした人間。なのだが、なぜか、殺し合いをして一週間も経たずにこの学校に転入してきている。
「先輩、私の顔に何かついていますか？」
「別に」
納得はいっていないものの、ユヅルはそれを口に出すことなく、食事を終了する。
「話を本筋に戻しますよ、今日は、文化祭のユヅルさんのスケジュールについてです」
「スケジュールねぇ」
どうして自分のスケジュールを、自分で組むことができないのか、彼は疑問を持ちながら適当に話をあわせる。
天禅寺高校の文化祭は、若干特殊な時期に行われる。行われるのは、十二月の二十二から二十四の三日間。終業式を二十一日に行い、その後、三日間をお祭り騒ぎに当てるといった理事長の考えである。
「軽音楽部は、たしか、最終日のステージ参加だったはず」

「手芸部は、二日目の午前中が当番になってます」
本人の意見を無視しながら、着々と四人の女子によって、ユヅルのスケジュールが決定していく。
「そういえば、ユヅルさんは、誰か招待したんですか？」
カナミが疑問を口にした瞬間、その場にいた四人の女子の視線が、彼に固定される。天禅寺高校の文化祭は、初日が学内のみ、二日目、三日目が一般公開となっているものの、この文化祭が開催されている最中、部外者は生徒に配布されているチケットがなければ、敷地内に入ることができない。
「くるかどうかはわからないが、とりあえず二枚ほど、チケットだけは送っておいた」
「先輩、それは、男ですか、女ですか？」
食いついてくるレベッカに飽きれながら、
「そこ重要なのか？」
「「「重要です」」」
聞いてみるが、四人同時に言われ、
「女だよ、ただ、お前は知ってると思うけど」
ため息をつきながら、レベッカを指差す。だが、当のレベッカは、首をかしげている。そんな彼女を手招きし、
「お前、自分と俺以外の執行官、何人ぐらい知ってる？」
「局長代理と、秘書官ぐらいです。顔を知っているのは」
彼女の回答を聞いて、肩を落とす。
本来、執行官に就任したとき、顔見せに他の執行官に挨拶に伺うのが基本なのだが、彼女はそれをしなかったらしい。もっとも、執行官が本部にいることが稀な為、合えていなかった線もあるが、二人というのは、あまりにも少なすぎる。
「俺が送ったのは、イスカリオテとマリーシャ、二人ともお前と同じ執行官だよ」
「聞いたことのない名前ですね」
「じゃあ、『軍神』と『戦乙女』の称号は？」

「それなら聞いたことあります。確か、席次の三と六ですね」
「そう、その双子だよ」
「先輩の交友関係って」
「何か言いたげだな」
そんな風に二人で内緒話をしていると、アキタカが屋上に姿を現し、
「ユヅル君、ナンパしに行こう」
意味不明な言葉を口にしたので、その瞬間、ユヅルは固まってしまう。
「ちょっとこっち着て」
手招きされたので、仕方なく四人から離れて彼に近寄るユヅル。
「そんで、何？」
「だから、ナンパしに行こう。二人で」
「はっきり言おう。おまえの言っていることの意味がわからん。結果だけでなく、その考えに至った過程も話せ」
いきなりの誘いを断ったりはせずに、説明を求めると、
「いやね、ちょっと懸賞サイトでこんなものを手に入れたんですよ」
そう口にして、アキタカは制服の内ポケットから二枚のチケットを取り出す。良く見ると、そこには新しくできたスパリゾートの名前が記載されている。
「よかったな、他をあたれ」
「いや、まだ過程をすべて話し終えてないですって」
「俺じゃなくて、他のやつを誘えよ」
「バンドのメンバーのことを言ってるなら、みんな補習です」
「あいつら、馬鹿だったのか」
「面目ないです」
天禅寺高校は、期末試験終了後、テスト休みが設けられ、授業はなく、部活動の為の自主登校という形を取っている。もっとも、そこで赤点を取ったものは補習という名目で、毎日授業参加を義務付けられているが。

「そんなわけで、一緒にナンパに行きましょう」
「一人で行け」
過程と結論を聞き、面倒だと判断したユヅルはすぐに断るのだが、
「一人でナンパなんてできるわけないでしょうが」
いきなり逆ギレされてしまい、言葉を失う。
「そりゃ、毎日美少女に囲まれたハーレム生活を送ってる、各ファンクラブのぶっ殺すランキングトップの人にはわからないでしょうよ。でもね、僕だって、モテタインデスヨ？」
血の涙さえ流しそうな勢いでまくし立てるアキタカを見て、ユヅルはため息をつく。これは、後で知ったことなのだが、ヒサノだけでなく、カナミにカズキ、おまけにレベッカにまでファンクラブができており、いつも彼女たちと一緒にいるユヅルは、男子生徒たちにとって見れば、不倶戴天の敵らしい。
「わかったよ。ナンパはともかく、付き合ってやるよ」
「ユヅル君なら、そう言ってくれると思ってましたよ。それじゃ、後で連絡入れるんで」
表情をコロコロと変えながら去っていったアキタカ。
「平穏って、どんな状況をさして使う言葉だったっけな」
タバコに火をつけながら、傍観者になりたいと感じていたユヅルだった。

水着×ｍｉｚｕｇｉｌ（後書き）

さぁ、
次から修羅場に突入です

水着×ｍｉｚｕｇｉ２（前書き）

ナンパの成功率は、いかほど？

「すこし、遅れたか？」
「いえいえ、来てくれただけで御の字です」
二日後、学校へ登校はせず、ユヅルとアキタカは隣町の駅前で待ち合わせをしていた。勿論、このことを四人には二人とも知らせていない。
「それにしても、季節柄、こんなところにくるような奴は、馬鹿としか思えないんだが？」
「それは、僕を含めてですか？」
「勿論」
私服姿のユヅルは、パーカーのポケットからタバコを取り出して、火をつけて吸い始める。
「つ～か、ナンパしたいなら、別にこんな場所に来なくても」
「わかってない、ユヅル君は何もわかってない」
近くの柱に背中を預けたユヅルに対して、アキタカは彼の言葉を完全に否定する。
「いいですか、スパリゾート。この言葉に込められているのは、開放という名の水着。水着ですよ、水着。夏にしか本来拝めない、女性の至高の姿といってもいい。それを、夏ではなく、冬に拝める。しかも、開放的な空間に水着。これほど、ナンパに向いているシチュエーションはありません」
アキタカに力説され、あきれながらも文句を口にできないユヅル。それだけ、彼の言葉には迫力があった。
「まぁ、いいけど。おまえ、確か彼女いたよな？」
「それとこれとは、別問題。問題ありません」
―問題が山積みだろ―
そんなことを考えながらも、ユヅルは決して口には出さない。最近になって、彼自身気づいたことなのだが、軽音楽部のメンバーは、

ユヅル以外全員彼女がいる。モテていないわけではない。だが、女性に対してはがっつく肉食系。
―本当、二ヶ月前の俺からは想像できないな―
自分が今までおかれていた状況を振り返り、ついつい自嘲してしまうユヅル。
「さて、いきますよ」
「あいあいさー」
適当に返事をしてチケットを受け取ったユヅルは、アキタカと共にスパリゾートへと歩き出した。

「これがスパリゾートねぇ」
「すっげぇ、水着天国です」
二人して、見ているものは同じはずなのに、口に出した感想はまったくの別物。建物内には、温泉の他、サウナに温水プール、ウォータースライダーに絶叫系のアトラクションまで完備され、これは一種のテーマパークといったほうが正しいかもしれない。
「それで、これからどうするんだ？　俺、ナンパなんてしたことないぞ」
「大丈夫、問題なしです。俺が女の子に声かけるんで、ユヅル君は何も言わなくて大丈夫です」
疑問を口にしたユヅルだが、アキタカはそれを一蹴。完全に、自信に満ち溢れている。
―どこからその自信がくるのか、教えて欲しいもんだ―
思ってはいても、彼から受け取ったチケットで遊びに来ている為、文句は口にしない。そんなユヅルを気にせず、アキタカは一人の女性に目をつける。
「ユヅル君、早速行きましょう」
「ああ」
生返事をしながら、アキタカに続くユヅル。
アキタカが目をつけたのは、黒のビキニを着た長身の女性。職業

はモデルなのだろうか、スレンダーなボディは、腰でくびれており、健康的な色気が漂っている。しかし、そこでユヅルは気づいてしまった。

「アキタカ、あれは止めとけ」

「なんでですか。ここまで来て怖気づかないでくださいよ」

ユヅルの忠告を無視して女性に声をかけるアキタカ。その瞬間、ユヅルは頭を軽く右手で抑えてしまう。

「あのぅ、良ければ一緒にお食事でも」

「へぇ、僕に声をかけるとは、ね。いいよ、ユヅル様も一緒なんだろ？」

そう、アキタカが声をかけた女性は、雨竜カズキその人。途中で、ユヅルは気づき、彼を止めたのだが、とめられなかったことをその場で若干、後悔している。

「うっ、雨竜さん？」

「そうだよ、君の知っている雨竜カズキ。なにか、問題でも？」

気づかなかったアキタカを、嘲笑するように淡々と口にするカズキ。そして、気づいていたユヅルはといえば、

「まさか、ゆ～君がここにいるなんて。偶然ってすごいね」

カズキと一緒に来たのだろう、オレンジ色のかわいらしい水着を着たヒサノにつかまっていた。

「アキタカが懸賞でチケット当てて、誘える人間がいないから一緒に着たんだが。そっちは？」

「ここの社長さんとお父さんが知り合いで、偶然チケットを頂けたんです」

本当のところ、父親にお願いしてチケットを入手したヒサノだが、それは決して口にしない。

「そっか、そんで、お前ら二人だけか？」

「はい、何か問題でも？」

「いや、偶然が重なりすぎるのは、いかがなものかと考えていただけだ」

ヒサノとしては、カズキにも秘密でくるつもりだったのだが、二人がこの場所に来る日時を彼女に調べてもらった為、断りきれなかったのだ。それゆえ、これ以上ライバルは増やしたくない。それが彼女の本音。対してユヅルは、芋づる式に後二人着たら、どうしようかと悩んだが、そこまで深く考えなくてもよかったらしい。

「うう、僕の今日の希望が」

「いや、まぁ、がんばれ」

ナンパ失敗だけでなく、本日の行動予定が決定してしまったアキタカは、その場で膝を着いて落ち込んでしまっている。とりあえず、慰めの言葉をかけては見るものの、彼の反応はない。

「それで、これからどうするつもりだい、ユヅル様？」

「どうするもなにも、一緒にいたほうがいいんじゃないか？」

「本当ですか？」

カズキの提案で、いい方向に転んだ二人は心の中でガッツポーズをとり、左側からカズキが、右側からヒサノが、それぞれユヅルの腕を取る。

「ふふっ、両手に花だね」

「あれ、一緒に乗りましょうよ」

二人のテンションはかなり高くなってきているが、当の本人は歩きづらいだけ。それぐらいしか考えていない。

「はぁ、勝手にしてくれ」

志半ばにして、失敗してしまった友を尻目に、彼は羨ましい状況で休日が開始された。

水着×ｍｉｚｕｇｉ２（後書き）

しかし、残りの二人も黙ってはいません

水着×ｍｉｚｕｇｉ３（前書き）

華やかだけど、冷たい空気

「そんで、これからどうするよ？」
食堂でカレーライスを口にしながら、ユヅルは意見を求める。
「遊べれば何でもいいんじゃないかな？」
「そうですよ、息抜きみたいなものですから」
カズキ、ヒサノに共に言われ、ユヅルは余計に悩んでしまう。元々、アキタカに誘われてきた為、彼にはこの場所で何かをしようという、明確な目的がない。さらに言えば、こういったテーマパークに来るのは、カナミと一緒に行った遊園地を含めて二回目。遊ぶ、そのことに対して、彼はまったくといっていいほど経験がないのだ。
「あいつはあいつで、どっかいっちまうし」
彼を誘った本人、アキタカはうなだれるだけうなだれて、一人でどこかに行ってしまった。そう、誘ったはずのユヅルを置き去りにして。
「気を利かせてくれたんじゃないかな？」
「何気に、空気の読める人みたいですしね」
そんなことを口にしながら、二人の間は視線で火花が散っている。後は、一人、排除できれば、彼と二人きりで休日を謳歌できる。その考えは、二人にとって友情よりも、とても魅力的。
「そうは言っても、俺、こういうところ慣れてないしな」
「それじゃ、ゆ～君、あれに乗りましょう」
食事を終え、適当にぶらつくことにした三人だったが、ヒサノが指差したウォータースライダーに乗ることに決定。しかし、その提案を受けたわりにカズキの顔色はあまりよくない。どうやら、彼女もカナミと同じように絶叫系のアトラクションが余り得意ではないらしい。
「別にいいけど、お前、大丈夫なのか？」
「安心したまえ、大得意だ」

―絶対、嘘だな―
視線を合わすことなく口にするカズキ。そんな彼女の様子を気にしながらも、三人で列に並ぼうとして、そこでユヅルの動きが止まる。
「これ、二人乗り？」
彼の視線の先にあるのは、カップル限定とかかれた文字。つまり、三人でも一人でも乗ることができないアトラクションらしい。
「なっ、なら仕方ない。僕が少し待っていることにしよう」
早々に戦線を離脱するカズキ。その時、ヒサノの瞳が光ったのは言うまでもない。
「じゃあ、行きましょう」
カズキを尻目に、ユヅルの腕を取って列へと並ぶヒサノ。その、実に嬉しそうな姿をみて、卑屈な気分になってしまうカズキ。
「じゃあ、少し待っててくれ」
そう口にして、ユヅルとヒサノは列へと並んでしまう。
そして、二人に順番が回ってきたとき、係員の男性になぜか、殺意交じりの視線を向けられるユヅル。この男性、どうやら先ほどの三人のやり取りを見ていたらしい。
「この、ハーレム野郎」
「なんか言ったか？」
「いえいえ、それでは、きっちりと持ってくださいね」
バナナボートに似たものに跨り、取っ手に手をやるユヅル。しかし、その後ろに座ったヒサノは、なぜか取っ手を持たず、彼に抱きついている。
「これ、大丈夫なのか？」
「ええ、カップル限定ですし」
そう口にはしているものの、男性スタッフの顔は引きつっている。
「それでは、逝ってこい」
「おい、絶対演技でもないこと口にしただろ、今」
係員に突っ込みを入れるものの、ウォータースライダーはスター

ト。正直に言って、ものすごいスピードで落下している。取っ手でバランスを取らなければ、コースアウトしてしまってもおかしくはない。

―やり辛い―

後ろからヒサノに抱きつかれ、羨ましい状態のユヅル。しかし、本人には、その意識がなく、操作がやりづらいことに対する感想しかない。そして、そんな状態の彼は、当然のごとく、最後のほうで操作を誤り、二人してコースをはずれ、プールへと投げ出されてしまう。

「おい、無事か?」

「はっはい、大丈夫です」

咄嗟の判断で、ヒサノを右手で抱きしめる形でプールに着水したユヅル。濡れた髪をかき上げながら、彼女に声をかけるものの、二人の顔の距離は十センチもない。

「とりあえず、あがるぞ」

「はい」

声をかけられながらも、ヒサノの顔はうっとりとしている。咄嗟の行動とはいえ、ユヅルは彼女をかばい、抱きしめてくれたのだから。

「おや、二人ともずぶ濡れだね」

「ああ、アレのせいだ。お前は乗らなくて正解だったかもしれない」

カズキの元へ戻ってきたユヅルとヒサノの二人。ヒサノの顔が赤いことを確認し、何かあったのだとカズキは判断するものの、超がつくほどこの手のことに鈍感な彼が、そのことに気づく可能性が、非常に低いので、ため息を一つだけつく。

「そうそう、ヒサノ君、一つ君にお願いがあるんだ」

「私ですか?」

ユヅルにではなく、自分にカズキが声をかけてきたのが不思議でしょうがなく、首をかしげるヒサノ。

「あれに、一緒に参加してくれないかな?」

そう口にして、カズキが指差したのは、ビーチバレー大会ののぼり。

「二人がウォータースライダーに乗っている間に調べたんだけどね。アレ、どうやら女性限定で参加できるみたいなんだ。おまけに優勝商品は、ペアの一泊二日温泉宿泊券、二回分。どうだい、ここは共闘してみるっていうのは？」

「やりましょう」

瞳に炎を燃やし、二人は互いに手を取り合う。優勝以外に興味はないといわんばかりに。

「あいつら、いつの間に仲良くなったんだろう」

彼の目は、こういったことに関しては、節穴以外の何者でもなかった。

水着×ｍｉｚｕｇｉ３（後書き）

イベント盛りだくさん

水着×ｍｉｚｕｇｉ４（前書き）

今回は短め。

つなぎの部分に近いかも

「お前ら、本当にこれに出るのか？」
「勿論だよ」
「はい」
異口同音に答えられ、それ以上ユヅルは何もいえなくなってしまう。なぜか、開催されているビーチバレー大会。これに二人とも突然参加するというのだから。
「まぁ、がんばってくれ」
そして、このビーチバレー大会が終わるまで、どうやって時間をつぶそうか考え始めるユヅルだった。

ビーチバレー大会。
大会と銘打たれているだけあって、参加者にはプロも名を連ねている。そんな中、優勝しようというのだから、彼女たちのやる気は相当なものなのだろう。
「それにしても、これ」
そう、彼が今見ているのは組み合わせ表。先ほどエントリーしたヒサノとカズキペアの初戦の対戦相手は、カナミとレベッカペア。
「あいつら、やっぱり着てやがったのか」
ため息をつきながら、どっちが勝ってもろくなことにはならない。そう考えているユヅルの前に、まるで、海を割るように男性陣を二つに分けながら、大会のコートに向かう女性二人組が。
「なんで、この場所に、このタイミングで」
―今日は、厄日か？―
ユヅルの視線の先にいる、女性二人組み。それに彼は見覚えがあった。っと、言うよりも完全に知り合いである。
ブロンドの髪を風になびかせ、青のビキニを着たグラマラスな女性、そして、同じブロンドの髪に、ピンク色の、これまたビキニを

着たスレンダーな女性。
　この二人に見つからないように、移動しようとしたユヅルだが、残念ながら、神様はサディスト。
「そこにいるのは、ダーリンね？」
「姉様、訂正してください。あの人は、私の旦那様です」
―どっちも違う―
　即座に否定したかったユヅルだが、その場の男性陣の殺意と嫉妬が入り混じった視線を一身に受け、ため息をつくだけ。
「イジーにマリー、文化祭は二週間後だ」
　そう、この二人が、彼が文化祭に招待した人物。イジーことイスカリオテと、マリーことマリーシャの双子。共に異端殲滅執行官であり、『軍神』と『戦乙女』の称号をもつ、異例尽くめの二人。ただ、彼の言葉を借りるなら、招待したのは、二週間後の文化祭であり、この時期にこの国にいるはずがない人物でもある。
「ええ、ちょっと急用があってね」
「なら、こんな場所で遊んでる余裕なんてないだろ」
　タバコに火をつけながら、ため息を一つつくユヅル。だが、その時、自分がどうしようもないほど油断していたことに気づく。先ほど、そう、一瞬前までいたはずのマリーの姿が、彼の視界から消えている。
―まさか、嘘だろ？―
　執行官は、執行官同士での戦闘を基本的には、禁止されている。これは、ユヅルという特例の『席次の十三』以外、すべての執行官が守らされているルール。だからこそ、彼は油断していたのかもしれない。戦闘とは、何も武器を用いて命を奪い合うことだけを呼ぶ言葉ではないことに。
　少し遅れて、彼の首に小さな痛みが走り、瞳だけ動かして確認。ユヅルの首には小さな注射器の針が刺さっており、それをマリーが持っている。
「すみません、旦那様、『アンブレラ』からの緊急要請です。お許

しください」
落ちていく意識の中、ユヅルは嫌な言葉を聞いた。そして、
―あいつらに、どう言い訳したものか―
場違いなことを考えていた。

水着×ｍｉｚｕｇｉ４（後書き）

果たして、
彼は文化祭までに戻ってくることができるのか？

無貌の君臨者1（前書き）

彼にしてみれば、
初めての経験です。

無貌の君臨者1

ドイツ、ベルリン上空二万メートル。
突如として拉致されたユヅルは、ステルスヘリの中、仏頂面でタバコの煙を燻らせていた。
「だから、悪かったよ。謝るから、機嫌を直してくれないかな？」
彼の目の前に座る茶色の髪に、黒の法衣を着た青年が申し訳なさそうに頭を下げてくるが、その様子を彼は見ていない。
「拙者からも非礼を詫びさせて欲しいでござるよ、ユヅル」
青年の隣に座っている、これまた黒の法衣を着た黒髪に盲目の女性が、青年に習うように彼に頭を下げる。
「ごめんなさい、兄様」
「ほんまに勘弁してほしいどす、ユヅルはん」
ユヅルの隣、銀髪に赤い瞳の少女とその隣に座る着物を着崩した黒髪の妖艶な美女がそろって頭を下げる。
「別に、怒ってねぇよ」
つまらなそうに、タバコの煙を吐き出し、四人の謝罪を一蹴するユヅル。
―確実に怒ってる―
その時、四人の脳裏には同じ言葉が浮かんでいた。
「拉致されたのは俺自身の油断だ。まさか、『アンブレラ』の奴らが、そこまでなりふりかまわない連中だと、予想できなかった俺自身の失態だよ」
タバコの煙を吐き出しながら、彼は、四人と目をあわせようともしない。
アンブレラ。
異端審問局にあり、外部勢力を殲滅する為の武力行使部隊で、席次の一、二、五、七の四名で構成される。最強にして最凶の戦闘能力者集団。

席次の一、称号『斬術師』、鳳センザ。
席次の二、称号『詐欺師』、ケイオス・グリューナク。
席次の五、称号『舞姫』、陣内フジノ。
席次の七、称号『殺戮者』、ハイドレンジア・フォルダン。
この四名によって構成された部隊は、未だに無敗にして戦死者ゼロ。歴台最強とまで言われている。しかし、そんな四人は、一人の少年、ユヅルに対して全員が頭を下げている。それだけ、席次の十三には、特別な意味がある。そう、彼は、最強ではない。だが、最弱でもない。しかし、執行官全員が束になってかかったとしても、返り討ちにあうことが確定している。執行官を単独で処分することができる唯一の執行官なのである。
「それで、わざわざ、俺をドイツまで引っ張ってきた理由は何だ？」
未だ、誰とも視線を合わせることなく、彼は問いかける。
「ユヅル、君は、無限書庫（アーカイバ）について、どれほど知ってる？」
「およそ、七割ってとこだな」
青年、ケイオスの言葉に対して、少し悩みながらユヅルは答える。
無限書庫。
ありとあらゆる魂が行き着き、封じられているといわれている場所。別称では、アカシックレコードとも呼ばれ、この世のすべての知識がある場所とも。
「それがどうかしたのか」
「もし、無限書庫の知識を一人の人間が独占できるようになったら、世界はどうなるだろうか」
「戦争が起きるな」
至極当然のように口にする。
人間は欲深く、そして臆病な生き物。もし、隣にいる人間が、莫大な財産を抱えていたとしたら。もし、目の前の人間が、自身を傷つけるものを持っていたとしたら。欲望は欲望を、不安は不安を呼び、それを手に入れるため、それを取り除く為、人は力を行使する。
「僕らが今から向かうのは、今現在、もっとも、無限書庫の入り口

に近いとされている人物の居城だよ」
「城ねぇ。馬鹿と煙は高いところがすきって言うけど、そいつもその類か」
「それだけなら、拙者たちがくる必要もなかったのでござるよ」
盲目の女性、センザが思わせぶりなことを口にするので、彼は顔をしかめる。
「どういうことだ？」
「席次の九と十が、調査に向かい、殺されているでござる」
「へぇ」
情報だけで知っていて、彼自身あったことはないが、センザの口から出てきた二人は、ユヅルと同じ魂吸収者（ソウルアブソーバー）だったはず。それが、二人も殺されたとなれば、確かにアンブレラが動くには十分すぎる理由かもしれない。
「異端審問局最強部隊も、随分と臆病なもんだな」
「敵が、敵です」
侮蔑を口にした彼に対し、少女、ハイドレンジアは否定せずに答える。
「だから、ユヅルはん、あんさんの力も貸して欲しいんどす」
フジノの言葉と共に再び四人が、彼に対して頭を下げる。そんな彼らを見て、ため息と共に煙を吐き出し、
「今日、日本だと何日だ？」
「十二月十三日です」
「そうか、なら、とっとといくぞ。どうせ、この下にその馬鹿は、いるんだろ？」
そう口にして、唐突に立ち上がったユヅルはドアを開け、
「俺はな、いろいろと仕事以外のスケジュールが詰まってるんだ。仕事してたほうが気楽だって思えるぐらい。だから、今回だけだ」
そのまま、パラシュートもつけずにヘリから身を投げ出した。
「秘書官の言うとおり、変わったね、彼」
「拙者もそう思うでござる」

「ますますいい男になってきはりましたなぁ」
「兄様は、渡さない」
そして、それに続くように四人もヘリから飛び降りるのだった。

無貌の君臨者1（後書き）

次回から、
攻略戦の開始です。

無貌の君臨者2（前書き）

この章、若干長くなりそうです

「ふむ、まぁ、予想通りの展開だな」
銀色の髪に、右頬には蛇の刺青を入れた状態のユヅルは、とても楽しげにタバコに火をつけて煙を吸い込む。
先ほど、ヘリコプターから飛び降りたのは、彼を含めて五人。時間差が多少あったとしても、全員がバラバラの場所、他者を視認できない場所に下りることはほとんどないはず。
―攻城戦は、あまり得意じゃないんだけどな―
攻めることよりも、守ることのほうが容易い。
それは、武術の本質が守りに偏っていることだけでなく、人間の本能によるところが大きい。人間の反射的な行動は、訓練を受けたもの以外、そのすべてが自身を守るために機能している。故に、攻めるという動作をするためには、その反射を訓練で極力抑えなければならない。ましてや、この場所は相手の領域。侵入者に対しての対策はいくらでも講じることができる。
「はぁ、面倒なことに付き合う羽目になったな」
愚痴をこぼしながら、彼は目の前にあるドアを蹴破り、中へと進入する。
「君には、礼儀と言うものが欠如しているのだろうか。ドアはノックしてから開けると、習わなかったかい？」
「お生憎様、礼儀を教えてくれた人間は、それを適用するべき環境も教えてくれたんでな」
室内にいたのは、ピエロの仮面をつけたスーツ姿の人物。声は機械で変換しているのか、無機質であり、しぐさからも性別はうかがい知れない。そんな怪しげな人物の目の前、ちょうど彼のために用意されたかのように配置されたソファ。それに彼は、警戒することもせずに腰掛け、
「一つ聞かせろ、俺をこの場所に招いた理由は？」

タバコの煙を吐き出し、腕組みしながら問いかける。彼が落下した場所は、本来であれば、落下の衝撃で破壊されている箇所が多々あるはず。それにもかかわらず、彼に怪我もなければ、室内に破壊された痕跡もなかった。そうなると、相手が招き入れた可能性が非常に高い。

「君が、他の四人と比べて、格段に面白そうだったからだよ。ユヅル・ハイドマン君」

「人に言われると、不愉快だな」

ソファに背中を預け、タバコの煙を吐き出し、それと同時に言葉も吐き捨てる。

「他の四人は？」

「おや、お仲間のことが気になるのかな？」

機械的な声の為、その言葉に込められた意思は理解できないものの、

「そりゃな、全員死亡してたら、俺の仕事量が増える」

彼は自分の考えを隠すことなく、正直に伝える。

「ほう、なら、君自身に負荷がかからなければ、死亡していても、生存していても大差ないと。そう捕らえていいのだろうか？」

「そのとおり」

目の前の人物は、思案しているのか、左手をこめかみあたりに当て、口をつぐんでいる。

「あんた、何か勘違いしてないか？　異端審問局は仲良し組織ってわけじゃない。エゴイストの集まりで、共通の目的があるから協力しているだけ。誰が死のうが、関係ない。まぁ、あの四人がそう簡単に死んで、俺に仕事を押し付けるような連中でないことだけは確かだけどな」

説明するように言葉を続け、ユヅルは意地悪な笑みを浮かべる。

「さて、それでは楽しいおしゃべりの時間は終わりだ」

そう口にして、ユヅルは火のついたタバコの先を向け、左手の指でフィルターを挟む。

「ここからは、お互いの手札を交互に、オープンしていこう。いっておくが、これは提案じゃない」
「それは、私自身には、大変メリットのある話だが、君にそこまでのメリットはあるまい」
「だろうな、俺には基本的にリスクが大きい」
「ならば、なぜ？」
「そのほうが面白いからに決まっている」
目の前の少年、ユヅルは揺らぐことのない言葉で断言する。それが、どれほど愚かしく、恐ろしい行為であるか。ユヅルは、自分の命をまるで紙切れのようにしか扱っていない。慎重であれば慎重であるほど、目の前の人物が壊れていることを理解できるはず。
「そうだな、ルールは単純。制限時間は、四人がここに来るか、もしくは来ないで一時間が経過した場合。手札の公開は、相手の質問に対することのみで、交互に行われる。これについて、虚偽の申告は許されない。ただし、完全に知らない場合、あいまいな表現ではなく首を横に振って否定すること、以上だ。何か質問は？」
ユヅルの真意がどこにあるのか、それを曖昧にしたまま、目の前の人物は首を縦に振る。
「そんじゃ、先行はあんたでいいよ」
「それでは、君の提案に乗った上で聞きたい。なぜ、このようなことをする？」
「このようなことって、情報の開示しあいをすることか？」
「それ以外になにがある」
相手の第一手。
それは、デメリットしかない現状で、あえて自分を死地へと追いやる愚考。その考えの根底を知りたいと考えたがゆえ。対するユヅルは、
「スリルが欲しいからだよ」
「そんなことのために、あえて自分を窮地に追い込むと？」
「ああ」

簡潔に答えが目の前の人物は、信じられないといった感じで首を横に振る。
「馬鹿げている。君の真意はどこにある」
「続けて質問って、ルール聞いてたのかよ」
ユヅルは一つため息を一つつき、
「まぁ、サービスしとくか。俺の真意、そんなものどこにもない。ただ、スリルを味わいたいだけだ。それとも何か、あんた、自分にこれだけ有利な状況作って、勝利への方程式を磐石にした上で、自分の勝利に疑問を持ってるのか。おかしな奴だな」
本当に信じられないといった様子で首を鳴らす。
「これでいいか？」
「ああ」
納得はいっていないものの、会話でユヅルの真意を、あり方の根底を見極める為、話を進めることにする。
「そんじゃ、俺の番。あんたが二つ質問したから、こっちも二つ質問させてもらう。一つ目は、あんたの呼称。二つ目が、あいつらの置かれている状況」
目を細め、相手を観察するようにユヅルは探りを入れていく。
「私の呼称。それがさほど重要とは思えないが、好きに呼ぶといい」
「じゃあ、ピエロで」
ピエロ、なんのひねりもないネーミングセンスだが、二人は特に疑問を持っていないようだ。
「次に、君のお仲間の状況だが、四人バラバラにこの場所に向かって進んできている」
「バラバラにねぇ」
―あいつらもそこまで馬鹿じゃないはずだから、分かれて進まなければならない理由があったと考えるべきだな―
攻城戦だけにあらず、攻める側の戦力の分散は意味を持っていなければ、即座に死を意味する。それを身をもって知っているユヅルは、現状の分析を開始し、楽しげに笑みを浮かべる。それはまるで、

新しいおもちゃを見つけた子どものように。
「これでいいかね？」
「ああ、十分」
「それでは、私から。四人、アンブレラの能力を教えてくれ」
ピエロが戦力分析に質問をしてくるのは織り込み済み。もっとも、ここで、彼は仲間の安全を考え、首を横に振るべきなのだが、
「四人とも、俺と同じ魂吸収者（ソウルアブソーバー）で、能力名は忘れたが、切断、爆発、流動、操作の力を持ってる。ちなみに、切断が盲目の女で、爆発が男、流動が売女で、ちびが操作。こんなもんでいいか？」
特に悩むことなく、彼は自身の知っている知識を口に出す。
「ああ、十分だ」
―何か、考えがあってのことか？―
ピエロは、おそらく偽ることなく仲間の力を告げた彼に対し、警戒のレベルを上げる。
「そんじゃ、これはお願いなんだが、あいつらの戦いを観戦したい。音声は別に拾えなくていいから、映像だけ拾えないか？」
「いいだろう」
そう口にして、ピエロが指を軽く鳴らすと、それぞれの前にディスプレイが現れ、四人のそれぞれの位置が表示される。
「操作方法は、画面の光点に触れれば、その人物の映像を見ることができる」
「至れり尽くせりだな」
軽口をたたきながら、ユヅルはそれぞれ動いている四つの点のうち、一つに触れる。すると、ディスプレイには、盲目の女性、鳳センザの姿が映った。
「第一の犠牲者は彼女だな」
その言葉にはゆるぎない自信が含まれている。しかし、
「どうしてそう思える？」
「君こそ、ルールを無視だな。まぁ、先ほどのは提案として扱うことにしよう。簡単な話、私は、四人それぞれがこの場所にくるに当

たり、確実に私の部下、魂吸収者と戦うようにルートをセッティングしてある」

―なるほどね、面白い―

口に出すことなく、ユヅルはタバコの煙だけを吐き出す。

「ほら、もう始まるよ」

それが、戦いの始まりを告げる言葉だった。

無貌の君臨者2（後書き）

次から個別戦闘開始

無貌の君臨者3（前書き）

ようやく更新

「そんな馬鹿なっ」
その声は機械音声でありながら、確実に狼狽していた。そして、ピエロはあわただしくディスプレイを操作していく。
「何をいまさら慌ててるんだか」
ため息混じりに煙を吐き出し、イスに背中を預け、ディスプレイへと視線を固定した彼だが、その瞬間、自身の目を疑う。
―新手のパフォーマンスか？―
ディスプレイに映っているセンザが室内に入ると、その室内には一人の男がうつぶせに倒れている。しかも、ただ倒れているわけではない。血の海に沈んでいる。
「貴様、いったい何をしたっ」
「いや、俺に言われても。何もしてないし」
「なら、なぜ私の部下が全員殺されている」
その言葉を聴いて、ユヅルはすべての光点に触れてみる。すると、どの場所でも、アンブレラの面々が死体に出くわしている。
「集団自殺でも流行ってるのか、ここは？」
場違いな言葉を吐き出しながら、彼は思考を開始する。
敵対する存在が死んでいる。
この事実だけならば、喜ぶべき事態なのだが、それをやったのは味方ではない。ならば、敵のうち誰かが裏切った。しかし、先ほど、映し出された光点の位置はずべて距離が離れていた。空間を自由に行き来できる能力者でもいれば可能かもしれない。だが、それなら、なぜこのタイミングで裏切る必要があった。
思考するものの答えの出ない問いに、彼はさじを投げ出したくなったのだが、その時、不意にマナーモードにしていた携帯電話が振動した。
―電波とどいてんのかよ、ここ。杜撰だな―

とりあえず、目の前にいるピエロに視線を一度だけ移動させ、彼は携帯の通話ボタンを押す。
「はいもしもし？」
「ハイドマン執行官、手短に聞きます。現状は？」
電話の相手はエカテリーナ。その声は、彼女にしては珍しく硬い。
「現状というと？」
「作戦の進行具合についてです」
簡潔に言われ、とりあえず彼は、事実だけを説明することにする。
「俺とアンブレラの四名は敵内部へと進入成功。途中で四人とははぐれた。加えて、四人とも敵に遭遇することなく進んできてるみたいだ。どうにも、敵さんの用意した手駒が、第三者によって除外されたらしい」
「なるほど、それはいいことです。私も体を張った甲斐がありました」
「ちょっとまて、会話の流れから察するに、第三者を招きいれたのはあんたなのか？」
「はい」
その言葉を聴いて、彼は絶句する。
―この女狐、いったいどこまでの展開を読んでいやがった―
「敵勢力の排除に成功したというのであれば、おそらく、もうすぐ姿を現すことでしょう」
「そんなに、自分の愛弟子たちが心配なら、自分が着いてこいよ。俺なんかに任せずに」
「保険というものは、常に二重三重にかけておくものです」
「ああ、そうかよ」
元アンブレラの隊長であったエカテリーナ。彼女は、彼に気づかせることなく、策を用いていたということになる。
「誰かを騙すなら、味方からだっけか？」
「違いますよ。誰かを騙すなら、自分以外のずべてを欺いてこそです」

「そいつは勉強になったよ」
若干苛立ちながら、ユヅルは通話をきる。
「話はあらかた聞こえてたと思うが、一応、本筋だけ伝えておく。非常に残念ながら、こちら側は、誰一人としてかけることなく、むしろ一人増えてこちらに向かっている」
「なら、この殺人を犯したのは、貴様の側の人間だと」
「そうらしいな。俺も電話で聞いてはじめて知った」
本当につまらなそうに吐き捨てると、ユヅルはその瞬間、驚愕でタバコを口から落としてしまう。
室内に突然現れていた男。
ぼさぼさの黒髪にサングラス、無精ひげを生やし、一応スーツを着ているものの、清潔感は皆無に等しい。しかし、そんなことは彼にとっては些細な問題。重要なのは、視線の先にいる人物が、彼の記憶に刻まれているということ。
「ウインド隊長？」
それは、亡霊でも見つけたように間の抜けた声。
「なるほど、若干変わっているがどうやらあの女の言っていたとおり、バリスタで間違いなさそうだ」
男は、髪をかきながらつまらなそうに彼の昔の名前を口にする。
間違いない。
ユヅルの目の前にいるのは、彼を戦場で拾い、戦闘スキル、戦術的思考を叩き込んだ人物。
「そちらの奴にも名乗っておこう。本日付で異端審問局所属、異端殲滅執行官、席次の九に任命された。名は、ウインド、以上だ」

無貌の君臨者3（後書き）

そして、合流

無貌の君臨者４（前書き）

まだまだ本題にたどり着かない

「それにしても情けない。俺様は、こんな間抜けを育てた覚えなどないのだがな」

吐き捨てられるのは、再会の喜びを完全に打ち砕く侮蔑の言葉。

「背後への警戒が疎かだと、そういいたいのか？」

「ご名答、クスっ」

ユヅルの言葉に答えるように、背後から彼に突きつけられる刃と言葉。それも、彼は忘れることなく覚えている。だから、振り返ることなく、

「そうだよな、元隊長がいるんだ、元服隊長のあんたもいて、当然といえば当然だ。久しぶりだな、レイブン副隊長」

新しいタバコに火をつけ、つまらなそうに、落ちたタバコの火を靴のそこで踏み消す。

「あらっ、可愛くない。そういうところは相変わらずみたいね。でも、いいのかしら、自分の命を相手に握らせたままで」

「ウインドが九ってことは、あんたが十でいいのか？」

レイブンの問いに答えることなく質問を投げかけるユヅル。その表情に焦りはなく、先ほど浮かんだ驚愕すら姿を消していた。

「ああ、ぴったりだろ？」

「そうだな。他人の背後取ることしかできない暗殺者には、相応しい場所だな」

レイブンの代わりに問いに答えたウインドへ視線を一瞥、彼はタバコの煙を吐き出し、背後へと視線を送る。

その場にいたのは、黒髪に黒い瞳、顔に小悪魔のような表情を浮かべたスーツ姿の女性。年は、彼より少し上程度。

「なぁ、何でナイフを動かさない？　相手の命を握ったから？　元仲間だから躊躇った？　違うだろ。俺は目の前の男に標的は殺せるときに殺せと教わった。嬲るのは、拷問のとき以外する必要はない

とも」
「何が言いたいのかしら？」
「折角再会できたって言うのに、落胆させるなってことだ」
その言葉と同時、彼女は地面へとたたきつけられる。ユヅルは立ち上がっただけ。それ以外の動作が彼女には見えていない。
「それで、わざわざ執行官になってまで俺に会いたかったのか？子離れしない親は嫌われるぞ、ウインド」
「本当にそう思っているのだとしたら、自信過剰もいいところだ」
真っ向からユヅルの視線を受け止め、ウインドは答える。
「今回、俺様たちがこの件にかかわったのは、別にお前に関係していたからじゃない。エカテリーナとか言う女が、あまりにも必死こいて説得してくるものだから、交渉に乗ってやっただけのことだ」
「そうかよ」
そう口にして、懐から銃を引き抜いたユヅルは、ピエロに向かって引き金を引く。銃弾は、五発着弾し、ピエロはそのまま地面へと転がる羽目に。
「良かったのか？」
「本当なら、もう少し情報を手に入れてからにしたかった。だがまぁ、ここで俺のプランを変更しておかないと、どうにも手遅れになりかねないからな」
床に転がったピエロはピクリとも動かない。そして、血液の一滴すら出さず、何かがはじける音が小さく響いている。
「あの女が何を考えているのか、俺の理解の範疇にはない。だが、あんたがここにいるのは、いろいろと都合がいい」
吐き捨てて、
「レイブン、これから四人の馬鹿がこの部屋に来る。そいつらと一緒に、この城の主を消しとけ。つ～か、いつまでも寝てないで働け」
乱雑に命令し、ユヅルはゆっくりと息を吐き出す。
「ウインド、あんたには付き合ってもらうぞ」
「ほう、俺様をご指名とは、嬉しいねぇ」

「すぐにそんな戯言は口にできなくなる。行くぞ」
その瞬間、二人の姿が彼女の視界から消失した。

無貌の君臨者４（後書き）

合流できなかった

無貌の君臨者5（前書き）

移動先は？

「それで、お前は俺様をどこに連れてきたんだ？」
開口一番、ウインドはユヅルにたずねるが、その答えはひどくつまらないものでしかない。
「ここは、王立図書館だ」
「王立図書館？」
「表向きは大英図書館って、仰々しい呼び方があるな」
つまらなそうにタバコの煙を吐き出すユヅル。しかし、本来立ち入り禁止のこの場所にいることが誰かに知られてしまえば、国際問題にも発展しかねない。
「何をしに？」
「荷物持ちに決まってる。とりあえず、このリストに載ってる本をすべてかき集めて来い。話はそれからだ」
紙切れを一枚放り投げ、ユヅル自身も本棚へと向かい目当ての書籍を探していく。そんな彼を見て、
「つまらん」
吐き捨てるように口にしながらも、彼はリストの書籍を探していく。
「これでいいのか？」
「ああ、次に行くぞ」
短く答え、二人はその場所から移動する。

◆◆◆◆◆◆◆

「クローデル、エカテリーナ、並びに解析班と技術班、準備はできているな？」
次に二人が現れたのは、異端審問局本部。そこでは、執行官二人が、各々人員に指示を飛ばしているところ。そんな中、ユヅルがい

きなりウインドを伴って現れた。
「まったく、貴様はいつもいきなり現れるな」
「黙れ、お前の軽口に付き合ってる暇はない」
話しかけてきたクローデルを一蹴し、自身の持っている書籍とウインドの持っている書籍を机に置き、
「大英図書館で集めてきた資料だ。勝敗はあんたらにかかってる。頼むぞ」
短く彼は告げる。しかし、その言葉を聴いた白衣の人員たちはそろって雄たけびを上げ、右こぶしを振り上げる。
「エカテリーナ、とりあえず俺は指示通り動いた。後はあいつら次第だ」
彼女へと視線を送り、煙と共に言葉を吐き捨てるユヅル。一人、この場で話のないように着いていけていないウインドは、ようやく言葉を搾り出す。
「それで、いい加減俺様を連れまわした理由を話してくれないもんかね」
「説明は、この悪女に頼め。間違っても、あっちのジャパニメーションマニアには頼むな。時間の無駄だ。そして、俺にはまだやるべきことがある。だから、そいつに話を聞き終わったら送ってもらえ」
彼はそれだけ口にして、そのままその場から消え去ってしまう。
「なんなんだ、一体？」
「事情が事情ですから、仕方ありません」
「そうそう、説明を頼む」
ウインドは、今度こそ事態の説明を求める。ようやく話の通じる人物がいるので。
「そうですね、どこから説明したらいいものでしょう。ちなみに、数秘術や天使に関する知識はどれほどお持ちですか？」
「ほとんどない」
断言する彼を見て、エカテリーナはため息一つつくこともなく、
「それでは、一番重要なことだけ説明しておきます。天使に関して

です」
「随分とメルヘンだな」
「茶化さないでください。いいですか、天使とは、天の使いという意味。それぐらいは理解できていますよね？」
「あまり人を馬鹿にしないことだ」
獰猛に犬歯をむき出しにして、笑みを浮かべるウインド。しかし、その顔を見てもエカテリーナの表情は涼やかなまま。
「それでは、天使がその肉体に内包する力に関しては？」
「さあな」
「そうですか。話を先に進めます。天使一体がその肉体に内包できる力は、おおよその値で、数百万メルス。百メルスが魂吸収者（ソウルアブソーバー）一人の許容量だと計算した場合、一個師団導入してようやく五分の戦力です」
彼女の言葉を聴いて、ウインドの顔から血の気が引く。魂吸収者は、その能力によって個体差はあるものの、人間が到達できる限界を軽く凌駕している戦闘兵器。それをはるかに上回る戦力を持っている存在があるとすれば、勝てる確率がいかほどのものか。
「ちなみに、無限書庫（アーカイバ）に天使が存在しない理由がこれに該当します。加えて、悪魔が存在しない理由も」
エカテリーナの言葉を聴いて、彼は首をかしげる。彼の元部下であり、現在この異端審問局に所属している彼は、
「なら、どうしてあのガキは」
「それについては、残念ながらお答えすることはできません」
「なんでだ？」
「第一級秘匿事項となっていますので、情報を開示できるのは、大司教以上の階梯を持つ方のみとなっているからです」
それ以上、彼女は答えようとはしなかった。
「はぁ、この場所に足を踏み入れんのは、一体何年ぶりになるんだろうな」

つまらなそうに、それでいて誰に問いかけることなく言葉をつむいだユヅル。

「およそ、二年と十一ヶ月だ。人間の時間経過で計算するならだが」

暗闇の中、銀色の髪に、白い仮面をつけた人物がつまらなそうに彼の質問に答える。しかし、質問に答えてもらったはずのユヅルは、不機嫌そうにタバコのフィルターを噛み千切る。

「お前が案内役かよ、イレイザー」

「不服かな、我が主」

そう、悪魔たちの王は不適に答えた。

無貌の君臨者5（後書き）

彼はどこに向かったのでしょう？

無貌の君臨者6（前書き）

彼はどこにいるのでしょうか？

「しかし、一体どういった風の吹き回しだ。我が主が自らこの場所に足を踏み入れるとは」
「俺の視界を通して、世界を共有していたお前がそういうこと聞くか」
イレイザーの後を歩きながら、ユヅルはふてくされたように言葉を口にする。
「大まかな用件は察しがついているんだろう？」
「ああ、だが、私は直接我が主からその言葉を聞きたい」
―面倒な奴―
ユヅルはタバコに火をつけ、煙を吐き出しながら、
「俺自身にかけた封印を開放する為にきたんだよ」
「おお、我が主。ようやくその決意を持っていただけたとは、歓喜で涙があふれそうだ」
「勝手に溢れさせてくれ」
「まったく、我が主はつれない」
軽口をたたきあいながら、二人は暗闇の中迷うことなく進んでいく。
「こんなところに我々を集めるとは、我が主は、よほど死にたいらしいな」
道が開け、二人が大広間へと足を踏み入れた瞬間、ユヅルの背後から言葉と共に突き出される刃。
「自殺したいのなら、他でやって欲しいわよね」
言葉と共に側面から、鼓膜を破りそうな大音量と質量を伴った衝撃が襲い掛かる。
「・・・・・食べていいよね」
上から、酸性特有の物質を焦がす臭いと共に落下してくる重量物。
その全てが、イレイザーを避けてユヅル単体へと強襲してきた。

「ライプラース、スコール、グラトーン。貴様ら、主にむかってなんと恐れ多いことを」
『中央悪魔皇』イレイザーの怒号すら、彼らにとっては涼風に。
「確かに我は、彼のものを主と認めた。しかし、こんな無様な姿をさらすのなら、死んだほうが、否、いっそ、我が手で殺したほうが」
背後からユヅルを襲った男性、『東方悪魔皇』ライプラースは、つまらなそうに、
「ホント、こんな奴相手に敗北を認めた自分が嫌になってくるわ」
側面から襲い掛かった女性、『西方悪魔皇』スコールは、苛立ちを隠すことなく、
「・・・・・おなかすいた」
上空から落下してきた少年、『南方悪魔皇』グラトーンは、特に意識もせず、
「まぁ、悪魔相手に真正面から来るなんて馬鹿以外の何者でもないですよ」
にこやかな笑みを浮かべた青年、『北方悪魔皇』ベクトランは、少し遅れ、
四人はそれぞれ、ユヅルを中傷するように言葉を吐き捨てている。
しかし、
「そうか、なら、特別だ。本当は二秒の予定だったが、五秒にしよう」
五人の視界に捕らえられていないユヅルの声と共に、その体は自由を奪われた。さらに、全方位からの攻撃で、サンドバック状態にされ、その後、強制的に加えられた重圧によって地面へとたたきつけられる。
「お前ら、自分を殺すのではなく、敗北させた相手に対して、もう少し警戒するということを学んだほうがいいぞ」
そして、タバコの煙を吐き出しながら、ゆっくりと大広間へと足を踏み入れてきたユヅル。
「我が主、これはいったい？」

「さっきまでお前と一緒にいたのは、分身（アバター）だ。俺みたいな臆病で、狡猾な人間が、何の準備もせずに、現れるとでも思っていたのか？」

未だ地面に縫い付けられたままのイレイザーに対し、ユヅルはつまらなそうに吐き捨てる。だが、イレイザーは、彼の言葉を聞いた後、膝を折り、彼に向かって忠節を示すように頭をたれた。

「それで、他の馬鹿四人は、この状況でも強がって、俺を殺すと口にできるか、一人ずつ聞いていくことにしよう」

そう口にして、移動を開始するユヅル。

「さて、智謀を司る、東方悪魔皇ライプラース。お前に問う。お前は、自分を殺すのではなく、敗北させた相手が、何の準備もせず現れると、本当に思っていたのか？」

その問いに、ライプラースは答えることなく、代わりに忠誠を誓う騎士を真似るように膝を折り、その場で彼に対して頭をたれる。

「さて、戦乱を司る、西方悪魔皇スコール。お前に問う。お前は、自分に勝利した相手が、そのまま自分が殺せるレベルのまま留まっていると思っていたのか？」

その問いに、スコールは答えず、ライプラースに習うように膝を折り、頭をたれる。

「さて、悪食を司る、南方悪魔皇グラトーン。お前に問う。お前は、自分が食べることのできなかった相手が、餌ではないと理解できているか？」

その問いに、うなずきながら、グラトーンは二人と同じような体勢をとる。

「さて、方向を司る、北方悪魔皇ベクトラン。お前に問う。お前は、自分が手を下すことなく、事が終わると思っていたのか？」

その問いに、ベクトランは楽しげに笑みを浮かべ、皆と同じ体勢になる。

「ならいい」

短く告げ、

「ライプラース、スコール、グラトーン、ベクトラン、それにイレ

イザー。俺は今から、俺が俺自身にかけた封印を解き放つ。すべては、くだらない茶番に幕を引くため」

タバコの煙を吐き出し、投げ捨て、

「お前らは、悪魔にとって最大の屈辱である敗北を受け入れ、俺の力となった。故に、今回のことは不問とする」

一歩だけ踏み出し、五人に背を向け、

「お前たちは、ただ俺について来い。俺の魂が、滅びを受け入れ崩れ落ちるまで。俺は決して、死なず、悔いず、負けない。俺がお前たちに、勝利し続けるという、甘美なる美酒をくれてやる。だから、お前たちは、遅れることなく着いて来い」

そして、法衣を翻しながら振り返り、

「返事はどうした？」

「「「「「我らの魂。朽ち果てるまで、我が主と共に」」」」」

五人の声に対して、彼は口の端を若干吊り上げるのだった。

無貌の君臨者６（後書き）

そして、場面はもどります

天使光臨1（前書き）

タイトルは変わってるけど、続いてます。

天使光臨1

「なるほど、大体の事情はわかったよ。それにしても、話を聞くだけなのに、いきなり襲い掛かってきちゃダメだよ」
室内に入るなり、襲い掛かってきたレイブンを叩き伏せ、現在の状況を聞くことに成功したケイオスは、叩き伏せた彼女に対して笑顔で忠告する。
「それにしても、秘書官殿、どこまで状況を読んでるんだろうね」
「残念ながら、拙者には、元隊長の考えは読めぬでござるよ」
ケイオスの問いかけに、センザは首をひねりながら答える。
「まぁ、ユヅルはんが中抜けしたことには、驚きましたけどなぁ」
「兄様は、途中で任務を放り出すようなことは決してしません。きっと何か考え合ってのことだと、私は判断します」
ユヅルが、新しい席次の九と共に姿を消したことに対し、不満を口にするフジノに対し、ハイドレンジアは、揺るがぬ言葉を口にし、
「その根拠はどこにあるんどすか？」
「兄様だからです」
見事なまでのブラコン振りを発揮していた。
そんな時、ケイオスの携帯が振るえ、彼は液晶を確かめることなく通話に出る。
「もしもし？」
「もしもしじゃねぇよ、詐欺師」
電話の相手はユヅル。彼は開口一番、ケイオスの称号を口にし、
「時間がないから、先にこっちの用件を言わせてもらう。とりあえず、その場に全員いるな？」
「うん。僕らアンブレラと新しい席次の十。この五名を指すんだったら、誰一人かけることなく、この場所にいるよ」
周囲を見渡し、現状の戦力を確認してからケイオスは答える。
「少し遅れるが、席次の九もそっちに合流するはずだ。お前はそい

つと一緒に事態をどうにかこうにか、収めるか、俺が戻るまで時間稼ぎをしろ」
「時間稼ぎ？」
「ああ。順序だてて説明しているほど時間はないから、簡潔に説明する。敵さんの目的、これが馬鹿みたいなことでな、天使の従僕化だ」
「うん？　言っている意味が良くわからないんだけど」
「わからないなら無理に理解しようとするな。俺も、さすがに馬鹿すぎて理解することは諦めた」
　電話越しにため息を口にするユヅル。
「まぁ、その目的を達成する為には、大規模な天使の召喚術式が必要になってくるわけだ。こいつは数秘術に関する専門知識が必要だから、説明は省く。ただ、厄介なことにこの術式は、こっちが潜入したときから発動を開始している」
「止める方法と、完成時間は？」
「完成するまでの時間は、相手さんの技量が大きく影響を及ぼすから俺にも詳しくわからん。ただ、それなりの準備はしているはずだから、後一時間もあれば発動するんじゃないか？」
「曖昧だね」
「そんで、止める方法は、術式の核を壊すか、術式の使用者を殺すかの二択。前者は、時間内に無理があるだろうから、選べるとしたら後者だろうな」
「そうだろうね」
　ケイオスも、彼に習ってため息をつく。制限時間は少なく、選べる選択肢も少ない。加えて、天使を相手取ることになれば尚更。
「術式の使用者についての情報は？」
「ああ、肝心なことを話してなかったな」
「まったく君って奴は」
「そういうなよ。術式の使用者は、お前らの先輩だよ」
　その言葉を聴いた瞬間、ケイオスの思考は凍りつく。

「無限書庫（アーカイバ）の入り口に一番近い人間だっけ？　お前らに与えられてた情報」

「ちょっと待ってくれ。ユヅル、僕の聞き間違いかな？」

「事実は事実として受け止めないと、自分の死期を早めるぞ、ケイオス。もう一度、今度は詳細に教えてやる。術式の使用者は、元異端審問局所属の異端殲滅執行官、アンブレラに所属、当時の席次は一、称号『魔術師』、徒草リカコ。十八年前、当時の席次の十三、つまり局長（オヤジ）に殺されたはずの人間だ」

天使光臨1（後書き）

敵は先輩、しかも死んだはずの

天使光臨2（前書き）

少しずつ前へ

その言葉を聴いて、ケイオスの心は重苦しい衝撃を受け、言葉を口にすることができない。

「どうしてそいつが生きているのか、事実確認はできていないし、本物という確証もない。ただ、いえることは、術式は開放まで待ってくれないってことだ」

彼の心の葛藤を知っていながら、ユヅルは言葉を続ける。

「相手の行動パターン、戦力、思考が知りたければ、携帯でサーバに直接アクセスして自分で調べろ」

ユヅルの言葉に彼は、まだ答えることができない。

「先輩が相手だから、そんなことで悩むなよ。優先順位を間違えるな。今のアンブレラの隊長はお前だ。お前が迷えば、悩めば、その分だけ、部隊の生存確率は減少する」

「それは、わかっているさ」

「わかってねぇよ。仲間意識？　同朋意識？　そんなちっぽけなものすぐにでも捨てろ。相手は敵だ。向こうは迷うことなくこっち側を殺しにかかってくる」

「それでも、僕は」

「救いたい？　お前の美意識に口出しするつもりはないが、死ぬつもりか？」

「仲間殺しが、仕事に入っている君にはわからないよ」

ケイオスは、決して彼に対して口にはしたくなかった言葉を口にする。孤児であった彼にとって、異端審問局の人間は、家族同然。それがたとえ、あったことのない人間であったとしても。

「ああ、わからない。まったくもって理解不能だ」

そんな彼に対し、ユヅルは侮蔑の言葉を持って答える。

「お前が守りたいのは、一緒にいたいのは、あったこともない他人か？　冗談もほどほどにしろよ。もう一度言うぞ、テメェが今隊長

なんだよ。味方殺し？　そんぐらいの汚名なら、そんなもん受けるだけで味方守れるなら、喜んで受け取れよ。俺たちは所詮、エゴイストの集まりだ。誰かに考えを強制することなんてできやしない」

そこで一度、ユヅルは言葉を区切り、

「俺たちは、テメェで好き好んで自分の手を汚して生きてる。だがな、守るっていう証を立てたんなら、テメェがどれほど汚れたって、それだけは破るなよ。綺麗でいたいと憧れるな。そこには、もう、俺たちは決してたどり着けない」

自分の心すら傷つける言葉を口にした。

「まぁ、お説教はここで終わり。決めるのはお前だ。そうだな、答えを最後までだせないってんなら、せいぜい引き伸ばしとけ。汚れ役は、俺が引き受けてやるから」

「君は、本当にそれで言いのかい？」

「良いも悪いもない。その為に俺がいる。ああ、後、そっちに行く奴は俺よりも、もっとエグイ思考の持ち主だから、それじゃな」

そう口にして彼は通話を終了した。

「それで、お前さんはどうするつもりなんだ、隊長殿？」

わざと茶化すように、現れたウインドは意地の悪い笑みを浮かべながら、ケイオスに答えを求める。

「あなたが新しい席次の九」

「おう、俺様がウインド様だ。よろしくな」

「そうか。なら話は早い。みんな聞いてくれ」

そして、ケイオスは自身の知りえている情報をすべて皆に対して公開する。

「これよりアンブレラは、術式使用者を戦闘不能にし、核のある場所を吐かせ、それを破壊。異論は認めない」

「甘いねぇ、ガムシロップよりも」

「ウインド、異論は認めないし、以後、私語も慎め」

彼の決定に対し、異を唱えるウインドをケイオスは鋼鉄の意志で封殺。行動を開始する。

「なぁ、方針はそれでいいとして、できなかった場合、術式使用者を殺していいんだよな？」
「できなかったことは考えるな。僕らはアンブレラ、血の、嘆きの雨から異端審問局を守るために存在する。そして、決定事項に変更はない」
そう口にし、彼に背を向けてアンブレラは動き出す。それを見て、
「隊長、こんなおままごとに付き合うつもりですか？」
レイブンは早速不満を口にする。
「まぁ、お手並み拝見といこうじゃないか。異端審問局の抱える最高戦力がいかほどのものかを」

天使光臨2（後書き）

まとまりがありませんねぇ

天使光臨3（前書き）

戦闘開始

天使光臨3

そこは、教会と呼べるほど広く、ある種の神聖さすら漂わせていた。
「ここが中心部で間違いないはず」
ケイオスは異端審問局のサーバと、先ほどの部屋にあったデータを利用し、簡易的なマップを作成。術式を展開しているであろう場所を特定して、五人を引き連れてこの場所に足を踏み入れた。
「まぁ、天使様にはおあつらえ向きの場所かもな」
ウインドが、先ほどケイオスにいわれたことも気にせず言葉を口にするものの、そんなものを気にしていられるほど、その場にいる人間に余裕はない。それにようやく気づいたのか、彼も緊張で体の意思を高めていく。
「へぇ、僕の後輩は、結構若いんだね。でも、それなりに場数は踏んでいるみたいだ。うん、これなら、少しは役に立つかな」
軽口をたたきながら、いきなり六人の目の前、礫にされた救世主をあざ笑うように、十字架の上で足を組みながら、白衣にメガネの女性は歌うように告げる。ただ、それだけのはずなのに、この場にいる人間全員が、心臓を鷲掴みにされているように肩で息をしていた。
「挨拶は重要だよ、後輩君。僕の名前は、　徒草リカコ。異端審問局にいたときは、アンブレラに所属していて、当時の席次は一、称号は魔術師。これぐらいは知っているよね？」
茶化すように、組んだ足に肘を乗せ、全員を値踏みしながら、彼女は顎を手のひらに乗せる。
「当然、僕の目的も知っているわけだよね。あれ、でもおかしいな、さっきまで人形を通してお話していた彼がいない。どこに行ったのか、教えてくれるかな？」
その場にいる全員が凍りつくような笑みを浮かべるリカコ。だがそれに対し、

「俺様が知るかよ、そんなこと」
いつの間に移動したのか、彼女の上から風を纏ったウインドが落下してくる。彼の能力である『風力操作』で移動したのだろう。そして、この攻撃には、迅さだけでなく重力による重さも加えられている。そう、回避するにも、防御するにも、相手を知覚する時間が足りなすぎる。
「うん？　君は育ちが余りよくないみたいだね。両親に言われなかったかい、人の話は最後まできちんと聞きなさいと」
にもかかわらず、ウインドの攻撃は床へと突き刺さり、リカコはその場を動いてすらいない。
「次元屈折現象（シュレディンガー）、使える人間がいるとは思わなかったよ」
「へぇ、少しはお勉強しているみたいだね、感心感心。それはそうと、僕の質問に答えてくれると嬉しいんだけどね、後輩君」
舌打ちするウインドを視界に納めながら、ケイオスは内心、対抗策をどうやって生み出そうか悩んでいた。
次元屈折現象。
かつて、学者が提唱した猫箱を元に構築された技術であり、第三者を持ってしか、事実を突き止めることのできない理論を応用したもの。もっとも、その使用には非常に緻密な演算と、針に糸を通すほどの正確さが求められる為、現在では古代技術、『魔術』とさえ呼ばれている。
「ユヅルのことを言っているなら、彼は別件が入って、戻ってくるのは少し遅れる」
「なるほど、主役の登場はやっぱり遅くないと。ふむふむ、しかし残念だな、彼、僕の今から始める実験に間に合うかなぁ？」
ため息をつきながら、思案に耽るリカコに対し、ケイオスは笑みを浮かべ、
「それよりも、自分の心配をしたほうがいいと思うよ、先輩。今あなたは、アンブレラを相手にしているんだから」
その言葉とほぼ同時、彼女を下方向からセンザの斬撃が襲う。彼

女の能力は切断。いってしまえば、何かを切る力。そう、切ることしかできない能力。だが、それゆえに一点特化した力は次元だろうが、結界だろうが切断する。

「うん、なかなかいい指揮官だね、君。でも、それだけじゃ及第点はあげられないよ？」

しかし、それすらも嘲笑うように、リカコはセンザの隣に突如出現する。

「じゃあ、力ずくで合格点を奪うことにするよ」

それをあらかじめ予測していたように、その場所に無数の線が飛び交う。発生源は、ケイオスの背後、彼の長身に隠れるような位置にいるハイドレンジア。彼女の両手の指から放たれた水の糸。振動を付与された水は、最高の硬度を誇る宝石、ダイヤモンドすら両断する。それが網のように放たれている為、彼女に逃げ場はない。

「うんうん、いいね。実に面白い」

だが、その攻撃すら空を切り、リカコは再び十字架の上に移動して足を組む。

「不確定理論まで使うなんて、称号は伊達じゃないってことか」

「勉強熱心だね。君みたいに冷静に事態を見極め、作戦を実行できる人間、僕は好きだよ。まぁ、若干甘さは抜けきっていないみたいだけどね」

「お褒めに預かり、光栄だね」

皮肉を口にしながらも、ケイオスは思考をフル回転し続ける。

不確定理論。

術式を組んだものにとって、不利益なことを無力化し、実益を得ることのできるものは実体化させることのできる、ある種のチートのような魔術。使用制限もなく、時間制限もないが、それゆえに莫大な演算能力とそれを可能とする知識が求められる。

「まいったね、本当」

頭をかきながら、ケイオスの鋭利な視線がリカコへと向けられた瞬間、彼女の顔から余裕の笑みが消え、口から血液が滴り落ちてく

る。

「これは、殺すつもりでやっと、殺さない程度にできる相手だ。僕としては、本当に遠慮したい相手だよ」

「随分と強かだね、後輩君。これは、とてもえげつない。知覚できなければ防ぐことのできない、不確定理論の穴を着いた、実にいい攻撃だ。でも、手の内を晒すのが早すぎたみたいだよ?」

「うん、それは僕もそう思った」

ケイオスの能力は爆発であり、その基点となるのは空間座標に設置する爆弾。彼は、それを彼女の体内に仕掛けたのだ。それにより、リカコは内臓にダメージをうけ、吐血。現在に至る。

「うん、でも暇つぶしにはなりそうだよ、君達。天使が現れるまで、僕を楽しませておくれ」

時刻は午後七時を回ったところ。

天使が光臨するまで、残り四十二分十一秒。

天使光臨3（後書き）

カウントダウンは進みます

天使光臨４（前書き）

執行官大忙し

天使光臨４

舞台は変わって、『黒金の檻』。
その中でも、教皇の許可がないものは枢機卿といえど、立ち入りの禁止されている区画。
第三聖遺物保管庫。
その場所にイスカリオテとマリーシャの姉妹はいた。
「姉様、時間はまだかかるの？」
「もうすこし、もう少しだけ待ちなさい」
厳重に施された封印を一つずつ慎重に解除しながら、イジーはプロテクトを解除し続ける為に、ノートパソコンのキーボードに指を走らせていく。
「ああ、やっぱりこの場所にいたのか」
そんなとき、二人に間延びした声がかけられる。それと同時に二人の体に襲い掛かってくる緊張と恐怖。入念な準備を重ね、何度もシュミレーションを重ねた後に現れた、執行官の半数以上を動員する緊急事態。故に、二人はこのときこそがチャンスだと、決行に踏み切った。現在、この場所にいる執行官は予想ができる。戦闘能力が二人には遠く及ばない、クローデルとエカテリーナの二人のみ。席次の十一は、どこにいるか誰にもわかっていないし、十二は日本に滞在中。なら、二人に声をかけてきたのは、
「いや、実際たいした手並みだ。ここまでこの場所の封印が解除されたのって、設立以来じゃないか。それに、タイミングもいい。執行官が軒並みいない状況。俺でも狙うなら、この機会を狙うね」
タバコの煙を燻らしながら、姿を現したユヅル。
しかし、そんな彼を見た二人は、別の意味で表情を固くする。確か、彼が能力を開放したときの状態は、銀髪に蛇の刺青、そして七本の刀だったはず。なのに、今の彼は、金髪で背中に一振りの大刀を背負っているだけ。そして何より、二人に対する殺意が一片すら

感じ取ることができない。
「ああ、別に手を止めなくていい。誰もお前らをとがめるつもりで、こんな場所に来たわけじゃないんだ」
二人は言っている意味が理解できていない。本来であれば、第五階梯以上の権限を持つ執行官であっても、この場所に立ち入っただけで処罰は免れない。そんな場所で、席次の十三に遭遇してしまったら、身の危険を感じないほうがおかしい。
「俺、お前たちに学園祭のチケットを送ったこと、覚えてるか？」
彼の言葉に対し、無言でマリーシャは首を縦に振る。
「実はな、局長（オヤジ）から、お前ら二人に対する異端審問を打診されててな。こっちから出向くより、呼びつけたほうが手っ取り早いと思ってたんだ」
「そうですか」
彼の言葉に呼応するように、マリーシャはイスカリオテを守るように移動し、
「なら、旦那様であっても」
いつでも戦闘に移れるように緊張を高める。
「だから、勘違いするな。俺は別に、お前らをボコるためにきたわけじゃない。それに異端審問に関しては、俺に一任されてる。つまり、見てみぬ振りもできるってわけだ」
タバコの煙を吐き出しながら、心底楽しそうな笑みを浮かべ、
「ただ、それには一つだけ条件がある。俺が聞いている罪状は、この場所に保管されている聖遺物を持ち出そうとしている疑い。それで間違いないか？」
「はい」
ユヅルの問いにマリーシャは簡潔に答える。
「なら、教えろ。お前らが持ち出したいものが何なのか、それをどう使うつもりなのかを」
その問いに、彼女はイスカリオテに視線を送った後、
「母が、病気なんです。医者に頼ってはみましたが、匙を投げられ

ました。他の知識や能力を総動員しても、手の施しようがありません」

「なるほど、それで聖杯ってわけか」

納得がいったように、ユヅルはタバコを投げ捨て、新しいタバコを取り出し火をつける。

第三聖遺物保管庫。この場所にみだりに人が立ち入ってはならないのは、厳重に封印しなければならない聖遺物が存在するからである。それらは三つあり、第一に聖釘（セイティ）、第二に神滅槍（ロンギヌス）、そして第三に聖杯（セイハイ）。いずれも救世主の血を浴びた代物であり、保管及び使用は教皇からの承認が必要。それほどまでに危険であり、奇跡を体現できる代物なのだ。

「そんじゃ仕方ない。寄り道が一つ増えたが、別に少し遅れてもあいつら死にやしないだろ」

ユヅルはそう口にし、二人を追い越す形で歩き、扉へ手を当てる。すると、砲撃でも直撃したかのように、扉は跡形もなく爆散し、二人は呆気に取られてしまう。

「教皇から許可をもらってる俺に対して、こんな封印かけとくほうが悪い。そもそも、俺は封印の解除方法なんて知らん」

呆気に取られている二人を尻目に、中に進入して聖杯を無造作に掴んだユヅルは、呆気にとられたままのマリーシャに対して放り投げる。

「そんで、お前らの母親はどこにいるんだ？」

「えっ？　それって」

パソコンから視点をユヅルへと移し、イスカリオテは問いかける。

「何呆けた顔してやがる。扉もぶっ壊したことだし、これでお前らがこの場所で何をやってたかを知っているのは俺だけ。そうだな、言い訳は、封印解除を手伝っているうちに、ハイドマン執行官が苛立って扉を爆破しました。そんなところでいいだろ」

二人は未だに彼が何を言っているのかわかっていない。否、わかってはいるのだが、事実として納得できていない。

「面倒事がいまさら一つ二つ増えたところで、現状は変わらん。空間軸及び座標をとっとと教えろ。予定が詰まってるから、一気に跳ぶぞ」
「ダーリン、それってまさか」
「旦那様、本当に？」
「俺は、教皇から聖杯の使用許可をもらってきた。そう、一時的にだが、聖杯の使用権限は俺にある。だから、どこで俺が使おうが文句いわれんのは俺だ。まぁ、後でエカテリーナあたりから小言ぐらい言われるだろうけど」
二人の考えは結論へといたり、その瞳から涙が零れてくる。
「涙は、嬉し涙にする為に取っとけ」
「ありがとうございます」
そんな彼に対し、マリーシャは頭を下げ、
「それで、ダーリンはどうしてそれの使用を？」
「ああ、ちょいとばかり、野暮用でな。あの馬鹿共に死なれると面倒だから」
イスカリオテは疑問を口にするが、つまらなそうに彼はその問いに答える。
「それって非常事態なんじゃ」
「どうだかな。まぁ、非常事態なのはお前らも一緒だろ」
そう言って彼は二人に対して背を向け、
「こっちははるばる現れた天使をぶち殺すってだけの簡単な仕事だからな」
獰猛な笑みを浮かべ、三人はその場を後にした。
天使が光臨するまで、残り時間三十三分二十八秒。

天使光臨４（後書き）

刻々と時間は過ぎていきます

天使光臨5（前書き）

戦闘激化中

天使光臨5

「そうそう、がんばっている後輩君に、いい情報を教えてあげるよ。僕は、君のいっているとおり、複数の術式を展開し、尚且つ天使召喚の術式まで展開中。僕から、君達へ攻撃を加えることはできないんだ」

笑みを浮かべながら、リカコは自身が不利になるであろう情報を惜しみなく口にする。それが、罠であるということを考えないケイオスではない。しかし、事態は深刻。残り時間もすくなってきている。それが、彼に決断を早めさせてしまう。

「随分と親切な先輩だね。心遣い痛み入るよ」

能力を限界を超えての行使。それにより彼女のいる空間ごと爆破しようとしたケイオスの体が、側面からの衝撃に反応することができず、床にたたきつけられてしまう。

「素直すぎる性格は少し考え物だね。僕はきちんとこういったはずだよ。僕からは、君達へ攻撃を加えることはできないと」

それは、彼女の協力者がこの場にいるという意味だったらしい。しかし、ケイオスの視線は、攻撃を自身に加えてきたものを見て、不覚にも固定されてしまう。それは、紛れもなくかつての仲間。

席次の九、称号『処刑人』、シャルロット・オーギュヌス。

席次の十、称号『墜落者』、ワン・フェイリン。

この場所で殺されたはずの二人の執行官。

「まさか、死体操想術（ネクロマンシア）だと」

「ご名答。君は本当に博識だね。君みたいなのが後輩で僕も誇らしいよ」

死体操想術。

意味どおり、死者の肉体を行使する、外道と呼ばれる技術。しかし、それは、操るだけであって、個々の持っていた技術や能力までは行使することのできない技術。なのに、死者である二人の肉体は、

生きているとき同様、もしくはそれ以上のキレを見せ、ウインドとセンザの二人と戦闘を開始している。
「どんなからくりだよ、これ」
口の中をきったのだろう、少量の血液を唾と共に吐き捨て、ケイオスは立ち上がる。
「ふふ、君は何か誤解しているみたいだね。僕は一言も、この場所にいるのが僕と君たちだけだとは言っていない。伏兵ぐらいいるに決まっているだろう？」
そう口にして、左手で彼女が指差した先には、仮面で表情を隠した一人の青年が立ち尽くしている。
「彼のことを君たちは知っているかな。いや、知っていないからといって恥じる必要はどこにもないよ。でも、折角だから教えておくに越したことはない。彼は僕のチームメイトでね、元異端審問局所属の異端殲滅執行官。アンブレラ所属当時の席次は二、称号『人形遣い』、クルーガー・マイソン」
その言葉を聴いて、ケイオスは頭を抱えたい気持ちでいっぱいになる。
敵は元を含めて執行官が四人。そのうち一人には攻撃自体が意味を成さず、二人は死人。打開する方法を探すほうが難しい。
「ハイドレンジア、二人がどうやって操られているか、理解できるかい？」
同じ操作系の能力を持つ彼女に対し、質問を投げかけてみるものの、
「あそこまで正確無比な操作は無理。方法としては、糸による遠隔操作か、生体電流による電極操作の二択」
こちらが選ぶ選択肢が返ってきてしまう。
「なら、試してみれば、いや、試すしか方法はあらへんやろ」
ケイオスが命じるよりも先に、彼らの視界を白光が包み込む。原因はフジノの能力である『電力操作』によるもの。彼女はその能力をもってして、地電流を媒介にして、局所的に雷を発現させていた

のだ。
「おやおや、折角、全員の能力を把握させずに戦っていた指揮官殿の努力を無駄にしてしまうとは。部下はあまり優秀ではないらしい」
観察するようにリカコは告げ、その視線の先、二人の死者は、白煙を上げながら、焦げた肉体を修復し始めている。
「肉体再生、いや、時間逆行（リバース）か」
「そうだよ、彼に操ってもらうんだ。なら、最高の素体に、最高の技術を投入したものを提供するのが礼儀というものじゃないか」
そして彼女は、十字架の上に立ち、両手を広げ、
「さぁ、ここで僕は君たちの努力を否定しよう。今、術式は完成した。僕は、実験に成功した。だから、君達は人柱になってくれ」
無慈悲に彼女は言葉を吐き出し、それと同時に、天井を一瞬で消し飛ばし、白い翼を広げた人ならざるものがその場所に君臨する。
「僕はこれから、天使の従僕化に関する術式を展開する。それまで、天使がどこかにいかないように、君達はがんばって、生き延びるといい」
リカコは楽しげに言葉を告げるが、それは、自身が天使の制御を確立するまで時間稼ぎをしろといっている無常なもの。しかも、この場にいる六人には、その拒否権が与えられていない。
「ようやく隙を見せてくれた」
その言葉と共に、リカコの胸から突き出てくる刃。
「頭のいい人間、臆病な人間、そういった人種は自分の目的を達成したとき、ようやく隙を見せる。まさか、自身にかけている術式を解除するとは、思ってもいなかったけどね」
彼女の背後、その旨に刃を突き刺しながらレイブンはつまらなそうに告げる。そう、彼女は、このとき、この瞬間の為だけに、自身の姿や気配さえ消して耐え忍んでいたのだ。
「しかし、隊長、この状況、どう召集つけましょうか」
レイブンが完全にリカコから注意を切り、ウインドに声をかけた瞬間、その場にいた全員が入り口の壁まで吹き飛ばされ、叩きつけ

られた。
「やってくれるじゃないか、君達。まさか、ここまでやってくれるとは僕も思っていなかったよ」
それは、初めてリカコが見せる憎悪という名の表情。
「そんなに自殺がお好みなら、今ここで、君達を終わらせてあげよう」
そこにどれほどの力が込められているのか、その場にいる人間で理解ができるものはいない。ただ、彼女の両手に集まった力。あれほどの『魔術』を行使できる人間が力を解放したら、予想がつかない。
「天使の光臨に立ち会えたことを光栄に思い、そして逝くがいい」
彼女の言葉と共に解き放たれる力。それは、世界を蹂躙するように圧倒的で、その場にいた者たちにはなす術もない。そう、この場にいた者たちには。
「まったく、野暮用片付けて駆けつけてみれば、ヒスってるババアと、ボロボロの馬鹿が六匹。これは俺の見間違いか何かか？」
世界を蹂躙する力は、それを飲み込む発光によって消し去られ、
「まぁいいか」
タバコの煙を吐き出しながら、ユヅルは倒れたままのケイオスへ聖杯を投げ渡し、
「さて、事情はよくわからんし、現状も中途半端にしか理解できてない。ただ、一つだけ確かなことがある」
そこで彼は言葉を一度区切り、
「俺の領域（ナワバリ）に踏み込んでただで済むと思うなよ」
天使と魔術師に対して宣戦布告した。

天使光臨5（後書き）

ヒーローは遅れて、一番いいときにでてくる

天使光臨６（前書き）

ようやく決着

「今のは、聞き間違いかな？　天使と執行官二人、元も含めれば四人。それ相手に宣戦布告したように聞こえるんだけど」

若干、冷静さを取り戻したリカコは、ユヅルに対して問いかける。

「やっぱりババアだな。耳が遠いらしい。聞こえなかったらしいから、今度は馬鹿にでもわかるように、遠まわしじゃなく、直接的に言ってやるよ。かかってこいよ、ザコ」

不敵に笑みを浮かべ、

「ああ、お前ら、ここからは俺一人でやるから。そこからでてくるなよ、つ～か、イジーとマリー、一人もそこから出すな」

一緒に現れていた二人の執行官に対して指示を飛ばして、結界を張らせる。この行為により、完全に彼は、一人での戦闘を行うことを宣言したことになる。

「そうかい、君はもうちょっと利口だと思っていたんだけどね。評価を改める必要があるみたいだ」

「年寄りって奴は、本当に長話が好きらしいな」

リカコに対し、完全に見下した態度でタバコの煙を吐き出すユヅル。それとほぼ同時、死兵と化した二人の執行官が、彼の完全な死角から襲撃。それに対して彼は防御も回避もしない。

「あんたら二人にはとんだ茶番だったよな。でも、あんたらはどこぞの馬鹿と違って、使命に従事して、命を落とした。その生き方は誇っていい。誰が馬鹿にしようと、俺が黙らせてやる。だから、安らかに眠れ」

彼に攻撃が当たる瞬間、二人の執行官は糸が切れたようにその場に倒れ、そして、その体がまるで天に昇るように、光となってその場から消えていく。

「なっ、何が起こった？」

それは、目の前で起きたことなのに、理解が追いつかない出来事。

リカコ同様に、その場にいた執行官全員がその目を疑って、ただ一人、ユヅルだけが苛立ちからタバコのフィルターを噛み千切っていた。

「元異端殲滅執行官、徒草リカコ並びにクルーガー・ハイマン。これより二名の異端審問を、異端殲滅執行官、席次の十三であるユヅル・ハイドマンが行う。まぁ、誰が弁護にこようが、結論は、極刑以外ありえないけどな」

口に残ったフィルターを吐き捨て、その瞬間、初めて殺気を露に言葉を口にするユヅル。

「確かに、君は不可解な力を手に入れてきたみたいだけど。こちら側には、天使がいる。戦力差は覆らない」

しかし、リカコは自分の優位が普遍なものだと判断し、余裕を取り戻す。それをみて、彼はつまらなそうに、

「だったら、早く天使の従僕化でいいんだっけか？　その術式を完成させてくれねぇかな。こっちは邪魔せずに終わるまで、待っててやるから。いい加減、タバコの煙でごまかすにしても、あんたらの加齢臭きついんだよ」

自身が不利になる言葉を平然と口にする。その言葉を聴いて、

「ちょっとユヅル、それはまずいんじゃ」

「黙っとけよ、ケイオス。お前はお前で、自分の部隊を守って、俺の登場まで生き残ったんだ。もうお前の出番は終わりだ。そこで傷直して、休んどけ」

警告するケイオスに対し、彼にしては珍しく優しげな言葉を口にする。

「後悔するなら今のうちだよ？」

「くどい。つか、無駄に口を開くな、臭う」

リカコの言葉に、さらに彼女の怒りに油を注ぐような言葉を口にして、彼は新しいタバコに火をつける。

「なら、馬鹿は死んで直すといい」

術式が完成し、天使を支配下に置いたリカコは完全に勝ち誇り、

言葉を口にする。その間、ずっとタバコを吸っていたユヅルの足元には、一箱分の吸殻が転がっていた。

「死んで直るなら、テメェが自分の馬鹿さを治して来い」

襲い来る天使。

それを欠伸交じりに待つユヅル。

天使の力を情報でしか知らない執行官は、その威力を視界に捉え、恐怖を感じる。なにせ、翼の一振りで、城の約半分が吹き飛んでしまったのだから。

「ふっ、フッハハハ、アーはっつはは。圧倒的じゃないか。まったく余裕を見せているから、何かしら対抗手段を講じていると思えば。ただの馬鹿でしかなかったようだね」

リカコの高笑いが響き、その場にいた執行官たちは、その存在に対して、どのように対策を採れば対等な戦闘に持ち込めるのか思案し始める。

「はぁ、耳も悪く、加齢臭もキツイ。加えて目も悪くバカときた。お前、やっぱり局長（オヤジ）に殺されてたほうが良かったんじゃねぇか？」

だが、次の瞬間、彼らの不安は一蹴される。そう、城の約半分を消し飛ばす一撃を受け、防御もしていない、回避もしていない。その場を、一歩たりとも動いていない状態で、ユヅルが悪態をついていたから。

それに対して、言葉もないのか、リカコは瞳を零れんばかりに見開いている。

「天使が一柱（いったい）で内包できる力の総量はおよそ数百万メルス。これを魂吸収者（ソウルアブソーバー）の人数に置き換えると、一個師団投入して五分の戦いができるかどうか。では、ここで問題です。天使と対になる悪魔という存在。こいつら一柱が内包できる力の総量はいかほどでしょうか？」

つまらなそうに、事実を確認するように、淡々と質問を投げかけるユヅル。対して、リカコは答えることができない。

「答えは簡単、天使一柱と同量。まぁ、対となる存在なんだ、対等じゃなければ同じ舞台に上がることは許されないよな。そんじゃ次、

悪魔を従えた俺の力の総量はいくつでしょうか？」
　天使の翼を何度も受けながら、一切反撃することなく、傷つきもしないユヅル。それは、子どもが大人にじゃれ付く光景に似ている。
「数秘術に詳しいくせに、計算もできないのか。ああ、馬鹿だからしょうがないよな。そんじゃ代わりに、執行官一のお利口さん、イジー。数百万だと計算が面倒なので、百万を基準として、六百六十六かける、百万はいくつだ？」
「六百六十六かける十の六乗」
「はい、よくできました」
　茶化すように言葉を口にしながら、彼は乾いた拍手を送る。そして、
「殺し合いは数学の勉強じゃないけどな、戦争は数でやるもんだ。何も対策を講じていない？　とことんお前の目は節穴だな。俺の後ろを見てみろ」
　左のこぶしで一撃。天使を消し飛ばし、彼はつまらなそうに背後を右手の親指で示す。
　するとその場所には、いつの間に現れたのか、彼に対し膝を着き、頭を垂れている五柱の悪魔皇と、六百六十一の悪魔。
「主だった奴だけ紹介しとく、右から順番に、イレイザー、ライプラース、スコール、グラトーン、ベクトラン。こいつらが、軍団を束ねる悪魔たちの皇だ。それ以降は、こいつらに付き従う悪魔。さて、問題です。なぜ、こんな場所に大量の悪魔がいるのでしょうか？」
　それは、圧倒的な存在を前にして、自分の無力さを思い知らされる感覚。
「答えは、こいつら全員が、俺の力だから、だ。さぁ、死に損なった哀れなババアとジジイ。戦争は数でやるものだと俺は先ほど言った。そして、それに数が足りなければ、質で補えることも付け足しておこう」
　彼は謳うように口にし、

「数でも、質でも敗北しているお前らは、どうやって勝利を勝ち取る？」

最も意地の悪い質問を投げかける。

「もう一度、きちんと自己紹介をしておこうか。俺の名は、ユヅル・ハイドマン。異端審問局所属の異端殲滅執行官、席次の十三にして称号は『死神』、階梯は、『第七階梯（エンタク）』。そして、六百六十六の悪魔を束ね、魔天数字（ナンバーオブ・ザ・ビースト）を瞳に宿すもの。彼らから与えられた俺の名は黒帝（サタン）。以上、黄泉へ旅立つ餞には十分すぎるだろ？」

彼は、そこで初めて背中に背負っていた大刀に手をかけ、左手で鞘を掴み、目の前へと移動させる。

「お前らは、局長を馬鹿にしただけでなく、俺の執行官（しょゆうぶつ）を殺し、その生き様を汚した。加えて、俺の数少ない執行官（なかま）を傷つけた。一片の慈悲をかけてやるつもりもねぇ」

右手を柄へと移動させた瞬間、大刀に絡み付いていた鎖が一瞬ではじけ飛ぶ。その瞬間、解き放たれるユヅルの全力。それは、結界越しでも、執行官全員の命を鷲掴みにする。

「骨も、塵も、生きた証すら残さず消えろ。それが、お前らが存在（いきている）間にできる最後の、有意義なことだ」

抜き放たれた刃は、真紅に輝き、滅びを体現した。

天使光臨６（後書き）

次でまとめてようやく日本へ

天使光臨7（前書き）

ようやく長かった三章が決着

「ふむ、完全に始末をつけたとおもっていたんだがなぁ」
異端審問局本部、『黒金の檻』。その局長室で、冷めたコーヒーを口に運びながら、部屋の主、アレグリオ・ハイドマンは提出された書類に目を通し、机と放り投げる。
「あいつは、どうした？」
書類を提出した男性、ケイオスへと声をかけ、彼は椅子を回転させて、視界を外へと向ける。
「なんでも、急いで帰らなければならない用事があるとのことで、日本へと今日の飛行機で帰っていきましたよ」
「顔ぐらい見せていけばいいものを」
少し寂しげに、アレグリオは言葉をため息と共に吐き出す。
「今回の件に関して、処罰を受けるものは一人としていない。これは私の決定だ。以上、下がりたまへ」
「はっ」
短い返事と共に敬礼し、ケイオスは室内を出て行こうとするが、ドアノブをまわしたとき、思い出したことがあったのか、振り返り、
「局長。ハイドマン執行官の伝言を伝えておきます。用事を片付けたら、プレゼントを持って帰ってくるから、それまで息災でいろよ。っとのことです」
「プレゼントを受け取るのは立場として、逆だろうに」
アレグリオの言葉を聴いて、彼は微笑し、そのまま室内を後にする。
「それで、俺への説明はいつしてくれるんだ？」
室内に突然現れたウインドからの不躾な言葉を聴き、アレグリオは嘆息し、
「エカテリーナに言われただろう。それは、第一級秘匿事項だと」
「ああ、あの女には確かに言われた。だが、腑に落ちないことだら

けでな。なったばっかりの執行官としてではなく、友人として聞きにきた」

彼は許しを得ることなく、ソファに腰掛、アレグリオの回答を待つ。

「ユヅルの力についてか？」

「ああ。あの女が言うには、無限書庫（アーカイバ）には、天使と悪魔は存在しない。だが、あいつは使うことができる。それはなぜだ。さらに言うなら、あの馬鹿げた力は？」

彼の問いかけに、アレグリオはすぐに答えることはせず、コーヒーを口に少しだけ含んだ後、

「厳密に言えば、天使と悪魔、聖獣と邪竜の四種類が無限書庫には存在しない」

「だが、無限書庫には、すべての魂が保管されているはずだ」

そう、無限書庫はすべての魂が行き着く終着点。その場所に、存在しない魂があることのほうが異常。

「ああ、表向きの無限書庫には、存在しない」

「表向き？」

彼の言葉に不信感を抱き、ウインドは首をかしげる。

「無限書庫には、鍵を持たぬものが入れぬ厳重封印が施されている。その先に、深奥室と呼ばれる、この星の魂に通じる場所がある。そこに、先に口にした四種類の魂が封印され、保管されている」

「ほう」

「鍵は全部で四つ。その鍵は星装具（アストラル）と呼ばれ、手にしたものは到達者（アデプト）と呼ばれている。もっとも、私はあいつ以外の到達者に出会ったことはないがな」

あっさりと、驚愕の事実を告げる。もし、彼が言っていることが真実であるなら、ユヅル以外に三人、魂吸収者（ソウルアブソーバー）が足元にも及ばない、桁違いの存在がいることになる。

「あいつは、なぜそれを持っている？　俺と一緒にいたときには、持っていなかったはずだ」

「それは、上手く隠していたからだろうな。あいつは、生まれながらに持っていたよ」
そう口にして、彼は過去に思いをはせる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆

異端審問局にユヅルを始めてつれてきたとき、星装具を持っている彼に対して、アレグリオは、
「お前は生まれながらにして選ばれた存在だ。そのことを誇りに思いなさい」
確かにそう口にし、彼を褒め称えた。だが、彼の反応は非常に冷めていて、
「どうした、もっと喜びなさい」
「なんで？」
純粋に、どうして喜べばいいのかわからないといった感じで、ユヅルは言葉を返してきた。それについて聞いてみたら、
「星に選ばれて、なんで喜ばなければならない。人より優れていることを誇るなんて、愚者のすることだ。人は、同じ人に出会うことはできない。なら、誰かと比べる必要ない。俺は、そんなものよりも、大切だと思える人が欲しかったよ」
酷く悲しい答えが返ってきて、彼を強く抱きしめたことを覚えている。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「まぁ、なんにせよ。あいつがいる限り、異端審問局に攻めて来る馬鹿はいない。そういう意味では、最強の広告塔だな」
「あいつは、私の自慢の息子だ。兵器でも、化け物でもないし、ましてや、広告塔でもない。私が愛してやまぬ息子。それだけでいい」
「お互い、親ばかみたいだな」

「違いない」
二人はどちらからとも言わずに、声を上げて笑い出したのだった。

天使光臨7（後書き）

次からようやく日常編へ

準備の日々１（前書き）

ようやく学校生活に

準備の日々1

―どうしてこんなところにいるんだ、俺？―

ドイツでの半ば強制的に参加させられた任務を完了し、日本へと戻ってきたユヅルは、生徒会室のパイプ椅子に座らされ、室内にいる三人の生徒の視線にさらされている。

事の発端すら、彼には理解できておらず、とりあえず呼び出されたので、出向いてきたのだが、彼が室内に入ってからおよそ十分。誰一人として言葉を口にしていない。

「えっと、俺になんか用でもあるのか？」

無言の圧力に耐えられなくなったというよりは、このまま時間を無駄にすることの無意味さを考え、会話の糸口をユヅルは放り投げる。しかし、相手は会話に乗ってこない。

―帰りてぇ。今すぐ帰りてぇ―

ただでさえ、ドイツに行っていたせいで、文化祭の準備は遅れていて、さらに、彼を取り巻く四人の女子の機嫌が悪い。ご機嫌取りをしようとは、彼自身考えてはいないが、自身の取り巻く環境がギスギスしているのは、精神的に好ましくない。それゆえ、どうしようかと考える時間も多少なりとも欲しいと考えている。

「無言で帰らない。意外と義理堅いんですね、ハイドマン君」

そんな状況で、彼の対面、三人のうち真ん中に座る女子生徒がようやく口を開く。ただ、彼女の左側の少女は未だ、彼を睨んでいて、右側の少女は彼のことを見てすらいないので、室内の空気はあまりよくない。

「大丈夫ですよ、ヒメカ。彼はここで私たちに乱暴するような人ではないらしいから」

真ん中の女子生徒に言われ、ユヅルを睨んでいた少女、ヒメカがようやく彼に対する敵対心を緩める。

「知っていると思いますが、私が生徒会長の二年一組、品川ヘキル

です。彼女は副会長の志摩ヒメカで、こっちにいるのが、会計の犬塚アキホさん」

自己紹介をし始め、多少空気が和んできたこともあり、ユヅルは体に入れていた力を抜き、パイプ椅子に体重を預ける。

「それで、生徒会長さんが俺みたいな奴に何のよう？」

呼び出されたので、この室内にいる人間が生徒会の人間であることはある程度予想できていたが、彼は途中編入で、生徒会長の顔を知らなかった。むしろ、生徒会のメンバーを見たのが、今回始めてである。

「ハイドマン君は、確か転入してきたとき、黒髪だったはずですよね？」

「染めてたんだよ。これが地毛だ」

彼は嘘は言っていない。両目の紋章まではごまかせないので、青のカラーコンタクトを入れているが、流石に金髪はごまかせないので、そのままにしておいた。

「そうですか。まぁ、いいでしょう」

確認しておきたいことがそれだけなのか、ヘキルは満足そうに笑みを浮かべる。しかし、それが逆に彼の疑心を刺激する。

「ヘキル、遠まわしに相手の態度を観察するのは止めなさい」

そんな彼女を戒めたのが、意外にも先ほどまでユヅルに対して敵対心を露にしていたヒメカ。

「ハイドマン、こちらの用件は単純だ。生徒会に入れ」

「何言ってんだ？」

「聞き取れなかったか？　それとも意味がわからないのか？　安心しろ、どちらでもお前が取れる行動は限られている」

―ダメだこいつ、人の話し聞かないタイプだ―

半ば諦めたように、ユヅルはため息をつく。タバコを吸って、落ち込んでいく気分を少しでも和ませたかったが、流石に、この場所で吸う気には彼もなれない。

「こちらはこういっているんだ、異端審問局所属の執行官、ユヅル・

ハイドマン。貴様の正体をばらされたくなければ、我々に協力しろと」

「いや、別にばらされたところでなんも問題はないけど？」

脅迫に近い言葉を聴きながら、彼はあっさりと返答を口にする。むしろ、彼にとって見れば、自分の身分を隠しているつもりすらない。ただ単純に、聞かれなかったから答えなかった程度のものでしかない。

「なんだと、貴様、それでもヘキルと同じ執行官か？」

「ふ～ん、俺があったことのない執行官てことは、席次の十一、称号『情報屋』ってとこか」

「なっ、どうしてそれを」

―こいつ、馬鹿だ。それも自分が馬鹿だってことを自覚してない馬鹿だ―

自分から情報を開示しておきながら、相手がその情報に近いものを持っていない。心理戦においては、致命的とも呼べるミス。それを彼女は平然とやってのけた。だからこそ、ユヅルは完全にあきれていた。

「ヒメカ、ダメじゃない。あなたがこっちの情報を漏らしちゃ」

「うっ」

戒めるヘキルに、自身の醜態を恥じるヒメカ。先ほどと立場が逆になった二人を見て、

「コントを見せるために俺を呼んだなら、用は済んだよな？　これで帰らせてもらうわ」

付き合っていられないといわんばかりに、椅子から立ち上がったユヅルの目の前にあったのは、ナイフ。しかも、突きつけているのは、先ほどまで会話に一切参加せず、彼に視線すら向けなかったアキホ。

「座って。話はまだ終わってない」

「お前が座ってろ」

その言葉と同時、ナイフを突きつけていたはずのアキホが、先ほ

どまで彼の座っていた、パイプ椅子に腰を下ろし、その背もたれに、ユヅルが腰掛けている。
「見たとこ、そっちの馬鹿が表向きに、そんでここの間抜けが、裏向きにお前を守る盾ってことか。間違ってるなら訂正を、情報屋」
意地の悪い笑みを浮かべ、ユヅルは告げる。
「俺を手ごまにするのは諦めろ。何考えてるか知らんが、俺は駒を動かす側であって、動く側じゃない。むしろ、動かしやすい駒が欲しいなら、席次の十二を紹介してやる」
「やっぱりそうですよねぇ」
そんな彼の言葉に対して、何の動揺もしていないヘキル。それが、彼に疑惑を抱かせるものの、
「ああ、なるほど、合点がいった。お前の提案か、レベッカ」
部屋の入り口に、ノックをして現れた執行官に対して、彼はつまらなそうに口にする。
「ばれちゃいましたよ、レベッカさん」
「品川先輩が鋭すぎるのがいけないんですよ」
彼の位置を通り過ぎ、ヘキルと口論をはじめるレベッカ。彼女がどこの委員会に所属しているか聞いていなかった彼は、若干諦めモードへと移行する。
「はい、自己紹介よろしく」
「あっ、はい。生徒会書記のレベッカ・サウザードです。先輩」
その紹介を聞いて、彼は頭を抱えたくなってきた気持ちを、どうにか押し戻し、平静を装う。
「あのなぁ、俺は三つ部活掛け持ちしてるんだ。しかも、面倒ごとになぜか好かれる性質だから、これ以上苦労したくないんだよ」
「大丈夫です。生徒会は、活動日が金曜日なので、先輩の入っている部活に影響はでません」
堂々と胸を張ってレベッカが口にするので、彼は移動し、彼女の額にでこピンをおみまいしてやる。
「どうして俺の周りに面倒な奴らが集まる。本当に、ついてねぇ」

そうして、苦労性の彼は、生徒会にも参入する羽目になったのである。

準備の日々１（後書き）

最後の執行官登場。

準備の日々２（前書き）

役得、役得

所変わって、手芸部部室。
その場所で黙々とユヅルはミシンを動かしている。もっとも、室内にはヒサノもいるのだが、ユヅルが拉致されて、ドイツに行った日から戻ってきて今日に至るまで、彼女は一言も口を利いていない。まぁ、彼女にしてみれば、デートを邪魔され、途中で雲隠れされたわけで、それに対して腹を立てるのは、乙女としての特権である。
―まったく、俺も変わったもんだ―
日本に来る前の彼であれば、自分が他人からどんな目で見られようが、一切気にしていなかったし、誰かの顔色を伺うなんてもってのほか。それが今では、自分の周囲にいる人間に多少なり気を使ってしまう。
「はぁ、俺も焼きが回ったもんだ」
誰に言うでもなく自嘲した彼は、ミシンを動かす手をいったん止め、ズボンのポケットから携帯電話を取り出し、ヒサノに対して放り投げる。反射的にそれをキャッチしてしまったヒサノは、どうするべきか対応に困ってしまう。
「あんまりにも突然のことで連絡できなかった。悪かったよ」
「謝罪はわかりましたけど、それとこの行動にいったい何の意味が？」
ようやく口を開いたヒサノに対し、髪を軽くかきながら、
「よく考えたら、お前の連絡先知らないし、俺も教えてなかったなと。これを機に、番号、登録しといてくれ」
それは、自分の携帯にヒサノの番号とアドレスを、彼女の携帯にユヅルのものを。彼はそう口にしている。
「自分でやればいいのに、ゆ～君、ひょっとして苦手だったりします、こういうの？」
「できないのとやらないのでは意味が違う」

ヒサノの問いに、彼はそっぽを向いて答え、そして何か思い出したように立ち上がり、無遠慮に彼女の後ろに立つと、その髪に許可もなく触れる。

「ちょっと、ゆ～君、女性の髪は、日本では命とまでいわれているもので」

「わかったから動くな」

照れから来て、顔を赤くするヒサノに対して、用は済んだといわんばかりに、自分が先ほどまで座っていた場所に戻るユヅル。いぶかしげに、先ほどまで彼が触っていた場所に触れてみると、硬い感触が指に伝わってくる。

そこにあるのは、髪留め。彼がドイツから日本に戻ってくる際、選んで買ってきたものである。

「ドイツ行った土産だ。気に入らなければ、捨ててくれてかまわん」

「えっ、お土産ですか？」

「ああ、流石に俺も、突然いなくなれば、罪悪感ぐらい覚える。そんで、携帯は終わったか？」

彼の言葉で少しの幸福を感じ、今まで中断していた作業を再開して、彼女は立ち上がって、携帯電話を手渡す。

「それにしても、ゆ～君は、警戒心が薄いんですね。いまどき、自分の携帯を簡単に渡したりしませんよ」

「そうか？」

「そうですよ、私だってしません。お父さんにだって見せたりしません」

ヒサノの言葉にユヅルは首をかしげながら、携帯をズボンのポケットにしまい、

「へぇ、そういうものなのか」

「そうです。って、ゆ～君の携帯みとけばよっかったですか？」

「別に見られても、あっちの知り合いと、軽音楽部のメンバー、後は世話になってる人だけしか登録してないから、かまわないけどな」

その言葉を聴いて、一瞬だけ彼女は動きを止め、そこからものす

ごい速度で思考が動き始める。
「それってどういうことですか？」
「どういうことも何も、いったとおり。ああ、そうすると、お前が俺がこっちに来て始めて自分から、連絡先を教えた人間になるな」
思い返してみれば、軽音楽部のメンバーには頼まれて教え、世話になっているカナコに対しても同じ。自分から彼が連絡先を教えたのは、ヒサノが始めて。
「それって、神宮寺さんも、雨竜さんも、あの、レベッカさんも、連絡先を知らないってことですか？」
「多分な。まぁ、レベッカはどうだか知らんが、おれはあいつらの連絡先、誰一人知らん」
必要以上に人とのかかわりを持ってこなかったが故、彼はそういう行動を取っていたのだが、彼女にしてみれば意味合いが違う。
―私が初めて。要するに特別って意味ですよね、コレ―
先ほどまでの鬱屈して気分や怒りは光速で吹っ飛んで行き、ヒサノの心にはこれ以上ないといった具合の幸せが舞い込んできた。
「おやおや、コレは邪魔しちゃったかな？」
そんな二人をよそに、口元に手を当てながら、にやけ顔を隠すことなく入ってきたのは、部長であるみ～たん先輩こと、釧路岬。
「いきなり現れて、何いってんるんですか、あんたは？」
「そっ、そうですよ」
ユヅルは疑問を、ヒサノは動揺を隠しながら答えるが、彼女は楽しげに、
「ああ、ここも愛の巣となってしまうのか？」
「先輩っ」
口にした言葉がヒサノの怒りを買い、そのまま二人して室内から出て行ってしまう。それを追うことなく、ミシンを再び動かし始めるユヅル。しかし、
―これ、誰が着るんだろうな？―
自分が作っている深いスリットの入ったチャイナドレスを見なが

ら、疑問だけを頭に浮かべていた。

準備の日々2（後書き）

いいところでででてくるのは、しようです

準備の日々3（前書き）

謝るべきもう一人

準備の日々3

「現実はかくも空しく、幸せな一時はいつも儚い」
かつて、詩人のようにその言葉を、諳うように口にした人物を久しぶりに思い出し、ユヅルはその一節だけを口に出す。
「へぇ、それは誰のセリフだい、ユヅル様？」
いつものようにカナミから逃走し、逃げ込んだ図書室で彼に声をかけてきたのは、カズキ。そんな彼女を見て、
「ああ、お前もよく知っているやつだよ」
「うん？　僕も知っている人物？」
「ああ、バイソン。そういえば、いきなりドイツになんか行って悪かったな」
「謝ってもらったら、こっちとしては、いう言葉がないよね」
ユヅルの謝罪を受け、あっさりとカズキは口にする。彼女が怒っていたのは、突然彼が、昔のようにいなくなってしまったことが深く、関係していたから。
「そうそう、ウインドとレイブンにあったよ」
「へぇ、そいつは珍しい。相変わらず元気だったかい？」
「殺そうとしない限りしなないし、にくったらしいほど元気だった」
彼の言葉を聴いて、少しだけ声を出してカズキは笑う。
「なら、レイブンの恋心は未だに成就してなかったってことかな？」
「あのおっさんも、いい加減覚悟決めればいいのにな」
旧知の人間を話題に会話を重ねていく二人。そこには、他の三人が加わることのできない、時間という名の大きな壁が存在している。
「そういえば、ユヅル様、作詞はできたのかい。真田君が探していたみたいだけど？」
「ああ、できてる。見たければご自由にどうぞ」
そう口にして、ユヅルは制服のブレザーからメモ帳を取り出し、カズキに対して放り投げる。

「これかな、『Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｓｅｅ　ｍｅ？』と『Ｓｕｍｍｅｒ　ｓｎｏｗ』って間違ってないよね？」
「ああ」
「ふふっ、いつからこんな言葉を言えるようになったんだい？」
「笑うなよ」
カズキが微笑しながら、視線を落とす先には、彼が作詞した二曲の歌詞。その曲が両方ともラブソングなのだから、彼女の反応も当然かもしれない。
「あれっ、でも確か、ステージでやるのは五曲だったはずだよね？」
「ああ。内二曲がそれで、後の三曲はこの後、ミーティングで決めることになってる。はぁ、思い出したら腹が減ってきた」
ユヅルはタバコを吸うことなく、自分の手を腹部に当てる。
「昼食はまだとっていないっと？」
「そりゃ、毎度毎度逃げ回る羽目になれば、食えないときもある」
「食べてあげればいいのに」
「俺は胃薬を常備してない」
カズキの提案に対し、即答する彼を見て、
「なら、一緒にランチでもとるかい？」
かばんを開け、その中から弁当箱を取り出して提案する。
「多少なりとも、多めに作ってはいるけど、分けてあげるんだから、少ないとか文句は口にしてはダメだよ？」
そんな彼女の言葉を聴いて、一瞬だけ、不覚にもユヅルの思考が停止してしまう。
「うん？　どうかしたかい？」
「いや、お前、料理できたんだ」
「本当に失礼だな、君は。流石に、引き取ってくれた両親が共働きだから、料理ぐらい人並みにできるようになるよ」
「そいつは失礼」
彼は、カズキに対して非礼を詫びるように一礼し、
「それじゃ、ご馳走になりますかね」

「うん、そういう態度が最初から取れればいいんだよ」
二人はほぼ同時のタイミングで笑い出し、奥の部屋で食事を開始することになった。

「それじゃ、ステージではこの構成でいくことに大決定」
軽音楽部の部室。アキタカが黒板を使って声高々に宣言したので、それに対して、ユヅルとカズキの二人は、乾いた拍手を彼に対して送る。本来であれば、この場には、軽音楽部のメンバーである三人もいるはずなのだが、彼らは未だ補習という名の拘束から、抜け出ることを許されていない。
「いや～、突然ユヅル君がいなくなったときは、どうしようかと思いましたけど、戻ってきてくれて本当によかったです」
「しつこいな、お前も。その件に関しては謝ったろ」
アキタカの言葉に対し、少し不機嫌になりながら、ユヅルは反論する。
「それにしても、お前、思い切った構成にしたな」
「コレのどこに問題がありますか？」
アキタカは黒板を叩きながら反論。
ステージで披露する曲のリストは以下のとおり

『ミュージックジャンキー』　作詞アキタカ　作曲ユヅル
『Ｊｏｋｅｒ』　作詞カズキ
作曲ユヅル
『ボトムレスピット』　作詞アキタカ　作曲ユヅル
『Ｃａｎ　ｙｏｕ　ｓｅｅ　ｍｅ？』　作詞作曲ユヅル
『Ｓｕｍｍｅｒ　ｓｎｏｗ』　作詞作曲ユヅル

「どうしたもこうしたも、俺が加入してからできた曲だけだろ。俺が来る前に作った曲は？」
「成功すれば勝ち組です」

プライドは成功の邪魔になるなら捨てるべき。それが彼の考えらしい。

準備の日々３（後書き）

さて、ほうって置かれた一人が次回登場

準備の日々４（前書き）

残念でした

準備の日々４

「まったく、人の都合ってものを考えて欲しいもんだ」
タバコの煙を吐き出しながら、ユヅルは一人帰り道を歩いていた。
軽音楽部でステージのセットリストを作成したあと、生徒会に半ば強制的に連れて行かされ、書類の整理を開始。その後、各部活を回って、違反物の持込がないか、規定時間を越えて生徒が残っていないか、そういったことを確認する為に残り、時間は既に午後八時を回っている。
「それに付き合う、俺も俺だが、な」
自嘲し、夜空を見上げた彼は、少しだけ、過去へと思いを馳せる。
自分が最初に見上げた夜空の印象は、恐怖。光が飲み込まれ、いつ、どこで、敵に襲われるかもしれない。
次に見上げた夜空は、静寂。異端審問局に入り、力や知識を身につけていくたびに、誰かしら、自分に対する悪態、罵倒を投げつけてくる。それがなくなる瞬間。
だが、今、見上げた夜空に感想が持てない。それは、今の自分が満たされているのか、それとも飢えているのか。自分の足元が落ち着かない感覚に似ている。
そんな考え事をしていた数秒後、彼の背後からいきなりの強襲。無論、考え事をしていたとしても、周囲への警戒を緩めていない彼のこと。半歩、体を左にずらして攻撃を回避。そのまま相手の攻撃が空を切る瞬間を狙って、体を反転。勢いの乗せた蹴りをカウンターで腹部へと叩き込む。そして、その一撃では終わらない。体勢を崩した襲撃者に対し、前進した彼は、落ちてきた顔に対して右膝を叩き込み、呼吸を阻害。重ねて、両手で頭を掴み、投げの要領で、相手をアスファルトへと叩きつける。
「ふむ、やはりこういう結果になりましたか」
背後からかけられた声に対し、既に彼は制服越しに銃口を向けて

いる。しかし、かけられた声は、澱みのない英語であり、慣れ親しんだ声に非常によく似ていた。それでも、相手への警戒心を解かない為、あえて振り向こうとはしない。

「だから言ったじゃないか。こいつに、こういった手は意味がないって」

その瞬間、彼の体は宙を待っていた。ガードが間に合ったのは、殆ど勘の域に近い。後方へと意識を集中させた瞬間、前方からの攻撃。しかも、相手を無力化し、警戒心が薄くなり始めている瞬間を狙った襲撃。

―面倒だな、本当に―

彼の着地と共に、左右の両方向から仕掛けられる攻撃。それは、挟撃を警戒し、絶妙のタイミングで、ズレを作り出している。まさに、二人で戦うことに慣れているといっていい。

「雑なコンビネーションだ」

それでも、ユヅルはあわてることなく、片方ずつ、相手の攻撃を捌いて、脱出。それとほぼ同時に、取り出した数本の刀を相手に対して投擲。それで、相手がひるんだことを確認した瞬間、彼が過去呼ばれていた、『攻城弩（バリスタ）』の名を意味する攻撃が飛来する。彼が両手で掴んだ刀の数は全部で八本。しかし、それを彼が投擲した瞬間、その次の八本が彼の両手には握られ、それが投擲。その繰り返しにして、威力は繰り返されるたびに飛躍的に上がっていく。故に、ウインドは彼をこう名づけた、バリスタ、っと。たった一人で城を攻め落とす、遠距離攻撃のスペシャリストであり、その射程圏からは誰一人として逃さない。

数秒後には、無数の刀が彼の周囲に突き刺さっている。

「流石に、戦闘能力だけは伊達ではありませんね」

「しかし、周囲への警戒心が足りない。攻撃に集中力を割きすぎた結果だ」

そんな彼の着地とほぼ同時に、背後から突きつけられる刃。これでは、回避のしようがない。

「攻撃は最大の防御、しかし、最大の隙を生む。そう教えたはずなんだが」
「けれども、並外れた殲滅力は褒めるべきですよ」
絶対の勝利を確信しているが故の二人の会話。しかし、その瞬間、ユヅルの姿が消える。
「それは、分身（アバター）だ。入れ替わりのタイミングぐらい見抜くべきだと思うぜ、俺は」
そんな二人の背後、タバコの煙を吐き出し、地面に落としてしまったカバンのほこりを払っているユヅルがいた。
「そんで、あんたらはいったい何しに来たんだ？　『第六階梯（マザー）』、テレジアにシムカ」
敵意を完全に収め、二人が振り返るのを悠然と待つユヅル。そんな彼に対して、一切埃を纏っていない尼僧服の女性、柔和な笑顔を浮かべた女性、テレジアは、
「聞いていませんか？　ヘキルから、学園祭の招待チケットをいただいたことを」
不可解なことを口にし、
「愛弟子がどれほど成長したのか、見に着てやったわけだよ、はるばると」
筋骨隆々な女性、シムカは豪快な笑顔を浮かべる。
「初耳だ。それで、あんたらの目から見て、俺は？」
タバコを地面へと捨て、必要とあれば、続けての戦闘に移れるように。
「私としては、もう少し能力の底を見てみたいと思いますが。これ以上は、完全な殺し合いとなってしまうと判断します。あなたは？」
「ふんっ、私としては、白兵戦闘は及第点。ただ、殺すつもりのない戦闘をこれ以上行ったところで無駄でしかないだろうよ」
それぞれの意見を耳に、彼はため息をつく。
『第六階梯』。
それは、執行官を指導する立場であり、その能力、戦闘技術を育

成する教官に与えられる階梯。故に、途中参入、スカウトされてきたもの以外は、例外なく彼女たち二人の教育を受けていることになる。そして、その例外には、彼は含まれていない。

「なら、殺すつもりでやればいいのか？」

試すのではなく、彼は正直に、カバンを地面へと落とし、再び刀を手に取る。しかし、そんな彼に歩み寄り、テレジアは、

「ダメですよ、ユヅル。あなたは、必要以上に自分の心を傷つけすぎる。それも、無意識のうちに。やりたくないのなら、やりたくないと。はっきり、口に出していいのです。あなたは、まだ子どもなのですから」

自分に向けられる殺意と共に彼の体を抱きしめる。

「そうそう、お前はまだ、自分の心を治す術を知らないんだから、大人に甘えていいんだよ」

後ろから、二人を抱きしめるシムカ。

そんな二人に対して、

「口うるさい母親を二人も持って、俺は、必要以上な不幸ものだよ」

照れくさそうに悪態をつくのであった。

準備の日々４（後書き）

母親というものは、とても強いのです。
力ではなく、心が、器が

過去と今1（前書き）

複線回収

過去と今1

タバコの煙を吐き出しながら、ユヅルは一人屋上の柵に背中を預け、空を見上げていた。

本日は学園祭初日。

先日、いきなり来日した二人の母親に成績表を見せ、本日のことを告げて登校した彼は、生徒会の仕事で見回りの最中のはず。しかし、結果としてここで彼はサボタージュを決め込んでいる。

「やっぱりここにいましたね、先輩」

そんな彼の居場所にいち早く気づいたのだろう、レベッカは腰に手を当て、若干苛立ち混じりに、彼に声をかけてくる。

「ああ、お前か」

苛立ちをぶつけられた本人であるユヅルは、柳に腕押し状態。

「ああ、お前か。っじゃありませんよ、先輩」

「そうですよ、ハイドマン君」

苛立つ彼女の後ろから屋上に現れたのは、呆れているヘキル。そんな彼女に気づいたユヅルは、

「お前ら、『第六階梯（マザー）』が二人して、今日本に来ていることを正しく、認識しているか？」

視線を合わせることなく、つぶやくように口にする。しかし、その瞬間、レベッカとヘキルの顔色は怒りの赤から、恐怖の青へとすぐさま変化。

「嘘ですよね、先輩？」

「それは、本当ですか、ハイドマン君？」

信じたくないのだろう。二人の声は、知らず知らずのうちに震えている。

「事実だ。一昨日、学校の帰りに襲われて、昨日、渡された成績表持って会ってきた。明日あたり、顔出すんじゃないか？」

テレジアとシムカの二人は、ホテルに泊まり、ユヅルの住んでい

る神宮寺家に一度挨拶しに現れ、再びホテルに戻っていった。
「第一、チケット送ったはずのお前が何で青ざめる、情報屋」
「いえ、ですが、去年も送ったのに来なかったので。今年もてっきり来ないものだと」
送った張本人であるヘキル自身、来るものだと思っていなかったらしい。
「ううっ、あの地獄の日々から開放されたと思った矢先に」
レベッカはその場で膝を着き、震えてしまっている。
テレジアとシムカ。
前者が異能の育成、後者が白兵戦の能力底上げ。完全に育成を二分化した彼女たちに逆らえるものは、局長以外に存在しない。彼女たちとかかわりを持っていない、スカウトされて入ってきた執行官ですら、敬意を持って接する。その育成方針は苛烈にして、生かさず殺さず。文字通り、地獄の教官。
「まぁ、お前らも覚悟だけはしといたほうがいいんじゃないか？」
そんな言葉を口にして、彼は屋上を後にした。

―子どもだったから、大人じゃなかったから。俺は守ることも、抗うこともできなかった―
人気のない校舎裏へと移動し、ユヅルは自分の胸に左手を当てる。その場所にあるのは、消せるのに、決して消せない傷。傷跡自体は、治療が上手くいったので、その痕跡すら残っていない。しかし、先日の言葉が、再び彼に痛みを思い出させる。
目の前に映るのは幼かった自分。
誰にも負けることはない、そんな小さなプライドを持っていた自分。
しかし、結果は違い、彼自身、生涯で初めての敗北を味わうことになった。それも、完膚なきまでに、いい訳ができないほどの。
「本当に、なんで、今になって思い出す」
瞳を閉じ、タバコのフィルターを、悔しさで噛み千切る。残るの

は後悔と、失意の苦い味。絶対に負けられない戦いで敗北したという事実。

「へぇ、こんな場所があるんだね、ユヅル？」

そんな彼に声をかけてきた人物。しかし、彼はその人物の姿を見て言葉をなくす。

そう、それはここにいてはいけないはずの人物。

自分と同じ、天禅寺高校の制服に身を包んだ一人の女性。その女性は、頬に一目でわかる蛇の刺青を入れ、黒髪を風に弄ばれている。

「ひさしぶりで、僕の顔なんて忘れてしまったのかな？」

だが、女性は、驚愕を必死に飲み込んでいるユヅルとは対照的に、とても楽しげな笑みを浮かべながら、一歩ずつゆっくりと近づいてくる。

「なんで、お前がここにいる」

「うん、いちゃいけない？　ああ、一般開放は明日からだから、流石にまずいのかな？」

「そんなことを言ってるんじゃない」

声を荒立て、口に残ったフィルターを吐き出しながら、

「茶化さないで答えろ」

怒気を押さえ込んだ冷たい声色で問いかける。

「そうだね、そろそろ美味しくなってきた頃だと思って、食べに着たんだよ。本当は、もう少し熟成を待つつもりだったんだけどね」

女性は、にこやかに答える。その笑みに邪気はなく、ただ、瞳だけが奈落を体現したように淀み、一切の光を拒絶している。

「ここではじめてもいいんだけど。流石に僕も、そこまで君ほど人でなしにはなれないから、今夜、一時にこの場所で待っていてくれると嬉しいな」

「来なかった場合は？」

「わかってるくせに、質問するのは悪い癖だよ。当然、明日のこの時刻、この場所ではじめるだけのことだよ」

女性は、いよいよ楽しげに声を上げて笑い出す。しかし、それは、

完全に壊れてしまった人間が成す、壊れた音楽に等しい。
「随分優しい目をするようになったよね。大切な人でもできたのかな？　でも、忘れちゃいけないよ、僕らは決して購うことのできない罪を背負った重罪人で、幸せになる権利なんて、生まれながらにして持っていないんだからさ」
呪詛に似た言葉を残し、女性はその場から去っていく。
「今夜一時、か」
新たなタバコに火をつけ、ユヅルは今まで、否、日本に来る前の自分が浮かべていた、狂気に似た笑みを浮かべ、
「いいぜ、殺しあおう、壬生クレハ。俺たちは、所詮、獣でしかないんだからな」
日常を切り捨てた怪物へと再び戻っていく。

過去と今1（後書き）

一人ほどヒロインが登場していない

過去と今2（前書き）

過去と向き合う

過去と今2

月さえ雲に隠れ、一切の光が遮断され、街灯の明かりすら、蛍の光に満たない。

そんな時刻、午前一時。

指定された時刻に少し遅れ、ユヅルはその場所へとやってきた。

「まったく、女性を待たせるなんて、どういった教育を受けてきたんだよ、君は」

「お前と同じ教育だよ、クレハ」

問いかける声、答える声。共に、人としての感情が欠落した無機質なもの。声を発した二人の表情は、片方は嬉々とし、もう片方は鬱屈。

「ふふっ、僕としては着てくれないほうが楽しめたんだけどなぁ」

「テメェの趣味に付き合うつもりはねぇよ」

「そうかい？　あの時はあんなに楽しそうに、人間というラベルを貼られた肉の塊を、動けないようにして、拷問して、糾弾して、命乞いをさせてから殺していったのに」

「ああ、そうだな」

嬉々として話すクレハに対して、ユヅルの回答はあまりにもそっけない。

「ああ、ひょっとして、まだあのことを根に持っているのかな？」

「お前、五月蝿いよ」

「いいねぇ、そういう表情が見たいんだよ、僕は。人間という、くだらないラベルを剥がした、ユヅルという名の本質を」

それは一瞬の交錯。互いが互いに位置を入れ替えたとき、二人の左頬が少量の血液を流し、

「俺の本質だと、お前にわかるわけがないだろ」

「ああ、わからないから、知りたいから。僕はあの場所で、アンネ・リーベデルタを殺し、君に敗北を体験させて姿を消したんだ」

クレハは謳うように、両手を広げ、
「初めての敗北はどうだった？　初めて大切な人を失った感想は？　信じていた相棒に裏切られた気分は？　知りたいことだらけなんだ、教えてくれよ、ユヅル。その為に、君は今まで生かしておいて上げたんだからさ」
「本当に、お前は性格悪いよな、むかしっから」
二度目の接触。今度はクレハの髪が数本千切れ飛び、ユヅルの銜えていたタバコが地面へと落下する。
「ふふっ、いいねぇ。でも、もっとだよ。それじゃ足りない。理性を手に入れた獣は手ごわいが、その絶対的恐怖を忘れてしまう。そうだな、まずは、その理性を破壊することからはじめようか」
クレハが口にした瞬間、彼女の周囲に二本の十字架が突き刺さり、そこに磔にされている人物が、彼の瞳に映った瞬間、彼の心を射抜く。
「お前も世話になったはずだろ、二人には」
「うん、だいぶ世話になったよ。おかげで簡単に捕らえさせてもらった。ああ、まだ殺してはいないよ？　だって、君の目の前で殺さないと」
「本当に悪趣味だよ、お前」
十字架に磔にされているのは、テレジアとシムカの二人。
「って、それぐらいで、俺が怯むと？」
「そうだね、それぐらいで動揺されていたら、拍子抜けもいいところだよ。だからさ、追加のお品物も用意しました」
楽しみながら、彼女が指を鳴らすと、振ってきた十字架は五本。そしてそこには、ヘキル、カナミ、レベッカ、カズキ、ヒサノの五人が磔にされている。
「いやね、数日ほど君を観察していて、彼女たちが君の日常（たいせつなひと）に見えたから。コレ幸いと、ね」
悪魔めいた笑みを浮かべ、
「うん、だが、まだ足りないよね。そんなわけで、追加オプション

も用意してあるんだ。ほら、僕って親切だろ？」

彼女自身に力を完全に解放する。

「そうだねぇ、僕だけじゃなく、君も力を解放したら、彼女たちの命は、もって三百秒って所かな。ほら、はじめようよ。ここに、君が殺したがっている、元異端審問局所属の執行官見習いにして、君の昔の相棒。そして、執行官殺しの罪を犯した人間。加えて、君に対を成す、到達者（アデプト）。六百六十六の、完全なる調和の数字を得た人間、壬生クレハが目の前にいるんだからさぁ」

しかし、ユヅルはすぐに自分の力を解放しようとはしない。

柄にもなく、彼は迷ってしまっている。

―大切なのは己自身。それ以外は、守れるときに守れ―

そう教わったはずなのに。

「うん、そうだね。じゃぁ、ここで一つサプライズをしようか。ほら、一つ目」

彼女の声が彼の耳に届くまで、長い時間がかかった。それは、彼の目の前で、一人の女性、シムカの首がゆっくりと地面に落ちるよりも長い時間。そう、つい先ほどまで生きていて、本当なら、今日の学園祭に来るはずだったのに。それは二度と帰ってこない未来。

「どうかしたかい？　僕たちはこうして今まで奪ってきたんだ。奪われることだって想定してきているはずだろ？　それとも、生贄は一つじゃ足りないかな？」

そう言って、テレジアの心臓に剣が突き刺さり、次の瞬間、彼女の姿が見えなくなるほどの量の刃が、彼女の体を十字架に一体化させる。

「……」

それは、果たして言葉だったのだろうか。テレジアの唇が動いたようにも見え、それが一層、クレハの笑みを濃くする。

「彼女たちも災難だったよねぇ。僕たちみたいなのに、出会わなければ、死なずにすんだのに」

それは、死者を嘲笑する笑み。

「何か言ったらどうだい、ユヅル。それとも、この程度でショックを受けて、言葉が口から出ないなんて言わないよね？」

クレハは問いかけるが、その言葉は彼に届いていない。

―どこでいったい、俺は間違った？―

奪われたのは、母親のように慕っていた二人の命。奪った相手は笑い、二人の死を嘲っている。しかし、それは結果であって、原因ではない。原因は他ならぬユヅル自身。彼が、過去彼女に敗北し、一人の女性を守ることができなかったが故。そのせいで、今回は二人の命が奪われた。無論、これからその数は増えるかもしれない。

「はぁ、拍子抜けもいいところだなぁ」

そう口にして、次に誰の命を奪うか。いっそ、全員生贄として捧げてしまうかを悩んだクレハ。そんな彼女の耳に響いてきたのは、乾いた笑い声。発しているのは、ユヅル。そして、彼女は楽しげに彼へと視線を送る。

「どうかしたかい、ユヅル？」

彼はその問いかけに答えない。ただ、乾いた声が響くだけ。だが、それは彼女の想定の範囲をはるかに超えた、声。

『無限書庫（アーカイバ）への接続を開始
防御プログラムの発動を確認、排除
厳重封印の開放を承認、了承
深奥室への接続を開始
防御プログラムの起動を確認、排除
封殺封印の開放を承認、了承』

「封殺封印だと？」

そんな言葉、彼女は聴いたこともない。同じ、到達者であるにもかかわらず。

『全魂の閲覧及び召喚を開始

悪魔、天使、聖獣、邪龍、各六百六十六、
計二千六百六十四の魂の選別を開始　』

「いったい、何をしている」
そんな言葉は、今の彼にはきっと届かない

『領域固定開始
並びに封殺結界の座標固定承認
魂の選別を終了
開放対象の選択を承認　』

『開放　覇王セフィロト　』

過去と今2（後書き）

言葉は必要ない

過去と今3（前書き）

ＶＳユヅル戦開始

過去と今3

かつて、一人の男がいた。
その男は誰よりも強く、賢く、ただ、それゆえに人を遠ざけ常に孤独を愛した。
そして彼は遂に、星の意思に戦いを挑み、敗れた。
誰に知られることなく、誰に恥じることなく、彼は眠りに着いた。
されど、人は、後世に彼の名を語り継ぐ。
彼こそ、真の英雄、覇を唱えるに相応しいもの、セフィロトと。

「あれは、いったいなんだ」
クレハは自身の視界を疑い、言葉を吐き出す。視線の先にいるのは、先ほどまで、心を傷つけ、壊そうとしていた対象、ユヅル。
「まさか、開放してしまうとはね。これは、この国が地図から消えてしまってもおかしくないね」
そんなクレハに声を投げてきたのは、先ほどまで十字架に磔にされていたはずの人物、カズキ。気づけば彼女は他の人質もすべて解放し、その光景を見ていた。
「知っているのか、アレを？」
「君こそ、ユヅル様の古い知り合いの癖に、アレを知らないで生活していたなんて驚きだね」
「いいから、答えろ」
クレハの狼狽振りを楽しみながらカズキは、
「アレは、覇王セフィロト。星の意思と対を成す、最高峰の魂にして、彼が従えた最初の魂。君もわかるだろう？　アレは規格外だよ、天使や悪魔、聖獣に邪龍。この四種であっても、アレの前では赤子に等しい。おまけに、今の彼は、理性を捨てているね。それもおそらく自分の意思で。何が原因であったのか、容易に想像がつくけど。きみ、やりすぎだよ？」

ため息混じりに、タバコを口に運び、静かに火をつける。
視線の先のユヅル。彼は背中から光り輝く、金色の翼を十二枚生やし、その両手には、ドイツの任務で使った赤い刃の大刀が一振りずつ。呼吸はしているものの、その場所に停滞し、動く気配を見せていない。
「想定できる最悪のシナリオと結果。これじゃ、どっちが悪役か、わからないよ、バリスタ」
あえて、カズキは彼を昔の名前で呼ぶ。
すると、それに応えるように響くのは獣の咆哮。
気の弱いもの、肉体の弱いものであれば、コレだけで命を奪われてもおかしくはない。それほどまでに強大な憎悪が込められ、殺意が膨れ上がっている。
「さて、君はどうするつもりだい？　おそらくだろうけど、君の目的どおり、彼は完全に自分を壊して、力を解放している。それと戦うの君の目的だったんだろう。僕は止めないよ、自殺だと思うし、結果も予想と同じだろうから」
そこで彼女はタバコの煙を吐き出し、腕組をして、
「ただ、勘違いしてはいけない。彼の憎悪の対象は既に君から、彼自身に向いている。本当に、不器用な生き方だよ。誰かを責めて、心の重荷を軽くするか、共に歩むものに重荷を分け与えることもせず、ただ、自分で背負い続けるんだから」
嘲るのでも、侮辱するのでもなく、ただ悲しげに言葉をつむぐ。
「さて、アレの相手は君に任せるよ。僕は僕でやらなければならないことができてしまったからね」
その言葉と共に、怒り狂った、憎悪の海に堕ちた覇王が動き出す。
それは、一歩踏み出しただけの行為。それなのに、クレハの体にかかる重圧は、今まで彼女が感じたものの中でも、最上級。
「そうだよ、僕はコレを望んでいたんだ」
自身を奮い立たせる為ではなく、己の心からの登り来る欲望に従順に彼女は、自身の手に握る白き刃をユヅルへと向けて、疾走する。

そして繰り出す攻撃。
その一撃はすべて致命傷を狙い、受ければ死ぬ。そんな攻撃。そして、その攻撃は豪雨のようにユヅルへと向かう。しかし、対する彼はその攻撃をものともせずにむかってくる。肉が裂け、血を流しながらも、ギリギリのところで致命傷だけを避ける。そして、なぜか彼は攻撃をしかけようとはしていない。ただ、肉薄し、攻撃を避け、動き続けているだけ。一方的な攻撃と、一方的な回避行動。
「なぜ、仕掛けてこない？」
疑問を口にしてしまうクレハ。それこそが引き金。その一言を皮切りに、ユヅルの姿をしたものは、手にした赤い刃を一振り。それだけで、彼の左側にあった建物、生き物、その全てが消滅していく。その一撃に何が込められているのか、この場で理解ができるものが何人いるだろう。
「まさか、魂喰らい（ソウルイーター）だとでも」
魂喰らい。
その特性を、ユヅルの持つ赤い刃は宿している。それは、斬りつけたものの魂を意味どおり喰らい、自分の力と成す力。それ故、先ほどクレハが彼に与えた傷は完全に癒え、彼には傷跡一つ残っていない。
「普段、抑制していたからね。解き放たれたときの反動は、コレぐらいでないと。とはいえ、彼女でもどれぐらい持つかな」
タバコの煙を吐き出し、カズキは傍観者に徹する。もとより、到達者（デプト）の力は星装具（アストラル）から来るもの。そして、星装具は星の意思の力を四つに分けたもの。そのうちの一つを持ち、星の意思と同列の力を持つ覇王の魂。この二つを持つ、ユヅルにクレハが勝てる可能性はゼロに等しい。それに加えて、魂喰らいの能力。戦力差は、奇跡が起こったとしても、覆せるものではない。
「君は、望んで闇に堕ちたのだろう。それぐらい、僕にもわかるよ。でも、君はもうバリスタじゃない。ユヅル・ハイドマン。そう、僕に誇ることができる名前があると口にしたはずだ」

そこで彼女は一度言葉を区切り、

「君は、自分の弱さを知っている。そして、自分がどれほど罪深いかも。これからどれほどの罪を重ねるかも。だからこそ、君には知って欲しい。君が罪を重ねた分だけ、救われたものがいることを。君が傷ついた分だけ、守られた笑顔があることを。君が、心で涙を流したぶんだけ、君が愛されていることを」

二度と使わないと決めていた力を解放する。

「星装具のひとつ、真蒼絶望（ブルー・ディスペア）の担い手、雨竜カズキが願う。絶望は、打ちひしがれるものではなく、打破すべきものであることを。僕は、君を守るよ、救うよ、求めるよ、愛するよ、ユヅル様。だから、こんな結末なんて認めない」

過去と今3（後書き）

主人公、チート過ぎ

過去と今４（前書き）

チートタイム終了

過去と今4

その攻防は、正に一方的。カズキが予想していたとおりの結果。ユヅルが攻め、クレハが防ぎ、回避する。その攻防に交代はなく、また、行き着く先も決まっている。彼の攻撃に対して、どうにか反応しているクレハだが、彼女自身、自身の不利を悟っている。彼は、周囲を巻き込みながら戦い、そして、周囲を傷つけた分だけ己の力を増し、傷を癒していく。対して、彼女にそんな力はなく、防戦一方。逃走することは、おそらく可能だろうが、それは彼女のプライドが許さない。

「気に食わない、あんたはやっぱり最高に気に食わない」

過去、確かに彼女はユヅルに勝利している。しかし、それは単純な実力勝負ではなく、彼の弱さを突いた戦略によるもの。実力や能力、彼女自身、彼に及ばないことも、負けていることも理解している。それでも、納得できるかといわれればそうではない。そのことが許せず、敢えて彼の大切なものを奪い、動揺させ、敗北させた。自分が感じた無力さを、虚脱感を味あわせる為に。それなのに、彼は自分を殺す刃を握らなかった。コレほどまでの屈辱は彼女に存在しない。だからこそ、

「僕は、君だけには負けない。負けられないんだよ、ユヅル」

彼女は刃を手に立ち向かう。それが勝てない相手であっても、彼女は自分のスタイルを変えない。

「くだらねぇよ、クレハ」

それは、完全に彼女の虚を突いた。故に、彼女は防ぐことができずに、自分の刃を完全に砕かれてしまう。

「そんな、理性を完全に捨ててていたはずじゃ」

「ああ、捨ててたよ。ついさっきまでな」

対してユヅルは、タバコに火をつけ、赤い刃を二振りとも鞘へと戻し、完全に敵意を消失させている。それと共に、彼の背の翼は消

え、星装具である赤い刃は崩れ落ち、その姿を消し、彼女の白い刃が再生される。
「ったく、めんどくさいまねしてくれて、ありがとうよ」
その声を受け、カズキは笑みを浮かべ、
「お礼はもっと、きちんと誠意を込めて口にするべきだと思うよ、僕は」
二人の前へと再び姿を現す。
「はぁ、赤の担い手と、黄の担い手がこの場にいればもっと簡単に事態は収束できたと思うんだが、これから面倒だぞ、カズキ」
「そうだね、君が赤から解放されてしまったからね」
その二人の会話をまったく理解できず、クレハは会話の内容についていけない。
「どういうことだ、コレは」
それと同時に、彼女が今まで感じていた力をまったく感じない。
そして、彼女の体に刻まれていた魔天数字が消失してしまっている。
「まったく、いくら蒼の担い手だからって、下手したら、お前が消滅してたぞ」
「まぁ、勝算はあったからね」
お互いにタバコの煙を燻らせながら、苦笑いを浮かべるユヅルとカズキ。
「どういうことだ、コレは」
再び、彼女は同じ言葉を口にし、
「僕が、星装具（アストラル）の力を使って事実を改変したんだよ。君たち二人の記憶に介入して」
「そのおかげで、俺もお前も、こいつも、星装具に溜め込まれていた六百六十六の魂を開放。殆どゼロからやり直しってことだ」
驚愕の事実を知らされる。それもそのはず、到達者（アデプト）としての力を失い、今までの罪もないがしろにされ、消されてしまったのだから。
「さて、コレでお互い互角。お前が殺した人間も死んだという事実を改変されて、死んでいない。憎しみもない。それでも、俺とやり

あいたいっていうんなら、受けてやるよ」
彼女が過去殺した人間、アンネ・リーベデルタも、テレジアもシムカも生き返っている。それこそが、カズキの所持していた星装具のみが一度限り使える、究極の奇跡。ただ、それ故にユヅルは自分の持っていた星装具を失い、彼女たち到達者は、今まで従えた魂を開放して、力がゼロの状態に戻ってしまっている。
「どうやら、俺は一人で背負いすぎてたみたいで、背負ってやるって奴の存在に気づいてやれてなかった。まぁ、人間なんてみんなそんなもんだろ」
それなのに、力を殆ど失った彼はあっさりとしている。
「覇王の魂もなく、星装具もない。そんな状態で、僕に勝てるとでも？」
対する彼女は、星装具が健在。
「勝てるに決まってる」
そして、戦いは再開される。
クレハの持つ白い刃は、輝きを増しユヅルへと傷を刻みこんでいく。対して、彼は回避行動だけを取り、笑みを崩さない。絶対的な不利であり、現状を打破する術も限りなくゼロに近いというのに、彼には絶望した様子は微塵もない。
「何がおかしい」
「おかしい？　違うよ、嬉しいんだよ」
挑発とも取れる言葉を彼は口にし、
「考えてみろよ、王様気取りだった俺らが、平民からスタート。これから、何回上に昇っていけるんだ？」
そして、
「俺の感じていた世界がどんだけちっぽけだったか、教えてもらえたんだ。これほど、楽しめることが他にあるか？」
好奇心を、向上心を、昂りを抑えられない少年相応の笑みを浮かべている。
「馬鹿にするなっ」

それに激昂したクレハは、必殺の一撃を放つ為、敢えて間合いを取り、
「星装具、真白新生（ホワイト・ユニバース）の担い手、壬生クレハの名を持って命ずる。敵を討ち滅ぼし、我に勝利をもたらせ」
白銀の輝きを伴った刃を振り下ろす。
「それがお前の全力か。なら、まずはそいつを超えることから創めることにしよう」
必殺の一撃が迫る中、タバコをその場で放り投げ、
「乗り越えるべきは常に己。なら、奮い立つときは今。故に目覚めろ。俺は俺でしかなく、他の誰でもない」
紡ぐ言葉は歌うように、自分の意思を確認するように、
「今こそ輝くとき。永遠よりも刹那を、憎悪よりも愛を、狂気よりも歓喜を、そして、悲しみよりも大切な何かを、俺は掴み取る」
その場で右手を天へと掲げ、
「さぁ、共に創めよう。ここが俺とお前の出発地点だ」
金色の光を掴み取り、白銀の輝きを粉砕する。
彼の右手に握られているのは、金色に光り輝く刃を持った大刀。
「俺は、英雄になんてなれない。そして、完全なる罪人にも。俺は俺だ、ユヅル・ハイドマンだ。今日、やり直せたんだ。だから、ここで俺は誓う。俺は、己の大切なものを二度と失わない。取りこぼさない。その為に、歌え、舞え、勝利の凱歌を共に謳う為に」
構えを始めて見せるユヅル。それに対して迎え撃つクレハ。そこには、憎しみも怒りもなく、ただ闘争があるだけ。
「行くぞ、獅子凱歌（レオルヴィート）」
その一撃が勝敗を決め、敗者は倒れ、勝者は去ることなく背中をみせ、
「クレハ、お前も、やり直し方を見つけて、もう一度俺に会いに来い」
優しげな言葉をかつての相棒に捧げるのだった。

過去と今４（後書き）

過去の清算ができれば、どれほどの人間が救われることか

Happy Birth Day!（前書き）

学園祭は続きます

Happy Birth Day!

「ありがとうございましたぁ」
感謝の声と共にぬいぐるみを手渡すヒサノ。そんな彼女を見つめながら、ユヅルは黙々とぬいぐるみの追加を作成していた。
学園祭二日目。
一般参加のある今日、手芸部では作成したぬいぐるみの販売をしており、ユヅルが作ったぬいぐるみは飛ぶように売れている。もっとも、あんなことが昨日あったので、気を紛らわせるために忙しいというのが、彼には非常に助かっている。
「ゆ～君、お疲れ様」
そんな彼が意識を彼女からはなしてすぐ、ヒサノはユヅルに缶コーヒーのプレゼントを贈る。
「まぁ、とりあえず明日の分がもうすぐ終わる」
「それはほんとうにご苦労様です」
自身も彼の横に座り、ジュースを口にするヒサノ。本来であれば、この時間、ユヅルはヒサノと一緒に学園祭を回っているはずなのだが、手芸部が予想以上に忙しくなり、彼が作ったぬいぐるみが底を突くという事態が発生。その為、二人して手芸部に戻ってくることになってしまったのだ。
「打ち上げは豪華そうだな」
「そうだねぇ」
二人して、売り上げを抱えて声たからかに笑っている岬を見て、若干ひいている。
「それにしても、何もお前まで戻ってくる必要はなかったんじゃないか？」
「一人で回って何が楽しいんですか？」
疑問を投げかけるものの、ヒサノに質問を質問で返され、ユヅルは閉口。彼女にしてみれば、学園祭を楽しむというよりは、彼と一

緒に学園祭に参加するという目的のほうが大きい。そして、それがかなわないのなら、せめて一緒にいたいと思う乙女心。もっとも、人付き合いの希薄なユヅルはそんな心の機微に気づくことはない。
「そういえば、ダンスパーティーって何やるんだ？」
「えっ？」
ぬいぐるみを完成させ、缶コーヒーを開けたユヅルの質問に対し、ヒサノは一瞬固まってしまう。
「いや、あっちにいたとき、何回か参加したことはあるけど、主だった目的は踊ることじゃなかったし、正直、なんでそんなことをするのかわからん」
「う～ん、そうですね、みんなで達成感を味わう為に、踊る。そんな感じだと思います」
「そういうもんか？」
「そういうものです。楽しければ、楽しんだ者勝ちなんですよ、お祭りは」
膝にひじを立て、そこにあごを乗せながら、ユヅルは少し悩んで視線を移動させ、
「じゃあ、あれっていったい誰が着るんだ？」
そこにあるのは、彼が準備期間に作成し、完成させたチャイナドレス。今はマネキンに着せられ展示されているが、彼は、それがダンスパーティーで誰かが着るものだと思っていた。
「それは、ちょっと、まだ言えません」
苦笑いをしながら答えをはぐらかすヒサノ。そんな彼女に対し、立ち上がったユヅルは、
「まぁ、いっか。それで、楽しむんだろ？」
彼女に対して右手を差し出す。
「はいっ」
そんな彼の手を握り返し、ヒサノは満面の笑みを浮かべる。
「本来、エスコートって奴は、男性側がやるはずなんだが。お祭りって奴が俺は始めてだ。悪いが頼めるか？」

「勿論です。今日一日で、ゆ～君をお祭り好きにしちゃいます」
「お手柔らかに」
彼の右腕に抱きつく様に体を密着され、二人は手芸部を後にした。

「それじゃ、まずはコレです」
そう口にして、ヒサノが手渡してきたのは小さなわっかが五本。
俗に言う輪投げなのだが、ユヅルはそんなことを知らない。
「これは、輪投げといって、このわっかをあっちにある商品に潜らせたら、商品がもらえるゲームです」
「ほうほう」
「ちなみに参加賞というものはありません」
「世の中、どこもかしこもせち辛いな」
そんなことを口にしながら、ユヅルは商品へと目を向ける。ただ、そこは私立校。駄菓子などではなく、ゲーム機やブランド品が並んでいる。ただ、それに伴い、ゲームの難易度も高いのだが。
「なんか、欲しいのあるか？」
「取ってくれるんですか？」
「まぁ、取れるかどうかは保障しないけどな」
しかし、その言葉を聴いた瞬間、ヒサノの視点は一点に集中している。その先にあるのは、ブランド物のペアリング。誰が見ても、彼女が欲しいものは明白である。
「五回中、一回ぐらいなら、何とかなるだろ」
そう言って、彼は右手の指でわっかを回転させて、あっという間に五本のわっかを投げきってしまう。そして、人付き合いは不器用なくせに、その他のことに関しては超がつくほど器用なユヅル。その全てが商品を手に入れている。その中には、当然、先ほどヒサノが欲しがっていたペアリングもあり、係りの生徒の顔は若干青ざめている。
「ほれ、欲しかったんだろ？」
商品を受け取り、ペアリングをヒサノへと手渡すが、彼女はなか

なか受け取ろうとはしない。
「あのですね、ゆ～君、片方は、ゆ～君がつけてくれませんか？」
「別にいいけど？」
そう口にして、男性用を右手の中指にはめるユヅル。しかし、それでもヒサノはまだ指輪をつけようとしない。
「もう一個お願いです。指輪、つけてくれませんか？」
それは、精一杯の勇気を振り絞った彼女の行動。当の本人は理解していないだろうが、ユヅルは指輪を彼女の右手の薬指にはめてあげる。そして、当然、その行為にどういう意味があるのか、彼は理解していない。
「それじゃ、次に行くとするか？」
「はいっ」
そうして、ヒサノにとって大切な思い出が一つ刻まれたのであった。

Happy Birth Day!（後書き）

鈍感、極めし者、その名はユヅル

Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈ　Ｄａｙ２（前書き）

風邪には作者も勝てませんでした

Happy Birth Day2

「とりあえず、もう一度確認させてくれ。今から、どこに向かうのかを」
「しつこいね、ユヅル様。料理部の屋台だよ。君もいい加減、覚悟を決めなよ」
文化祭のパートナーが、ヒサノからカズキへと交代し、行き先を決めたはいいものの、行き先を聞いてユヅルは行動を渋っている。
「なんで、そんな場所に。お前は自殺志願者だったのか、止めておけ。俺が言うのもなんだが、未来にはきっと、希望って言う素晴らしい存在がいるはずだ」
「どうして君がそこまで嫌がるのか、僕には理解できないけど。まぁ、そこまで君が嫌がるということは、何かしらトラウマでも刷り込まれたんだろうね、きっと」
仕方なく屋上でタバコを吸い始めた二人は、校庭の屋台で何かしら揉め事が起きていることに気づいた。だが、当然のごとく二人は動こうとしない。
「お祭り騒ぎに馬鹿はつき物。日本もそうなんだな」
「フーリガンと一緒にしたら失礼だよ、きっと」
そんなことを口にして、傍観者を決め込んだ二人だったが、次の瞬間、タバコを床へと放り投げ、その場所へと駆け出していた。そう、そこに、本来いるはずの人物がいたから。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆

場所は校庭の屋台密集地帯。
一人の女性が、飲み物を歩いていた男にかけてしまったことから、争いごとに発展。まぁ、よくあるパターンなのだが、場所が悪かった。男が苛立ち混じりに殴りつけた屋台の柱。それは屋台の重さを

支える為に重要な役割があり、それが折れてしまった。そして、密集しているが故に、一つ倒れそうになれば、又一つ、ドミノのように崩れていこうとしてしまう。

そんな状態で、女性が動けるはずもなく、生徒たちの避難も、入場客の避難もままならない中、遂に屋台が一つ倒壊し、女性へと向かって倒れてくる。無論、女性に難癖をつけてきた男はとっくにその場を退散していて、女性に、逃げる術はない。だが、

「おまえ、俺の頼んだコーヒーはまだかよ」

つまらなそうに吐き捨てた言葉。

銀色の短い髪に、特徴的な赤と蒼のオッドアイ。左手の甲から、左の瞳にまで到達する刺青を入れた青年が、タバコの煙を燻らせながら、右手の一本だけで、倒れてきている屋台を支えていた。

「あの、その」

「ああ、考えがまとまってないのに話そうとするな。あと、この状況はあまりに面倒だから、とっとと避難しろ。屋台に残ってるガキ共もだ」

女性に対して一言説教した後、青年は生徒たちが避難を終了するまで屋台を支え続け、避難が完了したことを確認して、右手を離した。

「ったく、お前が妹の晴れ舞台を見に行きたいって言うから。わざわざ付いてきてやってみれば、早速いつものようにトラブルに巻き込まれやがって。いい年した女が、少しは反省って行動を覚えろ。サルでも真似事できるぞ」

タバコの煙を吐き出し、青年はベンチに座らせた女性に対して、マシンガンのように悪態をつき始め、その言葉を聴いている女性は涙目になってきている。

「ううっ、すみません」

両手でスカートを握り締めながら、女性はやっとのことで言葉を搾り出す。そんな中、

「姉さん、来るなら来るで、きちんと連絡をくださいよ」

ヘキルが騒ぎの収集をつけ終えて合流してきた。
「こいつがお前の妹？」
「はい、私の自慢の妹、ヘキルちゃんです」
「姉さん、僕はもう高校生、いい加減ちゃん付けはよしてくれ」
二人が談笑し始め、それに対して一言も口を挟むことなく、青年は黙ってみていたが、
「もう、俺、帰っていいか？」
「だめですよ、シロウさん」
女性に釘を刺され、シロウと呼ばれた青年は苦笑い。
「姉さん、こちらの方は？」
「こっちの人？」
「こいつに他人の紹介を求めるな。妹なら、わかるだろ？」
「ええ、まぁ」
「俺は、魅神楽シロウ。こいつの仕事の同僚で、本日は付き添い、以上だ」
名乗った青年に対して、ヘキルが苦笑いで応えたそのとき、屋上から急いで走ってきた二人が合流し、二人は息を切らしながら、自分の視線の先にいる人物が、本物であるかどうか、確認する。
「バイ・・・ソン？」
「その名前を知ってるってことは、俺が傭兵やってたときのガキ共だな。確か、バリカンと、レイズ」
「「バリスタとレイン」」
「ああ、そんな感じだった」
そう、二人の目の前にいる青年、魅神楽シロウこそ、二人の窮地を何度も救い、技術や知識を教えてくれた兄貴分、バイソン。
「久しぶりだな、ガキ共」
そして彼は、年月を感じさせない笑みを浮かべ、二人の頭を撫でるのだった。

Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈ　Ｄａｙ２（後書き）

最後のキーパーソン登場

Happy Birth Day3（前書き）

驚きの連続

Happy Birth Day3

「積もる話なんて俺にはないんだが、お前らはあったりするのか？」
品川姉妹が気を使い、三人だけにしてくれたというのに、開口一番、シロウはつまらなそうにそう口にした。
「確かにあるといえば嘘になるけど」
「面と向かっていわれると、少し悲しい気分になるね」
ユヅルとカズキの二人は、思い返しながら、ため息をつく。
「そういえば、シロウ、そんな目の色してたっけ？」
ユヅルの記憶の中にある彼の瞳の色は緑。だが、今の彼の瞳は赤と蒼のオッドアイ。瞳の色が年月で変化するなど、聞いたことがない。
「ああ、こいつは、可哀想なガキ共にくれてやった。それぞれ色が違うのは、くれてやった奴らが違うからだ」
あっさりととんでもないことを口にするシロウ。それを聞いて二人はさらにため息をついてしまう。
彼は昔からそうだった。
共にすごしたのは、一年という短い期間でしかなかったが、とんでもないお人よしで、誰彼かまわず救おうとしてしまう。そこにリスクがあろうと、ためらうこともせず。
「それで、お前ら、本当に何もないのか？」
シロウはタバコの煙を吐き出しながら、何気なく聞いてくるが、二人はそれに答えようとしない。
「たとえば、星装具（アストラル）のことだったり。星座神具（エクストラ）のことだったり。聞かれたことに関しては、きちんと答えてやるよ」
その言葉は、二人の動揺を誘うには十分すぎるもの。
「やっぱりな、お前ら、又トラブルに巻き込まれてんじゃねぇか」
タバコを床へと落とし、ため息交じりにシロウは、はき捨てると、二人の額にでこピンをお見舞いしてくる。

「ガキが、大人ぶって悩んでんじゃねぇよ。テメェらの特権は、甘えることと、我侭を言えるってことだ。巻き込んだっていいんだよ、ガキの面倒を一緒に片付けてやんのが、大人の特権だ」

二人はこの言葉に反論することができない。

自分たちが子ども扱いされているという事実もあるが、純粋に心配してくれる好意に対して、あまりにも不慣れだから。

「まぁ、ガキって言っても、おまえらは一人の人間だから、プライバシーってやつがあるし。話したくなったら、話してくれりゃいいや」

コートのポケットから二枚の紙切れを取り出し、二人に握らせると、

「そこに俺の連絡先がかいてある。なんかあったら、連絡よこせ。まぁ、俺にも俺の日常があるから、いつでもどこでもってわけには行かないが、できる限り協力してやるよ」

「ありがとう、兄さん」

「なんか、悪いな、兄貴」

「最初っから、そうやって素直になればいいんだよ」

そう口にして、彼は新しいタバコに火をつけた。

「それにしても、俺は、俺よりも器用な人を始めてみた」

「そうだね、流石に器用すぎるよね、兄さんは」

シロウと別れた二人は、彼の置き土産、もとい、誕生日プレゼントとして受け取った、二人が少年兵だったときのドックタグを加工しなおして作られたピアスをつけながら、生徒会室へとむかっていた。

「へぇ、あの二人にそんな過去があるなんてね、初めて知ったよ」

「そりゃそうだ。誰かに話した覚え、俺にはないからな」

生徒会室から聞きなれた声がして、ユヅルは鍵を完全にぶち壊して室内へと侵入する。

「人がいない間に、暴露話か、あぁ？」

シロウの襟を掴んで、怒鳴りつけ、
「別に聞かれて困ることじゃないだろ。今のお前は、アレグリオの養子ってことになってるし」
対して怒鳴られた側は非常に落ち着き、
「ちょっと待ってほしい。その話、僕もユヅル様も兄さんに話してないはずだよね？」
カズキ一人が会話のおかしい箇所に気づいた。
そう、二人は自分が名前をもらい、今の生活がどんなものなのか、大まかな説明だけはしておいた。だが、その会話の中に、ユヅルの親について触れたことは一度もなかったはず。
「何で知ってる？」
「アレグリオ本人に確認取ったからな」
当然のように口にするシロウ。だが、それでこの場にいる人間は誰一人として納得していない。
「ねぇ、シロウさん。きちんと説明してあげたら？」
「説明べたのお前がそれを言うか？」
ヘキルの姉、アイリに言われ、窓辺に背中を預けたシロウは、
「俺は、元異端殲滅執行官、いや、異端審問局設立者だ。だから、アレグリオやお前らはものすごく年月の離れた後輩ってことになる」
驚くべきことを口にし、
「加えて言うなら、お前らの持ってる星装具や星座神具も俺が作ったものだ。後、何か言ってないことってあったかな？」
「兄貴、あんたいったい何者なんだよ」
そう、今まで口にしたことのない言葉をユヅルは口にする。彼の正体が、いったいどんな存在であっても、ユヅルにとっての彼という存在は変わらない。だが、疑問だけは拭い去っておきたい。
「ああ、肝心なことを言ってなかったみたいだな」
そこで一度言葉を区切り、
「俺という存在を一言で言うなら、神。この星を作った原初の存在。無限書庫（アーカイバ）の管理人。そんなところかな」

散歩にでも出かけるような気軽さで、彼は途方もないことを口にした。

Happy Birth Day3（後書き）

ヒロイン一人が登場しないまま2ヶ月

Happy Birth Day4（前書き）

最後の戦いへのプロローグ

Happy Birth Day4

「驚いたか、まぁ、無理もないだろうけど」
雑談でもするようにシロウは、特に重大なことではないといった感じで軽く、
「でも、事実は事実だからな」
タバコの煙を吐き出すものの、周囲の人間は言葉を紡ぐことができずにいる。
「そうそう、俺がこの場所に現れたのは偶然ではあるが、必然ではない。ちょっとした裏ルート、いうなれば、隠しダンジョンみたいなものだ」
「何を、言ってる？」
ようやくユヅルが口にできた言葉はかすれ、弱弱しい。
「四つの星装具（アストラル）が一人の手に渡ったとき、星の皇が光臨する。そのとき、人が今まで築いてきた治世は終わりを告げる」
タバコの煙を吐き出し、シロウはいつものような笑みではなく、冷笑を浮かべ、
「星の皇は、俺と同じ神であり、この星と同化した者。故に、人間に対する憎しみというものが非常に大きい」
「どうして？」
「当たり前だろ。人間がこの星に対してしてきた行いを振り返ってみれば。有史以来、この星に対して、人間は終わらない拷問をしてきていると同じなんだから」
カズキの問いに、当然、そう告げるようにシロウは答え、
「星装具は、この星に存在する人間たちに対する警告。そのために俺が創った。それなのに、どいつもこいつも勘違いしてるから、どうしたものかと思ってな」
シロウが言うには、星装具は本来、四つの形を持つものではなく、一つであり、それを彼はあえて四つの形にわけ、悪魔、天使、聖獣、

邪龍に接続できる装置としての意味を与えた。それは、膨大な力を制御する為のものではなく、武器としてではなく、人として星の魂に接する。そういった意味合いを持たせただけのこと。それを、人間は、星に選ばれたと勘違いし、強力無比な兵器と勘違いして使用してきた。

「おそらく、星装具は、もうすぐ本来の姿へと戻ろうとするだろう。そうすりゃ、星の皇が目覚める」

「回避する方法は？」

「ないな」

ヘキルの問いに対し、彼は無残にも切り捨てる。

「それにしても、どうしてお前ら人間って奴は、すぐに逃げる方法を模索しようとするんだ？　そこが俺には理解不能だよ」

「勝てない相手なんだろ？」

「多分な」

どこか含みのある口調で、シロウは答える。

「なら逃げようと考えるのは、むしろ、当然じゃないのかな？」

カズキの言葉を聴いて、大声あげて笑ったシロウは、次の瞬間、振り下ろしたこぶしで、机を粉々に粉砕していた。

「おかしいな、俺が戦いに対する信念を教えたガキ共は、こんなに馬鹿だったはずはないんだが？」

「あなたは、兄さんは確かに、いろいろなことを教えてくれた。その中でも、決して死ぬなという言葉を、教えてくれたことを僕は忘れていない」

熱弁するカズキに対して、シロウは、

「ああ、教えたな。だが、お前らは死ぬということを勘違いしている」

「どういうことだ？」

「まったく、一から十まで説明している余裕はない。いいか、敵は強大、こっちの戦力はジリ貧、おまけに時間制限つき。そんなとき、俺はお前たちにどうしろと教えた、諦めろと教えたか？」

シニカルな笑みを浮かべて二人に対して問う。それに対して、
「「頭を使って、策をひねり出し、相手の裏をかいて生き残る」」
「そうだよ。わかってんじゃないか。そんで、ようやくスタートラインに立てそうなお前たちに、一つアドバイスをしてやる。戦う前から諦めるような愚考はない。お前らの前に、誰がいるか、思い出してみろ。鳥頭だってわかるぞ？」
答えを聞き、新しい選択肢を与えるシロウ。その姿は確かに、絶望を希望へと変化させる神と言う言葉がよく似合っている。
「まさか」
「そう、そのまさかだ。俺が手を貸してやる。だが、正面きって喧嘩を売るのは俺の役目じゃない。お前たち、人間じゃなきゃならない」
「それで、勝てる相手なのか？」
「馬鹿が。勝てる勝てないじゃない。勝つんだよ」
「ああ、確かにその言い分のほうが兄貴らしい。でも、具体的にどうやって？」
ユヅルの問いに対して、
「コレをくれてやったガキ。そいつは、自分の大切な者を守るためなら、命すら投げ出すような奴でな。自分が傷つくことを恐れやしない。だが、決して諦めたりもしない」
そこで一度言葉を区切り、
「ホントだったら、あいつにはいい加減、まともな生活をおくらせてやりたかったんだが、そうもいかなくてな」
タバコの煙を吐き出した後、
「神を打倒する事ができるのは、限られた人間だけだ。だが、あいつは凡人でありながら、信念だけを武器に、それを成し遂げた」
「それって、まさか」
「そう、お前らに紹介しようって奴は、俺に敗北の味を噛み締めさせた、クソガキだ」
短く、楽しげに伝えてきた。

Ｈａｐｐｙ　Ｂｉｒｔｈ　Ｄａｙ４（後書き）

次回は、シリアスパートを抜けます

Ｌｉｖｅ　Ｌａｄｙ１（前書き）

さて、本日の主役は？

Live Lady!

「まぁ、今すぐってわけじゃないから。近いうちに連絡する」
そう口にして、シロウが去っていったのは昨日。
そして、文化祭最終日を迎えたユヅルは、目の前にある現実と対峙していた。
「コレはどういうことだ？　誰かきちんと説明してくれ」
目の前に用意されているのはウィッグと、彼が準備期間中に製作したチャイナドレス。
「ですから、コレが衣装です」
「なんの？」
「決まってるじゃないですか、ステージの」
「誰の？」
「ユヅルさんの」
カナミに改めて説明され、がっくりと肩を落とすユヅル。そりゃ、いきなり女装してステージに立って歌えと言われれば、誰だって反応に困ることだろう。
「何でこんなことになってるんだ？」
「みんなで話し合って、やっぱりインパクトが重要だろうって話になって」
「それで女装？」
「それで女装です」
楽しげに答えるアキタカとヒサノを見て、再度ため息をついてしまうユヅル。コレは既に、どう言い訳をしたとしても、結果を変えることはできそうにない。
「ちなみに、話し合ったっていってたけど、この意見を出したのは誰？」
そう、彼が問いかけた瞬間、その場にいた人間全員の視線がアキタカへと集まる。

「お前か、コノヤロウ」
視線で人が殺せるとは、まさにこのことだろう。いい笑顔を浮かべながらも、ユヅルの瞳は決して笑っていない。
「ほらほら、早くしないとお化粧する時間がなくなっちゃいますよ、ユヅルさん」
「そうですよ、ゆ～君」
二人にせかされ、完全に逃げ場を失ったユヅルはため息をつき、
「なら、これから着替えるから出て行け」
「「え～」」
「え～、じゃない。あと、化粧も自分でできる」
「「なぜに？」」
「ちょっとした事情があってな。やったことがあるんだよ。深くは言いたくない。ともかく、出て行け」
不満を口にする二人の言葉に耳を傾けず、強引に部屋から追い出すユヅル。そして、
「はぁ、どうしてこんなことになった」
本日何度目になるかわからないため息をつくのだった。

「嘘でしょ、これがゆ～君？」
「女性として、完全に負けた気にさせられるのは、どうしてでしょうか」
二十分後、部屋に入ることを許された二人の目の前にいるのは、紛れもないユヅルなのだが、その姿は、完全に女性そのものであり、
「いい加減、その羨望と嫉妬の混じった目で見ないでもらえると、嬉しいのだけれど」
言葉遣いまで変化しているのだから、同一人物として認識するのはかなり難しいかもしれない。
それもそのはず、今のユヅルは、黒のロングストレートのウィッグに、チャイナドレスとブーツ、そして、化粧までしていて、元々プロポーションは悪くないものの、それを上品なものにまで仕上げ

てきている。他人が見れば、一目で彼と判別することはできないだろう。

「口調や、仕草まで完璧だなんて」

「前に一度だけ、仕事でこういった格好をすることがあって、そのときに少々学ばせていただいたの」

「うぉ～、女神光臨」

微笑したユヅルに対し、骨抜きにされつつあるアキタカが興奮を抑えることなく、大声を上げる。

「もうすぐ演劇部が終わるから準備してくれって、誰、この別嬪さん？」

あわてながら控え室に入ってきたリュウイチは、当然のようにユヅルが女装した結果を知りもしない。そして、

「ユヅルだよ、それ」

黒縁メガネを直しながら、室内に入ってきたシンゴに言われて、自分の目を疑っている。

「それにしても、シンゴは一発でわかったんだ、凄いね」

「雰囲気同じじゃないか、わからないほうがどうかしてる」

「そういうものですか？」

「そういうものだよ。それにしても、ずいぶんと板についてるね。二人が見たら驚きそうだ」

シンゴの言う二人とは、転校というアクシデントでこの学校を去ってしまった軽音楽部のメンバーを指している。よって、ドラムのリュウイチ、ベースのシンゴ、ギターのアキタカ、ギター&ボーカルのユヅルといったメンバー構成に。

「まぁ、過去のことは置いといて、時間だし、そろそろ行こうか」

そんなアキタカの声で、四人は右こぶしを握り、全員であわせ、

『それでは、本日のメインイベント、Ｏｕｔ　Ｏｆ　Ｔｈｅ　Ｈｏｌｅの登場です』

進行役の紹介を受け、戦場（ステージ）へと足を踏み出すのであった。

Ｌｉｖｅ　Ｌａｄｙ１（後書き）

カナミ、ようやく登場

そして、再び出番なし

幕間　神様と神殺し（前書き）

シロウが紹介する相手とは誰なのか

主人公の出番はない

幕間　神様と神殺し

昼下がりのカフェテラス。
この時間ともなれば、ユヅルたちは学園祭を大いに楽しんでいることだろう。そう思いながら、魅神楽シロウは、一人、コーヒーカップを傾け、待ち人が自分を見つけてくれることを祈っていた。
彼は、自分が生まれたときのことを知らない。
もっとも、神という存在である以上、時間の経過は無縁であり、老いや死といった概念さえも彼を捉えることはできない。共に誰一人としていない、孤独。そう、願ったはずなのに、彼が生きていると錯覚してしまうのは、あまりにも眩しすぎる存在に出会ってしまったからだろう。

「すこし、遅れてしまいましたか、シロウ？」
少しの間、物思いに耽っていた彼に対して、声をかけてきたのは、右目に眼帯をした柔和な笑顔の青年。コレといった外見的な特徴は眼帯以外になく、人ごみに紛れてしまえば、すぐにでも見失ってしまうだろう。
「まぁ、待つことには慣れているから気にするな、ユウ」
ユウと呼ばれた青年は、シロウの対面に腰を下ろし、ウエイトレスに注文を済ませ、
「それで、いったい何の様があって、僕に声をかけてきたんですか？」
単刀直入に用件を聞いてくる。

「おいおい、いきなりだな。普通、もうちょっと旧交を温めあったりするんじゃないのか？」
「そんなことをする間柄ですか、僕とあなたは」

ユウの言い分はもっともであり、シロウはため息をつくことしかできない。二人の邂逅は、今回を含めて四回目。一度目は右目を与えたとき、二度目は敵として、そして三度目は共に戦場に立つ仲間として。

「僕らの一生はあまりにも短い。まぁ、時間の感覚が緩いあなたには、わからない概念かも知れませんけど」

「ああ、そうかもな。随分とお前も口が悪くなったもんだよ」

注文した紅茶の匂いに満足しながら、ティーカップを動かすユウに対し、悪態を尽くシロウ。

「そうですね、この紅茶をからにするぐらいの時間ぐらいは、あなたの軽口に付き合ってあげましょうか、ねぇ、神様？」

「何気に酷いこと口にするな、お前」

「ええ、あなたがこの眼を僕にくれたおかげで、いい意味でも悪い意味でも大変なことが多すぎましたから。助けてくれたことを差し引いても、厭味を僕の一生分言い続けてもお釣りが来るぐらいです」

自分の右目に眼帯越しに触れ、消え去りそうな笑みを浮かべるユウ。

そう、彼の右目は彼が幼いときの事故によって、失われ、代わりに今はその場所にシロウの瞳が移植されている。

「それにしてもお前、一人で来たんだな。あいつらはどうしたよ、四人ほどいたろ？」

「他でもないあなたがそのことについて聞いてきますか。みんな忙しいんですよ、あなたと遊んでいられた五年前とは違って。それに、僕以外に、この場にきたら、あなた、その場で殺されちゃいますよ？」

「そいつは、確かにそうだな」

若干、顔を引きつらせるシロウ。それもそのはず、ユウを含む五人は、かつて神を殺すことができた唯一無二の存在。そして、彼以外の四人はシロウに対して、良いイメージを持っていない。もっとも、それは彼もそうであり、比較的冷静に対処できるだけである。

「和馬は、今武者修行で外国のどこかにいます。崇は、弁護士としてバリバリ働いてますから、おそらく裁判所あたりでしょう。理沙と雪華は二人で買い物に、今日は出かけています」

「急にどうしたよ？」

「聞きたかったんでしょ、僕らの近況。今言った事がすべてですよ」

「へぇ、じゃあ自由に動けるのは三人ってとこか」

その言葉をシロウが口にした瞬間、世界の温度が急激に下がった。

「今、不穏なことを考えませんでしたか。どうも、悪巧みしているように聞こえたんですが」

「悪巧みはしていないぞ」

「では、よからぬ企みごとはしているということですね」

そこで一度、ユウはティーカップをソーサーへと戻し、

「お前ら人外の揉め事に、巻き込もうというなら。今度は怪我じゃなく、その存在そのものを消し飛ばしてやるぞ、神」

「現役退いたお前にできるかねぇ、人間」

その場で神と人が殺気を交錯させる。しかし、意外にも先に矛を収めたのはシロウ。

「悪かった。謝るから、勘弁してくれ」

「ご機嫌取りする前に、用件を話せ。お前の存在価値を決めるのはそれからだ」

ユウの左目にこもっているのは、紛れもない殺意。口調が変わっただけではなく、先ほどから彼の周囲にもかすかに変化が生じている。それを察知した為、シロウは矛を収めることにしたのだ。

「星の皇が目覚めようとしている」

「それで、僕らを巻き込むつもりか、今の日常を狂わせて」

「いやいや、最後まで話しは聞いてくれ。お前に頼みたいのは、戦天詞（エンジェルアームズ）を作って欲しいんだよ」

「あんなものを今更作ってどうする。あれは、神と戦う為の兵器であり、神であるお前には使えない。それぐらいは理解しているはずだ」

「ああ、使うのは勿論俺じゃない。俺のちょっとした弟分たちだ」

「そうか、僕らではなく、今回、お前はその子達を巻き込むつもりなんだな？」

「いや、ちょっと待て。順序が逆だ。俺が巻き込んだんじゃなくって、あいつらが勝手に巻き込まれてたのに、俺が横から手を貸してやりたいだけで」

「そうですか、それは、とてもかわいそうに」

殺気を収めたユウの口調は元へと戻り、

「ですが、アレは普通の人間には使えませんよ。物理的にどうやっても」

「そこは大丈夫だ。あいつらは喜ばしいことに、普通じゃない」

「そこは、喜ばしいことではなく、悲しいことです」

立ち上がった彼は伝票を掴み、

「夜九時以降、土日を避けて連絡をくれるのであれば、多少なりとも、その子たちに手を貸してあげましょう」
「おお、それじゃ」
「勘違いしないでくださいね。その子たちだけでなく、僕以外にも巻き込もうとしたその時点で、あなたの命運は途切れる」
そう、去り際に脅迫めいた言葉を残してユウは去って行った。

「あいかわらず、おっかねぇな、マジで」
喉元に突きつけられていたナイフをようやくどけてもらえた安心感。それを味わいながら、
「本当は、お前らを巻き込んだほうが手っ取り早いのは、俺だって知ってる。でもさ、流石に今回の主役は俺でもお前らでもない。なら、脇役に徹して、あいつらが主役の舞台を盛り上げてやる。そうしてやるのが、先達として役目だと思うわけだよ、俺は」
新しく注文したパフェをスプーンで口に運ぶシロウだった。

幕間　神様と神殺し（後書き）

そして文化祭に戻ります

Ｌｉｖｅ　Ｌａｄｙ２　告白（前書き）

サブタイトルにサブタイトルをつける私

Ｌｉｖｅ　Ｌａｄｙ２　告白

大盛況のうち、ライブもいよいよ最後の一曲を残すのみ。
そんな時、ふいにユヅルがマイクを取った。この曲の前にＭＣは予定されていなかったはずなのに。

「ここで、一世一代の本音をぶちまけてみようと思う。つまり、告白って奴だ」

その言葉を聴いて、会場はさらにヒートアップ。もっとも、そのことを予想すらしていなかったステージ上の三人は、一瞬呆れた後、微笑と共に肩をすくめた。

「まずは、神宮寺カナミ」
「はい」

名前を呼ばれたカナミに対して、スポットライトが当たり、彼に好意を寄せる他の三人は気が気でない。

「俺、家をでようと思う。お前にいっぱい迷惑かけたし、悪いって気持ちもあるけど。それだけじゃなくって、このままあの家にいたら、俺自身、お前に甘えてしまいそうだから」

それは、はっきりとした意思表示であると共に、決別を意味する言葉。

「次に、雨竜カズキ」
「うん」

名前を呼ばれたカズキは、自分に訪れる結果を受けれることを決心し、

「調べてもらったんだけど、俺とお前は生き別れのきょうだいらしい。まぁ、これからも、いっぱい迷惑かけるだろうから、そのときはよろしく頼むよ、姉さん」

「ふふっ、手のかかる弟だ」

涙を受け入れるように笑みを浮かべる。

「次、レベッカ・サウザード」

「はい」

名前を呼ばれ、スポットライトにさらされたレベッカは次の言葉に期待する。

「正直、お前とは付き合い短いし、最初は喧嘩もした。だけど、今は違う。お前の努力を俺は知ってる。だから、背中を預ける」

「わかりました」

それは、失望と希望が入り混じった返答。認めてもらえたことと、手に入れられなかったことが、同時に押し寄せてくる。

「最後に、春日野ヒサノ」

「うんっ」

彼は、誰も選ぶことなどないかもしれない。そんな、絶望めいた後ろ暗い考えが頭を埋めていく中、彼女はユヅルの言葉を待つ。

「お前との出会いは、正直最悪だったの、覚えてるか？」

「うん、私が絡まれてるとき、ゆ～君が助けてくれた」
「あれ、不可抗力だったって言ったら、どうおもう？」
「それでも、助けてくれたのは、変わらないよ」
「そっか」

そこで一度彼は言葉を区切り、
「なんて言えばいいんだろうな。こんなこと一度も口にしたことないから、どういえば良いのか、よくわかんなくって」

そう口にして、彼はギターの弦を軽く弾く。
「だから、言葉よりも、行動で。俺の考えや思いを届けようと思う。この曲が終わったら、お前の答えを聞かせてくれ。顔も知らない誰かの為でなく、たった一人の愛しい人の為に捧げる歌。どうか、聞いてください、『Ｓｕｍｍｅｒ　ｓｎｏｗ』」
そして、演奏が開始される。

『Ｓｕｍｍｅｒ　ｓｎｏｗ』　作詞作曲　ユヅル

カーステレオから流れてくる　ビートルズに耳を傾け
隣にいる君へむかう視線　無理やり引き剥がしてアクセル
このままでいいわけないから　行動で気持ちを示すのさ
一世一代のギャンブル　このときだけは神頼みで

行き先を告げず走ってる　それなのに君は隣にいて
僕のそばにいてくれる　それはちょっとした自惚れかな？
言葉はもう準備ができてる　後一歩で踏み出せるはず
それなのに口が動かない　タバコの煙は吐き出せてるのに

お願いだよ　このときだけ
世界の音　僕のために消えて

※Ｙｅｌｌｏｗ　Ｓｕｂｍａｒｉｎｅ飛び乗って　夏の雪を見に行こう

ドラマティックな告白は　僕の柄じゃないけれど
好きだって言う気持ちが　溢れ出してとまりゃしない
零れ落ちそうな気持ちさえ　君に届けたいのさ

いつもとなりにいることが　いつも笑い合えることが
当然だと思っていた　若さゆえの過ちで
答えを聞くのが怖くて　耳を塞いでしまいたい
それでも答えが知りたくて　この手は動いてくれない

お願いだよ　せめて今だけ
その言葉を　僕にだけ届けて

世界中の誰より早く　次の朝を迎えたい
何気ない日々が突然　刻み込みたい記念日さ
右手にはサプライズ　左手には君がいて
ロマンティックなシチュエーション　君に溺れていたい

誰に何を言われてもいい　笑われてもかまわない
この言葉が君に届くのなら

この気持ちならきっと　誰にだって負けやしない
君の親、兄弟、そうさ　誰でも勝って見せるよ
つながっていたいんだ　君じゃなきゃ嫌なんだ
世界中探し回った　Ｏｎｌｙ　Ｏｎｅは君以外いない

※繰り返し

ギターの音が止み、歓声が巻き上がる中、ユヅルは再びマイクを取る。
「悪い、さっきのは、なしで」
その言葉を聴いた瞬間、巻き起こるブーイング。それすら受け止めながら、
「ヒサノ、俺は、お前が好きだ。お前が、俺が帰る場所にいて欲しい。だから、お前の答えを聞くのは止めた」
そして、その瞬間、黄色い歓声があがり、
「お前が嫌だって言っても、勝手に連れてくことにするわ」
「そんなの、ついて行くに決まってるじゃないですか」
ヒサノの答えを、彼は受け止め、
「そんじゃ、景気づけに、もう一曲行ってみようか。『Ｓｅａｒｃｈ　Ｔｈｅ　Ｗａｙ』」
再びギターとマイクを手に取り、ステージを盛り上げるのだった。

Ｌｉｖｅ　Ｌａｄｙ２　告白（後書き）

なんだろう、この達成感

そして、何気に歌詞を書いたの初めてだったり

紹介します1（前書き）

前回でようやく、第一部が終了した感じです

紹介します1

「ああ、そう言えばあの家でたんだよな、俺」
目覚まし時計の時間を確認し、カーテンを開けたユヅルは、タバコに火をつけながら、換気扇のスイッチを入れる。
学園祭終了から二日目。
神宮寺家を出て、引越しが終了したのが先日。そして、この国に着てから始めて一人だけの朝を迎える。
「めし、どうするかな」
今まで朝食は準備されていて、日本に来る前は職員専用の食堂で済ませていた。つまり、料理をする必要などなかった。だが、これからはそうはいかない。一人暮らしをし始めたのだから、自分のことは自分でやらなければならない。
「まぁ、その前に必要なのは、調理器具だよな」
改めて室内を見渡し、ユヅルはため息をつく。突発的に決めたこともあり、この部屋には、冷蔵庫と洗濯機、それ以外の家電製品すらない。食器などあるはずもないのだ。
「やることがない一日は、退屈以外のなにものでもない。そう思ってたけど、意外にやることは多いみたいだな」
学校が休みに入り、執行官としての仕事も差し迫ったものはない。故に暇。だが、暇を満喫していれば、生活に支障が出てしまう。
「ってことは、やることは決まったな」
タバコの火を灰皿に押し付けて消し、出かける準備を始めるユヅルだった。

「それで、なんでいるんだ、二人とも？」
「告白して二日目の恋人を放っておく彼氏は、どうかと思います」
「相棒って言ってくれたじゃないですか、先輩」

新しいタバコに火をつけ、玄関のドアを開けた瞬間、ヒサノとレベッカに待ち伏せされていたユヅルは、軽くため息をついてしまう。

「いや、まぁ、そうだけど。俺、これから買い物に行くんだが」
「じゃあ、ついていきます」
「一緒に行くに決まってるじゃないですか」

二人は打ち合わせでもしていたのだろうか、息ぴったりに即答してくる。そんな二人を無碍に扱うこともできず、ユヅルはそのまま二人を引き連れて買い物へ。

「それで、ゆ～君。本日のお買い物は？」
「電子レンジと、調理道具一式。後はエスプレッソマシンが欲しいところだ」
「先輩、それって一人暮らしするとき始めに買うものですよね？」
「まぁ、そうなんだが。あっちいたときも、こっちにきたときも。必要としてなかったから持ってないんだよ。そもそも、料理自体あまりしないし」

そう、ユヅルは料理人を尊敬している。それは、彼自身、自分の分だけの食事を作ることに面倒さが勝ってしまうゆえ。そして彼は、器用な割りに、興味のないことに関しては、とことんずぼらというか、やる気を示さない。つまり、食事を作るという環境が始めてなのだ。

「先輩、それじゃ、今度料理つくりに行きましょうか？」
「いや、遠慮しておく」
「どうしてですか？」

改心の一撃、っといえる言葉を持ってきたレベッカだったが、そ

れを拒否され、予想を裏切られてしまう。

「それなら、真っ先にヒサノに頼むし。ついでに言うなら、おまえの料理の腕を、俺は知らない」

「嬉しいです、ゆ～君」

「酷いです、先輩」

はやくもバカップルぶりを発揮しそうな二人を、若干恨めしそうな気持ちで見つめるレベッカ。そんな時、ユヅルの携帯が振るえ、

「はい、どちらさん？」

「どちらさんって、君、番号登録してあるんだから、いい加減、液晶見ずに出るのやめようよ」

ケイオスのため息交じりの言葉が耳に響いてくる。

「ああ、悪い」

「それは、欠片も悪いと思っていない人間のせりふだよ、ユヅル」

「意外としつこいな。それぐらいサラッと流せよ。しつこい男は嫌われるぞ」

「君に好かれるのは、正直、ゾッとするね」

「言うようになったじゃねぇか」

会話が英語で行われている為、ヒサノは意味がわからず、レベッカは会話の内容がわかっていても、相手がわからないといった状況。

「そんで、用件は？　無駄話する為に連絡入れてきたわけじゃないんだろ？」

「当然だよ、君」

「次あったら、出会い頭に殴るぞ、お前」

「ごめん。それじゃ、本題に入るよ。君、いつこっちに帰ってくる

の？」

ケイオスの言葉を聴いて、
「何言ってんの、おまえ？」
「いや、ドイツでのお仕事が終わって、局長に帰るって、君言ってただろ？」
「ああ、確かにそんなことを言ってた気がする」
「曖昧な記憶だね」

自分で言っていた言葉なのに、最近、ユヅルの周りでいろいろな変化が怒涛のように押し寄せてきていたので、彼自身、すっかり忘れていた。

「そっちに、サウザード執行官もいるだろ？　一緒に帰ってきなよ」
「ああ」
「近いうちにとか、そういう言葉はなし。君がそういうことを口にした場合、一向にやる気配がないから」
「付き合いが長いと、邪推してくるから嫌だよな」

そこで、一度ユヅルは思考を切り替え、
「明日、連絡するから、それまで待っててくれ」
「どういう風の吹き回し？」
「こっちにもいろいろあるんだよ」
そう言って携帯の通話を切る。

そして、ヒサノとレベッカの二人に対して向き直り、
「そんなわけで、年末年始はロンドンで迎えることになりました」
「「はいっ？」」
彼の言葉の意図がわからず、頭上にハテナマークを浮かべる二人。

「ちなみに、二人とも連れて行くので、今日はその準備もしたいと思います」
「どういうこと？」
「説明が欲しいです」
そんな二人に対して、
「ちょっとした、大人の都合って奴だよ」
曖昧な言葉で濁すユヅルだった。

紹介します1（後書き）

いざ、ロンドンへ

紹介します2（前書き）

果てさて反応は？

紹介します2

外国に行く為に必要なものは何でしょう？
この問いを投げかれられたのなら、真っ先に誰もがパスポートと答えることだろう。
だが、彼の場合は少し違う。

「タバコ、自分の吸ってる銘柄がないと、困るだろ」
ユヅルは迷うことなく、そう答える。

そんなこんなで、ユヅルにヒサノ、レベッカの三人は、待ち合わせの場所に旅行用の着替えをつめたキャリーバッグだけを持って、待ち人が来るのを待っていた。

「ううん、緊張します」
「そうか？　もしかして、外国に行くの初めてか？」
緊張しているヒサノに対し、見当違いな声を投げかけるユヅル。
彼女にしてみれば、付き合い始めた彼氏の親、そんな人物に会いに行くのだから、緊張しても無理はない。しかも、言語圏が違うので、挨拶がまともにできるかも怪しい。それで、彼女はこの日が訪れるまでの二日間で、申し訳程度の外国語を勉強していた。

「ううん、おなか痛くなってきました」
「いや、なんでお前まで緊張してるのか、俺にはわからんぞ？」
そして、別の意味で緊張していた。それというのも、先日、彼から相棒として正式に認めてもらったわけで、これからの仕事は、当然のようにユヅルと組むことが多くなるはず。しかし、彼女は執行官として新米であり、他の執行官と面識もほとんどない。だからこそ、他の執行官に、

彼の相棒として認めてもらえるかどうか、心配でしょうがないのである。

「そうこういってるうちに着たぞ」

彼が指差してから少し経って、輸送用のヘリがその場に着地してくる。

そして、中から現れたのは、レベッカも少なからず面識のある執行官、エカテリーナ・フォルダン秘書官。

「少し遅れてしまいまして、申し訳ありません」

「ああ、別にそこまで時間、気にしてないから。それよりも、英語じゃなくて、日本語で頼む」

エカテリーナは、彼の言葉を疑問に思い、そして、そこでようやくヒサノの存在に気づき、

「はじめまして、二人の保護者をさせてもらっています。エカテリーナ・フォルダンです」

「えっと、春日野ヒサノです」

日本語での挨拶を受け、緊張しながらも自己紹介を済ませるヒサノ。

「それで、失礼ですが、彼らとの関係は？」

「えっと、聞いてないんですか？」

「はい」

―ううっ、ゆ～君の意地悪―

エカテリーナからの問いを受け、事前に説明してもらえていると思っていたヒサノは、どう答えていいものか、悩んでしまうが、

「俺の女だ。説明はそれ以上必要か？」

ユヅルに断言され、気持ちが楽になった彼女は、手招きに答える

ように荷物を持って、彼と共にヘリへと乗り込んでしまう。

「そうですか、彼女ですか」

「ええ、先輩の彼女です」

エカテリーナの確認するつぶやきに、相槌を打ってヘリに乗り込むレベッカ。だが、

「彼女？　えっ、彼女って、あの彼女ですか？」

信じられないといった具合に、エカテリーナは自問自答を開始してしまう。

「そこまで驚くことか？」

ヘリに乗り込み、目の前の席で頭を抱え込んでしまっているエカテリーナ。そんな彼女を見るに見かねて、ユヅルは問いかける。

「だって、ハイドマン執行官ですよ？　単独破壊者にして、異端審問局一の問題児、エトセトラ。数え切れないぐらい悪名が轟くあなたに彼女？　多分、誰一人としてあなたの言葉を信用しませんよ、普通」

「酷い言われようだ」

流石のユヅルもため息をつき、タバコを懐から取り出したものの、何を思ったのか、そのまま吸うことなく元の位置へと戻す。

「どうかしましたか？」

「いや、流石に密室でタバコを吸うのはどうかと思って」

「嘘でしょ、嘘って言ってくださいよ。そんな、一般人みたいなセリフをあなたの口から聞くなんて。私はきっと夢を見ているんでしょうね」

「現実を直視しろ。ついでに、いい加減にしないと、暴力に訴えるぞ」

苛立ち混じりに答えるユヅルだが、コレは他の二人にとっても意外なこと。そう、ユヅル＝タバコ。ヘビースモーカーにしてチェインスモーカーのイメージが二人にも定着してしまっている。

「でも、先輩、どうしたんですか？」

「あん？　だって、密室だろ。お前やエカテリーナだけならともかく、今はヒサノも乗ってるんだ。流石に考えるだろ、普通」

「ゆ～君」

「すみません、空調下げてもらっていいですか？」

二人の掛け合いに、付き合いきれないといった具合に注文を口にするレベッカ。

「コレは、喜ぶべきなのですよね、きっと」

そんななか、一人自問自答をし続けるエカテリーナだった。

紹介します2（後書き）

まぁ、彼の行動と人となりを考えれば当然の反応です

紹介します3（前書き）

到着しました

紹介します3

「なぁ、コレはどういうことだ？」
四人が到着したのは、異端審問局の本部である『黒金の檻』。しかし、なぜかこの場所に本来いるはずの人間が誰一人としていない。むしろ、もぬけの殻。

「なんか、聞いてたりしないのか？」
「いえ、流石に私も何の連絡を受けていません」
事情を知っているだろうエカテリーナすら困惑している。

「どうしますか、先輩？」
「ふむ、そうだな。本来なら許可が必要なんだけど、まぁ、しょうがないか。悪いな、ヒサノ、今日はレベッカの部屋に泊まってくれ」
「えっ？」
「まぁ、妥当な判断ですよね」
「客室使いたいけど、マスターキーどこにあるかわからんし」
本人をよそに勝手に話を進めてしまうユヅルとレベッカ。しかし、この場所に始めてきたヒサノとしては、二人に従うほかない。

「って、誰か連絡取れないのかよ？」
「今、片っ端から連絡を取っているんですが、誰一人として出ません。ですが、おかしいんです」
「おかしいって何が？」
「執行官すべての光点が一箇所に集中しています」
「それって、席次の十一も含めてですか？」
「はい」

執行官は、基本的に世界中に散らばって仕事をしている。そのた

め、彼らの位置が把握できるように、その体には発信機がインプラントとして埋め込まれている。そう、ユヅルにレベッカ、ヘキルといった三名が同じ国に滞在していることは、例外中の例外といっていいだろう。

「なんか、大規模な仕事でもあるのか？」
「わかりません」
「まぁ、仕事だとしたら、今回、俺はパス。今回の俺の目的は、お姫様のエスコートなんで」
「先輩、何気に自分勝手ですよね？」
「そういうけど、大人数で行動する仕事なら、俺は参加しないほうがいいはずなんだが？」
「どうしてですか？」

戦力として計算するなら、彼の参入は非常に大きなプラスになるはずなのだが、
「彼の場合、周囲への被害が非常に大きい。ですから、それに味方が巻き込まれる可能性が、非常に高いのです」
「ああ、確かに」
そう、今まで彼は、強引に拉致されたドイツでの任務以外、複数名での仕事には一切参加していない。もっとも、参加する意思は毛頭ないのだが。周囲へ被害が無駄に拡大してしまうことを防ぐ為という建前もあったりする。

「まぁ、とりあえず、荷物だけ各自の部屋に置いたら、この場所に行ってみましょう」
半ばエカテリーナに仕切られながらも、特に逆らうことなく、行動した三人は、およそ五分程度で彼女の元へと戻ってきた。

「さて、皆さん、覚悟はいいですね？」
「何に対する覚悟だよ」
思わせぶりな言葉を口にするエカテリーナを、殆ど無視する形で、全員が集合している場所のドアを蹴破るユヅル。その行動を、本来、いや、いつもであれば非常時であっても取り締まるエカテリーナなのだが。ドアの向こうの景色を見て、言葉が出てこなくなっている。

そう、四人の視界の先、庭園で異端審問局に所属するすべての人間が、酒盛りをしていたから。
「これは、どういったことでしょうか？」
正気に一番戻るのが早かったレベッカは、隣にいるユヅルに対して問いかけるが、当の本人は、物凄く嫌悪感を露にした表情を浮かべている。

「めちゃくちゃ、酒臭い」
レベッカとヒサノからしてみれば、ここまで嫌悪感を露にしている彼を見るのは初めて。そう、苛立った表情はよく見せるものの、ここまで嫌そうな顔はあまり見せたことがない。

「おお、帰ってきたか」
そんな四人に気づいた大柄な隻眼にして隻腕の男性。酒瓶を片手にユヅルへと、体を預けてきて、

「酒臭いって、言ってんだろっ」
物凄い勢いで繰り出された左の裏拳を鼻の下、人体急所の一箇所である人中に叩き込まれ、その場で大の字に倒れる。

「酔っ払い以外はいねぇのか？」
「いないみたいですね」
ユヅルの懇願するような問いに対し、エカテリーナはため息混じ

りに、彼にしては絶望以外ありあえない答えを口にする。

「おいこら、局長（オヤジ）。コレは嫌がらせか何かか？」

「何を言う。日本では、祝うことがあれば、皆で酒盛りをするのだろう？」

「誰だ、そんな間違った常識を植えつけたのは？」

先ほど叩きのめした、アレグリオを力任せに起き上がらせ、問いかけると不可思議な答えが返ってきて、

「あいつしかいないか」

その瞬間、左手に作り出した刀を投擲。銃弾すら凌駕する速度で放たれた刃は、目的の人物の酒瓶を砕き、

「こら、ユヅル、おねぇちゃんが怪我したらどうしてくれるのよっ」

「黙れっ。この元凶が」

気温よりもさらに低い殺気を浴びせるものの、酔っ払いには効果がまったくない。

「えっと、ゆ～君？」

「ああ、悪い」

肩で息をしながら、ヒサノへと振り返るユヅル。だが、そんな彼女にアレグリオが抱きつくように体を寄せていることを見た瞬間、彼の顔色が変わる。

「死ぬ覚悟はあるんだろうな？」

その言葉は、風が吹けば、消えてしまいそうなほど小さな声。しかし、それを聴いた瞬間、

「総員、最終防御体制を取れっ」

エカテリーナの訴えかけるような、声を大にした号令が響く。それを受け、その場にいた全員が酒の力に抗い、体勢を整えるが、既に遅い。

次の瞬間には、無数の刀が地面へと降り注ぎ、庭園の地面を埋めている。そして、その中でヒサノを右手で抱きしめ、刀の上に立っているユヅル。その瞳は苛立ちを通り超え、呆れも通り超え、純然たる殺意が宿っている。

「他人の女に手、出してんじゃねぇよ、酔っ払い。テメェら全員、墓場送りにしてやんぞ」

「うん？　何を言ってるんだ？」

酔いながら、若干正気を取り戻し始めてきたアレグリオは、近くにいたエカテリーナへと問いかけ、

「ハイドマン執行官の彼女ですよ、先ほどあなたが抱きついていたのは」

それを聞いて、彼の血の気は一瞬で引いてしまう。

「待て、ユヅル。ゆっくりと話し合おう」

「こっちには話し合う気なんて、毛頭ねぇよ」

レベッカの隣にヒサノを下ろし、両手に一振りずつ刀を握り締めるユヅル。そこには、情などなく、純粋に殺意のみが存在している。

「えっと、コレって？」

「そうですね、簡潔に説明すれば、彼は、独占欲が非常に強いのですよ」

「言っている意味はわかるんですけど」

「おまけに、彼は酔っ払いとお酒が大嫌いです」

「えっと、止めなくていいんですか？」

「私がですか？　嫌ですよ、それに、私、いえ、この場にいる人間で、ユヅル・ハイドマンを止められる人間がいるとしたら、一人しかいません」

そう口にして、エカテリーナは微笑し、
「彼は、ユヅルは、紹介する前に、あなたに触れたことを、怒っているんですよ。むしろ、紹介した後であっても、同性ではなく、異性が触れようとしたら、警戒するでしょうね」
「えっと、その」
「愛されてますね、ヒサノさん」
彼女の言葉に、顔を赤面させるヒサノであった。

紹介します3（後書き）

意外と精神的にはお子さまな主人公

紹介します４（前書き）

執行官同士で戦闘開始

紹介します4

「ほう、俺ら全員に対して、啖呵切るって。オモシレェぞ」
真っ先にユヅルの挑発に乗ってきたのは、席次の九にして、彼に戦い方を教えた男性、ウインド。

「世界の広さを教えてあげる必要が、ありますよねぇ」
そんな彼に便乗するように立ち上がったのは、席次の十にして、ウインドの相棒を勤める女性、レイブン。

「声を出して、相手に位置を悟らせるなんて、愚の骨頂だ」
しかし、そんな二人よりも彼の動きのほうが早く、鋭い。対象を、沈黙させるという、純粋すぎる目的で動く彼を、単純な戦闘力で止められるものは、

「拙者が、お相手するでござるよ」
長刀で、ユヅルの刀を受け止めたのは、席次の一にして、盲目の女性、鳳センザ。そして、その横で爆発が起き、彼は瞬時に自分の周囲を再確認する。

「いやはや、こういう歓迎をするつもりはないんだけどね」
「しょうがないどすなぁ、ほんまに」

そんな彼に追撃のように放たれた、雷の槍。それを刀を投擲し、避雷針代わりにして逸らした彼は、
「ケイオスにフジノ、か」
ただ、確認するように二人の名をつぶやく。

コレで戦況は、五対一。

圧倒的不利な状況でありながらも、彼の表情には一切の変化がない。

「兄様、私もいます」
「ああ、だろうな」
彼の周囲を取り囲むように疾走し続ける水の糸。その一本一本が加速し続けている為、触れれば、ダイヤモンドですら切断することが可能だろう。しかし、
「甘いんだよ、覚悟がな」

彼は、それを気にすることなく通過しようとする。そして、その行為はハイドレンジアの脳裏に、結果だけを連想させる。よって、解かれる包囲網。

「相手を殺すことを躊躇うな、そう、言ったはずだ」
その言葉と共に振り下ろされた刀。しかしそれは、遠距離から放たれた矢によって逸らされ、死角から繰り出された槍の一撃で、彼は後退を余儀なくされる。

「イジーにマリー」
「そうよ、ダーリン」
「だんな様が相手でも、容赦はしません」
戦況は変化し、八対一。

っというよりも、レベッカを除き、荒事専門の執行官全員の戦闘である。下手をしたら、この場所が焦土となってもおかしくない。

「あの、秘書官、この場合、どうすればいいのでしょうか？」
「そうですね」
そこで一度、エカテリーナは言葉を区切り、首をひねった後、

「あそこまで冷静にブチキレているハイドマン執行官をみるのは、私も久しぶりです。ですから、どうしましょう」
「いや、どうしましょうって、先輩は力の大半を失っているんですよ？」
「ええ、それは私も聞いています」

先日の一件で、ユヅルの力はかつて程、脅威ではなくなっている。今なら、執行官同士の戦闘でも、敗北するかもしれない。

「ですが、力の大半を失っていようと、私には止められません」
「冷静に言いますね」
エカテリーナの戦闘能力は執行官の中でもクローデルと一、二を争うほど低い。だが、

「むしろ、この状況でも、彼の敗北はないでしょう」
続く言葉を聴いて、レベッカは首をひねってしまう。

「それ、どういうことですか？」
「ああ、そうでした。あなたは、彼と単独で戦闘して敗北していましたよね、確か」
「はい」
彼とはじめてであった時のことを、思い出し、レベッカは居心地悪く答える。

「ですが、恥じることはありません。席次の九と十は別として。他の執行官は、彼の強さを嫌というほど体で理解しているはずです」
「まさかっ？」
そこで、レベッカはある結論へと考えが至り、

「そうです、あなたの考えどおり、彼らは一度、ハイドマン執行官に敗北しています。それも、彼が星装具（アストラル）を使う前に」

その言葉を聴いてしまう。

「単純な戦闘能力で言えば、席次の一、速度で言えば、席次の九、連携で行けば、席次の三と六。彼を打倒することは、不可能とは言いません。それぞれ、勝っている部分で、押し切ればいいのですから」

そして、彼女はヒサノへと耳打ちし、

「でも、それって、成功するんですか？」

「おそらく、あなただけしかできない方法です」

疑問符を浮かべたまま、ヒサノは戦闘が行われている場所へと足を踏み入れていく。

「いま、何を言ったんですか？」

「秘密です。それよりも、急ぎたまえサウザード執行官。彼女を傷つけたら、矛は君のほうへ向く可能性もあるんだよ？」

「この、鬼っ」

罵倒しながら、レベッカはヒサノの後を追って戦場へと足を踏み入れる。

「面白そうだな、エカテリーナ？」

「変な言いがかりはよしてください、局長。むしろ、あなたが軽率に動かなければ、このような事態に発展しなかったんですから」

復活したアレグリオだったが、エカテリーナに厭味を言われ、その巨躯を若干小さくさせる。

「さて、上手くいけばいいのですが」

◆◆◆◆◆◆◆

戦況は、八人の執行官を相手取りながらも、彼の優位的状況で展開されていた。それもそのはず、ユヅルは彼らと戦い、勝った経験があり、彼らの攻撃方法や心理、そういった戦場において有利に動く要因を知り尽くしている。

「テメェら、残念すぎるぞ」

それは、この戦いを終わらせる一言に他ならない。だが、その彼の右側から放たれた攻撃により、彼は若干、声のトーンを下げる。

「お前も、混ざるつもりか、レベッカ」

「流石に、コレは洒落になりませんから」

彼に襲い掛かってきたのは、レベッカの魔弾。それでも、ユヅルにしてみれば、殺すべき、殲滅する対象が一人増えただけのこと。

だが、レベッカにしてみれば、彼の動きを一瞬でも止める。それが目的であり、終着点。

「ゆ～君、ダメですよ。私を紹介してくれるんじゃ、なかったんですか？」

後ろから、彼に抱き着いてきたヒサノ。

どうして、この場に一般人がいるのか。その思考は、戦闘をしている執行官全員に、困惑を植え付けるには十分すぎる。しかし、

「ああ、そういえば、そうだったな」

彼ら全員の予想を裏切り、あっさりと、ユヅルは殺気を収めてしまう。これは、その場にいる全員が、自分の目を疑ってしまう。

「こいつは、春日野ヒサノ。俺の女だ」

乱暴すぎる口調で、ヒサノのことを紹介するユヅル。この状況下でも、彼女が全員の死角になっているのは、流石というべきだろう。

「彼女？」

最初にその言葉を聴いて、疑問符を口にしたのは、冷静さを欠いていないケイオス。そして、

「「「「「「「彼女ぉ」」」」」」」

その言葉は、全員の思考を戦闘から、驚愕へと塗り替えるには十分すぎるほどだった。

紹介します４（後書き）

最強を覆すのは、いつだって最愛

番外編　日本でのお正月１（前書き）

コレは、日本に彼らがいた場合のＩＦの物語

番外編　日本でのお正月1

目覚ましに起こされることなく、目を覚ますことができたことは僥倖と呼べるかもしれない。そんなことを考えながら、少年、ユヅル・ハイドマンはベッドから体を起こし、もはや習慣となっている、いや、反射的な行動となってしまっている喫煙を開始。

最近になって、彼女彼氏という関係が生まれた為、彼女の前ではタバコを吸うことに対して、思考することを心がけてはいるものの、長い間親しみ続けた悪癖は中々思うように、自分の理性に従ってはくれない。

「まぁ、別に困るわけじゃないんだけどさ」

換気扇の電源をつけ、着替えを開始。

数分も経たずに着替えを終え、本日も特にやることがないことを確認。

「さて、どうしたもんかね」

最低限の生活道具はあるものの、娯楽に関するものは一切室内に置かれていない。むしろ、趣味と呼べるものが最近、改めてはじめたギター以外になく、書籍の一つすらこの部屋にはない。

ピンポーン

たずねてくるような他人が、自分にはいただろうか？　そんな疑問を頭に浮かべながら、とりあえず、玄関のドアを開ける。新聞の勧誘なら、断ればいい。宗教の勧誘なら、無視してしまえばいい。だが、訪れてきたのは、そのどちらでもなく、

「あけましておめでとうございます、先輩」
着物姿で頭を下げてくる少女、レベッカ・サウザードがそこにいた。彼女は最近、彼の相棒となり、元々、このアパートに先に入居していたので、出会うことは珍しくない。でも、

「その姿は何？」
頭を下げられた当の本人は、疑問符を浮かべたまま首をかしげている。

「晴れ着ですよ。先輩、なんだか、お正月だって言うのにテンション低いですよ？」
「正月？」
「そうですよ、新年始まったんです」
「ふ～ん」
そして、それ以上何も告げることなく、玄関のドアを閉めるユヅル。

―なにか、祝うような行事だっけ？―
日本の常識を、二週間の勉強という名の隔離で叩き込まれたものの、彼の日本に対する関心は、あまり高くない。むしろ、低い。そもそも、彼は日本に来るまで、一度たりとも日時を気にして行動したことがないのである。特定の人物にかかわることであっても。

「ちょっと、先輩。郷に入りては郷に従えって奴ですよ。初詣に行きましょう。巫女さんにお参りして、おみくじを焚き火に投げ込んで、甘酒をかっ喰らう。日本のお正月を一緒に謳歌しましょうよぉ」
玄関越しに聞こえてくる相棒の声は、最後のほうは泣きそうなほどか細くなっている。そこで、彼はダウンに袖を通し、ブーツを履いて、

「お前は、俺よりも日本文化に対して学ぶ必要があると思うぞ」
玄関のドアを、彼女の額に叩きつけるという悪行も、さらりとやってのけるのである。

◆◆◆◆◆◆◆

「さてっと」
そう口にしてユヅルが歩き始めたのは、神社のある方向とは真逆。
「先輩、何処行くんですか？」
彼女の疑問はもっともであり、
「うん？　この時間に行っても阿呆みたいに行列ができてるだろ、多分。俺は、人ごみあんまり好きじゃないんだよ」
「それはそうかもしれないですけど」
時刻は午前九時を回ったばかり。家族で初詣に行く人たちで神社がごった返しているちょうどピークである。
「だから、パーティーを組もうかと」
「そういわれるとＲＰＧみたいですね」
「そんなわけで、後二、三人連れて行こうと思うわけだよ」
そんなことを口にしながら歩く二人。当然のように、レベッカはユヅルの左腕に体を寄せている。少し前の彼なら、まず間違いなく振り払っていただろう。
「だが、ちょっとした問題もあるわけで」
「いったい誰に対して話しかけてるんですか、先輩？」
目的地に到達したユヅルは、目の前の木造の大きな門を見て、ため息をついている。

表札には大きく春日野と書かれており、中には、多くの黒塗りの車が並んでいることだろう。

「まぁ、気にしないけどな」

悪い顔をして、インターホンを押すことなく、敷地内に入る二人。

中では、宴会真っ最中。

そう、ここに住んでいるのは、秋刀魚組六代目の春日野ヒサト。

当然、その関係者が正月から酒盛りをしており、

「おとうさん、飲みすぎですよ？」

「正月ぐらい飲ませてくれよ、ヒサノ」

酒瓶片手にくつろいでいるヒサトに対し、晴れ着姿のヒサノがお灸をすえている。

「そうそう、六代目。うちの息子、お嬢さんにどうですかね？」

「いやいや、うちの息子を」

春日野家に男系はいない。つまり、跡継ぎがいないことを示している。そのため、正月という集まりは、取り入ろうとするものたちにとって、格好のアピールタイムなのだが、

「俺の、娘を？」

完全に酔っ払っているヒサトの声が響くと、殆どのものが口を閉じてしまう。流石は、酔っ払っていても六代目を襲名している男性。その声と佇まいに、猛者といえどのまれてしまったのである。

「日本じゃ正月って、何処もかしこも酒臭いのか？」

そんな、重苦しい雰囲気をまったく気にしていないユヅルは、レベッカを伴い、その場に登場。当然のごとく、来訪の知らせを受けていないものたちは即座に懐に手をやり、

「おっさん、ヒサノ連れてきたいんだけど、いいか？」
「あん？　俺の娘を連れていくだと？」
「ああ、そう言ってんだけど。酔っ払って、意識でも飛びかけてるのか？」
　周囲の人間は、二人のやり取りを見守っている。既に、臨戦態勢に男たちは移行しているものの、ユヅルがヒサトの知りあいであることを会話から知り、手を出せずにいる。そして、先ほどと同様のヒサトの殺気。これで、彼が萎縮すると、大半の人間は考えていたのだが、
「ううっ、娘との大切なひと時を奪おうだなんて」
「あんたの娘は完全にお冠状態だぞ？　ついでにもう、準備しに行ってる」
「知るか、くそっ。俺から大切な一人娘を取り上げようって奴相手に、まとも相手できるかっ」
「うぜぇ、本気でうぜぇ。酔っ払いは万国共通だな」
　ヒサトの殺気を、そよ風のように受け流し、ユヅルは鼻を片手で防いでいる。その様子に唖然としているのが半分、もう半分は、
「お嬢を奪った？」
　その声を皮切りに殺気が充満し始めている。
「どうしても連れて行くってんなら、俺の屍を超えていけ」
「いや、かっこいいセリフ口にしても、足取り、結構まずいだろ？」
「なんだと？　そんな覚悟もないのに俺の娘に手を出したのか。断じて、貴様との結婚を俺は認めんぞ」
「話が飛躍しすぎだ。まぁ、後二年後にはどうなってるかわからんが」
「貴様っ、とりあえずこの酒を飲めっ」

「言っている内容に統一感がないな。後、俺は未成年だ。酒は飲めん」
「何だとっ」
いよいよユヅルに掴みかかってくるヒサトだが、その背後から受けた一撃により、その場に撃沈。あえなく、そのまま動かなくなる。
「コレ、やりすぎじゃねぇ？」
「このぐらいじゃないと、この人、おとなしくしてくれませんから」
ユヅルが呆れながらたずねたのは、ヒサトを金属バットで殴り倒した人物。艶やかな着物姿の女性は、彼の妻であり、ヒサノの母である、春日野アケノ、その人。
「それで、ユヅル君は、ヒサノを誘いに来てくれたのよね？」
「そうっすよ」
「そちらの方は？」
「こっちにいるのは、相棒のレベッカ」
「あらあら、とんだプレイボーイね」
顔は笑っているものの、アケノの目はまったく笑っていない。むしろ、先ほどまで殺気を充満させていたものたちですら引いている。
「それで、今日は帰ってくるのかしら？」
「それは、どういう意味？」
「お母さんっ」
疑問符を浮かべるユヅルと、準備をしてきたであろう、上着を着たヒサノ。
「ふふっ、遅くなっても、お母さんは別にかまわないわよ？」
「お母さんっ」
二人のやり取りだが、顔を真っ赤にしたヒサノが完全に母親に遊ばれてしまっている状態。

「まぁ、帰りはこっちによりますよ。ヒサノを送らないといけないし」
「ふふっ、楽しみにしてるわ」
彼女の笑みを、彼が理解できる日は来るのだろうか？

番外編　日本でのお正月１（後書き）

お正月は無礼講

次も番外編

番外編　日本でのお正月2（前書き）

前回からの続き

番外編　日本でのお正月2

「それで、誘いに来てくれたのは嬉しいんですけど、これからどこに行くつもりなんですか？」
「初詣に」
「初詣に行くのです」
ユヅルの右腕を取りながら、尋ねてきたヒサノに対してユヅルとレベッカはそれぞれ答え、

「そうなると、一番近いのは、カナミさんのところですね」
「そうなんだが、もう一人ぐらい欲しいところだ」
「どういうことですか？」
「先輩はパーティーを組みたいそうです」
「両手に花な、この状態でですか？」
少しだけ不満そうにヒサノは頬を膨らませ、

「いや、単純にそれとは別に挨拶をしておきたい人がいるんだよ」
ユヅルがそう口にした瞬間、

「「誰？」」
異口同音に、彼に問いかける二人。そんな二人に挟まれながら、

「カズキだよ。正確に言えば、カズキの親御さんになるんだけどな」
ばつが悪そうに答えるユヅルをみて、二人は納得が言ったように、安堵の息を漏らす。
学園祭のステージで、彼が告げた彼女への告白は、自身と血縁関係にカズキがあるということ。それならば、彼女が世話になっている両親に対して、挨拶をしておきたいという彼の考えにも納得がいくというもの。

「ただ、あいつの両親。結婚してから二十年ぐらい経つらしいんだが、未だに新婚のノリが続いているらしくってな。会えるかどうか」
「旅行にいってるとか？」
「しょっちゅう行くらしいぞ、あいつを置いて」
「雨竜さん、愛されてないんですか？」
「それはないな。あいつ、門限が未だにあって、それを過ぎると、警報レベルで携帯に連絡が来るらしい」
少しだけ、彼女が羨ましいと思いながら告げるユヅルだったが、その場で足を止める。

「どうしたんですか、ゆ～君？」
「いきなり止まらないでくださいよ、先輩」
二人から文句を言われながら、ユヅルが左手で指差した先には、一人の女性が、三人の男性にしつこく言い寄られている姿があって、

「日本にも、ああいうしつこいナンパがあるんですね」
それを見たレベッカが他人事のように口にするが、

「あれって、カズキさんじゃありませんか？」
ヒサノは気づいたらしく、ユヅルに確認を求めてくる。

「だよなぁ」
―なんだろう、このデジャヴ。今年も、一年、こんな感じなのかなぁ―
どこか諦めたような声で、納得してしまうユヅル。

そう、三人の男性に言い寄られている女性は、ユヅルの姉である女性、雨竜カズキその人。スレンダーなモデル顔負けのスタイルな為、晴れ着が非常に似合っていることは言うまでもない。

「しかたないから、少し待っててくれ」
「えっ、一緒に行きますよ？」
「そうですよ、先輩」
ユヅルの提案は、なぜか二人同時に却下されてしまう。

「いや、あのな、あいつらはナンパ目的でカズキに迫ってるわけだろ？　そこに二人、俺の私的判断だが、美少女が追加されてみろ。あいつらの思う壺だろ？　えっと、こう言うの日本語でなんて言えばいいんだっけ？」
彼が二人をどうやって説き伏せようかと、考えながら口に出した言葉で、二人は少し妄想世界へトリップしてしまっている。彼自身、おせじをいったわけではなく、思っていることをそのまま口にしていただけなのだが、そこは恋する女の子。好きな人から、自分のことを褒められて喜ばずにはいられない。

「まぁ、いいか。そんなわけで、少し待ってろ」
「「はい」」
―大丈夫かな、あいつら―
返事が聞けて、彼の思い通りに事態は進んでいるものの、一抹の不安を覚えずにはいられないユヅルであった。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「いいじゃん、一緒に行こうよ」
「いい店知ってんだよ、俺ら」
「結構、僕は急いでいるんでね」
しつこく言い寄られ、カズキは辟易していた。容姿をほめられることは悪い気はしないものの、それがあまりにも下心丸見えで、おまけに引き際を知らない。

「そういわずに、さぁ」
それでもなお食い下がっている男たちの脇を抜け、家路へとむかおうとしたカズキの腕を男の一人が力任せに取り、反射的に彼女が動こうとした瞬間、彼女の視界は意外な人物によってふさがれてしまう。

「だ～れだ」
その声の主を彼女は、すぐに理解できたのだが、どうしてこういった行動に出たのか、彼の真意をつかめずにいる。

「おいおい、わかんねぇのかよ」
「ユヅル、だよね」
だからこそ、彼女の声は若干震えていた。喜びではなく、怒りによって。

「正解。って、やっぱりカズキだったな」
「僕じゃなかったら、どうするつもりだったのかな?」
「素直に謝る」
彼女の視界を塞いでいた手をどけたユヅルは、あっさりと口にして、タバコに火をつけて煙を深々と吸い込んでいる。そして、そんな突然現れた男に対して、驚きを隠せない三人。

「ちなみに、どうして、あんなことをしたのかな?」
「一度やってみたかったから」
「まったく本当に君って奴は」
怒りをため息と共に吐き出し、呆れてしまうカズキだったが、
「それでは、待ち人が着たので、失礼させてもらうよ」
彼の登場を脱出の格好の言い訳にして、その場で彼の腕を取り、

歩き出す。だが、そこで諦めるほど男たちは、頭がよくなかったらしく、

「彼氏の登場？　でもさぁ、俺たちのほうが先約だよね？」

下卑た笑みを浮かべ、カズキの腕を掴んでいる手に力を込めてくる。

「彼氏じゃねぇよ、弟だよ」

とりあえず男たちの間違いを口に出し、

「そんで、お前はいつまで、人の姉の手を握ってんだ？」

男の腕を掴んで、にっこりと笑みを浮かべる。それと同時に青ざめていく男の顔。それもそのはず、ユヅルの握力は軽く百キロを超えており、徐々に力を加えていくという万力じみた方法を取っている。

「ちなみに、あっちにいるのは俺の連れだ。手を出したら、わかるよな？」

腕を掴まれている男のあまりの痛がりように、異常を感じたのだろう。他の二人はその言葉を聴いただけで、その場から走り去っていく。

そして、最後に残った男に対し、

「まだ、そう、もっと力入れてもいいんだが、そうすると、お前の腕、さよならしちゃうかもしれないな。すぐに、この場から消えてくれるなら、離してやってもいいけど、どうする？」

耳元にささやくように口にし、男が首を縦に振ったことを確認して手を離す。すると、恐怖と痛みに耐え切れなくなった男は、そのまま振り返ることなく去っていく。

「手を握っただけで大げさだよな」
「そこで、僕に同意を求める理由がわからないよ」
タバコの煙を吐き出しながら問いかけてくるユヅル。そんな彼に答えながら、噴出すように彼女は笑ってしまう。

「それで、僕に何かようかな？」
「そうだな、とりあえず、あけましておめでとう。これで、新年の挨拶はあってるよな？」
「あってるよ。こちらこそ、あけましておめでとう」
挨拶を口にした彼に対して、つられるように頭を下げるカズキ。

「そうそう、初詣に行く途中なんだよ、俺」
「うん、それで？」
「そんで、ついでにお前の両親に挨拶もしておこうと思ったんだけど、家にいる？」
「残念ながら、初日の出は飛行機で。そう口にして、二人とも旅行に行ってしまっているよ」
「だとおもったんだ」
そこで、彼は地面にタバコを捨て、ブーツのそこで踏み消し、

「おまえはもう行ったのか、初詣」
「いや、これからだよ」
「そっか、なら、同伴決定だな」

そう口にして、ヒサノとレベッカを呼び寄せるユヅル。そんな彼を見ながら、
「姉って、大変かも」
ぼやいてしまうカズキであった。

番外編　日本でのお正月2（後書き）

後二話ぐらいで番外編を終わらせる予定

番外編　日本でのお正月3（前書き）

エンカウント終了

番外編　日本でのお正月3

「そういえば、なんで、お前の名前って男っぽいの？」
「僕の名前のことかい？」
「そう、だって、カズキって普通、男につける名前だろ？」
「それは、誤解と偏見に満ちてるね」

カナミのいる神社に向かう長い階段を上りながら、ふと思いついたようにユヅルが口にした。ちなみに、現在、四人はレベッカ、カズキ、ユヅルにヒサノで並んで歩いており、ヒサノだけが、彼女の特権と、彼の腕をキープしていたりする。

「日本には、一姫、二太郎っていう言葉があってね。そこから、僕の名前は付けたって、母さんが言ってたよ」
「へぇ」

自分で話を振っておきながら、感心の薄いユヅルは右隣にいるヒサノへと視線を向け、
「まあ、ヒサノの場合はわかりやすいよな」
「どういうことですか？」
「ほら、自分の名前の漢字をそれぞれ付けたんだろ、お前の場合。ヒサトの久に、アケノの埜で、ヒサノ」
「まったく持ってそのとおりです」
自身の名前の由来を完全に当てられてしまう。

「私は、お父さんとお母さんが考えてつけてくれました」
「だよなぁ」
レベッカも自身をアピールするように口を開くが、それを聞いていた彼の顔はどこか寂しげ。

「どうかしたんですか、ゆ～君？」
「いや、ちょっとな」
「正月から、暗い顔はよくないよ、ユヅル」

彼の異変をいち早く察したヒサノと、変化を見過ごさなかったカズキに問われ、
「いや、名前って一口に言っても、つける人がいろいろな思いを込めて考えているわけで。俺のは、どうなのかなって、思っただけ」
まだ長く続く会談に視線を向けながら、ぼそりとつぶやく。その声は、普段の彼からは想像もつかないぐらいにか細い。

「名前なんて、自分を呼ぶ為だけの記号だから、反応さえできれば、それでいいものだと思ってたんだけどな」
彼にかつてつけられた名は、バリスタ。そして現在のユヅル。そのどちらも、彼のことを考えてつけられたものではなく、彼の戦闘スタイルから表現を持ってきたもの。

「カナミもカナミで、自分の母親と父親から漢字をもらってつけてもらって。なんていえばいいんだろうな、きっと、羨ましいんだろうな」
人は、望んだ名前を誰かから与えられることはない。そこにあるのは、名前を考えた人の思いであり、考え。そういったものを、与えられることなく、ただの記号としての名前を与えられていたユヅルにしてみれば、他の人間が、名前で呼ばれるのが羨ましく見えていた。そう、自分には手に入らないものが、すぐそばにあるように見えて。

「なるほどね、なら、新しい名前を考えてあげよう」
そんな彼に対して、何を思ったのか、急にカズキがそんなことを

口にし、

「それ、いいかもです」

その考えにすぐ便乗するレベッカ。

「いや、改名するつもりはないから。マジで」

少しだけ、こそばやくなって、悪態をつくユヅルだが、その顔はまんざらでもない様子。

「どうかしたか？」

だが、そこでユヅルは、隣のヒサノが何か悩んでいることに気づき、声をかけてみる。

「ゆ～君は、今の自分の名前が嫌いなんですか？」

「いや、誇りに思ってるよ」

そう、彼女の問いに迷いなく答えることができる。そこにどんな意味があるのか、なかったとしても、今の彼の名前は大切な人から与えられたものであることに変わりはない。

「なら、いいじゃないですか。私は、名前は付けてもらったことよりも、呼んでくれる人にこそ、意味があると思います」

「ああ、そう考えると、そうかもな」

初めて自分がこの名で呼ばれたとき、アレグリオが呼んでくれたときのことを思い出し、知らないうちに笑みを浮かべてしまう。

「それにしても、この階段を一週間前ぐらいまで上り下りしていた、自分を褒めてやりたい」

「まったくもって、凄いことだよね」

未だ、半分も上り終えていない階段に視線を向ける四人は、それぞれ楽しげに笑みを浮かべていた。

◆◆◆◆◆◆◆

「長かったな、マジで」
ようやく階段を上り終えたユヅルは、肩で息をしている三人に対して視線を向ける。三人とも、運動神経は悪くないのだが、動きづらい着物に履物。それが、彼女たちの体力を予想以上に奪い取るには十分すぎた。

「みなさん、おそろいで、今からお参りですか？」
そんな四人に気がついて近寄ってきたのは、巫女姿の女性。言うまでもなく、ユヅルが世話になっていた神宮寺カナミ本人である。

「ああ、あけましておめでとう」
「ええ、あけましておめでとうございます」
彼の挨拶に対して頭を下げたカナミだったが、頭を上げたとき、彼が両手を合わせて自分に対して拝んでいる姿を見て、首をひねる。

「何をやってるんですか、ユヅルさん？」
「あれっ？　日本の正月では、巫女に対してお参りするんだろ？」
たずねたはずが、逆に疑問で返されてしまった彼女は、

「誰ですか、間違った知識を植え付けた人は」
「レベッカ」
問いかけ、即答した彼を見て、大きくため息をついてしまう。

「それは、大きく間違ってます。そういうことは、レベッカさんじゃなくって、私、もしくは雨竜さんか、春日野さんに聞いてください」
「そうだな、今度からそうする」

どこか諦めたような彼の横顔を見ていたカナミだったが、彼に駆け寄ってくる三人を見つけ、
「皆さん、あけましておめでとうございます」
にっこりと、瞳が笑っていない笑顔を浮かべる。そこには、暗に、どうして自分を誘わなかったのかという、負の感情が込められている。

「あけましておめでとう」
「「あけましておめでとうございます」」
三人から新年の挨拶を受け、当然のように自分に祈っているレベッカの額を軽く叩くカナミ。

「ううっ、痛いです」
「まったく、ユヅルさんに、間違った知識を植え付けないでください」
「えっ、間違ってたんですか？」
「ええ、大いに。むしろ、そこで気がつかなかったあなたも、結構重症みたいですけど」
そんな軽口を叩き、四人は列へと並び、参拝を済ませる。

そして、ユヅルを除いた三人は、おみくじを買いに行ったのだが、彼はその場でタバコを吸って、焚き火の前から動こうとしない。

「ユヅルさんは、何をお願いしたんですか？」
「何？　これって、神様に対してなんかお願いする必要があんの？」
「根本的に、何しにきたんですか、あなた」
「いや、暇だったところ、レベッカに誘われて、そのままヒサノとカズキと合流してここまで来ただけ。深い目的も、趣旨も知らん」
そう、彼は肝心なところの説明を一つたりとも受けていないので

ある。

「初詣は、神様にお祈りして、自分の願い事を再確認する。そんな行事です」

「なるほどね」

少しだけ納得したように、彼はタバコの煙を吐き出し、

「なら、神様を信じてない俺が、きてもあんまり意味がないわけだ」

「そうでもないですよ？」

「どういうことだよ？」

「こう言うことは、やることに意味があるんです。神様を信じている、信じていないにかかわらず。そういった行為が、大事なんです」

「あっそ」

興味なさ気に、彼はタバコの吸殻を焚き火へと投げ入れ、

「なら、お前も何かお願いをしたわけか？」

「はい。家内安全、健康祈願です」

当たり障りのない答えが返ってきて、そこで微笑してしまうユヅル。

「なら、俺も願い事、しとけばよかったかな」

「なんてするつもりですか？」

カナミにたずねられ、彼女から顔を背けた彼は、空を見上げながら口にする。

「意味のないことが、意味を持つように。来年も、誰かさんたちと一緒にいられますようにって、さ」

それは、彼が口にした、小さな小さな願い事。

番外編　日本でのお正月3（後書き）

予定を繰り上げ、番外編終了。

次からは再びロンドン舞台の、本編へと戻ります

Ｂｏｙｓ　Ｗｏｒｋ（前書き）

酒盛りが終わって次の日から

Boy s Work

「正月って奴は、休む為のものだと聞いたんだが、俺は」
「そう言わないでよ、ユヅル」
「大体、酒盛りしてる時間があるんだったら、とっとと済ませとけばいいはずだろ。コレは何か、俺に対する嫌がらせか何かか？」
「いや、返す言葉もございません」
黒い法衣に身を包んだ青年、ケイオスを伴いながら、真紅の法衣に身を包んだユヅルは苛立ちを隠すことなく、廊下を早足で進んでいく。

「第一、なんで俺が戻ってきたときを見計らって、毎度毎度やるんだよ。監督官だったら、他の第七階梯（エンタク）でも構わない筈だろ？」
「そう言われても、ね」

異端審問局で、第七階梯を所持しているのは、局長のアレグリオ、局長代理のクローデル、秘書官のエカテリーナとユヅルの四人のみ。そして本日、アレグリオとエカテリーナは教皇に呼び出され、クローデルは出張に出かけてしまったため、手の空いているのはユヅルのみ。もっとも、彼自身、ヒサノと一緒に旅行気分で着ていたので、それを邪魔された。そんな印象しか抱くことができない。

「第一、執行官の数は十三人って、設立当時から決まってるんじゃねぇのかよ」
「そうだよ、それぐらい僕も知ってる」
「なら、何の為にこんなことをする必要があるんだよ」
彼は苛立ち混じりにドアを両手で開け、そのまま進んでいく。

本日、彼に与えられた仕事は、異端審問局の抱える最高戦力であ

る、異端殲滅執行官候補者の選定。先に、ドイツでの天使決戦があり、急遽エカテリーナが、欠番を補充したものの、このような不測の事態が起きたとき、執行官を選定しなおしている余裕はない。そう判断したアレグリオは、執行官候補者を新たに育成し始めることを決定。その中でも、特に才能のあるもの、秀でたものを見極めるのが、彼に与えられた仕事。

「仕方ないじゃないか、これもお仕事のうちだよ」

「だったら、とっとと第六階梯（ブラザー）から、昇格しろよ、ケイオス」

文句を口にしながら、タバコに火をつけたユヴルは、執行官候補者の待つ部屋のドアを足で蹴破り、室内へと足を踏み入れる。

すると、室内にいる人間はそろって難色を示している。

その反応も当然。

真紅の法衣を纏うことが許されているのは、教皇に告ぐ地位を持つ第八階梯（トライデント）と第七階梯の所持者のみ。そして、第七階梯に至ることができるのは、戦闘能力だけでなく、状況判断能力及び、戦術知識を規定以上満たし、教皇に認められたもののみ。故に、十代という若さでこの階梯に至ったものは、彼以外に前例がない。

「何、呆けた面晒してやがる、候補者共（ざこども）」

開口一番、完全に上から目線で、それも侮蔑の言葉を放った人物を、誰が歓迎することができるだろう。

「十人以上いるな？」

「局長から渡された資料によると、僕ら執行官全員の補充要因として、十三名。選抜したらしいよ」

「ふ～ん」

タバコの煙を吐き出し、つまらなそうに、

「一応、自己紹介だけしておく。俺が今回、選定権限を与えられた、ユヅル・ハイドマンだ。執行官としての席次は十三、階梯は、第七階梯だ」

「僕は、ケイオス・グリューナク。執行官としての席次は二、階梯は第六階梯。今回、僕は彼の補佐を担当させてもらう」

ユヅルとケイオスがそれぞれ自己紹介を済ませると、その場の全員が小さな声で話し始める。それもそのはず、悪名高い席次の十三が、いきなり目の前に現れたのだから。

「資料は？」

「ここにあるよ」

彼は、そんな候補者たちの動揺を、見向きもせずにケイオスから資料を受け取り、

「これ、本当にあの二人が送り出してきた奴らか？」

怪訝そうに、眉間にしわを寄せてしまう。彼が口にした二人は、当然のように執行官育成を行っている第六階梯（マザー）、テレジアとシムカ。

「資料ではそうなっているはずだけど？」

「相変わらず、雑な仕事するな、あの二人。こんな奴らが使い物になるはずねぇだろ。そんなの一目で判断つくぞ」

「そう？」

言い争いを二人が始めてしまうが、そこで、

「失礼ですが、先ほどの言葉を取り消してください」

候補者の一人からよく通る声が響いてきたので、二人は一旦、互いに口を閉じる。

「悪いが、取り消すような言葉を俺は口にした覚えはない。つ～か、

お前誰だよ」
「自分は、」
「ああ、名乗る必要はない。どうせ、覚える必要もない名前だ」
自己紹介を求めておきながら、勝手に打ち切ったユヅルは、携帯灰皿に吸殻を入れ、
「はぁ、あの三人、面倒ごとを俺に押し付けやがったよ」
「苦労をかけるね」
「だったら、さっきも言ったようにとっとと昇格しろ」
大きくため息をつくユヅル。
「バカに対して、説明するのは無駄だから、なるべくしたくない。だが、残念ながら、仕事なわけで。仕方ないから、お前らが、この場所に立つに対して、相応しくないことを今から順を追って、説明してやる」
室内にいる、ケイオスを除いた全員に対して声を大にしたユヅルは、
「一つ目、お前らは、初動が遅すぎる」
自分の目の前にいた候補者の喉下に、一瞬のうちにナイフの切っ先を当てていた。おそらく、彼の動作に反応できたものは、この室内に誰一人としていない。
「二つ目、危機的状況に陥って、判断能力が追いついていない」
そして、次の瞬間には、その隣の候補者の額に銃口を突きつけている。
「三つ目、この状況下で、どうして、構えない。まさか、自分たちが殺されないとでも思っているのか？　おめでたいことだな。お前らは」

先ほど、彼らは確かに彼の自己紹介を聞いていたはず。ならば、彼に与えられている権限がどういったものなのか、容易に想像ができるはず。

「四つ目、決定的なまでに緊張感が欠けている。どうして、自分のそばにいる人間が、味方だと勘違いしている。この場所はどこだ？ここは異端審問局本部、『黒金の檻』だぞ。利害関係だけでしか繋がっていないエゴイストの巣窟だ。いつ、誰かを盾にして生き延びようとしか考えていない他人しかいない場所だ」

全員、ケイオス以外の背後を取った彼は、新しいタバコに火をつけ、

「最後に、言っておくが、おまえら、何を根拠に自信と勘違いしてやがる。俺たち、執行官が立つ場所は、必ずしも正義じゃない。むしろ、悪としてのほうが多い。なのに、お前らときたら、目の前の人間に対して警戒心もなければ、実戦経験もほぼ皆無。自殺するなら他を当たれ。ここは、死に場所を求める自殺志願者が来る場所じゃない。ここにいていいのは、テメェの覚悟（せいぎ）を、誰を相手にしても、貫き通せる奴だけだ」

鋼の言葉をもって、候補者たちの心を食い千切る。

そして、そんな彼の言葉に対して、候補者は誰一人として反論することができずにいる。

「帰るぞ、ケイオス。時間の無駄だ」

「そうだったみたいだね」

そして、二人はそのまま室内を出て行こうとするが、突然ユヅルが振り返り、

「お前ら、ここが戦場じゃなくてよかったな」

捨て台詞を吐き捨て出て行く。それと同時に、候補者たち全員の

衣服が、下着を残してすべて床へと導かれるように落下していく。

「あれは、少し優しすぎじゃないかな？」

「実戦で死なせてやるのが、教育なら、そんな馬鹿げたことに金をつぎ込む奴らの気が知れねぇよ」

タバコの煙を吐き出しながら、彼はケイオスの顔を見ることなく答え、

「そんで、本日の残りの仕事は？」

「後は執務室で書類関係だね」

「任せていいか？　今からなら、着替えて追いつける気がする」

「無理だよ。第七階梯以上のサインが必要な書類が半分以上あるから。同様に僕も。君が仕事をこなしているうちに、テレジアとシムカに報告しに行かなくちゃならないから」

大きくその場で肩を落としてしまう。

「とりあえず、仕事をがんばろうよ」

「なんで、休みまで仕事しなくちゃならないんだよ。俺は、肩書き的には高校生だぞ」

「いや、それと同時に異端審問局の執行官で、第七階梯でもあるからね」

珍しく我侭を口にするユヅルと、それをなだめるケイオスの二人は、各々の仕事へ向かうのである。

Ｂｏｙｓ　Ｗｏｒｋ（後書き）

次は主人公が登場しません

Ｇｉｒｌ、ｓ　Ｔａｌｋ１（前書き）

主人公の過去、暴露大会

Girl、s Talk1

「ゆ～君も、一緒にこれればよかったのに」
ロンドンの街並みを歩きながら、ヒサノはついぼやいてしまう。
本来であれば、二人で、お土産を買ったり、お茶をしたり、デートしたりと、楽しい一日を過ごせていたはずなのだが、急にユヅルに仕事が入ってしまったのである。

「まぁ、そう言わずに。明日は、先輩を独り占めできるんですから」
ガイド役を買って出てくれたレベッカに慰められながら、二人は歩き続ける。すると、前方から二人の人物が、
「おや、あれは多分、間違いないでござる」
「・・・・・うん、兄様の彼女と、新しい席次の十二」
鳳センザとハイドレンジア・フォルダンの二人が紙袋片手に話しかけてきた。

「えっと、その」
「これは失礼したでござるな。拙者、不承ながらユヅル殿と同じ、執行官に名を連ねているもの、名前は鳳センザでござる」
「ハイドレンジア」
「こっちは、呼びやすくレンで、いいでござる」
自己紹介がまだだったことを思い出し、悩んでいるヒサノに対し、センザが優しく日本語で語り掛けてきてくれた。

「春日野、ヒサノです」
「そう、かしこまる必要はないでござるよ?」
そう、センザが優しく言ってくれるものの、隣にいるハイドレンジアは、先ほどから観察するようにヒサノに視線を固定している。

「これから、買い物でござるか？」
「はい、日本の両親に」
「そうでござるか。顔はわからないでござるが、声からして、とても優しい子みたいでござる」
センザは盲目であり、人を声と匂いで判断している。その事実を知ったヒサノが、どう答えていいか考えているうちに、
「そうだ、ヒサノさん。先輩方、お茶、していきませんか？」
レベッカが名案を思いついたといわんばかりに、両手を合わせて提案してくる。
「ヒサノさんは、先輩のこっちでの話が聞けて、先輩方は、日本での先輩のことを聞ける。両方ともが、メリットしかありませんよ？」
「確かに、興味がないわけじゃないですけど」
「こちらとしては、話してもらえるのであれば」
「なら、決定ですね」
強引に、レベッカが押し切る形で、四人はカフェテラスへと足を踏み入れた。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆

「誰かと思うたら、団体さんやねぇ」
そんな四人を、なぜかカフェテラスで出迎えてきたのは、いつものように、大きく胸元をはだけた着物姿でティーカップを傾けているフジノ。その姿は、完全に似合っていない。どちらかといえば、お猪口を持っていたほうが似合っている。
「・・・・・珍しい」
そんなことを口にしながら、彼女の横に腰を下ろしてしまうハイドレンジア。それを見たセンザは、仕方ないといった感じでため息

をつき、

「一緒で、かまわないでござるか？」

「はい」

ヒサノへと了解を取ってから、二名の座るテーブル席へと腰を下ろす。

「なんや、面白そうなことになっとるみたいやね」

あらかたの事情をセンザからされ、フジノは楽しげに口にして、

「本人が、ここにいないことが、ここまでおもろい事態になるんやったら。少しばかり、暇つぶしも悪くないかもしれへんわ」

持っていたブランドバッグからメモ帳を取り出す。

「それで、何が、聞きたいんでござるか？」

注文が運ばれてくる前に、水で喉の渇きを潤したセンザに問われ、

「その、ゆ～君のご両親について。知ってることが、あったら」

答えるものの、ヒサノの言葉は悩んでいるのか、たどたどしい。

それもそのはず、本人のあずかり知らぬところで、その人に対する情報を引き出そうというのだ。罪悪感を覚えても無理はない。しかし、それでも、彼女は知りたかった。彼が、家族を見るときの切なそうな顔が、焼きついていたから。

「初っ端から、難しい質問やね」

「う～む」

問われたフジノとセンザはそれぞれ頭を抱え、ハイドレンジアは注文したケーキにフォークを指している。

「私が、情報屋から得た情報では、不明と」

「流石に、席次の十一でも、調べられへんことはあるんやね」

レベッカが自身の知りえている情報を開示し、それを聞いたフジノは、歯切れ悪く答える。どうやら、この質問、思っていたよりも、深刻な問題らしい。

「他言、無用でござるよ」

そんな中、意を決したように、センザが重い口を開く。

「ユヅル殿も、あまり口にしたくない事実でござるから」

「そうやね。ユヅルはんの親御さんは」

二人が口にしようとした瞬間、ハイドレンジアが二人の服の袖を引っ張り、

「・・・・・私が、言う。多分、二人が話したら、兄様、とても怒る」

小さな少女に四人の視線がいっせいに注がれる。

「・・・・・兄様の、お父さんとお母さんは、もう、この世にいない」

「なくなられたって事、ですか？」

彼女の言葉に対して、ヒサノが疑問をぶつけるものの、それを彼女は首を横に振って否定する。

「・・・・・殺されてる」

彼女の言葉で、ヒサノとレベッカの表情が凍りつき、

「・・・・・続ける？」

「お願いします」

ヒサノの言葉を聴いて、ハイドレンジアは、ケーキを一口だけ口に運んだ後、

「・・・・・兄様は、このことを、決して自分から、口にはしな

い。憎しみが、自分で、抑え、きれなく、なってしまうから」
小さな体を、振るえる体を支えるように、自分で抱きしめながら、

「・・・・・・兄様は、前教皇と、執行官の間に、生まれた、不義の子。生まれて、すぐに、捨てられた。もう一人、いたらしいけど、それは、知らない」
驚愕の事実を口にする。

「・・・・・・そして、兄様の両親は、元教皇の命令で、殺されてる。他でもない、局長の、手によって」
それは、悲しすぎる憎しみのつながり。

Ｇｉｒｌ、ｓ　Ｔａｌｋ１（後書き）

まだまだ暴露してもらう

Ｇｉｒｌ、ｓ　Ｔａｌｋ２（前書き）

暴露会の続き

自分の両親が、たとえ自分を捨てた存在だったとしても、殺されていて。その、憎しみをぶつけるべき相手が、自分を救ってくれた存在であったなら、どれほど複雑な心情だろう。それを、軽々しくわかるなど、ヒサノも、自身の父を彼に殺されたレベッカも答えることができない。

「・・・・・兄様は、今も、憎んでる。でも、それと同じくらい、局長のこと、尊敬して、感謝もしてる」

「だから、ですか」

ヒサノは、彼の部屋にある唯一の写真を思い出して口にする。その写真に写っているのは、幼きユヅルとアレグリオの二人。両親の写真どころか、他の誰かと取った写真すらない。そして、それを彼は、この日本に唯一、私物で持ち込んでいる。そこに、どんな意味が込められているのかは、本人以外、知る由もない。

「それにしても、随分と変わったみたいやね、ユヅルはん。ドイツの仕事でも、ちょっと思うたけど」

「そうでござるな。こっちにいたときの、ユヅル殿であれば、人とのかかわりなど、道端の石ころぐらいにしか、考えていなかったはずでござる」

話題を変えようとした二人の言葉を聴いて、重苦しい雰囲気を振り払い、

「こっちにいたときの、ゆ～君って、どんな感じだったんですか？」

「それは、私も知りたいです」

情報屋から、ある程度の情報を買ってはいるものの、レベッカが知りえているのは、表面的な部分に過ぎない。それ故、彼女も気に

なってしまう。

「・・・・・・一言で、言えば、素敵な人」
「いや、レン、それ、答えになってへんよ？」
「・・・・・・兄様の本質、すぐには変わらない」
自分の彼氏が褒められているのだが、ハイドレンジアが抱えているのは、確実に異性としての感情。それがわかっているからこそ、ヒサノの心情は複雑。

「そやね、一言で言うなら、焼けた石やね」
「確かに、その表現は、間違っていないでござるな」
フジノの表現に納得がいったのだろう、センザはしきりに首を縦に振っている。

「誰一人として、まともに触れることができへん。触れてもうたら、火傷しか得られへん。誰ともかかわらず、誰一人として自分のそばに置かない。そんなお人やったね」
「加えて言うなら、それを自分で自覚しているから、誰とも足並みを揃えなかったのでござる」

単独破壊者。
こちらについたとき、エカテリーナからニュアンスだけ、聞かされていたその名の意味を、ようやく二人は知ることができた。

「おまけに、誰もたよらへん。自分にできないことがあるんやったら、できる人、頼ればええのに。できへんかったら、できるようにしてまう。努力の塊みたいな人やね」
「でも、興味がそちらに向かないと、まったくやらないでござるが」
このことについては、日本に渡ってきたユヅルも、変わっていない。

「あとは、そやねぇ」
「あの、その」
そこで、悩み始めたフジノに対し、慌てながら、ヒサノは恋する乙女らしい疑問をぶつけてみることに。

「ゆ～君、自分から、私に、触れてくることが、ないんですけど。私、魅力、ないんでしょうか？」
口にした本人は、湯気でも出そうなぐらい顔を真っ赤にし、自分が口にした言葉を、失敗と勘違いしてしまっている。だが、彼女が俯き、少し経ってから目だけ動かしてみると、そこには目をきょとんとさせているハイドレンジア、口元に手を当てているセンザ、そして、腹を抱えて女性らしくない笑い方をしているフジノの三人が。

「えっと、その、皆さん、魅力的ですし。ゆ～君、私と付き合ってるの、冗談なのかなって」
確かに、目の前にいる三人は、女性として、彼女にしてみれば魅力的に見えるかもしれない。盲目ではあるものの、凛とした雰囲気があり、物腰の柔らかいセンザ。肉体的に、今の彼女ではどうやっても敵わないフジノ。そして、人形のように容姿が整い、服装を変えれば、異性同性かかわらず、愛されそうなハイドレンジア。その三人を目の前にし、勇気を振り絞ったヒサノなのだが、

「相変わらず、でござるな」
「ほんまに、そこはやっぱり、二、三ヶ月じゃ変わらんみたいやね」
「・・・・・やっぱり、兄様は、そうじゃないと」
三者三様に感想を述べ、

「ユヅル殿は、照れているだけでござるよ」
「そやね、嫌われたくなくって、一歩踏み出せないんやろね」

「・・・・・ずるい」
笑いをどうにかこうにかかみ殺している。

「あの、こっちは、真剣なんですけど」
若干、熱も引いてきて、今度は逆のベクトルで熱を得てきたヒサノは、三人を睨みつけてしまう。

「安心していいでござるよ。ユヅル殿は、春日野殿一筋みたいでござるから」
「えっ？」
思わぬ言葉に、顔が綻びそうになるものの、そこは我慢。

「そやね、昨日みたいに、冷静にブチ切れたの、うちも始めてみたさかい」
「・・・・・怖かった」
昨日のことを思い出しているのだろう。先ほどとは一転して、二人の顔色は青ざめてきている。

「言ってることの意味が、よくわからないんですけど？」
「にぶいお人やね、ヒサノはん。秘書官あたりも、いうたとおもうんやけど」
「ユヅル殿は、特定の誰かに対してだけ、感情を動かすことはしないでござる。こちらにいたときは、っでござるが」
先ほどの焼け石の話を思い出すヒサノ。

「それぐらい、今のユヅル殿にとって、春日野殿の存在は大きいのでござるよ」
「ほんまにねぇ。こんないい女が、ここにいないのも含めて、五人以上おりましたのに、誰一人として、アプローチ受けた人なんて、おりません」

「・・・・・・ううっ」
三人からの言葉を受けて、今度は赤面させられてしまうヒサノ。
「えっと、でも、女性的な魅力は」
「それは、ユヅルはんが、へたれやからやろね」
「ユヅル殿は、臆病でござるからな」
「・・・・・・変わってない」
「どういうことですか？」
三人の言っている意味が理解できずに、テーブルに乗り出すように声を上げるヒサノだったが、その行為が恥ずかしいと気づき、すぐに小さくなってしまう。
「ユヅルはんは、臆病なんよ。既に、聞きはったとおもうけど、彼、少年兵やって、戦地を転々としとったんよ」
フジノの言葉に対して、ヒサノは首を縦に振る。
「そんで、人の死ぬ姿、苦しむ姿、目に焼き付けてもうたんよ。そんで、自分はそうなりたない。幼心に、そうおもうたんやろね」
「ユヅル殿の、冷酷さ、冷静さは臆病であることの裏返しでござる。だからこそ、今の席次についているといっても過言ではないでござる」
「せやから、触れたいけど、嫌われたない。そんな葛藤かかえとるんよ、ユヅルはん。これは、局長から聞いた話やけど、ユヅルはん、甘えることもへたらしいわ」
「自分のこと、知られて、嫌われるのが怖い。受け入れてもらえなかったら、どうしよう。戦場とは打って変わって、優柔不断でござるよ」
「いや、あの、でも」
「そやね、それでも、自分に自身が持てへんのやったら、おねだり

してみたらええとおもうわ」
「そうでござるな。きっとユヅル殿のこと、籍を入れることぐらい、平気でやってのけるでござる」
「不思議と、甲斐性はあるんよね」
女子の会話は、さらに激しさを増していく。

Ｇｉｒｌ、ｓ　Ｔａｌｋ２（後書き）

うわぁ、次も主人公が登場しねぇ

憎しみの連鎖1（前書き）

ようやく、主人公登場

そして、修羅場

憎しみの連鎖1

「へぇ、結構、いい場所だね、ここ」
その声は、本来存在してはいけないもの。
教皇庁。
それも、教皇の間。

この場にいるのは、教皇、第八階梯（トライデント）の三名、そして、アレグリオとエカテリーナの六名のみ。それ以外のものは、いかなる手段を用いたとしても進入不可能な場所。物理的に、どうやっても、この場所へ足を踏み入れることは許されない。にもかかわらず、声の主は、この場に現れた。

「おや、挨拶ぐらいしたらどうかな、教皇殿？」
外見からして少年、人を小ばかにしたような笑みを張り付け、侵入者はつまらなそうに声をかけてくるが、その声が響くと同時に彼の喉元、左胸、背後から、それぞれ凶器が突きつけられている。しかし、その切っ先が、少年を貫くことはなく、

「流石は、教皇直属の親衛隊、第八階梯に選ばれたことだけはあるね。でも、残念。君たちでは、僕に到達できない。そうだね、使ってみたらどうだい？　聖遺物、アレなら、ひょっとしたら、僕へと到達できるかもしれないよ？」
目の前の少年は笑みを浮かべ、第八階梯の猛者を、侮蔑する。彼らの動きは、アレグリオですら捉えることのできなかった速さ。だが、それでも、少年の命を奪うには至っていない。

「貴様は、何者だ？」
玉座から降りず、元教皇である、アレッサンドロ・フィエナ・ル

ーペンス八世は、少年へと声をかける。彼女自身、既に三十へと届く年齢のはずなのだが、その外見は幼い少女にしか見えないから不思議である。

「聞きたいのかい、教皇殿？」

「是が非でも」

教皇の問いを受け、少年は凶器を突きつけられたまま、笑みを濃くする。ただ、その笑みは歓喜ではなく、狂気に彩られ、見るものの心を不安へと掻き立てるもの。

「なら、答えてあげないとね。僕は、アデプト。実際の、本当の名前なんて、何処にあるのか知らないから、この名前を便宜上名乗っている」

「そうか、なら、アデプト、何の用があってこの場所に現れた」

自身の抱えている戦力が、無力化されているというのに、教皇の姿に恐れや不安は見られない。しかし、次の言葉を聴いた瞬間、彼女の態度は激変する。

「酷い言い様だね、こっちは、遠路はるばる、肉親を捜し求めてここまできたって言うのに、ねぇ、姉さん？」

「馬鹿なっ」

「おやおや、信じられない？　でもさぁ、自分を愛してくれなかった親を、自らの手で殺す命令を下した人間なら、当の本人に、聞く気も、無かったんじゃないかな？」

放たれた言葉に乗せられている思いは、侮蔑、嘲笑、そして隠すことのない殺気と憎悪。

その言葉を受けた彼女の動揺は、計り知れない。

自分を愛すことなく、数多の女生徒関係を持ち、母と自分を省みようとしなかった父。それを、断罪したことは、今でも後悔したこ

とはない。だが、血を分けた存在が目の前にいるとなれば別。彼女は、少年、アデプトから、父親を奪った敵でしかない。

「へぇ。そんな顔もできるんだね、姉さん」

いたぶる様に、アデプトは笑みを濃くし、

「じゃあさ、ついでに、奪われる側の気持ちも少し理解してみようか？」

殺意を形に、その右手に赤い刃の刀を作り出す。

それを見た、この場の全員が一瞬にして息をのむ。そう、それは、見間違えることなどない。かつて、ユヅルが手にしていた星装具（アストラル）に他ならない。

「行くよ？」

その言葉と共に、一瞬で三人を突き飛ばし、アデプトが疾走を開始しようとするが、

「ああ、やっぱりここにいたか。あのさぁ、この書類、不備があるんだけど」

不機嫌極まりない、タバコの煙を吐き出しながら、書類を片手に、この場に現れたもう一人の侵入者、ユヅルによって停止させられる。

「君は？」

「あん？　名乗るほどのもんじゃねぇよ。続けたいなら続けてくれ、俺は別件でここに着てるから」

アデプトに訊ねられたユヅルは、つまらなそうにアレグリオとエカテリーナの下へと近寄っていく。

「いや、ユヅル、この状況が、どういうことか、理解しているのか？」

「さぁ、な。あの女が命狙われることなんて、日常茶飯事だろ。別

に、取り立てて慌てるようなことか？　バカらしい」
　問いかけるアレグリオだったが、ユヅルは一蹴。
「面白いね、教皇が命を狙われてるなら、助けるのが、部下の務めじゃないのかな？」
「いや、俺、そいつの部下じゃないし」
　教皇を指差し、そいつ呼ばわりしたユヅルはアデプトの問いに答え、
「好きにやれよ。どうせそいつのまいた種だろ。憎しみを背負う覚悟もなしに、力を振るった。そんな奴の尻拭いをしてやるほど、俺は暇でも善人でもないんだよ」
　書類をエカテリーナへと押し付け、そのまま踵を返し、この場所から出て行こうとするが、
「ユヅル・ハイドマン。貴様は、第七階梯（エンタク）でありながら、教皇への狼藉を放っておくつもりかっ」
　第八階梯の叱責を受ける。しかし、彼のこと、ため息をつくだけで、反論を口にすることもなく、
「あほらしい。階梯を剥奪したいんだったら、どうぞご自由に。俺は、そいつのために、今の階梯にいるわけじゃない。そいつのために、ここにいるんじゃない」
　はっきりと、自身の心のうちを言葉へと変える。
「へぇ、君、ユヅルって言うんだ。面白いし、強いね。気に入ったよ、僕と一緒に来ないかい？」
「お断りだ」
　楽しげなアデプトの勧誘を一蹴し、タバコの先端を彼に突きつけるように、

「俺は、俺のやりたいように、したいように生きる。そいつを、誰かに決められるつもりはない。つ～か、俺は今、仕事を押し付けられたせいで、一日台無しにしてるんだ。それを、どうやって穴埋めしようか考えることに忙しい」

我侭を口にし、大きく胸を張る。

「ほら、どうしたよ。ご自慢の第八階梯（ぶりょく）で、解決すればいいだろ。なに、そいつが星装具持ってようが、相打ちぐらいはできるだろ」

今の今まで、完全に視界から除外していた教皇へと視線を向け、

「それともなにか、自分が追い詰められて、初めて後悔したってのか？　そいつはよかったな、初体験って奴だ」

「貴様っ」

先ほど、アデプトが向けたであろう視線と、似たようなものを込めて、彼は口にする。

「奪うのならば、徹底的に。憎しみも、怒りも、悲しみも、その全てを背負う覚悟を持て。俺は、そう教わって生きてきた。だからさ、あんたに肩入れするつもりも、助けるつもりもないんだよ。大方、そいつも、前教皇とかかわりがあるんだろ。なら、その、憎しみの連鎖すら受け止めて見せろよ、教皇殿。それとも、あんたは、そんな簡単なことに気づくことすらしないで、俺からも奪ったのか、姉さん？」

憎しみの連鎖1（後書き）

邂逅する兄弟たち

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7901v/

学校へ行こう

2012年1月9日06時48分発行